

妙見信仰の民俗学的研究—日本の展開と現代社会—

目 次

序章

I 研究背景	1
II 研究の目的	1
III 研究史—妙見信仰を中心として	2
IV 問題の所在と課題	4
V 研究の方法と本論分の構成	4

第一部 日本における「妙見信仰」の展開

はじめに	8
------	---

第一章 星と人との関わりの軌跡

I 日本での星に対する意識	8
II 日本における星辰信仰—北斗七星・北極星を中心に—	9
III 北斗七星・北極星を神格化した妙見信仰	11
IV まとめ	13

第二章 「妙見信仰」—日本における変遷と分布—

I 妙見信仰の変遷	15
II 妙見の分布	16
III 代表的な妙見	19
III-1 福島県相馬市の相馬妙見	19
III-2 大阪府の能勢妙見山	19
III-3 山口県山口市の大内氏の妙見	20
III-4 熊本県八代市の八代妙見	22
IV まとめ	23

第三章 妙見の像容

I 文献資料からみた妙見菩薩像	26
II 妙見菩薩像をみる上で特徴として表れる様相	27
III 現代に伝わる妙見菩薩像—四つの事例から	29
IV まとめ	30

第四章 民俗学的視点からみた妙見の特徴

I 先行研究からみた妙見の特性	32
II 先行研究からみた妙見の特性の分析	34
III 南関東地域における妙見の特性	36
IV 民俗学的視点からみた妙見の特徴	36
V まとめ	37

おわりに	39
------	----

第二部 妙見信仰と地域社会

第五章 氏神として伝わる妙見

—東京都稲城市百村の「妙見尊」行事から—

はじめに	40
I 百村の妙見寺と妙見宮	41
I-1 妙見寺・妙見宮の由緒	42
I-2 民俗行事の始まり	43
II 「妙見宮（妙見尊）」の三つの民俗行事	
II-1 神化まつり（1月8日）	45
II-2 蛇より行事（8月7日）	46
II-3 星まつり（12月下旬の冬至の日）	48
II-4 地域の人々の百村への想い—三つの民俗行事を中心に—	50
III 稲城市百村地域に伝わる妙見の現代的意義	54
おわりに	57

第六章 祭礼の中に武神として伝わる妙見

—千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から—

はじめに	59
I 千葉市中央区における妙見に係る諸問題	
I-1 研究史—千葉県に伝わる妙見を中心として—	60
I-2 問題の所在	61
II 妙見本宮 千葉神社で行われる「妙見大祭」の変遷	
II-1 資料からみる「妙見大祭」	61
II-2 「御浜下り」を行わなくなった「妙見大祭」	62
II-3 「御浜下り」の歩み	63
II-4 妙見の祭礼の特徴	64
III 妙見本宮 千葉神社「妙見大祭」～平成24（2012）年8月の祭礼	65
IV 下総國 寒川神社例大祭～平成24（2012）年8月の祭礼	69
V 古老の記憶	73
VI 二つの祭礼にみられる妙見の現代的意義	74
おわりに	76

第七章 大衆文化的妙見の受容

—東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界限に伝わる妙見—

はじめに	79
I 江戸時代の妙見に係る諸問題	
I-1 研究史—江戸時代の妙見を中心として—	79
I-2 問題の所在	80
II 江戸時代の妙見信仰	81

Ⅲ 江戸時代に民衆の間で花ひらいた妙見信仰の代表的拠点	
Ⅲ-1 江戸の「柳嶋妙見」	82
Ⅲ-2 能勢妙見山東京別院	85
Ⅳ 江戸時代の文献・資料・芸能等から妙見をみる	
Ⅳ-1 妙見信仰関係の書の公刊	86
Ⅳ-2 日常の中にみられる妙見	88
Ⅳ-3 芸能・芸術などにみられる妙見	91
Ⅳ-4 浮世絵にみられる妙見	93
Ⅳ-5 北辰一刀流と妙見	96
Ⅴ 現在の「柳嶋妙見」界限における妙見	
Ⅴ-1 「柳嶋妙見」界限における妙見への意識	97
Ⅴ-2 「柳嶋妙見」界限に伝えられる妙見の現代的意義	99
おわりに	101
第八章 変遷をたどり現代に息づく妙見	
一埼玉県秩父地方に伝わる現代的意義一	
はじめに	104
Ⅰ 秩父地方に伝わる妙見に係る諸問題	
Ⅰ-1 研究史一秩父地方の妙見を中心として	104
Ⅰ-2 問題の所在	105
Ⅱ 調査地の概要	
Ⅱ-1 秩父地方	105
Ⅱ-2 秩父地方と妙見	106
Ⅲ 秩父地方の信仰体系にみる妙見との関わり	
Ⅲ-1 屋敷神として宮地地域に伝わる妙見	109
Ⅲ-2 村地域の氏神としての妙見	112
Ⅲ-3 生産神として地域振興の育成に係る妙見	114
Ⅳ 現在の秩父地方における妙見	
Ⅳ-1 秩父地方における妙見への意識一聞き書きを中心に	122
Ⅳ-2 秩父地方に伝わる妙見の現代的意義	123
おわりに	125
終章	
Ⅰ 現在地域に伝えられる妙見の役割	128
Ⅱ 民俗信仰の視点からみた妙見信仰の位置付け	131

序章

I 研究背景

妙見信仰は、北極星や北斗七星を神格化した信仰であり、古代、中近東の遊牧民や漁民に信仰された。やがて中国に伝わり天文道や道教と混じり合い、仏教に取り入れられて妙見菩薩への信仰となり、中国、朝鮮からの渡来人により日本に伝わったといわれる。仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられた。このような経過をたどる妙見信仰は、日本では天文道、密教、道教、陰陽道、神道など複雑な背景が認められる。日本の妙見信仰は妙見菩薩に祈る信仰であるが、同一の仏神でありながら形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきたといえる。

中西用康は「妙見信仰は約二十世紀にわたって、その時その時の流れに沿って、それ相応な信仰形態を展開してきた」（中西 2008 309）と述べ、その信仰の形態はそれぞれの時代の特性をよく表しており、妙見信仰がときの文化の一つの側面であったといえることができる。いいかえれば、妙見信仰はその通念が固定化され限定された信仰ではなく、その時代の代表的な通念に自在に形を変えするという一面を持つ信仰であったといえることができる。

妙見信仰は時代の変遷を経て信仰の形態が変化していくとともに、日本各地に広く伝えられていった。武士の世となった中世以降、妙見を篤く尊崇した一族は数多く存在するが、代表的な一族に、千葉氏、相馬氏、平秩父氏、伊勢の度会氏、山口県の大内氏等があげられる。熊本県の八代にも古くから妙見信仰が伝えられた。妙見信仰の宗旨関係は各種各様であり、真言宗の相馬氏、天台宗の度会氏、天台・真言両宗の八代などが伝えられているが、江戸時代になると、檀林で修業した日蓮宗の僧が妙見の教説を伝道したため、日蓮宗寺院に妙見信仰が普及し多くの妙見菩薩が祀られた。

詳しくは結論で述べるが、妙見信仰には四つの特徴を認めることができる。この四つの特徴は、妙見信仰に関わる先行研究を収集分析した結果得られたものであり、「東京都稲城市の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の祭礼」「東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界隈の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」の中に典型的な四つの妙見を見ることができる。

II 研究の目的

本論文の目的は、最初に、先行研究等から妙見の特性を収集分析することである。次に、この分析結果から得た四つの特徴に基づき、それぞれの特徴を持つ妙見が今も伝わる関東地方の四つの事象「東京都稲城市の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の祭礼」「東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界隈の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」を事例として、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、その地域でどのような役割を果たしているのかを探ることである。本論文では、過去の歴史的な妙見の痕跡だけでなく、現在地域に伝わる妙見を民俗学的な視点から捉えることに焦点をおく。

佐野賢治が「妙見信仰の展開を知ることは日本民族の民俗性を知る手掛かりにもなっ

ていくのである」(佐野 1994 16)と指摘しているように、現代の生活の中の妙見の位置付けを探ることで、日本人の民族性そして歴史書の中に語られていない民族の実態を知ることができるのではないかと考える。

III 研究史—妙見信仰を中心として

日本における星の信仰は、大陸文化の受容とともに北辰崇拝という形で伝わり、やがて妙見信仰という形で定着し展開していったという一側面を持つ。

妙見の研究については様々な研究者が取り扱っている(資料 序-1)が、星の信仰の概要を全体的な視点で扱った金指正三(1943)の研究に始まるといえる。金指(1943)は、日本民族の星に係る信仰について広い視点で追及した。次いで吉田光邦(1970)、金指正三(1974)、佐野(1994)が、星の信仰を史的及び構造的に捉えるとともに時代ごと地域ごとの妙見信仰について言及している。

吉田(1970)は主に関西地方の妙見に触れ、金指(1974)は日本で展開した星辰信仰を体系的に位置付けて構造的に解説し、そこから派生した妙見信仰について考察した。佐野(1994)は、星に関する日本全国の全体的な諸相を述べるとともに日本人の星辰信仰観を解き明かし、そこから日本の妙見信仰に係る課題を指摘している。これらの研究を受けて、中西(2008)は、時代ごとそして日本全国の地域ごとに歴史的な視点から妙見信仰について広く深く概観し、妙見信仰の変遷が日本人の一つの解説となっていると述べる。

次に星の信仰、妙見信仰の部分的な研究については、時代の変遷を視点としたもの、鎮宅靈符神に係る研究がある。

時代の変遷を視点とした研究では、井原木憲紹(2005)、金指(1943)、佐野(中西 2008)が、上代の日本では星への信仰は希薄であったと述べている。その理由に佐野(1994)は「わが国の海洋性の湿潤な気候風土のもとでは星・星座は〔中略〕それほどクリアには見えずまた農耕民族の伝統を有するために夜はもともと就寝の時間であった」(中西 2008 330)ことをあげている。

しかし奈良朝以前、中国渡来の天文学が朝廷では盛んに行われており、北辰崇拝は天皇崇拝と深い関係を持ち朝廷以外に出ることは禁じられていた(廣畠輔雄 1994)という。そのような状況の中、妙見信仰も鎮護国家の目的のもと上層社会に存在していたが、一方、延命招福といった現世利益を求める民衆の間にも受容されていた(増尾信一郎 1994)。平瀬直樹(2013)も、鎮宅靈符信仰が伝来する以前の妙見信仰は、延命に関わる「星」の信仰という性格を持ち、当時の社会は、延命を得意とする呪術を求めていると述べている。

妙見信仰が日本に伝来した時代について、仏教渡来からあまり時を前後しない時期といわれるが、小峰智之(2007)は、はっきりしていないが妙見菩薩として遅くとも奈良時代後期頃には民間に広く伝わり信仰されていたと述べた。それは日本靈異記や御灯の記録の中にみることができる。

そして妙見信仰が日本で展開していった様相について、四つの捉え方がある。

一つ目は妙見信仰を1本の流れと捉えるもので、井原木(2005)は、北辰信仰は奈良

時代から平安時代にかけて、儒教や道教・仏教の影響を受け民俗信仰としての北辰崇拜・妙見信仰が形成され、やがて仏教と習合することで朝廷から民衆へ、畿内から地方へ、さらに武士層の守護神として展開したと述べ、妙見信仰が徐々に変容していったことを示唆している。

二つ目は、日本に伝わった当初から二つの系統の妙見信仰が存在していたとするものであり、金指（1943）は、上は宮廷において一つの儀式となり、下は民間の俗信ではあったが根強い信仰となったと述べる。

三つ目は、当初は一つの信仰であったが、やがて二つに分かれ階層の違う二つの系統の妙見信仰が並行に存在していったとするものであり、吉田（1970）は、日本に伝わったときは個人に幸福を与える神であったが、やがて密教と結合した妙見菩薩は、国家鎮護、王城守護の菩薩とされ、天子や貴族の熱心な信仰をあつめるものとなった。その結果一つは個人のものとなり、もう一つは国家、帝王のものとなったと述べる。

四つ目は、当初二つの系統であった妙見信仰が習合し展開していったのではないとするものであり、小峰（2007）は、鎮宅靈符等の異名に象徴される道教的信仰を起源として仏教と融合した星宿信仰と、天皇と結びついた中国の儒教的天文観を根源とする星宿信仰という二元的な展開があり、平安期以降、密教などを媒体として同化され習合尊的な性格を持った妙見菩薩へと変容していったのではないかという仮説を提示している。

鎮宅靈符神との関わりを述べた研究には、吉岡義豊（1966）、二階堂義弘（2012）、山極哲平（2007）、平瀬（2013）の研究がある。

鎮宅靈符神は靈符を司る神であり、靈符の中でも鎮宅靈符という 72 種をセットとする特定の靈符と関係し、玄天上帝、太乙神、妙見菩薩や国常立命等諸神仏と習合しながら、中国から日本へ渡り広く伝えられた神である（吉岡 1966）。

吉岡（1966）は、靈符に関わりのある妙見信仰は真武神と同体異名であり、同様に靈符と関わりのある真武神（靈符とかわりがない真武神もある）は日本に渡ると妙見菩薩として転生する。つまり妙見の本体が靈符神であるということになると述べている。二階堂（2012）は、吉岡の説を引き、妙見神の変容について、古代の玄武から変化した道教の神武大帝が、日本において妙見菩薩と混淆され信仰される状況を分析し、妙見神は様々な神格が合わさった複合的な神であると述べる。さらに山極（2007）も、吉岡の論証を肯定し、真武＝妙見＝靈符神という構図はほぼ確定したと述べている。次の中世武士団の時代の妙見信仰について、平瀬（2013）は、真武神のイメージが導入され妙見信仰を領国支配イデオロギーにまで高めていった。そして武士団、密教各派、神道各派による妙見信仰は、鎮宅靈符信仰によって補強され、中世社会により広く深く浸透していったと述べる。

また日本における星の信仰の性格について、窪徳忠（1983）は、大体中国と似ているが、異なる点は、人間を守り恵みをたれるやさしい神としての性格が強いことのように思われると述べており、民衆の欲や利益を追求する神ではなく民衆の生活の基本的な祈りの対象であったことが知られる。

このようにみていくと、妙見信仰は、中国から伝来した北辰崇拜という形の星の信仰から始まり、星の信仰の一側面として、約 1500 年間にわたり日本国内で時代に沿った

信仰形態を展開し、時代を代表する文化を形成してきたことが窺われる。

IV 問題の所在と課題

以上のように妙見信仰に関する研究は、中国から日本に伝わった北辰崇拝という形の星の信仰の概要を全体的に扱いその中で妙見を論じたもの、妙見信仰の展開を歴史的な視点から述べたもの、中国を源流とする鎮宅靈符神・真武大帝そして道教と日本の妙見信仰との関わりを論じたものが多い。この他に「第二部 妙見信仰と地域社会」で述べるが、一つの地方や限定された祭祀等における妙見をテーマとした多くの研究もなされている。これらは民俗学的視点から捉えた妙見についても一部言及しており筆者の研究の指針となる貴重な内容である。

しかしながら、これらの研究史は、日本に伝えられた妙見信仰が変容していく過程とその位置付けについて史実を交えながら歴史的に論じたもの、ある地方や限定された祭祀等をテーマとした研究が多く、民俗学的視点から妙見の特徴について論じたものやそれぞれの特徴を持つ妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかということについて民俗学的な視点で扱ったものはほとんど見当たらない。そこで妙見の特性を収集分析し、その分析結果から得た特徴を持つ妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを民俗学的な視点で取り上げることが、妙見が、現在地域に果たす役割を明らかにする上で重要な意義があるのではないだろうか。

また、この課題から発出する「それぞれの時代にそれぞれの人々が何故妙見信仰というものに存在感を維持してきたのか」「妙見は今どこにどのように存在しているのか」という問いかけは「日本人の民族性を知り現在の民俗学の今後の方向性を考える上での一助となる」意義があると考ええる。

筆者が本論文第二部で調査した四つの事象は、先行研究から妙見の特性を分析し、その分析結果から得た四つの特徴を持つ妙見が伝わるといわれる地域である。そこで本論文第二部の事例研究を基にして、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのか、そしてそれぞれの特徴を持つ妙見が、現在地域に果たす役割はどのようなものであるのかを問題の所在としたい。

したがって本論文では、それぞれの特徴を持つ四つの妙見が、現在地域に果たしている役割を明らかにすることを課題とし、そのための方法として先行研究から妙見の特性を分析し、その分析結果から得た特徴を持つ四つの妙見が、現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかの2点について民俗学的な視点で明らかにしていく。

V 研究の方法と本論文の構成

本論文は表題を「妙見信仰の民俗学的研究—日本的展開と現代社会—」と設定した。ここでいう民俗学的研究とは次の二つの手法で研究を進めていくことをいう。一つは歴史的な視点からではなく、地域に伝わる伝承を手掛かりに民俗学的な視点で研究を進めていく手法である。民俗学的なというのは、今、地域に伝わる伝承を手掛かりとして行

うことであり、現代を基軸とし、現代にどのような影響を及ぼしているのかを重要な視点とする。もう一つは、フィールドワークを中心とし、地域の妙見に係る祭礼や行事等の観点から、産業、儀礼、信仰、習慣、交通、交易など、現代の生活空間における基本的な民俗資料の調査を行い、妙見信仰について民俗誌的な視点で研究を進めていく手法である。

最初に先行研究から妙見の特性を収集分析し、その分析結果から得た特徴を持つ妙見が、どのような変遷をたどり、人々の意識の中にどのように存在し、そして現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを、主に先行研究と現地調査から探ることにより、妙見が地域に果たす役割を民俗学的な視点で明らかにする方法で調査・研究を進めた。具体的には、典型的な四つの特徴（後述）を持つ妙見が今も伝わる関東地方の四つの事象を選び調査研究を進めた。この四つの事象とは「東京都稲城市の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の妙見の祭礼」「東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界隈の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」である。

ここで「妙見」という表現について述べておきたい。

明治時代の神仏分離により、妙見菩薩は妙見神や天御中主命と名称を変えていった。しかし、妙見尊、妙見神に関わりなく、地域では今でも「妙見様」と呼ばれ親しまれ信仰されている。信仰する側にとって寺であるか神社であるか神であるか仏であるかはあまりこだわりなく、単に「妙見様」を崇敬しているという様相である。本論文では、現代に伝わる妙見に視点をおくことを第一と考えるので、妙見神、妙見菩薩、妙見尊を「妙見」と表現し、この三様の区別については明確に行わない形で論考を進める。

次に本論文の構成について述べる。

本論文は「序章」「第一部：日本における『妙見信仰』の展開」、「第二部：妙見信仰と地域社会」「終章」で構成する。

第一部は「第一章：星と人との関わりの軌跡」「第二章：『妙見信仰』—日本における変遷と分布—」「第三章：妙見の像容」「第四章：民俗学的視点からみた妙見の特徴」で構成し、第二部は「第五章：氏神として伝わる妙見—東京都稲城市百村の『妙見尊』行事から—」「第六章：祭礼の中に武神として伝わる妙見—千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から—」「第七章：大衆文化的妙見の受容—東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界隈に伝わる妙見—」「第八章：変遷をたどり現代に息づく妙見—埼玉県秩父地方に伝わる現代的意義—」で構成する。

「第一部：日本における『妙見信仰』の展開」は、日本における妙見について、定説、日本での分布、妙見菩薩の像容、民俗学的視点からみた妙見の特徴など、その概要を多方面から整理した形で述べた。この中の「第四章：民俗学的視点からみた妙見の特徴」は、現在の日々の生活や習慣の中に認められる妙見の特性を、先行研究を基に筆者が収集分析し、その結果から、民俗学的視点からみた日本の妙見の特徴を明らかにしたものである。内容は、社寺に伝わる信仰の霊験、一般の生活習慣の中での禁忌、祈り、呪術等であり、起源も理由も効能もあいまいでありながら、今も同じように生活の中に伝えられ、日常生活の様々な理由づけになっていると考えられる。この「第四章：民俗学的

視点からみた妙見の特徴」は、第二部で行う事例研究のための四つの事象を選択する手掛かりとなる章であり、第二部を展開するための伏線となる。

第二部では、第一部「第四章：民俗学的視点からみた妙見の特徴」の結論から得た四つの妙見の特徴を有する関東地方の四つの事象「東京都稲城市の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の妙見の祭礼」「東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界限の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」を選択し、第五章から第八章で事例研究を行った。現在妙見が伝わる多くの事象の中からこの四つの事象を選択したのは、それぞれに、現在妙見の軌跡が存在し、四つの妙見の特徴を認めることができたからである。この四つの事象について、妙見の祭礼や行事、日常生活習慣等の調査を行い、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを民俗学的な視点から明らかにした。

第五章では、東京都稲城市百村の妙見宮で行われる三つの民俗行事「^{じんが}神化まつり」「蛇より行事」「星まつり」の実地調査を行い、現在妙見が地域でどのような位置付けであり地域にどのような影響を及ぼしているのかということについて調査・研究した。百村の氏神として祀られている「妙見尊」は、今も別当寺であった「妙見寺」が管理し、各行事も「妙見寺」で執り行っている。寺院でありながら神社の管理も行うという神仏混淆の形態が江戸時代から現在まで続けられているという。

第六章では、中世、千葉一族が厚く信仰した妙見信仰の視点から、千葉県千葉市中央区の妙見本宮「千葉神社」と下総國「寒川神社」に伝わる妙見に由来する二つの祭礼「妙見大祭」「御浜下り」の現実態を明らかにして祭礼民俗誌を作成し、二つの祭りを比較・検討し、現代の生活の中で妙見がどのような位置付けであり地域にどのような影響を及ぼしているのかということについて調査・研究した。

第七章では、東京都墨田区業平にある日蓮宗寺院「柳嶋妙見山法性寺」界限に残る妙見の軌跡を探り、妙見が地域でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかということについて調査・研究した。法性寺は、江戸時代には「柳嶋妙見」と称し、江戸の町で一番古い妙見といわれ、繁栄を続けた歴史がある。江戸時代全期を通して多くの庶民が信仰し、また遊山の場所としても賑わいをみせ、界限では様々な江戸文化が醸成された。また、江戸時代には、檀林における学僧の妙見信敬といった形で日蓮宗における妙見尊信が盛んになった。「檀林の修学僧にとっては『妙見菩薩は試験の神さま』」（中西 2008 221）でもあり、檀林で修業した僧たちが妙見の教説を伝道し日蓮僧の間で妙見信仰が普及していった。

第八章では、地域の様々な場所や行事・祭礼の中に、妙見の存在を数多く認めることができる秩父地方の妙見について、現代の生活の中でどのような位置付けであり地域にどのような影響を及ぼしているのかということについて調査・研究した。多くの祭礼行事の中から、秩父市中宮地の関根家とその地域に伝わる妙見、秩父地方に伝わる「秩父七妙見」、秩父神社の祭礼「御田植祭」と「秩父夜祭」の二つの祭礼の三つの視点から調査を進めた。

終章では、第二部で行った四つの事例研究の調査結果をもとに、時代に沿った信仰形態を展開してきたといえる妙見の現代的意義、すなわち妙見が現在地域でどのような役

割を果たしているのかについて考察した。

《引用・参考資料》

- 井原木憲紹 2005 「日本における星辰信仰の一考察―日蓮上人御遺文に見える星辰・北斗を中心にして―」 『桂林學叢』第19号 法華宗宗務院
- 金指正三 1943 『我が國に於ける星の信仰』 森北書店
- 金指正三 1974 『星占い星祭り』 青蛙房
- 窪徳忠 1983 「中国から日本へ―星をめぐる民間信仰」 『日本民俗文化体系』2 小学館
- 小峰智行 2007 妙見菩薩の信仰と展開 『密教学研究』39 日本密教学会事務局
- 中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
- 佐野賢治 1994 「日本星神信仰史概論 ―妙見・虚空蔵信仰を中心にして」 佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
- 二階堂義弘 2012 『アジアの民間信仰と文化交渉』 関西大学出版部
- 平瀬直樹 2013 「日本中世の妙見信仰と鎮宅靈符信仰 ―その基礎的考察」 『仏教史学研究』第56号 仏教史学会
- 廣畑軸雄 1994 「日本古代における北辰崇拜について」 佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
- 増尾伸一郎 1994 「〈天罡〉呪符の成立 ―日本古代における北辰・北斗信仰の受容過程をめぐる―」 佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
- 吉岡義豊 1966 「妙見信仰と道教の真武神 ―附天正写本『靈符の秘伝』」 『智山学報』14 智山勧学会
- 山極哲平 2007 「鎮宅靈符神信仰研究史の整理」 『国文学』91 関西大学国文学会
- 吉田光邦 1970 『星の宗教』 淡交社 別紙 10行
の信仰』所収 溪水社

第一部 日本における「妙見信仰」の展開

はじめに

本論文第一部「日本における『妙見信仰』の展開」の目的は、日本における妙見について、その存在を位置づけることである。第一部では、妙見の基本的な情報すなわち妙見の変遷・分布・像容・民俗学的な特徴などを明らかにすることを課題とし、そのための方法として先行研究や文献資料を基に日本の妙見について探っていく。日本における妙見について、その存在を具体的に位置付けることは、第二部「妙見信仰と地域社会」の事例研究を行っていく上での伏線となり、事例研究の結果から考察を引き出すための原拠となる意義があると考ええる。そこで第一部「日本における『妙見信仰』の展開」では、先行研究や文献資料を基に、星と人との関わりを基点とし、変遷・分布・像容・民俗学的な特徴などの視点から、日本における妙見を具体的に位置付ける方法をとる。

第一部の第一章「星と人とのかかわりの軌跡」では、北斗七星・北極星を神格化した日本における妙見信仰を概観し、第二章「『妙見信仰』—日本における変遷と分布—」では妙見信仰の変遷・分布について述べる。第三章「妙見の像容」では妙菩薩の像容を、第四章「民俗学的視点からみた妙見の特徴」では、先行研究を基に民俗学的視点から日本の妙見の特徴を明らかにしていく。以上を踏まえ、日本における妙見について、その存在を具体的に位置付ける。

第一章 星と人とのかかわりの軌跡

本章の目的は、混同しがちな北斗七星、北極星、北辰、そして北斗七星・北極星を神格化した妙見が、日本においてどのような存在であり、どのように関連し合ってきたのかということについて明らかにすることである。『我が國に於ける星の信仰』（金指正三 1943）、『星の宗教』（吉田光邦 1970）、『星占い星祭り』（金指 1974）、『星の信仰—妙見・虚空蔵』（佐野賢治 1994）、『妙見信仰の史的考察』（中西用康 2008）などの先行研究から、「Ⅰ 日本での星に対する意識」「Ⅱ 日本における星神信仰—北斗七星・北極星を中心に—」「Ⅲ 北斗七星・北極星を神格化した妙見信仰」について概観する。

Ⅰ 日本での星に対する意識

佐野賢治は、日本には体系的星神信仰は存在しない（佐野 1994 13）と述べているが、日本における星神信仰は、夜空の星を見て移動するアジアの遊牧民のように実際に見る空の星への信仰としては発達せず、魔除け、厄除けという形で存在感を示してきた。星神信仰が空の星への信仰として発達してこなかった理由は二つあげられる。一つは、日本の空は水蒸気が多くアジア大陸のように澄みきっていないため、はっきりと空の星を認めることが困難な自然環境であること、そしてもう一つは、日本人ははるか遠く弥生時代からの農耕民族であり、朝早くから夕暮れまでを太陽の光のもとで田を耕して過ごし、星の出る夜は眠るという生活を営んできた民族であったことである。

星という言葉から連想される日常の身近なものに、ホシ（犯人）、白星・黒星、ズボシという言葉や、相撲の勝敗、陸軍の階級章などがある。また「希望の星」「星占い」「巨人の星」など未来を展望する象徴としても使われる。

星を表現するときに使われる「星象」は、図 1-1 は五光星、図 1-2 は五芒星と呼ばれ、一筆で書くことができ、入口がなくどこからも入れない魔除けの意味を持つ。陸軍の星はここからきているともいわれる。他にも海女が手拭いや道具に「星象」をつけ魔除けとしており、嬰兒のお宮参りに「犬」（字体が「星象」に通じる）の文字や印をつけ、やはり魔除けとしている地方もある。陰陽道では魔除けの呪符として用いられる。図 1-3 は清明紋といわれ安倍清明の清明神社の紋や護符にも見ることができる。

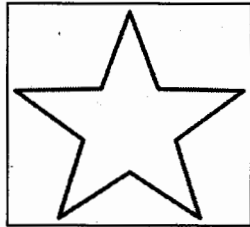


図 1-1 五光星

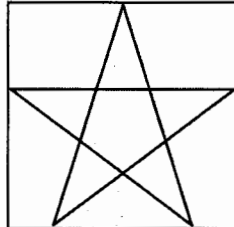


図 1-2 五芒星

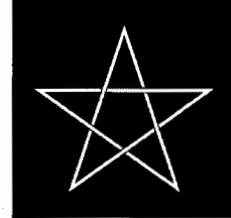


図 1-3 清明紋

星に関する身近な行事には七夕があり、節分に行われる星祭りも星を身近にとらえた行事である。各地に伝わる伝説や昔話にも、星にまつわるものが伝えられている。ここでは詳しく引用しないが、北極星・北斗七星を題材としたものは沖縄など南の地方に多く存在する。金星に関するものは各地に伝わっており、空の星が降って地中で育ったものが埋蔵鉱物となったとする伝説も伝えられている。

一方「星」に対する日本の観念的な星神信仰は、「体系的な中国の星神信仰が宗教者によって民間に沈下していく、一方的な過程と捉えてもよいことを示唆している」（佐野 1994 13）。つまり日本では、魔除け、厄除けという形態の観念的な星への信仰として、僧侶や貴族、武士といった特定階級の信仰から始まり、宗教者の関与によって民間に波及していったことが推測されるのである。

その信仰は「密教的系統（尊星法・天台、北斗法・真言）と陰陽道系統（安倍清明・土御門神道）の流れがあり、仏教的星神信仰には、北斗星を祀る法とそこから派生した妙見信仰の流れと虚空蔵求聞持法に拠る虚空蔵信仰に派生する流れ」がある（佐野 1994 14）。陰陽道系統の星辰信仰は「中国の天文観と道教の星辰信仰を背景に…（中略）…民間に伝わる呪術的信仰の上に成立した」ものであり（佐野 1994 16）、出雲晶子は「お互いの要素をとり入れあった結果、現在は区別しにくいものも多い」と述べる（出雲 2012 341）。

II 日本における星神信仰—北斗七星・北極星を中心に

日本における星神信仰の背景には、早い時期から妙見との関わりが認められる。妙見信仰は北極星や北斗七星を神格化した信仰であることから、ここでは、北斗七星、北極星を中心に述べていく。

北辰については、『大辞泉』によると、「辰は日・月・星の総称」（松村 1995 1366）とあり、『天文・宇宙の辞典』には、「北辰は北極星の中国名」（天文・宇宙の辞典編集委員会 1983 536）とある。『星の文化史事典』には「北辰とは北極星のことで、北極星を神として祭る信仰を北辰信仰という」（出雲 2012 341）とあり、本論文では、北辰と北極星は同じものとする。

野尻抱影は、北半球ではすべての星がほぼ北極星を中心として時計の針と反対の方向へ

1日1回まわっており、北斗七星はその一番外で大きな円を描き、柄のはしの星が一定の方角をさして、正しい季節を教えると述べている（野尻 1977 25-31）。北斗七星は七つの星からなるが、そのうち一つは3等星で残りの6星は2等星である。宇宙に現存する2等星の数は、国立科学博物館のホームページ（<http://www.kahaku.go.jp>, 2017. 8. 10）によると67個ということなので、6つの2等星を持つということは、宇宙で大きな存在感を示す星座であるといえる。

北斗七星の世界各国での言い伝えについて、野尻は次のように述べている。

大熊座の中心を成す星座であるとともに七つの星がヒシャクの形に並んでいることから、「熊」「ヒシャクまたは車」「七に関する動物や人」など、世界各国で身近な動物や道具と結びつけ、神秘性や畏怖を秘めた敬虔な思いが伝えられている。北斗七星を初めて大熊と見たのはフェニキア人であるが、北アメリカのインディアンも北斗七星を大熊とみている。アメリカ、フランスなどでは広く「ヒシャク」と言われている。また古代中国では北斗の車に北斗星の天帝が乗るといい、エジプトでは大神オシリスの車、ギリシャではハマクサ（車）、スカンディナヴィヤでは大神オーディンの車、雷神トールの車、英国ではチャールズ（農夫）の車、アラビアではマスの4星は柩の台で柄の3星は柩を送っていく3人の娘、柄の端の星は「とむらいの長」を意味するという。7に関することというインドでは7人のリシ（聖者）とされた。中国では7匹の豚とみていた（野尻 2003 21-22, 1977 29-33）。

このように世界各国で独自の存在感を伝えているが、「北斗は中国の名で『斗』は液体を入れる柄付きの量器」（野尻 2003 25）をいい、「日本ではシソウノホシ（四三の星）という名が最も古い」（野尻 2003 25）。他に「七曜星、かじ星、枡星、七ツ星」（天文・宇宙の辞典編集委員会 1983 534）などいろいろな呼び名がある。また、中国では「時代が下がると〔中略〕人間のおかす罪過を監視する、いわゆる司過の神のひとりとなれ、さらには人間の死を司る司命の神」とされるようになった（窪 1983 318）。

一方、一年中地平線に沈むことがなく不動（わずかに移動する）の星として存在する北極星は、ステラ・マリス（海の星）といわれるように航海の指針となっており、中近東など砂漠の多い国では旅の道標（野尻 2004 13-18）すなわち人生の道標、「中国では天の主催者である天帝とみなした」（大島ほか 2001 1162）。また、野尻は「中国伝来の学者的な名で、日本固有の名は、ネノホシ、ネノホーノホシ、キタノヒトツボシ、ヒトツボシ」と述べ（野尻 2003 12）、『天文・宇宙の辞典』には「しん星、不動星、妙見星、目あて星」（天文・宇宙の辞典編集委員会 1983 536）と記されている。

では、日本では、妙見信仰と関わる北斗七星、北極星に対して、どのような意識を持ってきたのであろうか。妙見信仰の視点から北極星と北斗七星の存在を探っていくと、両者の解釈は混同されている場合がしばしばあり、平安時代の日本では、北極星、北斗七星について明確に区別されず、両者とも人の禍福、寿命、運勢を司る星として重視されていた記録がある。北辰について出雲は次のように述べる。

北辰とは北極星のことで、北極星を神として祭る信仰を北辰信仰と言う。中国の漢民族は皇帝は天の命により人を治めると考えており、その道を天道といって皇帝は天では北極星であった。また北斗七星は『史記』天官書によると天帝の車にして、諸々の政法を定めるとあり、天帝の座する天の北極を中心に回ることから皇帝の権威の象

徴であった。日本にこの思想が伝わり、北辰信仰となったが、次第に北斗七星を北辰と混同するようになった。…（中略）…平安時代に貴族の間で星占いが流行し、儀式が増えたことなどから、北辰信仰は日本の独自色が強いものに変化していった。日本の北辰信仰は道教系と仏教の密教系があったが、お互いの要素を取り入れあった結果、現在は区別しにくいものも多い（出雲 2012 341）。

『日本の神仏の辞典』にある「北斗七星」「星」「北極星」「妙見」の内容を基に、日本の星神信仰について整理したところ、「日本における星神信仰の経過」（資料 1-1）のように表すことができた。この資料 1-1 から次のことが読み取れる。

中国天文学が成立した当時、北極星と北斗七星は明らかに違う位置付けであり、道教の視点においても北極星と北斗七星は区別されていた。仏教の視点でも北斗信仰は希薄であったが、「妙見菩薩の所依經典」（平瀬 2013 22）である『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪經』（以下「七仏所説神呪經」と記す）に北辰を妙見とするとの記録を見ることができる。中国天文学はこのような形で飛鳥時代に日本に伝わり、道教の視点と仏教の密教の視点を背景とした日本の星神信仰が時代に沿った形で整えられていった。奈良時代には、『日本霊異記』『類聚国史』『年中行事抄』『権記』等に、民間における妙見信仰が盛んであった様子が記されている。平安時代になると、密教の星辰信仰と道教の北辰・北斗信仰が結合し、延寿、攘災のためにさまざまな密教の修法、星供が成立した。平安中期から室町時代にかけては、密教占星術としての宿曜道も行われ、宿曜師が天皇・貴族のために運勢や寿命を占い星供を行った。そして「天皇と貴族による独占がなくなった鎌倉・室町時代に民衆へと広まっていき、土着の風習もとり込まれ、多彩な様相を見せるようになった」（出雲 2012 341）。

日本における星神信仰の背景には、早い時期から妙見との関わりが認められるが、宗教者が信仰を具体的な形に表現していくにつれ、妙見も時代や地域に沿った様相を定着させていったといえるのではないか。

III 北斗七星・北極星を神格化した妙見信仰

日本における妙見信仰は妙見菩薩に祈る信仰である。妙見菩薩は「中国の星辰崇拜思想から北極星を神格化した菩薩で、北辰と同じ」とされた（出雲 2012 372）が、次第に北斗七星を北辰と混同するようになり、平安時代には北斗七星または北極星を神格化した菩薩という位置づけとなっていた。妙見菩薩は日本の仏教に属する仏像ではない天部に属し、妙見尊星王、北辰妙見菩薩ともいわれる。天台宗寺門派では尊星王と呼んでいる。妙見菩薩・妙見信仰について『妙見信仰の史的考察』（中西 2008）からその推移をみていくと資料 1-2 「日本における妙見信仰の推移」のように

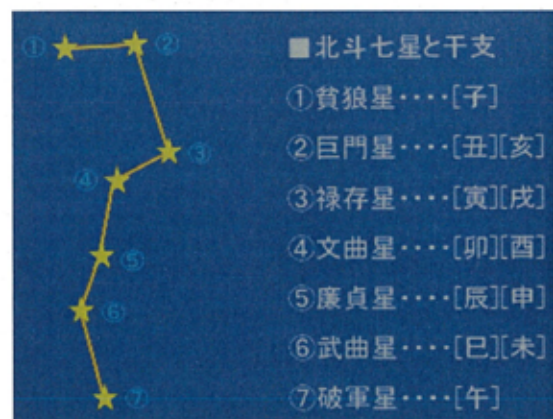


図 1-4 北斗七星図
（「那須波切不動尊金乗院ホームページ」より、
<http://www8.plala.or.jp/konjouin/hoshiku02.html>,
2017/10/23）

表すことができる。

妙見信仰の日本への伝来について明確な記録はないが、妙見菩薩という文字の日本での初見は「『正倉院文書』の『仏像彩色料注文』に見えるのを最古とする」（『岩波仏教辞典』 2002 971）とあり、聖武天皇が妙見菩薩像の修理を依頼した〔天平勝宝4（752）〕との記録もあることから、妙見菩薩が天皇の守護神として存在していたことが察せられる。

妙見菩薩の教説は「七仏所説神呪經」と『仏説北斗七星延命經』に著わされている。「妙見菩薩の所依經典」（平瀬 2013 22）である「七仏所説神呪經」は、道教の影響がみとめられる晋代失訳の經典で、5、6世紀に中国で作られた偽經とも推測されているが、妙見菩薩について「我北辰名づけて曰妙見という。今神呪を説き国土を擁護せんと欲す、所作はなほ奇特の故に妙見と名づく。閻浮提に処し衆星中の最勝、神仙中の仙、菩薩の大將ひろく諸生をすくう」（国訳秘密儀軌編纂局 1998 535）との經文があり、北辰を妙見とし、その神呪を称えることで国家擁護の利益やそのほか延寿・滅罪・増福や除災・五穀豊穰などの幅広い利益を説いている（『日本神仏の辞典』 2001 1162）。この「七仏所説神呪經」は、仏教の公伝〔六世紀半ば〕とともに日本に伝わった密教經典の一つであることから、妙見信仰は仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられたと考えられる。

『仏説北斗七星延命經』は、道教の星辰信仰をとり入れた中晩唐期の道仏混淆の經典である。「南無貪狼星 是東方最勝世界 運意通証如来佛 南無巨門星 是東方妙宝世界 光音自在 南無禄存星 是東方円満世界 南無文曲星 是東方無憂宝世界 最勝吉祥 南無廉貞星 是東方浄住世界 広達智弁 南無武曲星 是方法意世界 法海遊戲 南無破軍星 是東方瑠璃世界 藥師瑠璃光如来佛」（井原 2005 138）との經文があり、本地を七仏に配して説き、文曲星を吉祥天、破軍星を藥師如来に擬している。

また『新編仏像図鑑 上』には妙見菩薩について「この菩薩の本地は釈迦とし、観音とし、藥師とし異説多く本地つまびらかならず」（国訳秘密儀軌編纂局 1998 535）とあり、金指は「妙見菩薩本誓（仏の誓い）は、人間界の帝王を擁護すること」（金指 1974 147）であり、「〔妙見菩薩の本地が、釈迦、観音、藥師など〕種々あるのは、經典に説かれた妙見の功德が普遍化し、功德ある故に信仰を集めた仏菩薩と混じ、時代を経るに従って変化し、数多くなったのであろう」と述べている（金指 1974 148）。

また当時の仏教説話文学である『日本霊異記』には、「紀伊の国、安諦郡私部寺の前に住んでいた男が絹の衣を盗まれ、妙見菩薩に取り戻せるよう祈願した」（上巻 第34話）、「河内の国安宿の郡の部内に、信天原の山寺有り。妙見菩薩に燃燈を献る処とす」（下巻 第5話）、「漁夫が海難に遭い、妙見菩薩に祈ったことで助かった」（下巻 第32話）等いくつかの妙見菩薩の説話が綴られている。「『日本霊異記』の成立年ははっきりしないが、弘仁 13（822）年とする説があり、収められている話の時代背景は奈良時代が多く、奈良時代後期から平安時代初期には妙見信仰が庶民にも広がっていたことがうかがえる」（小峰 2007 93）。

妙見信仰の変遷については、第二章「『妙見信仰』—日本における変遷と分布」で述べるが、資料1-2からは次のことが分かる。

日本における妙見信仰は、僧侶や貴族、武士といった特定階級の信仰としてまず受容された。妙見信仰は仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に

伝えられたといわれる。仏教公伝から幕藩体制までの約 1300 年間、その信仰は少しずつ形を変えながらも、政治の中心となる場面で深く尊崇されていったことがうかがわれる。奈良時代・平安時代は執政の中心である公家の間で篤く信仰され、やがて武士が台頭すると武士の間で武神として信仰されるようになった。民衆へと広まった妙見信仰は地域の信仰も取り入れ次第に多彩な様相を定着させていくこととなった。

IV まとめ

本章では、「日本における妙見の存在を位置付ける」という第一部の目的に基づき、先行研究や文献資料を基に、北斗七星、北極星、そして北斗七星・北極星を神格化した妙見の存在と、それらがどのように関連し合ってきたのかということについて明らかにすることを目的とした。

弥生時代からの農耕民族である日本の星神信仰は、夜空の星を見て移動するアジアの遊牧民のように実際に見る空の星への信仰としては発達せず、魔除け、厄除けという形で存在感を示してきたが、日本の星神信仰の背景には、早い時期から妙見信仰との関わりを認めることができる。そこで北極星、北斗七星を神格化したといわれる妙見信仰の視点から北極星・北斗七星と妙見との関係を探った。

妙見信仰は、仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられたといわれる。

中国天文学は、飛鳥時代に日本に伝えられたといわれるが、資料 1-1 によると、中国天文学が成立した当時、北極星と北斗七星は違う位置付けであった。道教の視点においても北極星と北斗七星は区別されており、仏教の視点では北斗信仰は希薄であった。10 世紀中頃になると、道教の視点と仏教の密教の視点を背景とした日本の星神信仰が、時代に沿った形で整えられていった。

日本に伝えられた妙見信仰について、奈良時代には、民間における妙見信仰が盛んであった記録が残されているが、資料 1-2 に記したように平安時代になると、密教の星辰信仰と道教の北辰・北斗信仰が結合し、本命供、北斗法、尊星王法、妙見供など様々な密教の修法、星供が成立した。平安中期から室町時代にかけては、天皇・貴族のために運勢や寿命を占い星供を行った。天皇と貴族による独占がなくなった鎌倉・室町時代には武士や民衆へと広まっていき、多彩な様相を見せるようになっていった。

《引用・参考資料》

- 出雲晶子 2012 『星の文化史事典』 三秀社
井原木憲紹 2005 「日本における星神信仰の一考察」 『桂林學叢』第 19 号 法華宗宗務院
大島建彦ほか監修 2001 『日本の神仏の辞典』 大修館書店
金指正三 1943 『我が國に於ける星の信仰』 森北書店
金指正三 1974 『星占い星祭り』 青蛙房
窪徳忠 1983 「中国から日本へ一星をめぐる民間信仰」 『日本民俗文化体系』2 小学館
国訳秘密儀軌編纂局 1998 『新編仏像図像 上』 国書刊行会
小峰智行 2007 「妙見菩薩の信仰と展開」 『密教学研究』39 日本密教学会事務局

- 佐野賢治 1994 『星の信仰 - 妙見・虚空蔵』 溪水社
中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
野尻抱影 1977 『星の神話・伝説』 講談社
野尻抱影 2003 『星と伝説』 中央公論新社
野尻抱影 2004 『続 星と伝説』 中央公論新社
天文・宇宙の辞典編集委員会 1983 『天文・宇宙の辞典』 恒星社厚生閣
平瀬直樹 2013 「日本中世の妙見信仰と鎮宅霊符神—その基礎的考察」 『仏教史学研究』
第56号 仏教史学会
松村明監修 1995 『大辞泉』 小学館
吉田光邦 1970 『星の宗教』 淡交社
中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士 2002 『岩波仏教辞典 第二版』 岩
波書店

《引用・参考映像・ホームページ》

- 国立科学博物館のホームページ <http://www.kahaku.go.jp>, 2017. 8. 10
那須波切不動尊金乗院ホームページ <http://www8.plala.or.jp/konjouin/hoshiku02.html>,
2017/10/23

第二章 「妙見信仰」—日本における変遷と分布—

本章の目的は、日本に伝わった妙見信仰が、時代に沿って、どのように日本各地に伝えられ定着していったのか、そして地域でどのような位置付けであったのかを明らかにすることである。妙見信仰は、仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられたといわれるが、仏教公伝から明治維新までの約1300年間、その信仰は少しずつ形を変えながら日本各地に伝播し、その地域での特性を加味しながら各地に定着していった。本章では、先行研究、文献資料を基に、時代ごとの妙見信仰の変遷と日本全国の妙見の分布について述べる。

1 妙見信仰の変遷

日本における妙見信仰は、仏教公伝から明治維新までの約1300年間、時代に沿った様相を繰り広げていった。ここでは、この1300年間の四つの時代に特徴づけて述べていくこととする。1番目の時代は、仏教公伝（500年代半ば）から平安中期（900年代後半）までの約450年間、2番目の時代は、平安中期（900年代後半）から平安末期（1100年代後半）までの約200年間、3番目の時代は、鎌倉時代（1100年代後半）から安土桃山時代（1500年代末）までの約400年間、4番目の時代は、幕藩体制時代（1600年代初期から1800年代半ば）の約250年間である。

1番目の時代（仏教公伝〈500年代半ば〉～平安中期〈900年代後半〉の約450年間）は、大陸から伝わった律令制により少数の貴族が国家を統治し貴族独自の文化を築いた時代であり、奈良時代から存在していた怨霊思想が一層流行した時代でもあった。貴族の間で妙見信仰が盛んになり、妙見は護国の仏神、王者為政の教導神として位置付けられた。

2番目の時代（平安中期〈900年代後半〉～平安末期〈1100年代後半〉の約200年間）は、文化の和風化が進み仮名文学、物語・歴史書が盛んになり、平安末期に政治能力を失う貴族に代わり武士層が台頭し始めた時代でもあった。政治の中心になりつつある武士に尊崇された妙見信仰は、1番目の時代の護国の仏神、王者為政の教導神に加え、疫気消除増福益算への願いが尊重されていった。この時代は妙見信仰の修法に妙見供、北斗供、尊星王供の形式が整えられた。平安中期以降は眼疾の平癒を願う機会が多くなり、三条天皇、鳥羽上皇も眼病治癒をこの法で祈ったといわれる。

3番目の時代（鎌倉時代〈1100年代後半〉～安土桃山時代〈1500年代末〉の約400年間）は、武士が中心となり封建制を維持推進した時代であり、妙見信仰は武神としての尊信が確立された。家子（武士の一族で、本家と主従関係にあるもの）郎党（主家と血縁関係にない従者）の地方分散に伴い文化の地方分散が促された時代でもあり、妙見信仰も千葉氏、大内氏ら地方の豪族や武士の間で「守護神や武神」として篤く信仰されていった。武士が武神として妙見菩薩を信仰したことについて、金指正三は「北斗七星の第七星が破軍星（図1-4）と呼ばれたので、妙見菩薩を弓箭の神として崇拝したからである。殊に、地方の大名・豪族がこれを信仰して、堂社を建立したので、それが民間の信仰をあつめ、民俗信仰に展開する役目を果たした」と述べている（金指 1974 230）。文化面では説明・写実的傾向が見られるようになり、戦物語、説話集、絵巻、彫刻にもこの傾向が顕著となった。また、日蓮の現前に妙見菩薩が顕現したという説から、日蓮宗寺院でも広く祀られるようになり民間にも普及していった。

4番目の時代（1600年代初期～1800年代半ばまでの幕藩体制時代の約250年間）になると「星の信仰から海上安全の神、海上貿易を営む大商人の信仰するところから商業の神、さらに『妙見』という名から眼病平癒の神などとして民衆に広く尊信されていった」（大島建彦ほか監修 2001 1228）。妙見信仰は、これまでと違って政治の中心の場だけでなく大衆の間でも広く深く信仰されるようになっていく。この時代は独自に多様な文化が生まれ、妙見は庶民に広く信仰される親しみのある仏神となった。「それぞれの生業に相当するように、武士は武神として、農民は農業神として、また町民は商業神として妙見を尊崇していたのである。が、武士の妙見信仰も農民のそれも当代の妙見信仰を代表するものではなかった。〔中略〕都市の大衆の妙見信仰がそれを代表していた」（中西 2008 312）。この時代「妙見は全国各地に祭られ、『妙見さん』と呼ばれ、庶民の間に広く信仰された」（金指 1974 262）。そして日蓮宗とも深く結びついていった。

やがて世の中の体制を近代国家へと大きく変貌させた明治時代初期には、神仏分離により多くの社寺が祭神を妙見菩薩から天御中主命などと改め、また合祀・破却されていった。佐野は「天御中主命は香々背男命の父親に当たる神格であり、別名を天常立神ともいい、香々背男命→天御中主命の祭神変更の痕跡がここでも窺がえる」（佐野 1994 37）と述べており、神仏分離後に祭神を天御中主命、天常立神、国常立神（伊勢神道では天御中主命は豊受大神の本体とされ、その影響を受けている吉田神道では、国常立神を天御中主命と同一神とした）としている妙見社は数多く存在する。

仏教公伝から明治維新までの約1300年間の妙見信仰の歴史をたどると、同一の仏神でありながら、形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきたといえる。その信仰形態は、時代ごとの特性をよく表しており、妙見信仰がときの文化の一つの側面であったといえることができる。

II 妙見の分布

図2-1・図2-2・図2-3（「日本における星信仰について―妙見菩薩信仰を中心として―」、『駒澤地理』第42号＜駒澤大学地理学教室卒業論文＞、後藤哲也、2006、〔未公開〕：「星の見えるページ」で公開、<http://www2.tba.t-com.ne.jp/tty-gt/index.html>, 2012/10/23）の資料で示す日本地図上の妙見の分布図から、現代（2006年）の日本における妙見信仰の横への広がりを見ることができる。

次に江戸時代の日本全国の妙見の分布状況を知るために、「妙見寺社地理的分布表」（資料2-1、中西 2008 262-272）にある妙見寺社の件数を都道府県別に集計した表「江戸時代の妙見寺社等の都道府県ごとの数」（資料2-2）を「江戸時代の妙見寺社等の分布図」（図2-4）に示した。資料2-1「妙見寺社地理的分布表」は、金指正三の『我が国における星の信仰』の「妙見社地理的分布表」（金指 1943 193-226）を訂正増補したものである。中西は「妙見寺社地理的分布表」（資料2-1）について、これだけで妙見信仰の分布を尽くしたわけではないと述べている（中西 2008 261）が、江戸時代の妙見の分布を知る上での貴重な資料である。資料2-2・図2-4を図2-1・図2-2・図2-3と比較すると、概ね同じ傾向を認めることができるが、山口県と熊本県は資料2-2・図2-4では件数が極わずかであるのに対し、図2-1・図2-2では多くの件数が認められた。

これらの資料から、妙見は日本全国平均的に伝播していったということではなく、い

くつかの地方で盛んに信仰されていたこと、江戸時代の分布の傾向とほぼ同じような傾向で現在もその痕跡が認められることが分かる。その分布状況は、関東、近畿、中国地方の西側と瀬戸内海側そして九州の北側に多くみられ、四国の東側と南側、南東北地方のやや東側にも認められる。もう一つの特徴は、本州、四国、九州とも海岸線に沿った地域に多くみられることである。ここで、本論文第二部「妙見と地域社会」での事例研究対象地域が含まれる関東地方（茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）をみると、千葉県に特に集中しており 188 社の妙見社の記録がある。千葉県の調査によると下総地方 130 社、上総地方 53 社、安房地方 5 社で、下総地方が千葉県全体の 69%を占めている状況である（『千葉県の歴史』別編 民俗Ⅰ 千葉県 1999 380）。茨城県、埼玉県でも千葉県に隣接する地域に多くみることができる。

江戸時代の妙見寺社等の

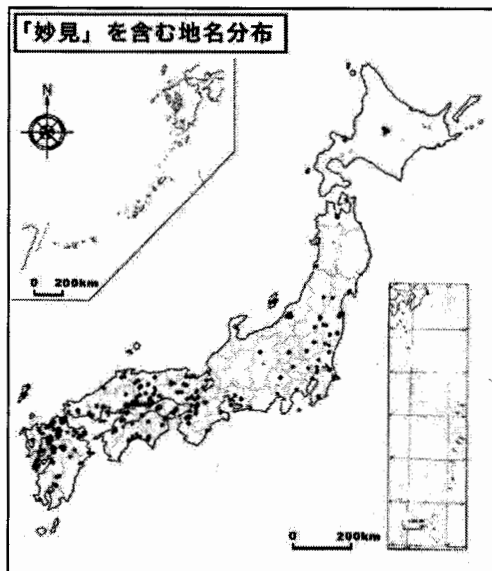


図 2-1

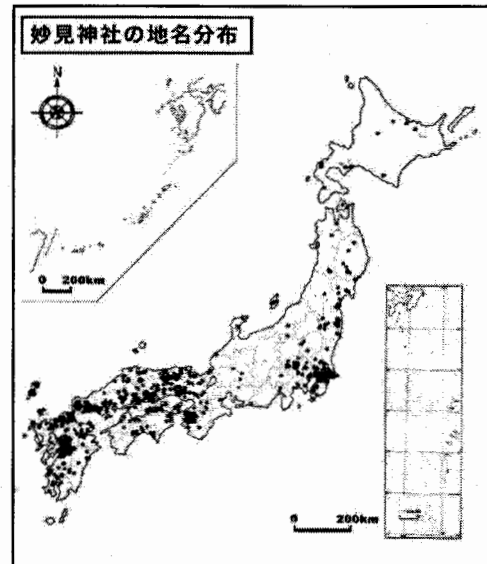


図 2-2

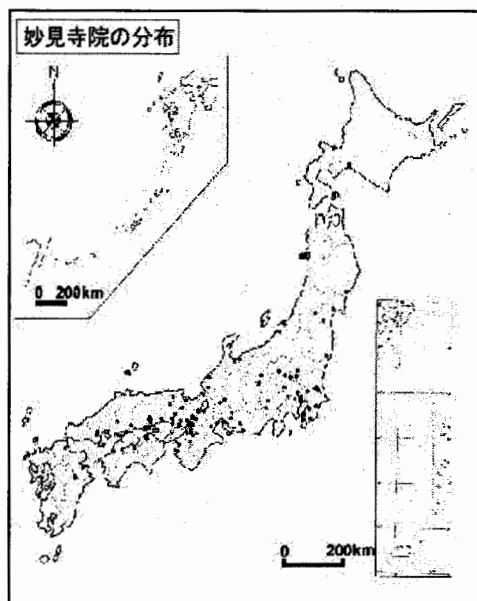


図 2-3

江戸時代の妙見寺社等の都道府県ごとの数

都道府県名	妙見寺社の数	都道府県名	妙見寺社の数	都道府県名	妙見寺社の数	都道府県名	妙見寺社の数
和歌山県	106	福岡県	15	茨城県	6	石川県	3
高知県	83	神奈川県	14	滋賀県	6	山口県	2
岡山県	70	京都府	11	愛知県	5	群馬県	2
広島県	29	福島県	11	大分県	5	福井県	2
島根県	29	千葉県	10	山梨県	4	新潟県	1
鳥取県	25	大阪府	9	三重県	3	熊本県	1
東京都	16	埼玉県	7	長野県	3	—	—
兵庫県	16	静岡県	7	栃木県	3	合計	502

『妙見信仰の史的考察』〔中西用康 2008〕中の「妙見寺社地理的分布表」より

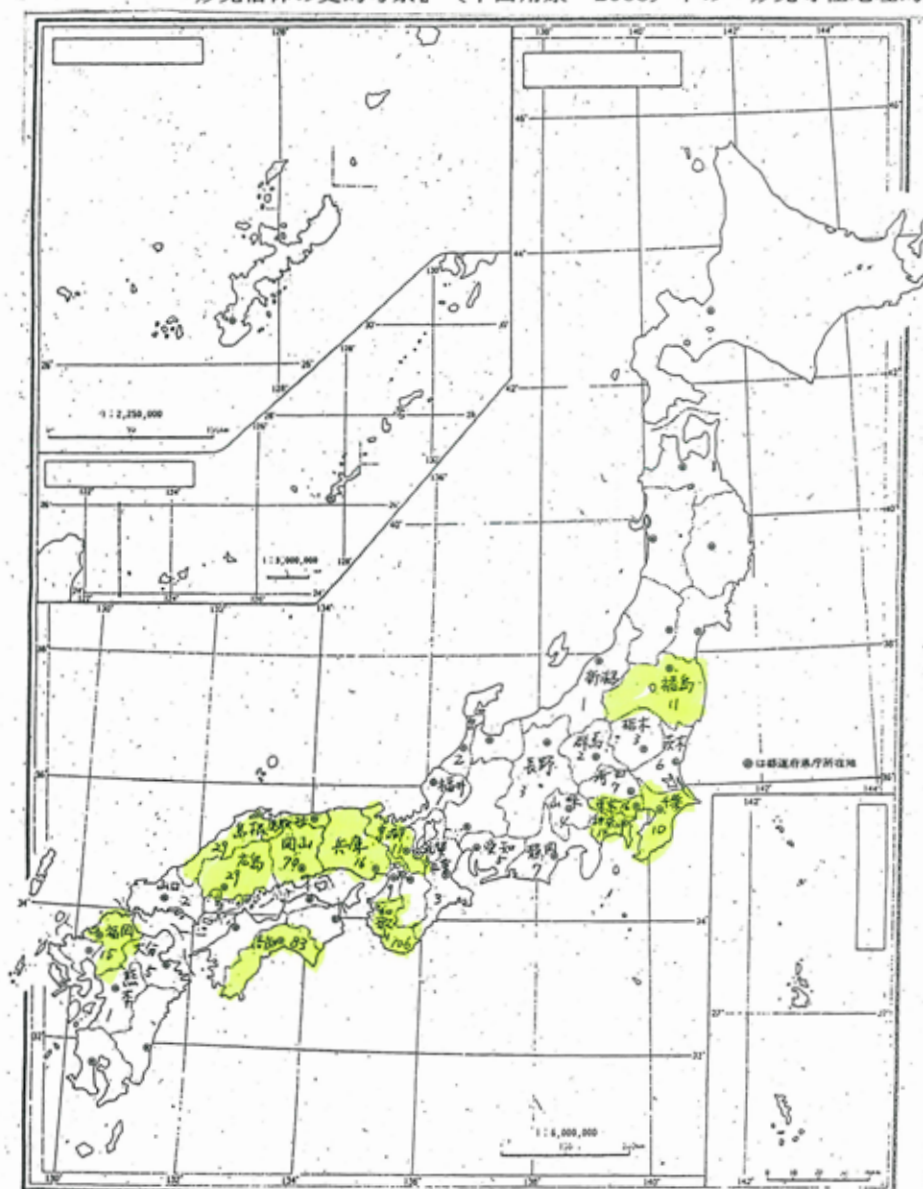


図 2-4

III 代表的な妙見

「Ⅱ 妙見の分布」からも分かるように、現在も日本各地に妙見の軌跡を認めることができる。その中の代表的な事例に「福島県相馬市の相馬妙見」「千葉県千葉市の千葉氏の妙見」「埼玉県秩父地方の妙見」「東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界限の妙見」「大阪府の能勢妙見山」「山口県山口市の大内氏の妙見」「熊本県八代市の八代妙見」等があげられる。近世には日蓮宗でも盛んに祀られるようになった。この7件の事例のうち、「千葉県千葉市の千葉氏の妙見」「埼玉県秩父地方の妙見」「東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界限の妙見」は、本論文「第二部 妙見信仰と地域社会」で行う事例研究の対象地域であるためここでは省略するが、他の4件について、先行研究、文献資料に基づき、簡潔に地域の概要と妙見の様相について述べることにする。

III-1 福島県相馬市の相馬妙見

相馬氏は、下総国、陸奥国（後の磐城国）を領した一族で、平将門（千葉氏の祖・平良文の甥）の後裔といわれる。平将門は途中で血脈が絶えたため、同族であり千葉家中興の祖といわれる千葉常胤の次男・師常が養子となり相馬氏の祖となった。師常は源頼朝の奥州征伐に従い戦功で相馬郡を与えられた。ここに千葉氏の一族として相馬御厨⁽¹⁾を支配した相馬氏が誕生し、将門の子孫として今日に伝えられている。『源平闘諍録』染谷川合戦の妙見菩薩の説話では、妙見菩薩の加護を得た将門は妙見を篤く奉ったが、だんだん驕り高ぶるようになり、やがて自分を「日本將軍平親王」と称するようになった。その結果、妙見菩薩は将門を見放し将門の叔父・平良文の元に渡ったとされる。

相馬地方の妙見信仰は勝善神と習合して牛馬の守護神とされている。この妙見信仰を特徴づけているのは、妙見菩薩の祭祀に際して藩をあげて行われた「相馬野馬追」であり、現在も相馬氏の伝統を引き継ぐ行事として毎年7月に盛大に行われている。相馬周辺の市町村からは多くの騎馬武者が集まり、大きな三つの妙見神を神輿で招いて催される。この行事は、今から1060年以上前、相馬氏の祖・平将門が領内に野生馬を放し敵兵に見立て軍事訓練をしたことに始まるといわれており、後世に相馬氏の勇壮さを伝えている。

妙見を祀る社寺では亀を飼わず殺さぬ禁忌があり、「正月三が日は潔斎をして、白い餅と肉食を絶って精進する慣例も守られていた。〔中略。これは〕将門が誅に服したとき白い衣服を着ていた」（中西 2008 154）ことに由来するといわれる。また「春の初めに白馬を観ると天災を払うことになる」という伝承があり〔中略〕例年3月22・23日には射技を妙見菩薩に奉納していた」（中西 2008 154）という記録も残されている。

（参考：『相馬地方の妙見信仰』2003 野馬追の里原町市立博物館・千葉市立郷土博物館、『将門伝説―相馬と周辺地域』2007 南相馬市博物館）

III-2 大阪府の能勢妙見山

「能勢妙見山」は、大阪府豊能郡能勢町にある日蓮宗の霊場で、妙見山山頂付近に位置し、開運北辰妙見大菩薩を祀る。妙見山は、かつて為楽山といい、天平勝宝年中（750年頃）行基によって開かれた大空寺という真言宗の寺院が建立されていた。

旧領主能勢家の鼻祖源満仲（913-997、多田源氏の祖で多田満仲ともいわれる）は鎮宅霊符神を守護神として祀り、それは能勢家代々に伝えられた。第23代能勢頼次

(1562-1626) は日蓮宗総本山身延山久遠寺の日乾上人に帰依して法華經信仰を深め、代々祀られてきた鎮宅靈符神も、日乾上人により改められて妙見大菩薩として祀られるようになった。1603年のことといわれる。現在祀られている妙見菩薩像は、日乾上人が自ら彫刻したもので、武具甲冑を身に付け右手に受け太刀、左手に金剛印を結ぶ能勢妙見独特の像容である。この像を為楽山山頂の大空寺跡に祀ったことから、為楽山は妙見山と称されるようになった。明和5(1768)年、女人禁制が解かれ、安永2(1773)年には内拝が許され、以後妙見大菩薩の靈驗を得ようと京阪の大衆が殺到したという。そして「能勢の妙見さん」として近畿のみならず全国的に名が知られるようになり、寛政年間(1789~1801)ごろには俳優たちの能勢参詣が盛んになっていった。1800年頃の「能勢妙見山」について、『摂津名所図会』には次のように記されており、江戸時代後期にこの地域で、日蓮宗を背景とした妙見信仰が広く伝えられていたことが分かる。

能勢妙見祠 野間村妙見山の峰にあり。麓より坂路十六町、一町毎に標石あり。／溪に石橋を架す。左右に石灯炉十六基、石階百三十二段。／本尊妙見菩薩 長二尺玉寸ばかり、右手に劍を蓋持つ。領主能勢候これを守る。／行程、京師より九里、大阪より八里。／この尊容は、故能勢藏人、妙見城の守護神たり。／能勢落城の後、家臣の七士この麓の野間村に累年住しこれを守る。／またそののち野間氏等離散して、今の領主能勢氏の有となりて小堂を建營す。／近年応驗新たなりとて、京都・大阪および遠近の貴賤、常に詣して間断なく、厄難病苦に患ふるものここに籠りて滝に浴し、嶮路を終日上下して法華の題目を唱え祈願の輩多し。／あるは他門の族は百日法華とてしばらく改宗に逮びここに話す。／領主能勢候も日蓮宗なれば敬仰厚く、領地の村民もまた他門を置かず。当山の繁昌、詣人賑ひ、平生法苑のごとし。(秋里・竹原 1798 9ノ44)

また妙見の隆盛について「特に花魁優伶の輩、厚く信じて誉を願ふも妙見の一字によるものならんや」と記され(同前 9ノ51)、「『妙見』の語義が『麗妙なる容姿』」(日蓮宗新聞社 1999 393)と解せられ、役者や花柳界で盛んに信仰されていたことが知られる。

その後、昭和16(1941)年の宗教法人法の改正により、能勢妙見山は真如寺⁽²⁾(能勢町地黄)所属とされ、真如寺付嘱託境外仏堂能勢妙見山とされ現在に至っている。

(参考:『妙見さまについて』 2012 植田観泰、「能勢妙見山」しおり 2014 能勢妙見山、能勢妙見山公式サイト <http://www.myoken.org>, 2017.9.10)

Ⅲ-3 山口県山口市の大内氏の妙見

中世、妙見を尊崇した守護大名の中で特色あるのが大内氏である。金指(1974)は妙見信仰を中心にその出自について述べているが、その概要は次のとおりである。

大内氏は、室町時代周防の山口を根拠地とし、長門、豊前、筑前、安芸、石見を治下におさめ、妙見菩薩を篤く信仰した。祖先は百済国・聖明王の第3皇子・琳聖太子で推古天皇19(611)年、周防国多々良浜に着岸し、後に大内村に居住したことから大内氏を称したという。琳聖太子来朝の2年前、周防国都濃郡鷺頭荘青柳浦の松の木に大星が

降り7日間輝いた。神がかりがあり異国の太子が来朝する警護のために北辰星が下降したということなので、その星を北辰尊星大菩薩と崇め祭り、浦の名を降松と改めた。琳聖太子は、この話を聞き妙見大菩薩を崇敬したので、その子孫も代々氏神として崇め祭り、降松の妙見信仰は盛んとなった。十一代大名・大内茂村のとき、この妙見大菩薩を大内氏の本拠大内県にある氏寺の氷上山興隆寺内〔現在の山口市大字大内御堀〕に勧請し、氏神として鎮め祭った。大内一族の総氏寺である興隆寺と総氏神である妙見社「氷上妙見宮」が同じ場所に祀られ、氷上山という一大霊場がつくりあげられ、文明（1469-48）の頃には僧房 100 を越え、宗徒は 500 を数えたと言われる（金指 1974 241-246）。

また大内氏の出自について金指は、大内氏が篤信した妙見菩薩は、どこから勧請されたのか、いつから崇敬するようになったのか、琳聖太子は創作された人物ではないかなど、多くの謎を残していると述べる（金指 1974 242-244）。

十四代大名・大内政弘は妙見菩薩の夢のお告げにより氷上山興隆寺を勅願寺とした。そして2月13日を興隆寺妙見菩薩祭礼（二月会）の日とし、舞童と称する22名の舞を奉納する児童を設け、舞を通して大内氏の祖神といわれる妙見菩薩と領民を結び付けた。この二月会では妙見菩薩前で弓技が奉納されたという。二月会について平瀬直樹は、政治的な意味を持つ一連の儀式から構成された、領国支配の安定を祈願するための行事であり、家臣と領民に対し両国の支配者であることを認識させる意味があったと述べている（平瀬 1994 277-278）。また、大内氏は亀蛇を篤く尊重し、幼名に亀という字を用い、政弘、十五代大名・義興、十六代大名・義隆とも幼名を亀童丸と称した。政弘は、さらに鼈、亀、蛇は氷上山の御仕えのものという信仰に基づき、鷹を飼育するのに鼈、亀、蛇を用いてはならないという禁令も設け、これを犯したものを重罪に処した。このことについて中西は、政弘は禁令により妙見菩薩の神威を保たせようとしたが、それは自らの威厳を誇示したものであったと述べている（中西 2008 183）。これらを裏付けるような権威を持った義隆の時代に、大内氏は西国随一の戦国大名となり全盛期を迎えた。しかし義隆の貴族趣味は生活全般にわたっており、文治政治に不満を抱いた家臣の陶隆房が謀反を起こし、1551年8月義隆と一族は自害し大内家は事実上滅亡した。

大内氏が本拠としたことで、「京の都」を手本とした独自の大内文化を築き発展した山口市は、現在も豊かな自然と歴史が共存する文化都市となっている。

妙見は、氷上妙見宮に勧請される前、山口市下松にある鷺頭妙見宮に祀られていたが、鷺頭妙見宮は明治4年に「降松神社」と改称し、今も下松市一円の氏神、山口県の妙見信仰の霊場となっている。祭神は天御中主大神であり、本殿は北辰妙見社と称する。春・秋例大祭は、地域を中心に盛大に行われているという。社坊の鷺頭寺は、神仏分離の際、山口市中市町に移り、現在は妙見信仰発祥の宮寺といわれる神仏混淆の寺となっている。

氷上山興隆寺は、大内氏滅亡後衰退し、明治時代の廃仏毀釈により堂塔もなくなった。寺内には鷺頭荘の降松から勧請した妙見を祀る北辰妙見社があったが、現在は大内義孝を祀る築山神社となっており、かつての繁栄の面影はない。

Ⅲ-4 熊本県八代市の八代妙見

八代妙見祭は八代地方最大の祭礼行事であり、異国情緒豊かな妙見の祭礼として日本全国に広く知られている。平成 23 (2011) 年に国の重要無形民俗文化財に指定され、平成 28 (2016) 年には「山・鉦・屋台行事」がユネスコの無形文化遺産に登録されている。この八代妙見祭は、八代神社秋の例大祭であり九州三大祭りの一つとなっている。

八代神社は八代市妙見町にあり、「妙見宮」「妙見さん」と呼ばれ、今も地域の人々に親しまれている。上宮、中宮、下宮の三宮からなるが、現在は下宮が本宮となっている。『妙見祭民俗調査報告書』には、八代神社について「妙見宮は初め八代市東部の横嶽の頂上にあった。これを上宮という。『肥後国誌』によると妙見神が目深・手長・足早 3 人の形となって竹原津に着き、天武天皇 9 (680) 年から 3 年間鎮座した後、益城郡小熊千代松ヶ峯に移り、宝亀 2 (771) 年横嶽に移ったという伝説を記す。他に妙見神の由来については百済聖明王の王子琳聖太子が妙見神であるという説なども知られている」とある(八代市立博物館未来の森ミュージアム 1996 3)。

また、妙見菩薩安置の山、白木山の白木は新羅に通ずると捉える説もある。八代妙見が新羅から請来されたと決めつけることはできないが、球磨川河口に位置した八代は、かなり古くから開けており、古代における国際港であったことから、祖先が銅器や鉄器を大陸から受け入れたように、大陸半島の海上生活者達の妙見尊崇を受け入れたのではないかとする説もある。

八代市の歴史的経過は、『妙見祭民俗調査報告書』によると次のとおりである。

天正 16 (1588) 年小西行長が八代郡を拝領すると妙見宮の神領はことごとく没収されたが、1600 年関ヶ原の戦功により肥後一国は加藤清正の所領となり、家臣である加藤正方が八代城主になると城下町の整備と領内の寺社復興に心を尽くした。寛永 9 (1632) 年、細川忠利が熊本藩主に封ぜられると、妙見を尊崇する忠利は、妙見宮の社領を旧に復するとともに脇殿一字を造営した。忠利の父忠興は足立妙見を再興し一戸妙見へ社領を寄進するほどの妙見篤信者であった。妙見宮の神紋は細川家の家紋と同じ九曜であったこともあり、忠興、忠利、光尚、綱利とも篤く妙見を保護した。この後、八代は松井氏の知行となったが、松井氏も妙見宮を尊崇した。妙見宮には数通の寄進状が残されており、歴代の藩主が妙見宮に寄進し、八代郡の一の宮として崇敬していたことがわかる(八代市立博物館未来の森ミュージアム 1996 4-5)。

八代は耕作地の多い土地ではなく海上生活者も多く、夜の海上における北辰北斗信仰(=妙見信仰)も発達していたため、江戸時代には、武士だけでなく多くの大衆も妙見を尊崇し、大衆からの多くの寄進もあったという。

そして「明治時代の神仏分離により、妙見宮は『八代神社』と改称し現在に至っている。しかし地元では現在でも妙見宮、妙見さんという名称で呼ばれることが多い」(八代市教育委員会 2010 60) という。

現在の妙見祭について『八代妙見祭』には、中世に整えられた武家主導の祭礼の形態を細川・松井氏が継承し、それに八代の町人が加わることによって形成された祭礼の形が基になっており、平成 2 (1990) 年からはふるさと創生事業として祭りの出し物の復活事業が本格化した。何よりも大きな成果は、町の人たちの笠鉦への認識が新

たになったことと八代市民の妙見祭への関心が高まったことであろうと述べられている（八代市教育委員会 2010 64～67）。

八代妙見は、本論文第八章の調査対象地である埼玉県秩父地方との共通点をいくつか見出すことができる。それは、「最初の伝達経路は異なるが、現在、生産神としての特徴を持つ」「水が豊富な地であり水との係わりが深い」「紙漉の産業が盛んである」「妙見が山の上から里にわたってきた」「渡来人伝説がある」「象徴として亀蛇が認められる」「妙見祭が御田植祭との対になる祭りである」「妙見祭が、近代、都市祭礼（付祭り）として発展し地域振興の育成に寄与している」「祭りが観光化されるに従い鉄道会社が大きな力になった」という点に表れている。今後、詳しい調査を行い、秩父妙見と八代妙見の比較を行うことを課題としたい。

Ⅳ まとめ

本章では、先行研究、文献資料を基に、日本における妙見信仰の変遷と日本全国の妙見の分布について述べた。

妙見信仰は、仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられたといわれるが、仏教公伝から明治維新までの約 1300 年間、その信仰は少しずつ形を変えながら日本各地に伝えられ、その地域での特性を加味して各地に定着していった。この 1300 年間を四つの時代に特徴づけたところ次のとおりであった。

1 番目の時代、仏教公伝（500 年代半ば）から平安中期（900 年代後半）までの約 450 年間は、貴族の間で妙見信仰が盛んになり、妙見は護国の仏神、王者為政の教導神として位置付けられた。2 番目の時代、平安中期（900 年代後半）から平安末期（1100 年代後半）までの約 200 年間は、政治の中心になりつつある武士に尊崇され、護国の仏神、王者為政の教導神に加え、疫気消除増福益算への願いが尊重されていき、修法に妙見供、北斗供、尊星王供の形式が整えられた。3 番目の時代、鎌倉時代（1100 年代後半）から安土桃山時代（1500 年代末）までの約 400 年間は、武神としての尊信が確立された。家子、郎党の地方分散に伴い文化の地方分散が促がされた時代でもあり、妙見信仰も千葉氏、大内氏ら地方の豪族や武士の間で「守護神や武神」として信仰されていった。日蓮宗寺院でも広く祀られるようになり民間にも普及していった。4 番目の時代、幕藩体制時代（1600 年代初期から 1800 年代半ば）の約 250 年間は、これまでの政治の中心の場だけでなく、大衆の間でも広く深く信仰されるようになっていった。そして独自に多様な文化が生まれ、妙見は庶民に広く信仰される親しみのある仏神となった。やがて世の中の体制を近代国家へと大きく変貌させた明治時代初期には、神仏分離により多くの社寺が祭神を妙見菩薩から天御中主命などと改め、また合祀、破却されていった。

妙見信仰の歴史をたどると、同一の仏神でありながら、形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきたといえる。その信仰形態は、時代ごとの特性をよく表しており、妙見信仰がときの文化の一つの側面であったといえることができる。

次に日本における妙見の分布について先行研究からその状況を探ったところ、妙見は日本全国平均的に伝播していったということではなく、いくつかの地方で盛んに信仰されていたこと、江戸時代の分布の傾向と概ね同じような傾向で、現在もその痕跡が認められることが分かった。その分布状況は、関東、近畿、中国地方の西側と瀬戸内海側そ

して九州の北側に多くみられ、四国の東側と南側、南東北地方のやや東側にも認められる。もう一つの特徴は、本州、四国、九州とも海岸線に沿った地域に多くみられることである。

《註》

- (1) 下総郡（現在の取手市、我孫子市、柏市の一带）に設けられた伊勢神宮領。
- (2) 能勢頼次により、徳川家康の菩提のためと能勢氏の祈願所として建立された。開山は日乾上人。関西身延と称し、日蓮宗妙見信仰の中心となった。昭和 16（1941）年の宗教法人法の改正により、能勢妙見山は真如寺所属とされ真如時付囑境外仏堂能勢妙見山とされた。（関西身延真如寺 <http://www.kansaiminobu.org>, 2017. 10. 10）

《引用・参考資料》

- 秋里籬 著・竹原春朝 齋 1798 『摂津名所図会』 柳原喜兵衛 ほか
植田観泰 2012 『妙見さまについて』 能勢妙見山真如寺
大島建彦 ほか監修 2001 『日本の神仏の辞典』 大修館書店
金指正三 1943 『我が國に於ける星の信仰』 森北書店
金指正三 1974 『星占い星祭り』 青蛙房
金谷匡人 1992 「大内氏における妙見信仰の断片」 『山口県文書館紀要』 19 山口県文書館
佐野賢治 1994 『星の信仰 - 妙見・虚空蔵』 溪水社
千葉県史料研究財団 1999 『千葉県の歴史 別編 民俗 I』 千葉県
野馬追の里原町市立博物館・千葉市立郷土博物館 2003 『相馬地方の妙見信仰』（千葉市立郷土博物館特別展図録） 野馬追の里原町市立博物館、
南相馬市博物館 2007 『将門伝説 - 相馬と周辺地域』（南相馬市博物館企画展図録） 南相馬市博物館
中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
能勢妙見山 2014 「能勢妙見山」しおり 能勢妙見山
摂津名所図会
平瀬直樹 1994 「大内氏の妙見信仰と興隆寺二月会」『星の信仰 - 妙見・虚空蔵』所収 溪水社
平瀬直樹 2014 「室町期における大内氏の妙見信仰と祖先伝説」『史林』第 97 巻第 5 号 史学研究會
安田宗生 1994 「熊本の妙見信仰」『星の信仰 - 妙見・虚空蔵』所収 溪水社
八代市教育委員会（文化課） 2010 『八代妙見祭』（八代文化財調査報告集 第 43 集） 八代市教育委員会（文化課）
八代市立博物館未来の森ミュージアム 1996 『妙見祭民俗調査報告書』 八代市立博物館未来の森ミュージアム

《引用・参考映像・ホームページ》

日本における星信仰について - 妙見菩薩信仰を中心として - 『駒澤地理』第 42 号<駒

澤大学地理学教室卒業論文>, 後藤哲也, 2006, [未公開] : 「星の見えるページ」で
公開 <http://www2.tba.t-com.ne.jp/tty-gt/index.html>, 2012/10/23
能勢妙見山 <http://www.myoken.org>, 2017. 9. 10
関西身延真如寺 <http://www.kansaiminobu.org>, 2017. 10. 10

第三章 妙見の像容

妙見菩薩は妙見尊星王、北辰妙見菩薩ともいわれる。菩薩という名称であるが、仏教上の分類では菩薩ではなく天部に属し、その像容は多様である。

本章では、日本に伝わる多様な妙見菩薩像の中から、異なる様相の妙見像を抽出し、その典型的な特徴について明らかにすることを目的とする。

妙見菩薩の像容について、小峰智行（2008）は、平安後期から鎌倉初期に描かれた妙見菩薩の図像について、図像集等を基に二臂座像、四臂座像、四臂立像の三種に分類し、その特徴を捉え、背後にある思想や信仰、他の尊格との関わりについて考察した。山下立（1999）は、千葉・個人宅で発見された妙見菩薩懸仏の像容から、妙見菩薩の造像の歴史・特徴や信仰背景、真武神、鎮宅霊符神、大將軍信仰との関わりについて論じ、仏教的妙見信仰の基盤の上に複合的な混沌が進み、信仰のあり方が造像にも波及したと述べる。林温（1997）は、図像鑑賞の視点から北辰・北斗、妙見を中心に緻密な分析を行い、星が日本の美術のなかにどのように造形されてきたかを概観している。星に対する信仰史・思想史を体系的に叙述したものではないが、「今日、吉祥天像として扱われている仏像の中に、本来妙見像として像造されたものが混じっている可能性がある」（林 1997 47）ことを指摘している。

以上のように妙見菩薩の像容に関する研究は、平安後期から鎌倉初期という限定した一時期に描かれた妙見菩薩の図像について考察したもの、千葉・個人宅で発見された妙見菩薩懸仏の像容について論じたもの、図像鑑賞の視点から日本の美術のなかにどのように造形されてきたかを概観したものも多く、全体的な視点で妙見像を扱ったものはほとんど見当たらない。そこで全体的な視点で妙見像の様相を探ることは、その時代その地域でどのような形の妙見が求められていたのかを推測することができ、本論文の目的である、現在妙見が地域に果たす役割を考察していくための一助となる意義があると考えられる。妙見の像容については、様々な視点からの詳しい分析が必要であり、この点については今後の課題とするが、ここでは前述の先行研究と文献資料に基づき全体的な視点から妙見像の様相を捉え代表的な特徴を明らかにしていく。

1 文献資料からみた妙見菩薩像

1 『新編 仏像図鑑』（国訳秘密儀軌編纂局 1991 国書刊行会 535-536）

尊容には異説が多い。

○尊星王軌：中央の大月輪中に菩薩をえがけ、左手に蓮花を持し、蓮花上に北斗七星形をなし、右手説法印をなし、五指並に上にむかい、天衣瓔珞その身を莊嚴し、五色の雲中に結跏趺坐す

○北辰別行法：赤白肉色、頻眉にして慈怒、右の第一手には箏を持し、第二手に月輪を持ち、馳走せる青龍の背の上に立ち、右足を上げ、右辺に持硯使者をえがく、かたち夜叉の如く黒雲中に現ず

○図藏鈔：さらに紙筆を持つ女形の使者を加う

○薄草紙：四臂の像なり、ただし黄色にして口を開き、逆髪中に七蛇あり、前の所持の日月輪を除きて、右手に節刀を持し、左手に金輪を持す

2 『岩波 仏教辞典』（中村元ほか 2002 岩波書店 971）

・奈良時代、洛北の霊巖寺の妙見像は吉祥天に近い姿であったという。（『図像抄』）

- ・10世紀末の天台宗寺門は尊星王法を創出し尊星王曼荼羅の中心尊は、陰陽道の禹歩・反問をとりこみ竜の背において片足立ちする菩薩形であった。
- ・鎌倉時代、千葉氏が道教の真武神の図像と性格を借用しながら十一面観音を本地とする軍神として妙見神を成立、髪を撫でつけあらわにした披髪で甲冑を身にまとい靈亀（もしくは玄武）を踏まえる。この像は、以後、千葉氏が中山法華経寺と密接な関係があったことから、中山法華経寺を介し日蓮宗に受容され全国規模で展開した。

3『日本の神仏の辞典』（大島建彦ほか監修 2001 大修館書店 1228）

- ・形像は一定せず。二臂および四臂があり、雲中に座ったり青竜の上に立ったり、分怒形や童子像形などさまざま。
- ・日蓮宗には立像と座像の妙見像がある。立像は、岩上の青竜の上に立ち、両手で剣を地に立てている姿、座像は、身延山久遠寺の日乾の創案になるもので能勢型といわれ、鎧を着て剣を頭上にかかげ、左手で金剛印を結んだ形をしている。「能勢の妙見さん」（大阪府能勢の真如寺）、「柳島の妙見さん」（東京都墨田区の法性寺）などの妙見菩薩が多く信仰を集めている。

4『仏教美術事典』（中村 元・久野健監修 2002 東京書籍株式会社 881）

- ・妙見菩薩：北斗七星を置いた蓮華を持つ二臂坐像や、人間の生死の籍を支配することを示す筆・鬼籍を持つ四臂坐像、四臂立像などがある。なお坐像は利剣を執り、立像は日輪・月輪を捧げて、竜上に左足で立つ。
- ・尊星王像：『白宝口抄』では、五色雲上の竜の背に乗り、左右の掌上に山を置いて頂に日月を配し、また錫^{しやくじょう}状と鉞を執る。

II 妙見菩薩像をみる上で特徴として表れる様相

文献資料で述べられた妙見菩薩像を分析すると次のとおりであった。

①坐像・立像の区分、

- ・五色の雲中に結跏趺坐する
- ・馳走せる青竜の背の上に立ち、右足を上げる
- ・竜の背において片足立ちする
- ・靈亀（もしくは玄武）を踏まえる
- ・雲中に座ったり青竜の上に立ったりする
- ・立像は竜上に左足で立つ
- ・五色雲上の竜の背に乗る

②二臂・四臂の区分

- ・四臂の像
- ・二臂および四臂がある
- ・北斗七星を置いた蓮華を持つ二臂坐像、人間の生死の籍を支配することを示す筆・鬼籍を持つ四臂坐像、四臂立像など

③持物など、

- ・左手に蓮花を持し、蓮花上に北斗七星形をなし、天衣瓔珞その身を莊嚴する
- ・右の第一手には箏を持し、第二手に月輪を持つ
- ・右手に節刀を持し、左手に金輪を持す
- ・甲冑を身にまとう

- ・両手で剣を地に立てている
- ・剣を頭上にかかっている
- ・北斗七星を置いた蓮華を持つ
- ・人間の生死の籍を支配することを示す筆・鬼籍を持つ
- ・坐像は利剣を執り、立像は日輪・月輪を捧げる
- ・左右の掌上に山を置いて頂に日月を配し、また錫状と鉾を執る

④乗り物

- ・馳走せる青龍の背の上に立つ
- ・竜の背において片足立ちする
- ・霊亀（もしくは玄武）を踏まえる。
- ・雲中に座ったり青竜の上に立ったりする
- ・岩上の青竜の上に立つ
- ・竜上に左足で立つ
- ・五色雲上の竜の背に乗る

⑤印象

- ・赤白肉色、頻眉にして慈怒
- ・黄色にして口を開き、逆髪中に七蛇あり
- ・吉祥天に近い姿（靈巖寺の妙見像）
- ・菩薩形
- ・髪を撫でつけあらわにした披髪で甲冑を身にまとう（千葉氏が道教の真武神の図像と性格を借用し十一面観音を本地とする軍神として妙見神を成立）
- ・分怒形や童子像形などさまざま

⑥その他

- ・日蓮宗には立像と座像の妙見像がある。立像は、岩上の青竜の上に立ち、両手で剣を地に立てている姿、座像は、身延山久遠寺の日乾の創案になるものの能勢型といわれ、鎧を着て剣を頭上にかかげ、左手で金剛印を結んだ形をしている。

以上のことから、妙見菩薩像は二臂および四臂で、座像と立像があり、雲中に座ったり青竜（霊亀もしくは玄武の場合もある）の上に立ったりしている。甲冑をまとうもの、天衣瓔珞をまとうものがあり、持物には、北斗七星を置いた蓮華、日輪・月輪、金輪、箏、節刀、錫状と鉾、利剣そして人間の生死の籍を支配することを示す筆・鬼籍があげられる。像容の印象には、吉祥天に近い姿、髪を撫でつけあらわにした披髪の真武神の姿、分怒形や童子像形があげられる。中には逆髪中に七蛇ありとする像も記されている。また日蓮宗の妙見像には、竜の上に立ち両手で剣を地に立てている姿と、鎧を着て剣を頭上にかかげ左手で金剛印を結ぶ「能勢型」といわれる姿をみることができるという。

Ⅲ 現代に伝わる妙見菩薩像—四つの事例から

妙見の像容については、歴史的・地理的背景を踏まえ信仰を背景とした多くの視点からの詳しい分析が必要であるが、ここでは前述の先行研究、文献資料に基づき、妙見の特徴的な事象をとらえ、大きく次の4つに分類することができると思う。

1 吉祥天如像に似せて造られた妙見菩薩

吉祥天如像に似せて造られた妙見菩薩は、奈良時代から平安初期のものに多く見られる。「北斗七星を女性の姿に表すことは、『北斗七星延命経』に図示されている」（林 1997 74）が、これらは『北斗七星延命経』所載の文曲星（図 1-4）の女形図像から出ているものと推測される。また『新編仏像図鑑』上には妙見菩薩について「この菩薩の本地は釈迦とし、観音とし、薬師とし異説多く本地つまびらかならず」とある（国訳秘密儀軌編纂局 1998 535）が、これについて金指正三は「妙見菩薩本誓（仏の誓い）は、人間界の帝王を擁護すること」（金指 1974 147）であり、[妙見菩薩の本地が、釈迦、観音、薬師など]「種々あるのは、経典に説かれた妙見の功德が普遍化し、功德ある故に信仰を集めた仏菩薩と混じ、時代を経るに従って変化し、数多くなったのであろう」と述べている（金指 1974

148）。代表的なものに、三井寺（＝園城寺 滋賀県大津市）法命院の尊星王図像、三室戸寺（京都府宇治市）の尊星王図（図 3-1）がある。三室戸寺尊星王図は、湧雲上の背に乗る四臂の菩薩形で、日・月および筆・巻子を持つ。『仏教美術事典』には、妙見菩薩について「人間の生死の籍を支配することを示す筆・鬼籍を持つ四臂坐像、四臂立像などがある」（中村・久野 2002 881）と記されているが、密教像らしい神秘性にあふれた印象である。

2 童形の妙見菩薩像

童形の妙見菩薩像は、「北斗七星延命経」所載の文曲星（図 1-4）の武装型と推測される。この特徴を有する像は、図 3-2 の読売新聞社所蔵の妙見菩薩立像（国指定重要文化財）一体といわれ、鎌倉時代唯一の妙見像である。伊勢神宮外宮の祢宜家である度会氏の氏寺・常明寺に安置されていたもので、甲を身につけ頭髪はみずら⁽¹⁾に結っており、武家文化の一環ととらえることができる。院派仏師と想定される院命の現存する唯一の作品といわれる。

清水眞澄はこの妙見菩薩像について、体内に墨書された梵字により妙見菩薩像と確認される貴重な作例であること、神道と仏教と道教の複雑な交流を示す像であることが確認できたとし、妙見菩薩として最も早い武将形の姿は、陰陽道と星宿信仰が道教において同化した姿と位置付けた（清水 2014 28-29）。



図 3-1 尊星王図



図 3-2 妙見菩薩立像

3 道士形の妙見菩薩像

但馬国養父郡（兵庫県養父市八鹿町）の帝釈寺日光院の妙見菩薩画像に、有髪有髯の道士形のものが伝わるが、その本地型のものと垂迹型のものとに分けて考えると次のようである。

本地型のものは、飯高寺（千葉県匝瑳市）の妙見菩薩像にその特徴がみられ、蓮花上に結跏趺坐し、左手に持つ蓮花上に北斗七星を作り髪は菩薩形である。

垂迹型の後世への影響力

は大きく、この系統の菩薩像は数多く残されており、特に千葉県に多く見られる。図 3-3、図 3-4 で示す垂迹型のものは、亀蛇の上に立つ披髪頭環の青年の相好で、いずれも江戸時代のものである。図 3-3 は千葉県銚子市森戸町に伝わり、長い髪を肩まで垂らした優しい表情の画像で亀の上に載っている。図 3-4 は千葉県香取郡多古町の日本寺に祀られており、細密な文様が施されている。いずれも鎮宅霊符神像の影響がみられる。

4 武装形の妙見菩薩像

武装形妙見菩薩像は、後期封建の世を反映し、甲冑をまとい、刀を兜の前上に横向きに右手で捧げている。左手は金剛不動印に結んで岩上に座り、菩薩という印象からはほど遠い武神の姿である。

『日本の神仏の辞典』に「日蓮宗には立像と座像の妙見像がある。立像は、岩上の青竜の上に立ち、両手で剣を地に立てている姿、座像は、身延山久遠寺の日乾の創案になるもので能勢型といわれ、鎧を着て剣を頭上にかかげ、左手で金剛印を結んだ形をしている。」（大島ほか監修 2001 1228）とあるように、近世に日蓮宗で一般化した像容であり、摂津能勢の妙見菩薩像が「能勢型」としてよく知られている。図 3-5 は、法雲寺（兵庫県美方郡香美町）の妙見菩薩像である。



図 3-3 妙見菩薩画像



図 3-4 妙見菩薩立像

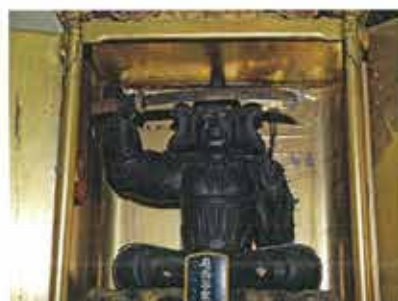


図 3-5 妙見菩薩像

図 3-1・図 3-2 は図録『道教の美術 TAOISM ART』（大阪市立美術館、2009）より、図 3-3・図 3-4 は、図録『房総の神と仏』（千葉市美術館、1999）より、図 3-5 は東林山法雲寺（兵庫県美方郡香美町）ホームページ（<http://www.houunn.jp/modules/xpwiki/>）より

IV まとめ

妙見菩薩は、北極星を神格化したものであるとともに北斗七星の化身ともされているが、その像容は実に多様である。

本章では、日本に伝わる妙見菩薩像のうち象徴的な様相の妙見菩薩像について、全体的な視点で、その典型的な特徴を明らかにすることを目的とした。

最初に文献資料を基に妙見菩薩の像容に関する特徴を抜き出し、その分析結果から、象徴的な特徴を持つと考えられる四つの形の妙見菩薩像を抽出した。その四つの形の妙見菩薩像は「吉祥天如像に似せて造られた妙見菩薩」「童形の妙見菩薩像」「道士形の妙見菩薩像」「武装形の妙見菩薩像」である。

第二章「『妙見信仰』—日本における変遷と分布—」で述べたように、妙見信仰は、仏教公伝から明治維新までの約 1300 年間、その信仰は少しずつ形を変えながら日本各地に伝えられ、地域での特性を加味しながら各地に定着していったと考えられるが、妙見菩薩像も同じように形を変えながら伝えられていったと考えられる。その結果、前述の象徴的な特徴を持つ四つの形の妙見菩薩像が今も伝わっているのではないかと考えられる。妙見菩薩像の像容は、その地域で妙見が最も盛んであったときに、人々が求めた信仰の内容を表していると推測できる。

本論文では第二部「妙見信仰と地域社会」で事例研究を行い、妙見が、現在地域に果たす役割を考察していくが、妙見菩薩像の像容からも、妙見が求められた時代や人々が妙見に求めたものを知る一助となると考える。

《註》

- (1) 古代の男性の髪のかき方。頂の髪を中央から左右に分け、耳のあたりでわがねて緒で結び耳の前に垂れたもの。奈良時代には少年の髪型となる（『広辞苑』 1998 2556）

《引用・参考資料》

- 大島建彦ほか監修 2001 『日本の神仏の辞典』 大修館書店
金指正三 1974 『星占い星祭り』 青蛙房
国訳秘密儀軌編纂局 1991 『新編 仏像図鑑』 国書刊行会
小峰智行 2008 「妙見菩薩の図像について」 『智山学報』第 57 号 智山勧学会
清水眞澄 2014 「読売新聞社所蔵の木造妙見菩薩立像について」 『三井美術文化史論集』第 7 号 三井記念美術館
中村元ほか 2002 『岩波 仏教辞典』 岩波書店
中村元・久野健監修 2002 『仏教美術事典』 東京書籍株式会社
林温 1997 「妙見菩薩と星曼荼羅」 『日本の美術』第 377 号 至文堂
山下立 1999 「妙見菩薩の変容 - 千葉・個人蔵銅造妙見菩薩像懸仏の像容の研究を中心に」 『密教図像』18 密教図像学会法蔵館
齋藤龍一（大阪市立美術館） 2009 『道教の美術 TAOISM ART』（特別展「道教の美術」図録） 読売新聞大阪本社・大阪市立美術館
千葉市美術館 1999 『房総の神と仏』（秋期特別展図録） 千葉市美術館

《引用・参考映像・ホームページ》

- 東林山法雲寺（兵庫県美方郡香美町） <http://www.houunn.jp/modules/xpwiki>, 2012. 10. 10

第四章 民俗学的視点からみた妙見の特徴

妙見信仰は、同一の仏神でありながら、時代・地域により異なる信仰形態を展開してきたといえることができる。

本章の目的は、先行研究を基にして民俗学的視点から日本の妙見の特徴を明らかにすることである。この妙見の特徴は、本論文第二部「妙見信仰と地域社会」の中で具体的な事例研究を展開するための伏線となるとともに、本論文の目的「それぞれの特徴を持つ妙見が、現在地域に果たす役割を明らかにする」ための原拠となる。

序章で取りあげた妙見の全体的な内容を示す 14 件の先行研究（資料 序-1）は、民俗学的視点から捉えた妙見について一部言及しているが、日本の妙見の特徴について民俗学的視点から明らかにしたものはほとんど見当たらない。そこでこの 14 件の先行研究のうち、人々の生活に密着した妙見の特性が述べられている 9 件を基にして、民俗学的視点から日本の妙見の特徴を明らかにすることを課題とした。

研究方法としては、民俗・歴史両面から全体的な視点で妙見信仰を論じた 9 件の先行研究の内容を基にして、民俗学的な視点からみた妙見の特性を明らかにしていく方法をとった。この結果から民俗学的視点からみた日本の妙見の特徴を明らかにする。

『広辞苑』によると「特性」は「そのものだけが有する、他と異なった特別の性質。特質」とあり、「特徴」は「他と異なって特別に目立つしるし。特色」とあるが、本章では、「特性」を「特徴」の狭義の意味を持つと定義し論じていく。

「Ⅰ 先行研究からみた妙見の特性」では、妙見の全体的な内容を示す 9 件の先行研究から、民俗学的視点からみた妙見の特性を収集し、「時代」「地域」「仏神の効能」「垂迹・神使等」「崇敬した者」「禁忌」「伝承」の項目に基づいて整理し、「伝承からみた妙見の特性 その 1」（資料 4-1）にまとめた。「Ⅱ 先行研究からみた妙見の特性の分析」では、資料 4-1 の内容を分析した「伝承からみた妙見の特性 その 2」（資料 4-2）から、現代の生活の中に伝わる妙見の特性を探った。

次に「Ⅲ 南関東地域における妙見の特性」で、江戸時代の妙見信仰の全国的分布を示す「妙見寺社地理的分布表」（資料 4-3、中西 2008 262-272）の中から、江戸時代に存在した南関東（安房・上総・下総・武蔵・相模〈千葉・埼玉・東京・神奈川〉＝以下南関東と記す）地域の妙見を抽出し、その現状と特性を探った。これらの分析結果を基に「Ⅳ 民俗学的視点からみた妙見の特徴」で、日本の妙見の民俗学的な特徴を明らかにしていく。

Ⅰ 先行研究からみた妙見の特性

妙見の全体的な内容を示す井原木憲紹（2005）、金指正三（1943）、金指正三（1974）、小峰智之（2007）、佐野賢治（1994）、中西用康（2008）、吉田光邦（1970）、広嶋輔雄（1994）、増尾信一郎（1994）、窪徳忠（1983）、二階堂義弘（2012）、平瀬直樹（2013）、山極哲平（2007）、吉岡義豊（1966）、の 14 件の先行研究のうち、生活に密着した妙見信仰の特性に触れていない広嶋輔雄（1994）、吉岡義豊（1966）、小峰智之（2007）、山極哲平（2007）、二階堂義弘（2012）の研究を除いた 9 件について、民俗学的視点からみた妙見の特性を収集・分析し「伝承からみた妙見の特性 その 1」（資料 4-1）にまとめた。

資料 4-1 に「時代」「地域」「仏神の効能」「垂迹・神使等」「崇敬した者」「禁忌」「伝承」の項目を掲げたのは、妙見信仰の内容について理解する場合、概ねこの 7 項目にまとめることができるからである。この 7 項目のうち「時代」「地域」「崇敬した者」は信仰の背景を理解するために必要であるが信仰の内容そのものとは深い関わりがないと考えられる。そこで信仰の内容を示す「仏神の効能」「垂迹・神使等」「禁忌」「伝承」に係る妙見の特性について整理したところ次のとおりであった。

1 仏神の効能

①武神・守護神 ②戦勝祈願 ③戦いに加護があること ④一族の栄枯盛衰 ⑤弓箭守護の軍神 ⑥敵方を呪術する軍神 ⑦呪詛 ⑧馬の守護神 ⑨馬匹の守護神・養馬の神 ⑩試験の神様 ⑪航海の安全 ⑫航行あるいは出入港船舶の目標 ⑬海上の安全 ⑭農業神 ⑮豊作招福・豊穰感謝 ⑯生産神 ⑰現世利益 ⑱延命 ⑲人の寿命を司る神仏 ⑳眼病平癒 ㉑視力守護の仏神 ㉒病疾平癒 ㉓息災 ㉔子孫繁栄 ㉕母乳豊富 ㉖子安神 ㉗開運厄除 ㉘容姿守護の神 ㉙良縁与恵の仏神

2 垂迹・神使等

①馬が妙見の化生（中世・相馬氏） ②馬は妙見の神使（中世・相馬氏） ③亀と蛇を神使として崇敬（大内氏） ④土公神や竈神と共に「宅神」という祟りの神の一種とされた（平安中期） ⑤竈神などいろいろの神に結び付けられた（江戸時代） ⑥八幡大菩薩（奈良時代） ⑦薬師如来（平安中葉以降） ⑧稻荷神との合祀、鎮守として稻荷神を祀る（室町時代）

3 禁忌

①正月 3 が日潔齋をして、白い餅と肉食を絶つ。（中世・相馬氏）
②亀とスッポンと蛇・ウミウナギを捕らえることを禁じた。（中世・大内氏）
③鷹を飼育するのに亀と蛇を餌としてはならない。鱧を食用にしてはならない。（中世・大内氏）

4 伝承

①馬の放牧を展開するなど馬との結びつきが見られる。（中世・千葉氏）
②北斗の第七星は破軍星ともいわれ、弓箭の神として武家に信仰された。（中世・千葉氏）
③諸星の紋を家紋とした。宗家は月星の紋を用い、その一門は六曜、七曜、八曜、九曜、十曜の紋を用いた。（中世・千葉氏）
④家紋に三星、七曜、月星、六星等を用いた。（中世・千葉氏）
⑤千葉氏の北斗山尊光院（現在の千葉神社）における元服の様子は婚姻のようであった。（中世・千葉氏）
⑥正月の行事に「三夜の鈴」「放射」（弓技の妙見菩薩への奉納）が行われた。（中世・千葉氏）
⑦正月三箇日精進潔齋してその尊影を拝した。（中世・千葉氏とその一門）
⑧北辰信仰にもとづき九曜の星の紋を用いた。（中世・相馬氏）
⑨御水（妙見の神域に湧く霊水）で傷を洗うと治癒する。（中世・相馬氏）
⑩七の数の尊重（中性・大内氏）

- ⑪ 亀童丸（大内氏三代の幼名）の初社参の盛儀。（中世・大内氏）
- ⑫ 亀蛇の尊重（中世・大内氏）
- ⑬ 妙見菩薩に祈祷すると狐に化かされない。（室町時代）
- ⑭ 「妙見さん」と呼ばれ、庶民の間に広く信仰された。（近世）
- ⑮ 能勢妙見に初詣でをすることを初妙見という。（江戸時代・能勢氏）
- ⑯ 10月の亥の日に御亥猪餅をついて息災を祈った（江戸時代・能勢氏）
- ⑰ 北辰北斗は華街の婦女の代名詞となった。（江戸時代）
- ⑱ 北極星を妙見星という。（江戸時代後期・宇佐一族）
- ⑲ 神鏡と亀蛇塚。祭壇の周にめぐらされた幕は七曜星。玄武の亀像がこま犬とならんで寄進された。（星田の妙見宮）
- ⑳ 屋根をふく瓦の軒丸瓦の文様は、九曜星を用いたものがずらりと並ぶ。星御所）
- ㉑ 影向松（妙見松）に棲む白蛇を見て礼拝する徒もありけり。（江戸時代・柳島妙見堂）
- ㉒ 渡来系の人により担われた。
- ㉓ 伝説中に鷺が多く登場する。
- ㉔ 機織、染色に従事する人がシンボルとして北斗七星を祀る。
- ㉕ 採鉱・採金と関係がある。
- ㉖ 庚申と妙見の関係が認められる。

このうち、「2 垂迹・神使等」「3 禁忌」「4 伝承」は信仰そのものでなく、信仰から派生した習わしや謂れ、あるいは迷信といわれるものの類であり、これらは妙見の痕跡といえることができる。それは、現在の寺社等が妙見に由来しているかどうかを予測するための指針となる一面を持つ。よく知られている事項には次のようなものがある。

馬との結びつき／亀と蛇との関連。亀蛇の尊重／渡来系の人との関連／七の数の尊重／鷺との結びつき／機織、染色との関連／採鉱・採金との関連／月星の紋、六曜、七曜、八曜、九曜、十曜の紋を用いる

以上のことから、「仏神の効能」の項目が、現在も地域に伝わる妙見の信仰内容を示す特性であるといえることができる。そこで「Ⅱ 先行研究からみた妙見の特性の分析」で、先行研究から導いた「仏神の効能」29項目の妙見の特性について分析を行っていく。

Ⅱ 先行研究からみた妙見の特性の分析

妙見信仰は、日本に初めて伝えられたといわれる奈良時代には護国の仏神、王者為政の教導神として信仰されたが、時代を経るに従い信仰の内容が変化していき、やがて願いごとをすべてかなえてくれる神仏として民衆からも広く信仰されるようになったことが知られている。

現在妙見を祀る寺社等でも、他の寺社等と同じように、様々な願いごとをかなえてくれる仏神として信仰されているのがほとんどであるが、それと合わせて「Ⅰ 先行研究からみた妙見の特性」で述べた特徴的な「仏神の効能」を認めることができる。これらの「仏神の効能」について、同じ効能を求める仏神ごとに分類したとこ

る、次に記した資料 4-2「伝承からみた妙見の特性 その 2」という結果となった。資料 4-2 から天皇や武士を対象とした願い事から大衆を対象とした願い事へと変化していったことを読み取ることができ、妙見が時代・地域により異なる信仰形態を展開していったことが理解できる。

「伝承からみた妙見の特性 その 2」

資料 4-2

	仏神の効能からみた特性		現代の生活の中に 伝わる特性
A	①現世利益 ②延命 ③人の寿命を司る神仏 ④眼病平癒 ⑤視力守護の仏神 ⑥病疾平癒 ⑦息災 ⑧子孫繁栄 ⑨母乳豊富 ⑩子安神	基本的な疫病防除・五穀豊穡・安寧などの地域住民の感謝と祈りを対象とする信仰であり、古態の持続性を維持する志向が見られる。眼病平癒は今でも霊験の中に具体的にうたわれていることが多い。	地域に伝わる氏神
B	①武神・守護神 ②戦勝祈願 ③戦いに加護があること ④一族の栄枯盛衰 ⑤弓箭守護の軍神 ⑥敵方を呪術する軍神 ⑦呪詛 ⑧馬の守護神 ⑨馬匹の守護神・養馬の神	妙見は、武神として千葉氏、相馬氏、大内氏等、中世から近世にかけて武士が守護神として篤く信仰したことが知られている。戦いの神仏、馬の守護神としての名残を留め、現在行われる祭祀の中にもその誇りを保ち続けている。一族結束のイデオロギーとしたとする説もある。	武神の名残
C	⑩試験の神様 ⑪開運厄除 ⑫容姿守護の神 ⑬良縁与恵の仏神	近世の華やかな文化を背景にした大衆の間で広く信仰された。江戸時代には、檀林における学僧の妙見信敬といった形で、日蓮宗における妙見信仰が盛んになっていった。修学僧にとって妙見菩薩は試験の神様でもあった。その信仰は、現在も文化・芸能・学問の中に名残を認めることができる。	容姿・芸能・学問の仏神
D	⑭航海の安全 ⑮航行あるいは出入港船舶の目標 ⑯海上の安全 ⑰農業神 ⑱豊作招福・豊穡感謝 ⑲生産神	農業、漁業、商業など地域の発展を願う信仰であり、水神とも結びついている。	生産神 ⁽¹⁾

III 南関東地域における妙見の特性

ここでは、江戸時代の南関東地域の妙見の現状と特性を探っていく。

方法は、「妙見寺社地理的分布表」（資料 4-3）と題した江戸時代の妙見信仰の全国的分布を基に、聞き取りや電話での調査、文献資料の確認等により、それらの妙見の特性と現状について調査分析を行った。資料 4-3 は、中西用康が『妙見信仰の史的考察』の中で、金指正三の『我が國における星の信仰』の「妙見社地理的分布表」（金指 1943 193-226）を訂正増補したものである。この「妙見寺社地理的分布表」（資料 4-3）について中西は、これだけで妙見信仰の分布を尽くしたわけではないと述べているが、江戸時代の妙見の分布を知る上で貴重な資料である。

今回、調査を「南関東地域の妙見」としたが、その理由は、『人口から読む日本の歴史』の中で、日本の人口推移を示した「日本列島の地域人口：縄文早期～2100 年」（鬼頭宏 2000 16-17）の表中の人口数が、1721 年以降首位であり、それ以前も 900 年までは 3 位以内であり、南関東地域が平安時代末期から江戸時代まで日本文化を涵養する地域の一つであったと考えられるからである。

「南関東地域に伝わる妙見（江戸時代に存在し現在も伝えられている妙見）」（資料 4-4）は、資料 4-3 から南関東地域に該当する妙見に係る寺社等 48 件を抽出し、現状を調査分析したものである。寺社等の中には、寺院、神社、祠が含まれる。48 件の中には、廃寺・社になっているもの、祭神が変わっているもの、痕跡のみが残されている寺社等もあった。調査することができたのは、現在妙見の痕跡を認めることのできない 23 件を除く 25 件であった。調査は、現在の状況や行われる祭祀の背景等を、電話や現地での聞き取り調査、文献資料等を確認する方法で行った。

この調査結果に基づき、資料 4-4 の特性の欄に、その地域の主な特性として、資料 4-2 で導き出した妙見の特性 A B C D の分類を試みた。A は「地域に伝わる氏神」、B は「武神の名残」、C は「容姿・芸能・学問の仏神」、D は「生産神」を示す。その結果、調査した 25 件の主な特性は、A B C D に該当するという結果を得ることができた。

IV 民俗学的視点からみた妙見の特徴

本章「I 先行研究からみた妙見の特性」「II 先行研究からみた妙見の特性の分析」に基づき、先行研究を民俗学的視点から整理することにより導き出された妙見の特性は、次の A B C D の四つであった。

- A：地域に伝わる氏神
- B：武神の名残
- C：容姿・芸能・学問の仏神
- D：生産神

また、本章「III 南関東地域における妙見の特性」の調査でも、その主な特性は A B C D に該当するという結果を得ることができた。

以上のことから、現在日本に伝わる民俗学的視点からみた妙見の主な特性は、A B C D の四つであると考えられる。そして、この A B C D の四つの特性は、狭義の意味

での特徴であり、また 25 件の調査結果に基づくものであることから、妙見の全体的な特徴といえることができる。したがって現在の日本の民俗学的視点からみた妙見の主な特徴は、「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つであると捉えることができる。

そこで本論文第二部「妙見信仰と地域社会」では、この四つの特徴に基づく関東地方の 4 地域を抽出し、具体的な事例研究を行っていく。

V まとめ

本章では、民俗学的視点からみた日本の妙見の特徴を探った。

最初に妙見の全体的な内容を示す 9 件の先行研究を基にし、民俗学的な視点からみた妙見の特性と考えられる事象を抽出した。次にその内容について、「時代」「地域」「仏神の効能」「垂迹・神使等」「崇敬した者」「禁忌」「伝承」の項目を設け、民俗学的な視点で妙見信仰について整理・分析し「伝承からみた妙見の特性 その 1」（資料 4-1）にまとめた。これらの項目のうち「仏神の効能」に示された 29 項目の内容が、現在も地域に伝わる妙見の信仰内容を示すものであることから、この 29 項目について分析したところ、現代の生活の中に伝えられる四つの妙見の特性を認めることができた（資料 4-2）。その特性は「A：地域に伝わる氏神」「B：武神の名残」「C：容姿・芸能・学問の仏神」「D：生産神」である。

一方、江戸時代の妙見信仰の全国的分布資料「妙見寺社地理的分布表」（資料 4-3）に基づき抽出した、現在も伝わる江戸時代の南関東地域の妙見 25 件（資料 4-4）について、現状と主な特徴を探ったところ、「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」という四つの特性を持つという結果を得る事ができた。この四つの特性は、現代の生活の中に伝えられる民俗学的視点からみた妙見の特性であり、妙見の特徴であると考えられる。

以上のことから、現在日本に伝わる民俗学的視点からみた妙見の主な特徴は「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つであると捉えることができる。

《註》

- (1) 本論文では、「漁業・商業・農業などの生産活動に幸をもたらす神霊」とされる「えびす」（『日本民族辞典』 2006 85）に通じる福神と定義する。

《引用・参考資料》

- 井原木憲紹 2005 「日本における星辰信仰の一考察—日蓮上人御遺文に見える星辰・北斗を中心にして—」 『桂林學叢』第 19 号 法華宗宗務院
金指正三 1943 『我が國に於ける星の信仰』 森北書店
金指正三 1974 『星占い星祭り』 青蛙房
窪徳忠 1983 「中国から日本へ—星をめぐる民間信仰—」 『日本民俗文化体系』2 小学館
小峰智行 2007 妙見菩薩の信仰と展開 『密教学研究』39 日本密教学会事務局

- 中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
- 佐野賢治 1994 「日本星神信仰史概論 ―妙見・虚空蔵信仰を中心にして」 佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
- 二階堂義弘 2012 『アジアの民間信仰と文化交渉』 関西大学出版部
- 平瀬直樹 2013 「日本中世の妙見信仰と鎮宅霊符信仰 ―その基礎的考察」 『仏教史学研究』第56号 仏教史学会
- 廣畑軸雄 1994 「日本古代における北辰崇拝について」 佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
- 増尾伸一郎 1994 「〈天罡〉呪符の成立 ―日本古代における北辰・北斗信仰の受容過程をめぐって」 佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
- 吉岡義豊 1966 「妙見信仰と道教の真武神 ―附天正写本『霊符の秘伝』」 『智山学報』14 智山勧学会
- 山極哲平 2007 「鎮宅霊符神信仰研究史の整理」 『国文学』91 関西大学国文学会
- 吉田光邦 1970 『星の宗教』 淡交社 別紙 10行
の信仰』所収 溪水社

おわりに

本論文第一部「日本における『妙見信仰』の展開」第一章から第三章では、仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられたといわれる妙見信仰について、先行研究、文献資料等に基づき、その概要を多方面から整理した形で述べた。この中で肝心なことは、妙見が時代や地域により多彩な表情を見せていた状況を確認できたことである。

第四章では、「民俗学的視点からみた妙見の特徴」を課題とし、先行研究と第一章から第三章までの内容を基に、現在の日々の生活や習慣の中に認められる日本の妙見の特性を収集分析した。その結果、現在、地域に伝えられる妙見には、主な特徴として「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つの特徴が認められた。第四章「Ⅲ 南関東地域における妙見の特性」で述べた 25 件の妙見に係る現地調査においても、同様に四つの特性を認めることができた。

この四つの特性は、現代の生活の中に伝えられる妙見の主な四つの特徴であると考えられる。すなわち現在、日本各地域に伝わる妙見は、民俗学的視点からみて、「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つの特徴のいずれかを、主な特徴として有していると考えることができる。ときには、いくつかの特徴が絡み合っている場合もあろう。

そこで、主な特徴としてこの四つの特徴が認められる関東地方の四つの妙見の事例を、先行研究を基に抽出し、本論文第二部では、民俗誌的な視点で現地調査を行っていくこととする。

第二部 妙見信仰と地域社会

本論文第二部第五章から第八章では、第一部の内容の収集・分析結果から得ることのできた、妙見の四つの特徴「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」を持つと思われる関東地方の四つの事象について事例研究を行っていく。

事例研究にあたっては、現代の生活の中に展開される妙見の位置付けと地域に及ぼす影響について民俗誌的な視点から現地調査を行い、現在地域に伝えられる妙見がどのような役割を果たしているのかを民俗学的な視点で明らかにしていく。

事例研究の対象としたのは「東京都稲城市の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の祭礼」「東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界限の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」である。

第五章では「氏神として伝わる妙見―東京都稲城市百村の『妙見尊』行事から―」と題し、稲城市百村で行われる三つの妙見尊行事から、妙見と氏神との関わりに着目し、現在の行事の様相、地域の人々の妙見に対する意識を探っていく。

第六章では「祭礼の中に武神として伝わる妙見―千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から―」と題し、千葉市中央区の「妙見本宮千葉神社」と「下総國寒川神社」に今も伝わる二つの祭礼を事例とし、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、妙見が地域にどのような役割を果たしているのかを探っていく。

第七章では「大衆文化的妙見の需要―東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界限に伝わる妙見―」と題し、東京都墨田区業平にある法性寺界限を事例とし、現在伝わる妙見の様相と、妙見がどのような位置付けであり地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、その特徴と役割を探っていく。

そして第八章では「変遷をたどり現代に息づく妙見―埼玉県秩父地方に伝わる現代的意義―」と題し、現在、様々な場所や生活・習慣、行事・祭礼の中に妙見の存在を認めることができる秩父地方を事例とし、「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の三つの要素を持つ妙見が地域に果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて探っていく。

第五章 氏神として伝わる妙見

―東京都稲城市百村の「妙見尊」行事から―

はじめに

東京都稲城市^{もみら}百村には「妙見尊」といわれる神社・妙見宮があり（写真 5-1）、ここに妙見が祀られ妙見に係る三つの民俗行事が行われている。三つの民俗行事とは1月8日の「^{じんが}神化まつり」、8月7日の「^{へび}蛇より行事」、12月冬至の日の「星まつり」である。これらの行事はいずれも妙見宮の行事であるが、別当寺であった妙見寺が執り行う神仏混淆の形態が今も伝えられ、地域住民が積極的に参加している。本稿の目的は、稲城市百村地域の三つの民俗行事を事例とし、現在、妙見がこの地域で果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて探ることである。

百村で行われる三つの民俗行事について、松本清蔵（2014）は多大な史・資料の分析と克

明な取材に基づき行事の背景とその内容を詳細にまとめている。遠藤聖一（1997）もこれらの行事について調査・報告を行っている。また稲城市、稲城市教育委員会による史・資料の分析と行事の調査が広く行われ記録がまとめられている。これら従来の研究は、妙見に係る三つの民俗行事について各々の行事の様相を記録したものや史・資料を紐解きそれを解説したものが多く、現在の地域の人々と妙見との係りについて取り扱ったものはほとんど見当たらない。しかし、現在、百村地域の人々は、三つの民俗行事を新たな活力を得るための一日としており、妙見宮を氏神として尊崇し日々の生活の中の身近な存在として意識している。このような状況の中、妙見が百村地域で果たす役割と地域の人々の妙見への思いを取り上げることは、現代に伝わる妙見を研究する上で意義があるのではないだろうか。

したがって本稿では、現在の百村地域の人々の妙見に対する意識と妙見が地域にとってどのような位置付けであるのかを明らかにすることを課題とした。ここでは地域の人々の生活に密着した行事である三つの民俗行事から、妙見と氏神との係りに着目して研究を進めていく。

研究方法は、2014年から2017年にかけて行った妙見宮に伝わる三つの民俗行事の調査と、地域の人々や妙見寺住職からの聞き取り等を基にして、現在の行事の様相、地域の人々の妙見に対する意識を明らかにしていく方法をとる。

本稿では、最初に妙見宮と妙見寺の概要について述べ、次に「神化まつり」「蛇より行事」「星まつり」の順に現在の行事について概観するとともに地域の人々の言質を取り上げる。以上を踏まえ百村地域に現在も伝わる妙見について考察した。

I 百村の妙見寺と妙見宮

百村は東京都多摩地域南部に位置する稲城市の南側、京王相模原線稲城駅から徒歩5分ほどのところにある。多摩川の支流である三沢川とその支流にあった入谷戸、堅谷戸⁽¹⁾という大きな谷戸が中心となった地域で多摩ニュータウンの東端にあたる。2016年1月1日現在、人口4,956、世帯数2,165（稲城市の人口87,461、世帯数37,780）、古くから農業が営まれていたが昭和40年代の急速な宅地開発に伴い第三次産業に従事する住民の割合が増加し、稲城市で農業に従事する者は極わずかになっている。

この辺りは稲城砂といわれる良質土砂で形成された砂層であった。地盤は普段は堅いが雨が降ると崩れやすく危険なため山を切り崩すことになり、昭和39（1964）年の東京オリンピック前に大量の土砂採取が行われた。昭和40（1965）年多摩ニュータウンの開発が始まり、昭和46（1971）年には京王相模原線新設計画のため妙見尊の表玄関にあたる地域が買収され、昭和49（1974）年に京王線が開通した。京王線の線路敷設にあたり峰の斜面を削り取った山の部分は崖となっている。

百村には村の象徴ともいえる妙見山がある。その山頂には北斗七星を神格化した妙見が祀られた妙見宮があり「妙見尊」ともいわれている。妙見山のふもとには神王山観音院妙見寺（以下妙見寺と記す）と称する天台宗寺院妙見寺があり、別当寺として江戸時代から妙見宮を管理してきた。その由緒は複雑な経過をたどる。寺院でありながら神社の管理を行うという神仏混淆の形態は、明治政府の神仏分離令の影響を受けることなく江戸時代から現在まで続いている。妙見寺の本尊は阿弥陀如来、妙見宮には北辰妙見尊が祀られている。

現在の百村の地形を概観すると図 5-1 に示した通りである。京王線の線路敷設に伴い、現在の妙見宮への参道や鳥居、「神化まつり」「蛇より行事」を行う平場も山であったところを整備したものとなっている。

I-1 妙見寺・妙見宮の由緒

百村の妙見寺・妙見宮について『新編武蔵国風土記稿 多摩郡三巻』に、「妙見社」は勧請の年代は不明であり靈驗あらたかな御神体を開帳することは許されていない。妙見寺は神王山観音院と号する江戸東叡山の末寺である天台宗寺院であるが開山の由来は伝えられていないとある（間宮 1995 060～62）。実際に現地を訪れてみると、妙見寺山門手前の左横にある鳥居に「妙見尊」と書かれた額が掲げられ妙見山を登る形で参道となる階段が連なっている。階段を進むと頂上にお堂があり拝殿には妙見宮と書かれた額を認めることができる。鳥居から妙見宮に至る参道の中腹には平場がある。そこには2本の石柱に1本の丸太が横に渡されており、その丸太には藁で作られた蛇の大注連縄が巻き付くようにして飾られている。これは「神化まつり」の際に掲げられた名残である。この平場には二十三夜塔があり、塔の前には「蛇より行事」の際に萱で作られた蛇の頭部が祀られていた。京王相模原線開通に伴う開発前は二十三夜塔も下の方にあり「神化まつり」も「蛇より行事」もそちらで行われていた。

百村の妙見寺と妙見宮は、数々の火災や退転、昭和 33（1958）年の「狩野川台風」の襲来により裏山の斜面が崩壊し庫裡が押しつぶされるという災害に見舞われたため古い記録が消滅してしまっているが、次の5件の資料が現存している。

- 稲城市『寺院明細帳』（稲城市教育委員会社会教育課 1989『稲城市郷土資料五』）…明治 40（1907）年に作成。
- 『妙見寺記録』（稲城市史編集委員会 1992『稲城市史研究 第四号』）…記された年代は不明だがおそらく江戸末期と考えられる。明治 35（1902）年までの書き継がある。
- 『武州多東郡妙見寺縁起』（稲城市 1996『稲城市史 資料編 2』）…妙見寺の開創を伝える史料であり妙見大菩薩を安置したことで始まる 760 年頃から災害や戦歴を経た 1200 年頃までの妙見寺の歴史を伝えている。天正 19（1591）年 10 月の年紀を持つ。
- 『北辰妙見尊略縁記』（稲城市 1996『稲城市史 資料編 2』）…百村妙見寺文書。妙見寺が文政 5（1822）年に刊行。
- 『妙見寺過去帳』…昭和 33（1958）年の災害後発見された過去帳を先住職が可能な範囲で書き写したものが存在するが、昔の過去帳は残っていない。

これらの資料から百村の妙見寺・妙見宮の由緒について次のように理解することができる。

「妙見寺」について、稲城市『寺院明細帳』には「当寺開基年月不詳 宝永年中晃傳代 観音院ヲ寺格ニ引直シ妙見寺ト号 今猶現存ス故ニ晃傳ヲ中興開祖トス」とあり、創建年代は不詳だが、宝永年中（1704～1710）に近くにあった観音院を「妙見寺」とし、当時の住職晃傳を開祖とすると伝えている。『武州多東郡妙見寺縁起』は補足史料がないが、妙見大菩薩を安置したことにより始まる 760 年頃から、災害や戦歴を経た 1200 年頃までの「妙見寺」の歴史を伝えている。『妙見寺過去帳』には、東光院は権大僧都源春（寛文元《1661》年寂）

と称し「当寺退転之節山伏二相成」とあり（『稲城市史研究 第四号』 稲城市史編集委員会 1992 43）、「妙見寺」は少なくとも江戸初期までは存続し後に退転してしまったことが分かる。

「妙見宮」については、稲城市『寺院明細帳』に「…本尊妙見、妙見尊ハ往昔孝謙天皇ノ御宇天平宝字四（760）年秋時の領主當麻真人村繼道忠禪師ニ命シテ當山ニ安置シ…」とあり、「妙見尊」は天平宝字4（760）年に妙見山に安置されたことを伝えている。そして「…其後修験東光院進退ス延宝五巳（1677）年参月拾日、東光院住民部ヨリ住職晃傳代妙見并二境内悉皆観音院ニ譲リ爾来妙見寺進退スト所傳記禄ニ有」と続き、1677年に東光院の倅民部が妙見並びに境内一切を観音院すなわち後の妙見寺に譲ったということを読み取ることができる。『妙見寺記録』にも、稲城市『寺院明細帳』と同じように天平宝字4（760）年の創建とあり、「妙見寺」の裏山に位置し「妙見宮」の別当であった修験者東光院が守っていたが延宝5（1677）年観音院に譲り、宝永年中（1704～1710）に観音院を寺格に引き直し「妙見寺」と号したと伝えている。ここまでを簡潔に言い換えると次のように解釈することができよう。

妙見寺は、一説には760年頃妙見寺に脇土として妙見大菩薩を安置したことにより始まり、同年妙見寺裏山に妙見宮が創建された。妙見寺は何度かの災害に見舞われ修復が行われてきたが1660年頃退転し、それからしばらくの間住職が不在であった。この間修験東光院が妙見宮を守り続けたが東光院の倅民部の代（1677年）に観音院に譲り渡した。観音院は当時妙見宮の鳥居（一番下の鳥居と思われる）の横にあり、寺院というより妙見宮の守にあたる修験であった。経済力をつけて土地を集積していき、1710年頃、晃傳住職の時代に現在の妙見寺の場所に寺地を移し、神王山観音院妙見寺と称する天台宗寺院として再興を果たした。現在の妙見寺は晃傳を中興開山とし、このときをもって始まる。現在の宮寄光永住職は晃傳から数えて十八世となる。奈良時代この地に妙見菩薩が祀られ、一時期修験が守り抜いてきたであろうことが理解できる。『妙見寺記録』には次のような修験との関わりが推測される記述もある。

寛永十二年（一六三五）九月の良賢・承応三年（一六五四）の五大院・延宝六年（一六七八）の慶舜の三山伏が本願となって妙見宮を修復している。この山伏が東光院とどのような関係であったかは不明であるが、妙見宮は天台修験にとって重要な拠点であった可能性もある（稲城市史編集委員会 1992 46）。

I-2 民俗行事の始まり

寛文2（1662）年「神化まつり」「蛇より行事」という妙見に係る二つの民俗行事が始まった。この時期は妙見寺が再興を果たす少し前にあたり、住職が不在となり修験東光院が妙見宮を守っていた時期である。その約160年後である文政5（1822）年にもう一つの妙見に係る民俗行事「星まつり」が始まった。『北辰妙見尊略縁記』にはこれら三つの行事の由緒についての記録が記されている。

寛文二〔1662〕年の春、諸国疫病流行煩ふ人助ハなし、其頃、別当蒙靈夢て、神化祭といふ事始、神木へ大注連縄を張、北辰四天を祭、又茅を以三百間余の大綱をより其形大蛇のこつく、郷境道の傍へ並置、又家々の門くへ注連を張妙見を祈し志

るしにや、当村へ入す、其後、別当氏子不和にて、右祭相止、其年当村へ疫病入、別当氏子多く煩ふ、夫より今にいたり、絶す執行有、享保の頃、諸国疫病流行、隣村迄来りしか、右防祭の記にや、当村へ入す

但、右神化祭ハ正月八日綱よりハ七月十六日夜也

右妙見利生おほき事、筆二も述かたし、仍、此度諸人厄難除の為、毎年冬至夜、於当社、星祭執行仕候、御信心の御方ハ御歳付可被遣候、可奉抽武運長久家内安全の祈禱者也、

文政五年仲秋

神王山 妙見寺

(『稲城市史研究 資料編2』 稲城市 1996 157-158)

この内容について松本清蔵は『青龍降臨の宮』の中で次のように解説している。

寛文二（一六六二）年、諸国で疫病が流行り病気にかかる人が大勢いたが助けるすべがなかった。妙見宮の別当が夢に霊を感じて、この神化祭という祭をはじめた。ご神木へ大注連縄を張り四天王を祀りまた萱で三百間余りの大蛇のような大綱を撚り、それを他村に通じる道の村境に張った。村の家々でも注連縄を張り、妙見信仰の家であることを示し、疫病を村内に入れないようにした。その後、別当と氏子の間で不和があり神化祭が行なわれなくなった。するとその年、村に疫病が入り込み、別当も多くの氏子も病にかかってしまった。そのことがあってから今に至るまでの間、祭は絶えることなく行われている。／ここでいう今とは、この縁起が作成された文政五（一八二二）年と思われる。享保のころ（一七一六～一七三五）、諸国で疫病が流行り、隣村まで流行ってきていたが、当村では疫病を防ぐ注連縄の効果で、罹患者は出なかったといわれる。／神化祭は一月八日に、綱より（「蛇より」）は七月十六日の夜行っている。妙見尊の利生の大きいこと、筆にも述べがたいほどだ（松本 2014 59-60）。

この記録から「神化まつり」と「蛇より行事」は寛文2（1662）年に同時に始められ、当初「蛇より行事」は「神化まつり」の一部であったことを読み取ることができる。

『北辰妙見尊略縁記』には、続けて文政5（1822）年に諸人の厄除けのため「星まつり」を毎年冬至の夜に行うようになったと記されている。これら三つの民俗行事は戦前まではいずれも夜間の行事であったが戦時中の灯火管制により昼間に行われるようになったという。

また「神化まつり」と「蛇より行事」はいずれも、次の昔話「青竜にのってあらわれた妙見さま」（稲城市教育委員会 2009 『稲城の昔ばなし 改訂版』）の中に伝えられている行事であるという。

百村（もむら）の妙見尊では、毎年夏の盛りの八月七日に「蛇より行事」が行われます。青萱をより合わせて大蛇をつくり、無病息災を祈るめずらしい行事です。

江戸時代の初めの寛文二年（一六六二年）に、疫病が大流行しました。村人たちはなんとかこれを防ごうと考えました。妙見尊は天平宝字四年（七六〇年）に妙見さま

が青龍にのって天下り、この地に現われたという言い伝えがのこる古い歴史を持つ神社です。

この言い伝えを思いおこした村人たちは、皆で青龍をつくってお祭りをすれば疫病が村の中に入ってくるのを防ぐことができるだろうと考えました。さっそく村のあちこちに生えている青萱を刈り取って、より合わせて大きな龍をつくりました。そして妙見尊が祀られている妙見山に村人総出で担ぎ上げました。大きな龍は妙見山のふもとから山頂の神社までのびて、さらに妙見山を七回り半もする長さであったと言われます。

村人たちの祈りによって、疫病は流行せず、またもとの静かな村にもどりました。

青萱でつくった青龍は、その形が綱でつくった大蛇に似ているところから「綱より」とか「蛇より」とか呼ばれて、現代にまで伝えられています。そして三百年以上にわたって百村地域の人々によって守り続けられ、平成四年に東京都の無形民俗文化財に指定されました。（稲城市教育委員会 2009 84-87）

II 「妙見宮（妙見尊）」の三つの民俗行事

II-1 神化まつり（1月8日）

1 行事の概要

「神化まつり」は、百村地域の村民の無病息災・疫病防除・五穀豊穡・地域の安寧を祈願して寛文2（1662）年に始められた（松本 2014 54）。毎年1月8日に行なわれ「八日祭」ともいう。妙見寺と講中の人々による静かな行事で内容は次のとおりである。

妙見寺では事前に藁を撚り12メートルほどの太い注連縄を作り保管しておく。1月8日に講中の人が集まり妙見寺本堂内に設けられた仮の妙見堂で開運厄除けの護摩供を修した後、栗の木で作成した蘇民将来のお札が授与される。その後、妙見尊の参道にある平場で、保管してあった注連縄に「蘇民将来子孫之門戸也」「妙見大菩薩」等と書かれた木札や北斗七星にまつわる木札、シメの札等を挿し、この注連縄を平場にある石柱に取り付ける。注連縄は1年間講中の厄除けとなる。参拝者は同じ蘇民将来の木札をいただき、自分の家の門口に貼って1年の厄除けとする。

松本清蔵は、この行事に用いるお札について詳しく述べているが、その概要は次のとおりである。

当日は祈願守護用のお札を事前に準備し入魂しておく。中心をなすのは四方固め（外から村の中に疫病など悪いものが入ってくるのを見張り拒む役割を果たす）のための3枚のお札で、縦・横約50センチの「廣目天王と増長天王」「持国天王と多門天王」と書かれた2枚と、縦48センチ・横96センチの「神化祭で尊崇する神の名前や祈願守護の内容」が書かれた1枚である。その他に栗の木でつくった天行星、七神鬼、「蘇民将来子孫の門戸也」の三種類のお札を12枚ずつ（12カ月を表す）作成しておく。そして妙見大菩薩、仁王般若経、大般若理趣分、三角札、紙札等祈願用の札も12枚ずつ準備する（松本 2014 55-57）。

栗の木でつくったお札の裏面にはボロン（一切の悪いものをはらい、清浄にする）、セーマンの星型（一筆がきで元の位置に戻り、始めも終わりもなくしてしまい、魔物が

入り込む余地がなくなる)、ドーマンの格子(多くの目で魔物を見張る)が書かれている(妙見寺の配布資料 2014)。昔からこれらのお札には栗札を使ってきたが、今もその伝統を守っている。理由は明らかではないが、栗を食べることで厄除けとしたり、栗の木を祭事用品に用いたりするなど、栗に縁起を担ぐ風潮が信仰の対象となってきたことの表れであろうか。

また、祭り当日にはカラスが12羽刷り込まれたカラス守りという護符が配布される。このカラス守りについて妙見寺住職は「カラス守りと蘇民将来の札を家の門口に張りつけておくと厄除けになるといわれます。今やっている方はいないと思いますが、昔は無病息災を願い1カ月ごとにお札のカラスを一つずつ食べたといいます」と語っていた。

「神化まつり」が行なわれなくなったという記述が『北辰妙見尊略縁記』にあるが、それは1回だけであったとのことである(松本 2014 60)。

2 2015年1月8日の「神化まつり」

午後1時頃、妙見寺を訪れると本堂の縁側に太く長い藁縄(大注連縄)が、蛇がとぐろを巻いた姿のようにして置かれていた(写真5-2)。長さは12メートルほどで1月7日に住職の家族3人が藁を撚って制作したものである。藁縄には漆の葉をからめてある。古来人々は漆には特別な力があると信じ、触るとかぶれるが邪悪なものは寄せ付けられない力があると考えていた。その習慣は今も続いている。祭りが始まる前、妙見寺本堂右の部屋では豆腐と甘酒で参加者を接待する。妙見寺住職の話によると、白いものが身を清めるということから「神化まつり」で参加者が「祭り出し」をする前に身を清めるのに豆腐を食すという意味もあるのではないかということであった。

午後2時30分頃から「妙見寺」本堂の中にある仮の妙見堂で3人の僧侶により護摩法要が行なわれ、祭りに用いる祈願守護用のお札に入魂した。仮の妙見堂には妙見宮と書かれた提灯が掲げられ護摩壇の前には五色のお札が置かれている。護摩法要が終わると、参加者が12メートルの新しい大注連縄を妙見宮に至る参道中段の二十三夜塔前の平場へ移動させ、そこで大注連縄にお札を差し込んでいく(写真5-3)。合わせてくつわ(藁で作ったワラジのようなもの)も大注連縄に取り付ける(写真5-4)。くつわは、輪の数が7・5・3の3種類あり、それらが12個ずつで計36個であった。くつわは無病息災に通じるのであろうとのことである。その後、平場に立てられた2本の支柱に横木となる丸太を取り付け、その丸太に、お札を差し込んだ新しい大注連縄を巻きつけた。丸太が高く掲げられる(写真5-5・5-6)と地域の安寧と人々の初祈願の成就を祈って住職や僧侶による読経が行われた。参拝者にはカラスが12羽刷り込まれた「カラス守り」が授与される。新しく掲げられた大注連縄の横の平場には忌竹を立て注連縄を張り、僧侶の手によって古い大注連縄やお札が厳かに炊き上げられた。今回の参加者は60人ほどであったが、昔はこの広場がいっぱいになるほどの参加者があったという。

Ⅱ-2 蛇より行事(8月7日)

1 行事の概要

百村の妙見宮で毎年8月7日の朝から行なわれる。寛文2(1662)年に諸国で疫病が流行った折、疫病退散、雨乞い、五穀豊穡を祈願するために始まり約350年間続いている。

る。この辺りは農家が多いので雨乞いは重要であり、農閑期の八月に行われるようになったという。青萱を蛇の形に撚るというもので、前述の妙見さまがこの地に青龍に乗ってやってきたという伝説「青龍にのってあらわれた妙見さま」（『稲城の昔ばなし 改訂版』所収）にも伝えられており、平成4（1992）年に東京都無形民俗文化財に指定された。

『北辰妙見尊略縁記』にその内容が記されている（前述）が、『稲城市の民俗（三）子供歳時記』「2014年7月15日付稲城市広報」には行事の内容について次のように記されている。

○『稲城市の民俗（三）子供歳時記』

蛇より行事

百村では7日の日に、村中が妙見寺へ集って、蛇よりが行われる。寛文年中から続いている行事と言われ、午前中は当番7人が萱刈りをして小束にした萱を仮干しにしておく。午後2時か3時頃から太鼓を合図に村中集って、この萱で蛇よりを行なう。妙見様が青龍に乗ってこの地に現れたという由緒によるもので、江戸時代には蛇よりは夜間に行われたと伝えられている。二十三夜塔の前へ角をつけた頭を置き、胴体を結びつけ、住職の祈祷が行われる。村人達は胴体を尾の方からかついで山へ登りながら置いていく。蛇の長さはもとは妙見山を取巻くほどの長さであったと伝えられているが、今は200メートル位であり、萱の乏しい時は50メートル程である。この蛇を担いだり触れたものは災厄や病気から免がれると信仰され、集った子供達に触れさせたりした。以前は階段の処で胴体を潜らせたという。ある年この行事を忘れたことがあって、疫病が流行し地域の子供が大勢死んだと言い伝えられている（稲城市教育委員会社会教育課 1988 78-79）。

○ 2014年7月15日付稲城市広報 第489号

この行事は、古くから厄除けの信仰で知られ、東京都の無形民俗文化財に指定されています。〔中略〕午前中に青萱を刈り取って乾かし、午後から萱を撚って長さ100メートル以上の大蛇をつくります。完成した大蛇は、百村地域の人々によって担がれ、妙見尊の石段に沿って安置されます（稲城市広報 第489号）。

2 2014年8月7日の「蛇より行事」

当日の調査記録は次のとおりであった。

○ 青萱刈

朝早く7人の地域の当番が青萱を刈り妙見宮へ向かう2番目の鳥居前の平場に干す（写真5-7）。10本ほどを一つに束ねたもので約300束あるという。昔は500束ほど刈ったとのことだ。生乾きの状態になるまで干すことによって直径5センチほどの束が半分くらいの太さになり撚り易くなる。最近では萱葺屋根の家もほとんど姿を消し萱を栽培することも少なくなったので寺の平場の一部を萱場にした。平場には左手に二十三夜塔があるが、その前に代表者7人の紺色の絆纏がかけてあった。北辰妙見尊と染め抜かれており青萱を刈るときに使用したものだという。青萱刈りは百村地域の7人で行われる。北斗七星に因み毎年講中で順番に7人が出て青萱を刈る。星がらみの行事は7人で行ってきたが、今は地区にこだわらず多くの人が参加できるよう広

く呼び掛けている。今後も伝統を守り伝えていきたいので新しい人にも積極的に参加してもらえるような方法をとっている。

大蛇の制作は午後2時から始まる予定であり、この間に、「妙見寺」の僧侶が二十三夜塔の前に祭壇を設け、清酒や菓子などの供物を供えて読経の準備が整えられた。

○ 大蛇の制作

午後2時頃大蛇の制作が始まった。頭を作るグループと胴体を作るグループに分かれ並行して作業に取り掛かる(写真5-8)。頭を作るグループは10人ほどで、地面に敷いたゴザの上に青萱を平らに置き巧みに編み仕上げていく(写真5-9)。頭の素材は小束をさらに小束とし、7列ずつ組み合わせ7本7段にこだわりながら作業が進められた。上顎、下顎、舌の三つの部分を作り上げた後、上顎に2本の角を取り付ける(写真5-10)。1時間ほどで縦50センチ横40センチ高さ40センチほどの頭ができあがった(写真5-11)。胴体は、3メートルほどの丸太で大掛かりなやぐらを組み20人ほどで取り掛かった。3人が梯子に上り、丸太の下では別の3人が3本の小束を撚りあげ太い胴体を作っていく。まず足場の丸太3本を円錐に立て平場にある大木の枝を利用して丸太が渡される。そこに撚った青萱を掛けて引き上げては下で続けて撚っていく方法で縦に撚り進み、引き上げられた胴体は地面に蛇がとぐろを巻くように上に重ねていく(写真5-12)。胴体の制作にあたって7本を組み合わせ7本7段にこだわりながら進められていった。縁起物の撚り方は左周りと決まっておき小束を作るときも大蛇を作るときも左回りに撚っていく。この作業は300束すべてがなくなるまで続けられ午後3時頃胴体と頭が完成した。午後2時40分頃からは、二十三夜塔の前で妙見寺の僧侶2名による読経が始まり大蛇の制作中続けられた。時折太鼓も打ち鳴らされ午後3時頃胴体と頭の制作が完了した。

○ 大蛇の担ぎ上げ

頭と胴体が完成すると、参加者全員で尾を先頭にして胴体部分を参道に沿わせながら妙見山頂上の妙見宮まで担ぎ上げた。胴体の撚り始めの部分は二十三夜塔の前で頭の部分とつなぎ合わされた。その後、住職が完成した大蛇の頭を御神酒で清め、口の中に清酒を注ぎ入れて開眼供養を行った。この大蛇に触れたり担ぎあげたりすると1年間無病息災で過ごすことができるという。担ぎ上げには参加したほとんどの人が加わり妙見宮への階段を駆け上がった(写真5-13)。担ぎ上げられた胴体は1年間石段脇に這わせておく。二十三夜塔の前では「妙見尊」の「御守」を僧侶から授与してもらうことができる。戦時中はこの「御守」を携帯して出征すると帰ってくることができるといわれ、必ず妙見様にお参りしてから出征し、多くの人にありがたがられたという。これは大蛇が妙見宮のお堂をぐるりと回って始点に戻るからと言われている。

昭和20年代後半までは「蛇より行事」の日は夜店もたくさん出て地域をあけての大変な賑わいであった。神仏混淆の行事が今も続いていることについて、参加者の1人は「ここはひっそりとした田舎だったから神仏分離政策のときも見逃されてしまったのだろう」と話していた。

Ⅱ-3 星まつり(12月下旬の冬至の日)

1 行事の概要

文政5（1822）年に始められた。12月下旬の冬至の日に、星占いにより来年の吉凶を占い厄を払うという意味を持つ行事で、妙見宮で護摩供養が行なわれる。江戸時代から明治時代にかけては「武州の妙見様」といわれ、近在の地域の世話人がお札を受けに大勢集まり、鶴川街道の入口から出店が立ち並び、境内には芝居小屋も立つほど賑わったという。現在は百村地域を中心とした静かな行事となっている。行事の内容について『稲城市史研究 第四号』『稲城市の民俗（一）年中行事』『稲城市の民俗（三）子供歳時記』には次のように掲載されている。

○『稲城市史研究 第四号』

『妙見寺記録』の中の星まつりの記載について次のように解説している。「星祭りの始まりは、妙見寺の八世良全の代で文政5年（1822）であった。この年、百村の出身で名主榎本六郎左衛門の弟で江戸へ出て坪内家の家人となっていた百村富之進が来て、この土地の地頭坪内は本年星回りが悪いので妙見宮において星供修行したい旨相談してきた。これに対して寺側も願うところであるが、そのときに諸人も祭りに参加させれば衆人の助けになろうと説いた。〔中略〕講中は寄付金を出し堂社を護持し、別当はその代わり講中の武運長久・家内安全の祈祷を怠りなく執行することが取り決められた」（稲城市史編集委員会 1992 50）。

○『稲城市の民俗（一）年中行事』

縁起として語られているところでは、村の疲弊を救うために、庄屋榎本氏が、文政5年に江戸から講中を呼んで、その接待役に百村の人々が総出したのが始まりだという。〔中略〕妙見寺と妙見社は、分離されずに現在にまで信仰されてきたのであり、当の星祭りは神仏習合そのものの祭りである。〔中略〕この星祭りは近郷近在に響き渡っており、その範囲は世話人の所在地から確認することができる。明治11年2月に、星祭講中及び村内中によって、妙見社に奉納された水鉢の銘文には、稲城旧村は勿論、南北多摩郡内全域に及んでおり、その数は200人弱となっている（稲城市教育委員会社会教育課 1983 183-184）。

○『稲城市の民俗（三）子供歳時記』

一年で最も日の短い12月下旬の冬至の日に、百村の妙見様で星まつりが行なわれる。以前は南多摩、北多摩、橘樹、都築の各郡に講中があつて当日は御仏餉袋^{ぶつしょう}の米だけでも、莫大な俵数になった。縁日の屋台が参道に並び、近郷近在の参詣人で賑わった。星まつりは年星または本命星が侵されると、その人に災があるとして、それを除くために星を祭るもので、妙見さまの星まつりと呼ばれた（稲城市教育委員会社会教育課 1988 99-100）。

以上の資料から、妙見宮の「星まつり」が始められたきっかけは「神化まつり」「蛇より行事」とは異なり、当時の領主坪内氏の厄除が発端となって始まったこと、文政5（1822）年とかなり遅くの成立であったこと、村の人々の参加を妙見寺が提案し大きな行事へと発展していったことが分かる。

「神化まつり」と「蛇より行事」は村民の無病息災・疫病防除・五穀豊穰・地域の安寧等を祈願するために始まったと記録にあるが、「星まつり」も厄を払うという基本的

な祈願がその根底にあり、江戸講中や近郷の村々から多くの参詣者が訪れたという。祭りが盛んなときは参詣者だけで7千人弱に及び、明治時代になっても盛んであったようだ(松本 2014 102-104)。『妙見寺記録』によると文政年間から弘化3(1846)年までの「星まつり」の人出の数は概ね資料5-1のとおりである。

2 2014年12月22日の「星まつり」

妙見宮のお堂は年に1度「星まつり」の日だけ開扉され北辰妙見尊に参拝することができる(写真5-14)。午後2時になると住職以下4人の僧侶が、新しいお札が納められた御櫃とともに妙見寺から妙見宮のお堂まで登っていく(写真5-15)。ほどなくお堂の中で4人の住職と僧侶による合同の読経のなか護摩供養が始まった。住職が九字を切り、火に護摩木をくべていく(写真5-16)。3人の僧侶は20~30束くらいある祈念簿を1枚ずつめくりながら「家内安全」「身体健全」「延命長寿」等祈念の内容を同時に斉唱し、最後に住職が新しいお札を護摩の煙に掲げて浄め午後3時15分頃終了した。現在は600枚ほどのお札を発行しているという。

地域の参詣者からは「『星まつり』は伝統ある古い行事で、昭和20~30年頃は調布、府中、狛江、三鷹をはじめ川崎や所沢あたりからも多くの人がやって来て屋台もたくさん出た」「絶え間なく人が訪れ一晩中大変な賑わいだった」「何百人という世話人が各地にいて近くの人々の祈願をまとめて『妙見寺』を訪れたので、寺の近所では家に泊めて接待した」という声が聞かれた。

付記…筆者は、2016年12月21日の「星まつり」の日の午前中に妙見宮で北辰妙見尊に参拝する機会を得た。その像容は、頭上に刀を掲げた武神の姿であり前立ではなく本尊として位置付けられている。武神でありながら静謐で品格があり地域の信頼を一身に集めているかのような趣である。神仏混淆であることから、かつて寺内に本尊として祀られていた経過もあり、妙見寺でも妙見尊を本尊と称している。妙見寺住職の話によると、昭和58(1983)年頃に行った妙見宮改修の際に、現在の本尊の中に胎内仏が存在することが分かったが、それは妙見宮のお堂を造ったときに、当時の住職が少し大きな(50センチほど)妙見像を造りその胎内に小さな妙見像を納めたものであるという。その胎内仏が昔から伝わる妙見像^⑤ではないかと思われる。現在の住職は昭和58(1983)年の改修時に妙見像を再び胎内に納める場面に立ち会ったが、前住職から「絶対に見ないように、見ると目がつぶれる」と言われ目をつぶっていたため実際に見てはいないが20センチ位であることを認識したという。その後、恐れ多くて仏像の胎内を開けることはしていないとのことである。前住職が遷化された現在、胎内仏を見た者はいないとのことであるが、神札に描かれている「北辰妙見尊御影」の像容のような童子の姿である可能性も考えられる。

II-4 地域の人の百村への想い—三つの民俗行事を中心に

百村地域は、稲城市内ではまだ以前の面影を残している地域であるが、開発が進み以前とは様相が大分変わってしまっている。平成28(2016)年12月に、古くから百村に関わりのある4人の方々にお話を伺う機会を得た。語っていただいたお話からは、祭りが盛んであった時代の地域の様子を思い起こすことができる。

語って下さった人

- A 松本三喜夫さん(1950年生 66歳)新潟県生まれ。現在百村にお住いの民俗学研究者。
- B 福島三利さん(1935年生 82歳)百村で生まれずっと百村に在住。妙見寺檀家総代。
妙見寺の行事等に関わっている。大きな農家で野菜を作っている。
- C 藤原光男さん(1953年生 63歳)藤原寿美さんの夫。37年間百村に在住。妙見寺の行事等を行っている。
- D 藤原寿美さん(1953年生 63歳)藤原光男さんの妻。妙見寺住職の妹で先代住職の長女。百村で生まれずっと百村に在住。妙見寺の行事等を行っている。

神化まつり(1月8日)

- B「神化まつり」では豆腐を食べてから祭りをします。豆腐は不幸があつて穴掘り(葬式)のときにも食べます。厄除けというのでしょうか。豆腐にどういう意味があるのか分かりませんが全部食べなければいけません。
- C年末になると平場の石柱を下げ「神化まつり」のときに掲げる大きなお札を降ろします。そのお札を、松本清蔵さんのところ(百村の工務店)にお願いして年初めの仕事に削っていただき助かっていました。大きなお札は二組あつて交互に使います。書いていないお札がいつも妙見寺にあり来年のお札を書いて石柱から下げた分を松本清蔵さんにお渡しして削っていただくのです。もとは厚さが5センチくらいありますが毎年墨が消えるまで削ってもらいます。
- D「神化まつり」でお配りするお札は蘇民将来の木札とカラス守りです。紙の蘇民将来のお札はお正月に住職が各檀家回りをするときに配ります。

蛇より行事(8月7日)

- A 萱を刈るのは7人の当番制で、蛇を撚るときなどは「蛇より行事」を心意気に感じて出てきて下さる方もたくさんいらっしゃいます。昔は萱場は村内のあちこちにあり、7人がどこへ行って刈ろうとそれは無礼講であつたという話を聞いています。朝のうちに刈って日に干すわけですが雨の日になると萱のしなりが出ないから大変です。「蛇より」はやはり雨を呼んでいるのではないのでしょうか。
- B「蛇より行事」は雨乞いも兼ねています。8月7日ごろが農閑期になり、丁度あの時分は照られる時期です。それを過ぎると雨が降ってくれるということでたいがい降ってきます。
- C 雨でも日延べしないでやります。夕方になるとよく土砂降りになりました。先代の住職は、これは雨乞いもあるからと言っていました。雨乞いの効き目が早く上で片付け始める前に土砂降りになるので、もうちょっと待ってくれたらいいのかなと思います。萱刈は、今は順番に毎年7人の方をお願いし、その中にブクがかかっている(喪中)方がいたらずらしてお願いしています。藁は1年中ありますが青萱は夏場の草です。「蛇より」に青萱を使ったということは夏でなければ作れないということでしょう。「神化まつり」の蛇は藁で年末に編みます。
- D 昔は撚ったヘビを下から這わせたので今よりはるかに長い距離だったと思いますが、どこかに行けば必ず萱があつたのでそれ位は簡単に集まりました。今はそういう場所を作らないといけませんが皆様のおかげで続けてこれました。

星まつり（冬至の日）

- A 聞いた話ですが、戦後間もなくは、今の神王橋のところからここまでずっと参道があって「星まつり」の日にはお店がたくさん出ていたといいます。地域でお世話をする方が、お札の数を事前に連絡しそれを受け取るためにお参りに来ます。そしてお札に護摩をあてる間にお寺で接待をして食べていただき気持ちよく帰っていただくのです。それはものすごい御馳走でした。推測になりますが、多分「星まつり」の接待でたくさん食べられるというところがミソじゃなかったかと思います。昔は量が御馳走でしたから。当日はお米を集める当番がいました。お米を入れてくる巾着袋（仏餉袋）はだいたいどこもハギレを使って作っていて各家の個性があり、きれいな袋でした。お米を1升持って来ると、お米を空けて何か気持ちのものをに入れて袋を返してくれたのではないかと思います。そういうところで気持ちの行き来があるわけです。
- B 百村では柚子と子供のおもちゃ等を売る人がいました。芝居もやりました。「蛇より」では芝居はありませんでした。「神化まつり」でも出店が何軒か出ました。「星まつり」の護摩を焚くのは夜中の零時でしたが今は午後3時頃です。戦後も初めのころは真夜中にやっていましたが、お参りに来る人が減ってきてから略してきました。警察の干渉はあまりなかったようです。真夜中には地元の人がお参りに行きます。灯りは持って行きましたが階段が暗く提灯がたまに一つ点いているくらいなので、子供はこわくて夜中には行きませんでした。
- C 「星まつり」のときは、長沼からここまで続く道は人が絶え間なく歩いていて、妙見寺近くになるとずっとお店が出て楽しかったんじゃないでしょうか。柚子を売っていました。今は出店が1軒も出なくなりお世話人さんも減って30数人しかいらっしゃらなくなり、個人の方も少なくなりました。今は、お札は500～600枚くらいで、護摩を焚くのは午前中の護摩と本護摩の基本的に2回です。前もってお受けしているものは午前中に護摩をあて午後の護摩では御祈願のものを読み上げます。「星まつり」は、元々は村を守るためのお祭りで昔は夜にやっていました。当日お炊事、ご飯を炊くのは男の方と決まっています、お酒も入るので接待役は男の人でした。前の日から村の方をお願いして大きな鍋で煮しめとかケンチンの煮物をしていただき女性は運んだりしました。30年ほど前までは、みんな受付にお米を仏餉袋に入れて持ってきて下さいました。その名残があるので今もお寺に出すときには米代と書いて中に現金を入れていらっしゃいます。「星まつり」の日は年に1回の妙見尊の開帳がありますが、妙見尊について次のような言い伝えがあります。先代が妙見様の社を新しく造るときに妙見様のお像も造っていただきました。中に納めるときに私も今の住職と一緒にいて、先代の住職が晒か何か白い布で巻いたものに、多分20センチくらいのものでしたが触ろうとしたら「ダメ」と言われました。妙見様は見ると目がつぶれるといいます。先代の住職が何日も身を清め、布に包んで今の妙見様の体の中に仕舞ったそうです。そのときは百村には滝がないので家の中で水浴びをして身を清めたといいます。胎内仏は先代しか見た人はいません。以前、記念品でプレートを作りましたが、あれが妙見様の新しい御姿です。松本清蔵さんの著書⁽⁴⁾に掲載されている剣を掲げた絵と同じです。50センチくらいで結構大きいです。胎内仏のお姿は住職も見えていないし、先代も話してくれなかったのですから分らないのです。

D 多摩川の渡しがあったところは1年分を「星まつり」で稼げたくらいの人数が訪れたと聞いたことがあります。七味唐辛子のおばあさんが必ず来て調べて売っていました。八卦見の本（暦）も一緒に売っていました。他にまんじゅう屋もありました。祭りのときにお世話人係が皆さんに出すご飯ですが、昔はお米を皆で持ち寄ってそれを使ってご飯を炊き提供しました。そのころは白米が貴重だったので、それも楽しみの一つとして来て下さる方がいらっしゃいました。たくさん飲める、それも大きかったです。今は減りましたが一時はお酒の量がすごかったです。皆さん「星まつり」の後は田んぼに落ちていたというほど酩酊状態でした。今接待で出す食べ物は、ご飯とケンチンと大根のお漬物、お煮しめですね。あと煮豆でしょうか。

妙見寺・妙見宮について

- A 妙見宮は村の鎮守ですが、もっと広く地域の人たちに支えられていました。組織が広いと世話役がいていわゆる講中みたいなものがありますから、そういう意味では支えられるという範囲が非常に広がったのです。妙見さんというと、この地域の人たちのおらが神社という意識が今でもあります。
- B 地元の神社として村中で大事に守っています。そして1年に大きな行事が三つあります。お願い事とか、祈祷やお祓いをしてもらいに妙見宮へ行き住職に護摩を焚いてもらいます。地鎮祭でもやるし病気になっても護摩を焚いてもらいます。戦争中は戦争に行かれた都内の人々が随分お参りに来ていました。自分の子が戦地へ行っているのだからその祈願にやってきました。終戦時分になったら戦死者が増えてしまって、それからもう来なくなっていました。百村地区の人は、出征するときに妙見山で楽隊で送り出しますが、それは上（妙見宮）でやりました。そして南武線の稲城長沼駅まで青年団が送りました。
- C ここは神仏分離のときに神仏混淆の形が残されました。妙見尊にお参りされる方は本当に多いです。妙見宮がこの地域の中心で皆が集まる場所だったのではないのでしょうか。
- D 妙見寺が神仏混淆なのは、あまりの田舎でお目こぼしだったのかなと思います。

その他

- B 冬の一番寒い時期、冬至を過ぎてからのことですが、毎年のように夜中に団扇太鼓をたたきながら妙見尊へ登っていく人たちがいました。日蓮宗の日本妙法院の人たちが年に1回お参りに来ていたのだと思いますが人数はよく分かりません。山伏のような恰好をしていることは知っていますがよく見たことはありません。ドンツクドンツクと結構な音がします。毎年来るので「あまた来てるね」という感じでした。子供の時分昭和30年代頃までは来ていたように思います。それとは別に「星まつり」の時には山伏のような恰好をしている人が来ていました。詳しいことは分かりませんが都内からということで、毎年来てほら貝を吹いていました。
- C 30年位前までは「星まつり」のとき、先導は修験のような恰好をしてほら貝を吹いていました。先導の方は前住職と親交のある方で、毎年ご連絡を差し上げなくても日にちが決まっているのでいらして下さいました。12月の夜に、外で太鼓を叩いていた人たちとは別です。
- D 私が小さいとき昭和30年代までのことですが、12月の夜に修験のような恰好をした人が太鼓を持ってドンツクドンと妙見宮へあがっていきましたが、すごく怖かった覚

えがあります。「星まつり」の前後じゃなかったかと思いますが、かなりの人数だったようです。ちゃんと私が見た訳ではなく、どんな恰好をしているのかなと言ったら修験のような恰好だといわれたのを聞き覚えているだけの話なのですが、怖かったので音だけはよく覚えています。その頃は静かだったので村中に響くように音が大きく聞こえたのかもしれませんが。どこから来たかも分かりませんが妙見様を巡って歩いている方たちではないかと思います。

C この辺りでは亀はとても大事にします。百村に亀がたくさんいるわけではないのですが、お寺に三沢川に通じる池があったので、昔は子供たちが川で亀を捕ってきて先々代の住職のところへ「お坊さんこれ捕まえてきたから」と亀を持って来ると「えらいえらい亀は大事だからね」と言ってお小遣いをやったそうです。

D 亀は妙見寺の池から逃げ出して川に戻っていくので、子供たちが川から捕ってくる亀にシルシをつけてみると同じ亀が行ったり来たりしていたといいます。

D 余談ですが、ここのところ（京王相模原線が開通前の妙見寺に向かう坂道の写真を示しながら）で「おはなはん」（1996年4月～1967年4月に放送されたNHK連続テレビ小説）の撮影がありました。高橋幸治が後ろに乗っておはなはんが桜の木から眺めているシーンがありますが、それがこの坂道です。今高い所（平場）に桜の木がありますが、その根っこはこのおはなはんの桜の木と同じ高さなのです。

C 電車が通ったのは、工事などがあるから今から40年くらい前だと思います。

A 稲城は山砂が採れ都内の建築関係のところに売れたという話もありますが、稲城の砂というのは雨が降るとガンガンに固まってしまうのです。乾燥した時にはこわすのが大変です。だから植物にはあまり適していないし、土壌的にはあまりいいものではないと思います。

D 農家ばかりですが、そんなに大きな農家というのは少なかった。自分の家の分を作っているくらいの小さな田んぼがいっぱいあり、大きな農家は何軒かあったくらいでした。割と貧しい地域だったようです。

A 米作というより畑作の方が主だったと思います。この辺では谷戸という谷が多く、谷戸の所にはだいたい水が出てきますから、そういう意味では、谷戸のちょっと開けたところは田んぼなんかになっているケースは結構あります。けどこの辺は尾根がたくさんありますから、そういう意味で田んぼの広がりというのはあまりなく、尾根の部分はみんな畑になっています。

III 稲城市百村地域に伝わる妙見の現代的意義

東京都稲城市百村の妙見宮で行われる三つの民俗行事を調査した結果、「『神化まつり』『蛇より行事』の二つの祭祀は、同じ祭りだったものが二つに分化したと考えられること」「妙見寺・妙見宮に妙見信仰の痕跡が認められること」「妙見宮が地域の氏神として存在していること」の三つの特徴を認めることができた。この三つの特徴の中で肝心なのは三つ目の「妙見宮の氏神としての存在」であった。

一つ目の「神化まつり」と「蛇より行事」が始められた時期については次のように考えることができる。現在「神化まつり」は1月8日に「蛇より行事」は8月7日に行われている

が、この二つの祭祀は当初同じ祭りだったものが二つに分化していったのではないか。『稲城市の民俗（三）子供歳時記』でも、この二つの民俗行事について「蛇よりは妙見寺の一月八日の神化祭りと、密着した一連の祭行事ではあるまいか。〔中略〕蛇よりは夏越の祓に行う、茅の輪くぐりの行事と酷似している」と疑問を投げかけている（稲城市教育委員会社会教育課 1988 79-80）が、『北辰妙見尊略縁記』に文政5（1822）年の1月8日と7月16日（現在は8月7日）に「神化まつり」と「蛇より行事」が行われていたことが記されており（稲城市 1996 157-158）、その内容（前述）から「蛇より行事」と「神化まつり」が始まったのは寛文2（1662）年の春以降であり、当初同時に行われたであろうことを読み取ることができる。松本も「神化祭と、今行われている『蛇より』は、もともと一緒に行われていたように理解できる」と述べている（松本 2014 60）。

平成28（2016）年12月の百村地域での聞き取り調査の中で、話者の福島氏も藤原氏も「藁は1年中入手できるが青萱は夏しか手に入らない」「8月でないと青萱がない」と述べていた。「蛇より行事」は青萱が大きな肝所となるので、二つの祭祀が同時期に始められたのであれば、『北辰妙見尊略縁記』に「春以降」という記述があり、青萱は夏にしか収穫できないため8月（旧暦7月）に始められたと考えられるのである。その後二つの祭りに分化し双分制の形をとり、一つはそのまま8月にもう一つは1月に移行し、茅の輪くぐりの行事のように「夏越の祓」と「年越の祓」のような二つの行事となっていったのではないか。

二つ目の妙見信仰の痕跡は次のようなところに認めることができる。

具体的な妙見の痕跡に、寺院・神社の名称が妙見寺・妙見宮であること、妙見宮の本尊が妙見尊であること、寺社の紋として九曜紋や月星紋が使われていること、妙見尊を表わす神札、妙見のお守り、妙見の井戸、妙見水の存在などがあげられる。間接的な妙見の痕跡の一つは、祭りの象徴を蛇（龍）としていることである。妙見の眷属神・神使に北の守護神である玄武があげられるが「蛇（龍）は湿地を好むことから、田を守る水の神としても信仰され」（川口 1993 462）ている。その他に山門に彫られた龍と亀、清く豊かな水、「蛇より行事」の中で「実施日が8月7日」「7人で萱を刈る」「7束ずつで蛇を燃る」など「7」にこだわりがあることがあげられる。

そして民俗行事への修験の影響も妙見信仰の痕跡の一つと考えられる。百村の妙見菩薩は760年頃から百村の妙見宮に祀られていたことを『妙見寺記録』『寺院明細帳』『武州多東郡妙見寺縁起』等から知ることができるが、その後、妙見宮・妙見寺は長い歴史の中で変遷を辿ってきた。江戸時代の一時期、妙見寺で住職が不在となったと伝えられているが、この間修験東光院・観音院が妙見菩薩を守り抜いてきたことが『妙見寺記録』等に記されており、地域に妙見信仰が浸透する過程で修験が大きな役割を果たしたであろうことは否定できない。百村地域における修験の影響を明証することはできないが、宮家準は、修験は一括りにできない。時代、地域によってちがってくる。修験は人々の生活実態の中で捉えた宗教であり、日本文化を象徴しているということができると述べている（宮家・佐野 2005 6）。百村の三つの民俗行事の背景にも、護摩供養、全国でも珍しい神仏混淆の持続、神聖な水へのこだわり等、修験の影響と思われる事象を認めることができる。また佐野賢治は「様々な民俗面における星の民俗は、宗教者の関与を窺わせ、星神信仰を指標とすることにより、宗教者が民間にいかに関与したのかというプロセスを追求することができ〔中略〕地域的特徴

を伴った民俗として伝承されている」と述べ（佐野 1994 13）、妙見信仰についても地域による特徴的な展開が認められることを示唆している。百村の三つの民俗行事は、修験の影響と思われる事象を背景に妙見信仰の地域的特性を取り入れた行事であるということができよう。

そして三つ目の妙見宮が地域の氏神として存在していることについては次のように考えられる。ここでいう氏神は、氏族の先祖ではなく、住んでいる土地の人々を守護する神と位置付ける。

人々の祈願の内容について松本三喜夫は「〔現在〕神社が宣伝している『ご利益』をみると、〔中略〕かつて人びとが執着して祈願した五穀豊穡という言葉は、今は見られない。

〔中略〕信仰の古さや本来の意味からすれば、息災と厄除を神にお願いするといったかたちがおそらくは最も基本ではなかったろうか」と述べ（松本 2015 20-21）、祈願内容は概ね二つに分類でき、一つは無常観に基づく基本的、必然的な願いであり、もう一つは人間の欲や煩惱に基づいた祈願といえると論じている。そして百村の「妙見宮の祭りには、人間の煩惱にもとづく祈願を看板などにしていないところに、古式が保存されているといえるし、神社や氏子たちの信心が継承されていることがうかがえる」と述べ（同前 21）、百村地域の人々の妙見宮への祈りが、厄災消除、五穀豊穡という基本的な祈りの形態であると位置付けている。三つの民俗行事の実地調査の中で、現在百村地域の人々が行事の中に求めるものは、皆が元気であることを喜び確かめ合い、新たな活力を得るための1日としていることであった。そこには地域住民の疫病防除、五穀豊穡、安寧を願う基本的な願いが込められていた。

また、江戸時代より前の百村地域で妙見尊への信仰がどのように受け入れられていたかという具体的な記録を見つけることはできない。しかし次の事柄から、江戸時代初期の妙見の祭祀の形態もそれ以前から代々受け継がれてきた祭祀の古式的な形態を踏襲していたと捉えることができるのではないか。それは地域で萱が少なくなっているにもかかわらず、「蛇より行事」では今も萱を工面し妙見宮の石段に沿って安置していること、三つの行事の中で「7」の数にこだわること、神仏混淆の形態が今も守られていることなどから、長い歴史のなかで受け継がれてきた祭祀であることが理解できる。

言い換えれば妙見宮は、現在、基本的な祈りの形態と祭祀の古式的形態を踏襲した地域の氏神として存在しているということである。地域の氏神として存在するという事象は妙見にかかわらず他の神仏にも認められるが、百村の妙見は三つの民俗行事のなかで重要な位置を占めており、妙見信仰を背景とした地域の氏神としての役割を果たしている。それは実地調査の中で認められた、百村地域の人々が、妙見宮と妙見尊が存在する百村という地域への愛着と三つの民俗行事に対する誇りを持ち続けていること、三つの民俗行事が、地域の人々と妙見寺との連携によりこれまでの祭祀の形態を忠実に守り、地域的特性を取り入れながら講中という形で現在まで伝えられていること、長老の指導のもとで行われる地域住民の手による地域住民のための行事であることなどから認識することができる。地域住民側と宗教者側それぞれの基本的な祈りの形態と祭祀の古式的形態を踏襲する妙見宮は、今後も氏神として地域の生活の中に生き続け、時代に即応した形で将来へ伝えられていくと考えられる。

現在、各地に様々な形で妙見が伝えられているが、地域の氏神として伝わる妙見、これも現代に伝わる妙見の特徴の一つであろう。

おわりに

本稿では、東京都稲城市百村の妙見宮で行われる三つの民俗行事の事例により、現在、妙見がこの地域で果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて明らかにすることを目的とした。具体的には百村の妙見宮で行われる三つの民俗行事の調査をもとにして研究を進めたが、特に妙見と氏神との関わりに着目した。

その結果、百村地域に伝わる妙見には三つの特徴を認めることができた。一つ目は「『神化まつり』『蛇より行事』の二つの祭祀は同じ祭りだったものが二つに分化したのではないかと考えられること」、二つ目は「民俗行事が行われる妙見寺・妙見宮に妙見信仰の痕跡が認められること」そして三つ目は「妙見が氏神として存在していること」である。この三つの特徴のなかで肝心なのは三つ目の「妙見が氏神として存在していること」であり、実地調査の中で次のことが明らかになった。

百村の妙見は三つの民俗行事において重要な位置を占めており、妙見信仰を背景とした基本的な祈りと祭祀の古式的形態を踏襲した地域の氏神としての役割を果たしていた。そして今後も地域の生活の中に生き続け、時代に即応した形で将来へ伝えられていくと考えられる。地域の氏神として伝わる妙見、これも現代に伝わる妙見の特徴の一つであろう。

《註》

- (1) 都道多摩尾根幹線道路となったため埋め立てられた。
- (2) 『青龍降臨の宮―稲城百村妙見尊譚―』に「妙見尊の祭りの手伝いの際には米二升を持参したが、その時に米を入れていく巾着袋。当日は食べ放題、飲み放題だったので、自分たちの食い分を持ってくるという意味合いだった」とある（松本 2014 119-120）。
- (3) 『武州多摩郡妙見寺縁起』に「百村の妙見は大炊天皇（淳仁天皇〔758～764〕）の御願により、道忠禅師が本尊に定光仏、脇士に星王同体の妙見大菩薩を安置したことに始まる。妙見大菩薩は道忠が自ら彫刻したもの であるという」とある（稲城市 1996 153-156）。
- (4) 『青龍降臨の宮―稲城百村妙見尊譚―』（松本清蔵、2014）。
- (5) 『妙見寺記録』に「文政2（1819）年本社の修復と拝殿の新規建立が行われた」とある（稲城市史編集委員会 1992 49）。

《引用・参考資料》

- 稲城市 1991 『稲城市史 上巻』 稲城市
- 稲城市 1996 『稲城市史 資料編2 古代・中世・近世』 稲城市
- 稲城市 2014 稲城市広報第489号 稲城市
- 稲城市教育委員会教育部生涯学習課 2009 『稲城の昔ばなし 改訂版』 稲城市教育委員会
- 稲城市教育委員会社会教育課 1981 『稲城・ものとくらしⅢ』（稲城市文化財調査報告書 第四集） 稲城市教育委員会社会教育課
- 稲城市教育委員会社会教育課 1983 『稲城市の民俗（一） 年中行事』（稲城市文化財調査報告書第八集） 稲城市教育委員会社会教育課
- 稲城市教育委員会社会教育課 1988 『稲城市の民俗（三） 子供歳時記』（稲城市文化財調査報告書第十一集） 稲城市教育委員会社会教育課

- 稲城市教育委員会社会教育課 1989 『寺院明細帳』（稲城市郷土資料五） 稲城市教育委員会
社会教育課
- 稲城市教育委員会社会教育課 1996 文化財ノートNo.1（改訂版）「蛇より行事」 稲城市教育
委員会社会教育課
- 稲城市教育委員会生涯学習課 2012 『稲城のあゆみ 改訂版』 稲城市教育委員会
- 稲城市教育委員会生涯学習課 2014 文化財ノートNo.89「妙見尊の民俗行事」稲城市教育委員会
生涯学習課
- 稲城市史編集委員会 1992 『稲城市史研究 第四号』 稲城市史編さん室
- 遠藤聖一 1997 「妙見探索記行」（『あしなな』第貳百四拾九輯） 山村民俗の会
- 川口謙二 1993 『日本神祇由来辞典』 柏書房
- 佐野賢治 1994 『星の信仰—妙見・虚空蔵—』 溪水社
- 松本清蔵 2014 『青龍降臨の宮—稲城百村妙見尊譚—』 暮らしの手帖社
- 松本三喜夫 2015 『歴史と文学から信心をよむ』 岩田書院
- 間宮士信ほか 1995 『新編武蔵国風土記稿 多摩郡三卷』 文献出版
- 宮家準・佐野賢治 2005 「対談 修験道と日本文化—その象徴する世界—」（『非文字資料研
究 No. 9』所収） 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の
体系化」研究推進会議

第六章 祭礼の中に武神として伝わる妙見

—千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から—

はじめに

千葉県千葉市中央区（図 6-1）は、中世、熱心な妙見信仰の信奉者であった千葉氏が武士団を形成する基盤となった地であり妙見信仰との関係が深く、そこに位置する千葉神社（写真 6-1）では、妙見という名称の祭り「妙見大祭」が 850 年以上前から現在まで休みなく行われている。また千葉神社から徒歩 30 分ほどの海沿いに位置する同区の寒川神社の例大祭では「御浜下り」が、昭和 23（1984）年まで千葉神社「妙見大祭」の主要行事として盛大に行われていた。千葉の妙見信仰は様々な神仏と習合しながら展開し、現在も県内各地に妙見信仰の歴史的な軌跡が認められる。

本章の目的は、千葉市中央区の「妙見本宮千葉神社」と「下総國寒川神社」に今も伝わる二つの祭礼を事例とし、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、妙見が地域にどのような役割を果たしているのかを探ることである。

研究方法としては、2011 年から 2012 年にかけて行った現地調査で、二つの祭礼の現実態を明らかにし作成した祭礼民俗誌と聞き取りをもとに、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしていく方法をとる。

祭礼民俗誌という手法を用いたのは、真野俊和が、祭りはその時を生きているものによって行われる行為であり、民俗学的視点の祭り研究は過去に向いてしまっていると指摘しながらも「いまは失われてしまった遠い過去の民俗的心性や文化が、祭の中に生きている」と述べており（真野 2001 3）、また桑江友博が「民俗学が対象とする祭り・祭礼は、その土地や地域の過去を調べるために最も有効な催事であり、そこで使用される文物、その祭事を行うための組織や、催事の構造は比較的変わりにくいものとして想定されており、それらの系譜をひもとくことによって中世・近世の社会事情や文化状況を把握しようと想定されているのである」と述べている（桑江 2010 99）ように、祭りは、時の流れとともに新しい意味が形づくられる側面を持ちながらも、過去の文化・慣習を知るための現時点での有効な手段であると考えられるからである。

そして佐野賢治が「妙見信仰の展開を知ることは日本民族の民俗性をする手掛かりにもなっていくのである」と指摘している（佐野 1994 16）ように、現代の生活に息づく妙見を探ることで、日本人の民俗性そして歴史書の中に語られていない民俗の実態を知ることができるのではないかと考える。

具体的には、地域の多くの人々が参加し昔の習俗をよく残していると思われる妙見の祭礼から、妙見信仰と人との関係を探っていくことを課題とし、次の 2 点について考察する。第一に、二つの神社に今も伝わる祭礼に焦点を絞り、詳しく調べ実体を明らかにして祭礼民俗誌を作成する。第二に、二つの神社の祭りを比較・検討し、妙見信仰と地域社会との関係から地域に息づく妙見に注目する。

論じる方法は、妙見信仰というはっきりとした形では捉えにくいと予想されるが、長い歴史を持つ妙見信仰が、現代の生活の中にどのような形で残され伝えられているのかという点に留意し考察を進めていく。

本章では、第一に妙見に注目しつつ妙見大祭と御浜下りについての歴史的経過を述べる。

第二に妙見大祭と御浜下りの現地調査の経緯と人々の祭りに対する意識を言質から取り上げ、第三で地域に伝わる妙見の現代的意義について考察する。

I 千葉市中央区における妙見に係る諸問題

I-1 研究史—千葉県に伝わる妙見を中心として

千葉氏ゆかりの妙見については、丸井敬司が千葉氏の武士団形成(1995)をはじめ千葉妙見の縁起(2000)妙見像(2006)について考察し、房総地方の妙見信仰と製鉄・鍛冶について(2005)も調査分析を行っている。千葉の妙見の核となる『源平闘諍録』の妙見説話については、眞野須美子(1987)、源健一郎(1991)の研究があり、妙見の本体・本地について追求している。土屋賢泰(1964)は妙見信仰の流れから古代千葉氏の信仰と役割を明らかにしている。これらは妙見についての多岐にわたる研究であるが、歴史的見地に視点を置いたものがほとんどであり、現代の民俗の中に息づく妙見信仰について扱ったものはほとんど見当たらない。

現地調査を行った千葉神社「妙見大祭」については、石井秀美(2000)が「妙見大祭」の様子を詳細に記録している。これまでの大祭の歴史や、他の資料からは知ることのできない舟形の山車が廃止になった時期や理由についても述べており、本章作成にあたっての重要な資料である。和田茂右衛門(1984)は、千葉神社の「妙見大祭」「御浜下り」について、様々な視点から詳細に述べている。明治・大正・昭和の戦前、戦後を通じて実際に現地を歩き、自分の目で確かめてまとめあげたものであると記録されていた。一方、段木一行(2005)は旧妙見寺文書に基づく歴史的な視点から妙見の祭礼について考察しており、和田茂右衛門(1984)の研究の裏付けとなる研究といえる。また小澤清男(2000)は、寒川神社に伝来する「結城舟」の飾り幕に注目し、妙見の祭礼で仕立てた2基の「大舟」を中心に妙見の祭礼について考察している。妙見大祭についても詳しく述べているが、大舟への視点が中心であり、今後も大舟の飾り幕の制作集団について研究を進めていきたいと課題を述べている。

寒川神社例大祭については、「千葉市中央区寒川町他・寒川の御浜下り」(千葉県教育委員会 2002)に例大祭の内容が詳しく述べられている。調査は2002年であり、10年前となるが、本章の現地調査の結果と照らし合わせると、多くの慣習がほぼそのまま現在まで伝えられてきたことが分かる。妙見大祭との関連については歴史の部分で触れていたが、二つの祭りの比較はされていない。また、「海辺の生活」に関する民俗調査「千葉市民俗調査報告書1『寒川の民俗』」(千葉市立郷土博物館 2004)には、祭礼については詳しく述べられていないが、寒川地域の行事や信仰、日々の暮らしなど様々な視点からの民俗調査が報告されている。いずれも妙見大祭について触れているものの現在の具体的な祭りの内容については述べられていない。

一方、民俗の視点からの妙見については、宮原さつき(1995、1996、1997、1999 a、1999 b)が、千葉妙見と御霊信仰、牛頭天皇、子安神など女性の信仰との関わりについて考察している。

また、伊藤一男(1980)は、修正会(御鈴振)、奉射、万歳楽、神楽奉納、大祭など当時の妙見に係る年中行事や習慣について述べており、現代の生活の中に、形を変えた妙見の名残を発見するためのヒントが隠されている可能性が認められる。

I-2 問題の所在

以上のように千葉の妙見は様々な神仏と習合しながら発展し、現代の生活の中に、その軌跡を残していると推察することができる。しかしながら、従来の研究は、妙見大祭について触れているものの現在の祭りの中に残された妙見の軌跡については述べられていない。また、祭りについて述べている研究では、「妙見大祭」「御浜下り」のいずれかについての祭りの意義や歴史に重点を置いており、現在の二つの祭りを同時に調査・比較したものではない。

各々の神社の祭礼として伝統を守りながら独自に行われている千葉神社「妙見大祭」と寒川神社例大祭「御浜下り」の二つの祭礼は妙見を祭る祭礼だと言われる。そこでこの二つの祭りの事例をもとに、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、二つの祭礼が地域にどのような影響を及ぼしているのかを取り上げることは、妙見が地域にどのような役割を果たしているのかを明らかにする上で重要な意義があると考えられる。

したがって、本章では、現在妙見が地域にどのような役割を果たしているのかを課題とし、そのための方法として、妙見が現代の生活の中でどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかの2点を中心に明らかにしていく。

II 妙見本宮 千葉神社で行われる「妙見大祭」の変遷

千葉市中央区の妙見本宮千葉神社「妙見大祭」と同市同区の下総國寒川神社例大祭「御浜下り」は、現在はそれぞれの地域の別の祭りとして行われているが、「御浜下り」も、かつては千葉神社「妙見大祭」の祭礼行事であった。

II-1 資料からみる「妙見大祭」

千葉氏は下総の豪族で守護大名・戦国大名となった一族であり代々守護神として妙見尊を篤く尊崇し中世に房総半島を中心に栄えた。封建時代約500年にわたり活躍し妙見信仰という文化を遺したといえる。千葉氏が妙見尊を篤く尊崇するきっかけとなったことを示す文献には『千学集抄』『妙見実録千集記』などがあり、『千葉県歴史 別編 民俗 I』には『源平闘諍録』などにある染谷川合戦の妙見菩薩の説話について次のように述べられている。

九三一（承平元）年に平良文は、平将門[良文の甥]とともに上野国花園村（群馬県群馬郡群馬町）の染谷川で、兄平国香の大軍と衝突した。七日七夜にわたる激戦の末、わずかに主従七騎までになってしまい、良文自身も落馬する惨状であった。このとき、突然妙見菩薩が童子姿となって現れ、合戦の最中に矢を拾い集めて良文たちに射させ、さらに国香の軍に剣の雨を降らせたので、良文たちは勝利することができた。このときに現れた童子は、上野国上郊郷の、七星山息災寺の妙見菩薩であったというものである。以後、良文の子孫は妙見を勧請し、千葉一族の守護神として代々崇拝するようになった（千葉県史料研究財団 1999 383）。

千葉一族は移住して城や館を新築するとその近くに妙見尊を祀っていった。平忠常（千葉氏三代目宗家）は、守護神として厚く尊崇していた妙見菩薩の分霊をこの地（現在の千葉神社の地）に祀っていたが、長保2（1000）年、忠常の二男覚算大僧正がこの地に金剛

授寺尊光院を中興開山し妙見宮の別当寺とした。そして大治元（1126）年、千葉常重（千葉氏七代目宗家）の代に本拠地を千葉城（中央区亥鼻）に定めた折、妙見尊の本霊を同寺に遷した。それまで千葉氏は本家に妙見尊の本霊を祀り、身近なところで戦勝を祈願し一族の繁栄のための力を得ていたが、本霊が北斗山金剛授寺へ納められてしまったことに心細さを感じ、年に一度だけ妙見尊に千葉城の近くにある御仮屋（千葉城のふもとである中央区市場町に位置し「妙見大祭」の際に妙見尊の分霊が7日間滞在する。千葉神社の管理）に1週間逗留し千葉本家とその一族・家臣団や町民に力を授けてもらうために、翌大治2（1127）年から祭りをを行うこととした。その祭りが今も続けられている「妙見大祭」である。これまで一度も休むことなく行われ平成24（2012）年は886回目に当たる。

祭礼の開催期間は、当初は旧暦7月16日から22日の7日間であった。祭り納めの7月22日は妙見尊の縁日でもある。明治中期からは新暦の月遅れで行うようになり8月16日から22日に開催されるようになった。この1週間に「何か一言願を掛ければ、その願いは必ず達成される」という伝承が残ることから、この大祭は「一言妙見大祭」ともよばれている。古くは祭りの7日間、1日ごとに北斗七星の星一つ一つに願を掛けていたことに由来している。そして期間中の20日には、妙見尊のご加護による豊漁を祈るため寒川村の氏子による「御浜下り」が昭和23（1958）年まで行われた。

「妙見大祭」について石井秀美は「明治後期から、この祭礼は7日間もかけてだらだら行われるため、通称『だらだら祭り』と呼ばれているが、祭礼の名物の一つである太鼓の二段打ちの音が『だらんだらん』と聞こえるので、こう呼ばれるようになったともいわれている。古くは『太鼓祭り』とか『はだか祭り』『生姜祭り』とも呼ばれ、近郊近在に知られていた」と述べている（石井 2000・32）。

米軍が千葉市を目標にした昭和20（1945）年7月7日の空襲は七夕空襲といわれ、神輿をはじめ千葉神社のほとんどが焼失した。本霊は当時の宮司が運びだし、井戸の水をかぶり火難を逃れたという。そしてこの年も千葉神社では仮宮を建立し8月16日（同年8月15日終戦）には仮神輿を作り祭礼を執り行ったという。

Ⅱ-2 「御浜下り」を行わなくなった「妙見大祭」

昭和20（1945）年の七夕空襲の後、昭和24（1949）年、神輿を新調したのをきっかけに、千葉神社では神輿が傷むのを懸念して「御浜下り」を中止することになった。同年寒川神社も神輿を初めて新調したため、その後、「御浜下り」は寒川神社例大祭の中で独自に行われるようになった。この二つの祭りは、現在は別の祭りとして位置付けられている。しかし当時の名残として、千葉神社「妙見大祭」前日の8月15日の夜に行われる潮垢離神事の際の千葉神社神職の着替えは、今も寒川地域の網元六人衆といわれる子孫の家、通称「まあとの家」で行われている。

現在の「妙見大祭」の日程は次のとおりである。

15日夜…19時頃、神職、氏子代表、町内会役員等が千葉神社を出発し出洲（妙見洲）

址に赴き潮垢離神事を行う。その後神社に戻り分霊を神輿に遷す。

16日…10時から神事。12時30分に分霊をのせた神輿が出発。氏子町内（すべてではない）を巡り御仮屋に19時頃到着する。

16日夜～22日昼過ぎ…分霊はこの1週間御仮屋に滞在する。

22日…14時頃分霊をのせた神輿が御仮屋を出発する。氏子町内（すべてではない）を巡り19時過ぎに千葉神社に戻る。最後に、しきたりによって選ばれた70人ほどの選士により拝殿内で「昇殿勇め」が行われる。昇殿勇めの後、分霊を本殿へ戻す時が「一言妙見」といわれ、この祭りのハイライトとなる。殿内、境内の光をすべて消した真暗闇の中で参拝者は願い事を唱える。光を消すことにより分霊に直接接することができ、最も靈驗あらたかで神秘的な瞬間であるとされる。

II-3 「御浜下り」の歩み

1 戦前の「御浜下り」

「御浜下り」は、戦前までは「妙見大祭」の主要行事として、大祭期間中である20日に妙見尊のご加護による豊漁を祈るため、寒川の若者により出洲（妙見洲）海岸にあった大鳥居をくぐり神輿を海中に渡御したもので、『社寺よりみた千葉の歴史』『千葉妙見大縁起絵巻』『千学集抄』にも、千葉妙見（現在の千葉神社）の祭礼の中で「御浜下り」が行われていたことが記されている。そこにも「御浜下り」は寒川の人々がつとめる役と述べられ、「妙見様が海に入らないと漁がない」という言い伝えがあるほど漁業に支えられたこの地域の生活に密着した行事であった。文化庁制作のDVDビデオ『無形の民俗文化財 房総のお浜下り習俗』でも「神を乗せた神輿が海に入ったり、塩水を汲んでご神体を清めたりする行事です。海水が浄化や再生の力を持つという信仰に基づき、豊漁、海上の安全、護国豊穰などが祈願されました。寒川の『御浜下り』は妙見様を祀る千葉神社の祭礼として神輿を海に入れる地域に密着した行事でした」と解説している（文化庁 2010）。

「御浜下り」の由来には次の二つの言い伝えがある。

一つは、江戸時代後期、大きな漁村であった寒川村に網元六人衆がいて、その六人衆から千葉神社に対し「妙見大祭」開催期間中に千葉神社の神輿を海に入りたいとの依頼があったからというもので、これは寒川地域の豊漁を願うものであり、当時は千葉も寒川も同じ千葉ということからその依頼を受けて始まったといわれるものである。

もう一つは、平良文が染谷川の合戦で勝利した（前述の『源平闘諍録』などにある妙見菩薩の説話）時、良文は寒川地域の人たちが童子姿の妙見尊の体を洗うよう、そして今後も寒川地域の人々が代々妙見尊を守るよう命じたというもので、妙見尊の体を洗うということは禊けにつながり、これが「御浜下り」の由来だといわれるものである。

2 戦後の「御浜下り」

昭和24（1949）年8月、千葉神社で神輿を新調したのと同時に、寒川の人々も初めて神輿を新調し寒川神社に奉納したため「御浜下り」は千葉神社の祭礼から離れ、寒川神社例大祭の中で独自の神輿による独自の行事として行われるようになった。

しかし、昭和30年代後半には千葉港、中央区の埋め立て事業が始まり出洲海岸も埋め立てられてしまった。出洲で行われていた「御浜下り」は中断され、昭和43（1968）年から平成10（1998）年までは千葉港に御座船を出して船渡御を行った。御座船は31年間続いたが往年の「御浜下り」の復活を望む声も多く、寒川神社氏子青年会を中心に検討を重ね、平成11（1999）年、かつて「御浜下り」を行っていた出洲海岸の埋立地先、千葉ポートパークの海岸で「御浜下り」を復活させた。復活した「御浜下り」は平

成 24 (2012) 年には 14 回目となった。8 月 20 日近くの土・日曜日に行ったこともあったが、現在は以前と同じ 20 日の夕刻に行われている。氏子青年会の大変な努力と多くの関係者の協力によって復活した「御浜下り」は、現在では地域の重要な行事として定着しつつある。

II-4 妙見の祭礼の特徴

「御浜下り」も含めた妙見の祭礼には次のような特徴が認められる。

① 祭礼の期間が 7 日間であること

祭礼は 7 日間にわたって行われてきた。祭りの 7 日間、1 日ごとに北斗七星の星一つ一つに願を掛けていたことに由来している。

② 千葉氏の家紋「月星」と「九曜」がみられる

千葉氏は熱心な妙見尊の尊崇者であり、千葉氏の家紋を付けることは妙見信仰を象徴していると捉えることができる。

③ 潮垢離神事を出洲（妙見洲）址で行うこと

「妙見大祭」前日の 15 日の夜、千葉神社の神職による潮垢離神事が行われる。『社寺よりみた千葉の歴史』などの文献にも出洲（妙見洲）海岸で神職が潮に浸り身を清めたとの記録が残っている。そこは、昔、「妙見大祭」の主要行事の一つである「御浜下り」で、神輿が海中に入る際にくぐった出洲大鳥居のあった場所でもある。

④ 神輿を、妙見尊を洗うしぐさのようにして揉む

神社境内と御仮屋では、神輿は肩に担ぐことは許されず低く持ち、下で揉んで手と腕で天高く掲げることを繰り返す。下で低く揉むのは水の中で妙見尊を洗っているしぐさといわれ、天高く掲げるのは水の中から出すしぐさといわれる。

⑤ 太鼓の音が波の音のように聞こえる。太鼓のブチ（撥）が椿で作られる

神輿渡御の間、千葉神社でも寒川神社でも、太鼓は神輿に同行し太鼓の音が絶えることはないといわれる。二段ウチという叩き方は「大きく」「小さく」をくり返して叩く方法で波の音に聞こえるといわれる。

太鼓を叩くブチは、今は桜や榎の木で作られた物もあるが、椿が一番適しており重要視された。千葉県柏市大青田にある妙見神社の妙見菩薩が亀に乗り右手に椿を持つことについて『千葉県の歴史 別編 民俗 I』には「ここで、注目されるのは妙見神が椿を持つことである。椿が霊木として古くから神聖視されてきたことは有名である。椿森の伝承や、白椿を持つ八百比丘尼などがその代表である」と述べられ（千葉県史料研究財団 1999 381）、妙見尊と椿の関係に注目している。

⑥ 「御浜下り」を行う

神輿を海中で渡御する「御浜下り」は、千葉神社「妙見大祭」の中で地域の生活に密着した行事として長い間受け継がれてきた。現在は寒川神社例大祭の行事として、千葉神社「妙見大祭」とは別の祭りになっているが、かつて妙見尊を祀った重要な行事として、形を変えながらも昔の伝統を守り引き継がれている。

⑦ 祭祀における香取神社への配慮

現在、香取神社は千葉神社から道路を隔て 200 メートルほどのところにある住宅地に挟まれた小さな神社だが、丸井敬司は「現在、香取社は、[千葉神社と]道路を隔て

た公園の北側に鎮座しているが、『妙見寺境内絵図面』『旧妙見寺文書』によると神仏分離前には妙見寺の境内の中にあった」と指摘しており（丸井 2003 11）、北斗山金剛授寺を開山中興する以前から地主神社として存在し、その敷地内に妙見尊の分霊を祀る祠があったと述べている。千葉神社神職の話によると「いつから祠が存在したかははっきりしていないが、700 年頃から祠があり渡来人が勧請したとも千葉氏が分霊を祀っていたともいわれている。やがて千葉氏が力をつけ妙見尊の存在が大きくなり力関係が逆転してしまったが、千葉神社では今も香取神社に礼を尽くし篤く敬っている」とのことであった。「妙見大祭」においても神輿発御・還御の際には必ず香取神社へ挨拶に出向き、そこで初めて神輿の上に「孔雀」（神輿の天辺に掲げる大鳥。鳳凰といわれる場合が多い）を掲げたりはしたりする。千葉神社境内で神輿の上に「孔雀」が付けられることはない。

また千葉神社の神輿は決して千葉神社の大鳥居はくぐらないというしきたりもある。これは、大鳥居が昔は香取神社のものであったので、香取神社に礼を尽くすため、神輿は出御の際も還御の際も山門（千葉神社東側の鳥居がない門）を通る。

Ⅲ 妙見本宮 千葉神社「妙見大祭」～平成 24（2012）年 8 月の祭礼

1 妙見本宮 千葉神社

J R 千葉駅の南、徒歩 15 分ほどのところに位置する千葉市内でもよく知られた神社であり、千葉の妙見様として地域の人々に広く親しまれている。主祭神は天之御中主大神（妙見様）、相殿は経津主神・日本武尊である。

『千葉いまむかし 13 号』には「千葉神社は、江戸時代には北斗山妙見寺という真言宗の寺院であった。それが明治の神仏分離により、祭礼を続けるために〔千葉〕神社になったという。その前身は、金剛授寺尊光院で、千葉氏退転以前は、千葉氏の妙見宮の別当寺であった」と述べられ（千葉市史編纂委員会 2000 24）、妙見信仰の中心として広く崇敬を集めていたことが知られる。千葉神社神職の話は次のようなものであった。

◇具体的に妙見尊を祀るきっかけとなった承平元（931）年の染谷川の合戦以降、千葉氏は本拠地を変えるたびにその地に本尊を勧請していき支配地では分霊を祀っていったが、その数は千葉市内だけでも 200～300 存在するといわれる。

◇縁起にあった一条天皇（980～1011）の眼病については、願掛けをしたところたちどころに治ったと伝えられている。その褒賞として、天皇から、それまで祠にしか過ぎなかった妙見尊の居所で千葉氏の支配地である現在の千葉神社の地に、北斗山金剛授寺という名前を与えられ長保 2（1000）年中興開山した。金剛とは最も固い金属を表わし一説にはダイヤモンドともいわれ、大きな力を授けてくれるという意味が込められている。

2 平成 24（2012）年 8 月の祭礼

(1) 潮垢離神事

「妙見大祭」の始まる前日（8 月 15 日）の夜、翌日からの祭礼に備え、神職、祭礼保存会、氏子総代、各町内会の責任者が参加して出洲（妙見洲）址へ出向き禊を行う行事をいう。

19 時、8 人ほどの高張提灯を持つ人を先頭に約 50 人が千葉神社山門から出発した。

白い着物、白足袋、白鉢巻姿の神職6人と氏子代表や町内会役員等が広小路方面から大和橋方面へ道なりに進んでいく。浴衣姿の人も多い。やがて港町交差点で右折し都橋を渡り、右に神明公園を見て少し行ったところにある堀江商店前で一時待機した。神職6人は、近くの家で着物を脱ぎ、白い禪、白鉢巻、白足袋姿になる。他の人は、堀江商店前の広場で上半身裸になり、衣類はその辺りの木や塀にかけておく。神職が着替えを行う家は、寒川地域の網元六人衆の子孫といわれる海保家（中央区神明町）で、300年の歴史があり通称「まあとの家」といわれる。準備が整うと再び連なり全員で海の方へ進んで行く。「幸楽苑」（中華料理店）の前を通過し歩道橋を渡り100メートルほど真っ直ぐに進んだ道路上で潮垢離神事が行われた。この場所は、昔、妙見の大鳥居が立っていたところで出洲（妙見洲）とよばれる海岸であった。昭和30年代後半の埋め立て事業開始前は、この歩道橋の下の産業道路（国道397号）まで海だったという。潮垢離神事は、暗闇の中、提灯の灯に照らされながら祝詞をあげ塩を撒き清め、厳粛に執り行われた。

「まあとの家」の前で海保家の関係者（40代男性）から「理由は分からないが、ずっと昔（百数十年前）から、8月15日に千葉神社の神職が禊にみえて家で着替えをしてきた。毎年接待をするが、戦後、何も手に入らないときはアサリの汁（フウカシ）を出したことがあるようだ」との話を伺うことができたが、これまでの経過はよく分からない様子である。

(2) 神輿発御

祭りの初日8月16日午前10時頃から本殿で「妙見大祭」執行に備え神事が執り行われた。その後神輿巡行となる。「みょうけん（妙見）」の分霊を乗せた神輿は、昼頃千葉神社を出発し氏子町内を巡り、午後7時過ぎに市場町の御仮屋に安置される。神輿の渡御経路は次のとおりであった。

12:30 千葉神社出発 12:35 香取神社～武石 13:30 栄町 14:40 富士見町
15:10 中央公園～銀座通り 16:40 吾妻二丁目 18:10 阪東稲荷～吾妻橋
19:00 御仮屋（市場町）

12時30分、山門から浴衣姿で「孔雀」を抱えた3人が香取神社に向かった。次に「一言妙見」の願いが書かれた幟を積んだ台車を浴衣姿の人が押していく。境内では太鼓を激しく叩き神輿を派手に揉む。やがて神輿は山門から出発した。

12時35分、10本ほどの高張提灯に先導され神輿が香取神社前に到着した。香取神社の境内には先ほどの「孔雀」が安置してある。神社の前で何度か揉んだ後、神輿は神社前の道路上に安置された。神輿は休憩や中継ぎのときにはいつも千葉神社の方角に向けて安置するが、香取神社の前でだけは、礼を尽くして香取神社に対し正面を向けて安置する。この場で千葉神社宮司による神事が行われ神輿に「孔雀」を取り付ける（写真6-2）。神輿は神社の前でも肩で担がず手と腕で天高く掲げたり下ろしたりする。そして幟を積んだ車、お囃子の車、太鼓、20本ほどの高張提灯、猿田彦、神輿、子供神輿、神職の乗った車両の順に連なり出発した。

高張提灯は2メートルほどの竹竿の上部に提灯を付けたもので、各町内会の名前が書かれている。年齢はまちまちだが半纏か浴衣姿の人が持ち、神輿を先導する露払いの役目を担っている。賽銭箱を首からさげた3名の雑仕が神輿に同行している。雑仕

は白い狩衣、黒い張烏帽子、黒足袋姿で大麻を持っており、賽銭を入れると御祓いをして「千葉神社 御神幸厄除守」と書かれたお札を受けることができる。役員は浴衣姿に麦わら帽子をかぶり幟の後を歩く。多くの担ぎ手で道路はあふれ狭い路地でも大きな賑わいをみせる。

町内会が変わるとそこから神輿の担ぎ手も交替し、神輿はリレーのように中央区を移動していく。町内会の変わる中継地点では、神輿はその場に少しの間留まり、神事と太鼓の披露が行われる。繁華街は最高の見せ場になるので交差点に差し掛かると神輿を何度も激しく揉む。神輿は肩に担いで巡行するが、揉むときは肩に担がず、手と腕で高く掲げては下で揉む所作をくり返す。「わっせ みょうけん」「みょうけん みょうけん」という掛け声の聞かれる地域もあった。「妙見大祭」は、本来は千葉氏のために行われていた祭りであり当初は町内を巡るようなことはなかったが、やがて町内からも盛んに奉納が行われるようになり、お札の印として巡る町内が増えていき現在に至っている。

町内を巡り 18 時 50 分頃神輿が御仮屋に到着した。神輿巡行も終わりに近づくと、高張提灯も 30 本くらいに増え、ますます賑わいを増した。御仮屋には紅白の幕が張ってある。神輿巡行に参加する人、観客等合わせて 200 人は下らない。大変な熱気の中、20 回ほど神輿を揉み、名残を惜しみながら御仮屋の前庭（掃き清められた神聖な場所）に仮置きする。「孔雀」をはずして横に置き、委員長挨拶、3 回の手締めが行われた。その後千葉神社神職による神事が行われ、神輿は 22 日午前中まで御仮屋に安置されることになる。16 日から 22 日の 7 日間、分霊は神輿に乗せられて御仮屋へ移動してしまうが本霊は千葉神社に留まっている。本霊は霊力が強く、人がもし直接接したなら目がつぶれてしまうといわれており、これまで直接接した人はないといわれている。

神輿巡行の沿道の住民からは、昔の「妙見大祭」が賑やかで華やかだったことを強調しながらも、最近の祭りが盛り上がり欠けることを嘆く声が多く聞かれた。その根底には、祭りが生活していく上での糧となっており、祭りを誇りに思う気持ちが込められていることが窺える。

光明寺（中央区中央四丁目）の門前で黒い法衣を身に付け神輿を出迎えていた住職は「光明寺は、現在はここに移転してしまったが、もとは千葉神社と同じ境内にあったので、今日の『妙見大祭』は、昔ともに祝ったお祭りとして喜んで参加している」とのことであった。この「妙見大祭」は、かつて寺院（金剛授寺）の行事であったものが今は神社（千葉神社）の行事となっているが、ほぼ同じ様式で行われており、光明寺の住職も祭りに積極的に参加していた。寺院の行事が、神社で昔の伝統を引き継ぎ行われているということは、庶民の願いが今も変わらず祭りの中に生きているからと考えられる。これは「妙見大祭」の一つの大きな特色であろう。

(3) 太鼓

「妙見大祭」は「太鼓祭り」ともいわれ、太鼓はこの祭りになくてはならない大きな存在となっている。神輿巡行の際、太鼓は台車に乗せられ神輿の前を進んでいく。神輿巡行の中継地点では、神輿はしばらくそこに留まり太鼓の披露も行われる（写真 6-3）。沿道の人も飛び入りで参加し、力比べのように思い切り力を入れて太鼓を叩く。太鼓は真ん中というより縁に近いところを叩いている。片側 2 人ずつで、右側 2 人一

緒に、左側2人一緒にというリズムで、4人で叩く場合が多い。この4人で叩く両面打ちを「アイウチ」という。神輿の最高の見せ場となる繁華街や交差点でも同じように太鼓の披露が行われた。

太鼓は直径1メートルくらいで十数本の色々な太さのブチ（撥）も太鼓と一緒に運ばれていく。ブチはすりこぎを大きくしたような形で長さ60～70センチ、直径10センチほどもある大きなものから、子供や女性も叩くことができるような大きさのものまで取り揃えてある。ブチの材質は、椿が一番よいとされる。桜で作ることもあるが今は桤が多く、桤は堅くてよいが重いという。そのブチで太鼓を力任せに思い切り叩き大きな音をたてることを真情としている。昔は太鼓が破れてしまい、片側だけで迫力のない音をたてることもあったそうだ。太鼓が破れると縁起がいいといわれるが、太鼓は高価なので、今は破れないようにブチの角を丸く削り使うことが多い。

(4) 神輿還御

「妙見大祭」の最終日となる8月22日昼頃、神輿は御仮屋を出発し氏子町内を巡り、19時過ぎに千葉神社に戻る。

【神輿巡行】 神輿の渡御経路は次のとおりであった。

14:00 御仮屋（市場町）出発～吾妻橋 14:20 大和橋～本町通り
14:35 中央区役所 14:35 広小路～ツインビル～院内仲通り～妙見通り往復
18:00 武石 18:40 香取神社 19:00 千葉神社

22日13時50分、御仮屋に高張提灯を持った浴衣や半纏姿の担ぎ手、観客が100人ほど集まり、千葉神社神職による神輿還御の神事が行われた。13時55分、御仮屋から神輿を出して前庭に仮置きし、神輿の上に「孔雀」を取り付ける。実行委員長挨拶の後、御仮屋敷地内で神輿を激しく5回ほど揉み14時に出発した（写真6-4）。太鼓、お囃子、神社の高張提灯、各町内会の高張提灯、猿田彦に先導されて神輿が練り歩く。神輿還御のコースは発御とは違う道順となるが千葉神社を目指して巡行する。神輿に合わせて前後を歩いて行く人の数も徐々に増え、猛暑の中大きな行列となっていく。

神輿の中継所では太鼓の演奏が一段と冴えわたり「ダラン　ダラン」と情緒のある音を響かせる。通町通り、妙見通りでは、「千葉小唄（ドント節）」などに合わせて、揃いの紺地の浴衣に赤い襦袢、赤い帯、白足袋に花笠姿の敬神婦人会会員100人ほどが音頭行進を行い、踊りを奉納していた。神輿渡御も終盤に近づいた千葉神社近くの妙見通りに差し掛かると、神輿は大きな盛り上がりを見せ担ぎ手も増えていく（写真6-5）。

18時40分頃神輿は香取神社に到着した。担ぎ手も観客も皆被り物を取り、神輿還御の神事と「孔雀」の取りはずしを行う。その後神輿は終点の千葉神社山門へと向かう。約5時間の神輿渡御で、担ぎ手の熱気は最高潮に達している

【神輿宮入・昇殿勇め】 18時55分、高張提灯に先導され神輿が千葉神社山門前へ到着する。神輿は高く掲げられ左右へ移動しながら激しく揉む所作をくり返す。高張提灯は徐々に山門から境内に入り、神輿も数回の押し問答の末19時5分に入場する。昔行われていたという「山門の攻防」（「〔神輿〕還御の際、山門前では門前の若者と神輿方の番との間に神輿を山門に入れる入れないで押し合い〔中略〕をした上で、神輿方の役持の者が山門を通行することを門前方へ懇願し、その話し合いの上ではじめて

通すという行事」〔和田 1984 19～20〕)の名残はほとんど認めることができなかった。

高張提灯は境内の内周りを囲むように待機し、神輿はしばらくの間その中を大きく移動する。境内は多くの人であふれ、賑わいも最高潮に達する。太鼓は2人がかりでゆっくりと叩く。やがて神輿は境内本殿前に納められ3本の手締めが行われた。

19時20分、還御の神事が執り行われ、次の行事「昇殿勇め」の際に昇殿できる84人の神輿の担ぎ手に、月星紋、九曜紋の染め抜かれた緑色のハチマキが渡される。19時25分、神輿はこの84人の選士に支えられ、神職、役員とともに昇殿する。本殿の中では左右に大きく移動しながら神輿を10回くらい激しく揉む。このときも決して肩に担がず、手と腕でおろしては天高く掲げる。やがて神輿が本殿左側に納められると同時に大きな拍手が沸き起こり、無事に還御できたことを慶び合う。神職による神事後、3本の手締めが行われる。

19時35分、本殿の扉が閉じられ幕が引かれて本殿の中は見ることができない状況になった。神社からの「一言妙見」解説の放送が終わったところで一斉に電気が消され、すべてが真っ暗闇に包まれる。ここがクライマックスである。このとき何か一言願を掛けると必ずかなう（「一言妙見」）といわれており、みんな真剣に祈りを捧げる。時間は2分くらいだったようだ。やがて灯がとまり7日間の「妙見大祭」は終了した。

IV 下総國 寒川神社例大祭～平成24(2012)年8月の祭礼

1 下総國 寒川神社

JR本千葉駅から南東に向かい徒歩10分ほどのところに位置する。主神は寒川比古命、寒川比売命、相殿は天照大御神で、あらゆる災いを祓う靈験あらたかな神として信仰されている。江戸時代は神明社または伊勢明神といわれていたが、明治元(1868)年社名を寒川神社とした。弘化2(1845)年、火災のため社殿、末社にいたるまでことごとく焼失した。明治33(1900)年に再建されたが明治41(1908)年の寒川大火で類焼し、昭和の初期に再建された。寒川神社ホームページと「下総國 寒川神社略記」には次のように述べられている。

旧寒川村は佐倉藩領で佐倉藩の年貢米を江戸に廻送するための御用港として、また一大漁業基地として、隣接する千葉町(現在の千葉市街)に劣らない賑いをみせていた。また寒川村領は現在の氏子町会となっている十一カ町の他に多数の飛び地を有しており、寒川神社はその総鎮守として広く崇敬されている。古くは寒川神社の沖を通る船の沈没事故が相次いだとき、ご神徳によってそれを鎮めたとの故事により航海の神として大いに崇敬され、航海安全、海上安全などの信仰を集めていた。千葉や寒川の魚問屋を中心とした旦那衆から盛んに信仰され、神社に残る当時の大絵馬には魚問屋が屋号をつらね、寒川神社が海の神として篤く崇敬されていたことを窺い知ることができる。海の神・寒川神社の神威を示すこの時代の神輿の「御浜下り」は寒川の象徴であり漁師町寒川に生きる人々の誇りであった〔寒川氏子青年会、<http://www5a.biglobe.ne.jp/~samugawa>:千葉市寒川神社〕(寒川神社 2010 1～2)。

例大祭は、かつては7月21日（明治中期以降は8月21日）で、20日には千葉神社の祭礼として寒川の若者が千葉神社の神輿を担ぎ「御浜下り」の行事が行われた。現在は、8月19日に宵宮、20日に本祭、21日に例祭が行われている。20日の本祭は、各氏子地域が参加して神輿が各町会を巡幸し、夕刻には寒川神社独自の行事として千葉ポートパークの海岸で「御浜下り」が行われ大きな賑わいをみせている。

2 平成24（2012）年8月の祭礼

(1) 例大祭を運営する組織

氏子の範囲は寒川一～三丁目、港町、新宿、新田町、神明町、出洲港、長洲一・二丁目、末広の11町会であり、この11町会が3～4町会で組を作り1年ごとの輪番制で年番となる。祭典委員会は寒川神社（宮司と元宮司）、寒川神社総代会（各町会から推薦された氏子総代で構成）と寒川神社奉賛会、氏子青年会で構成され、この四つの組織が一体となり活動する。祭典委員長の指揮のもと祭礼の世話役を担当する実行組織は年番区と氏子青年会で、道路交通の管理、怪我の防止、祭礼の誘導などを行う。

(2) 例大祭の準備

例大祭の準備は、前年8月20日の「御浜下り」が終わり、神輿が神社に還御したときから始まる。その場で引き継ぎが行われ次の祭りの準備に入り、何回かの会合を重ねた後、毎年8月の第2・3の土曜日か日曜日が具体的な祭りの準備の日となる。平成24（2012）年は8月12日（日）と18日（土）に氏子青年会が中心となり行われた。

【8月12日】 9時30分頃15人ほどの氏子青年会会員が神社へ集合し、本殿の清掃、注連縄の交換、神輿の蔵出し、「御浜下り」の会場準備などを行った。神社には、本殿前の中鳥居と本殿入口の2カ所に注連縄が掲げられており、注連縄の交換は年2回（正月と例大祭）行う。神社境内の神輿庫の前で太い注連縄を1本新しく作成した。そして中鳥居の注連縄は廃棄して本殿前にあるものを中鳥居に掲げ直し、本殿前には新しく作成したものを掲げた。その後、神輿と「鳳凰」（千葉神社「妙見大祭」では「孔雀」という）を神輿庫から出し水で清めた。神輿渡御の際に「鳳凰」が啜える稲穂は、寒川神社所有の田んぼ（中央区新宿町）で採れた稲である。

午後は、神社から車で10分ほどのところに位置するポートタワー前のロータリーへ出向き「御浜下り」の会場準備を行う。鉄骨で枠組みを作り「寒川神社例祭 お浜下り」の提灯を掲示し、両側には「寒川神社神輿 浜下神事8/20」の幟旗を立てた。

【8月18日】 午前中は、朝早く高品町（東千葉駅の近く）で伐った約50本の竹を氏子青年会会員が受け取りに行き、それを各町内会に配布した。隣接町内会との境にはこの青竹2本に注連縄を張ったチョーマタギ（町またぎ）を立てる。

午後は10人ほどで、「御浜下り」の会場となる千葉ポートパークの砂浜に、当日神輿が通る斎竹の鳥居と神事を行うための御仮屋の設営を行った。鳥居は海から3メートルほどの砂浜に設置した。70～80センチくらいの深さの穴を2カ所掘り、今朝伐った青竹と、その両横に幟旗を立てる。御仮屋は、4カ所に5メートルほどの青竹を70～80センチくらいの深さに埋めて設営した。当日はこの御仮屋に神輿を仮置きし「御浜下り」神事が行われる。御仮屋は神輿の担ぎ出しを行う場所でもあり、ここから鳥居をくぐり海に入る。鳥居をくぐらなければ「御浜下り」は「始まらないし、終

わない」といわれる。

(3) 宵宮祭

19日18時から宵宮祭が始まる。最初に神輿への御霊遷しの儀式が行われた。50人ほどの奉賛会会員、氏子総代会会員、来賓が参列して本殿での儀式を終えた。その後、御霊は、白装束の2人の神職に導かれ、本殿から鳥居を通り神輿庫に安置されている神輿まで移動する。神職1人は大麻で清めながら先導し、もう1人は、4人の氏子役員が人目に触れぬよう大きな白布で周りを覆った中を、御霊とともにゆっくりと進んでいく。ここで神輿への御霊遷しの神事が執り行われる。神事の様子は白布で覆われており誰も見ることはできない。厳粛な雰囲気の中、御霊遷しが完了すると白布が取り払われ祝詞があげられる。そして神輿庫に灯がともされ役員等による玉串奉奠が行われた。その後は明日の神輿渡御に備え直会となる。

(4) 宮出し・神輿渡御

宮出しとは、神社で発御祭を行った後、神社境内から国道まで神輿の担ぎ出しを行うことをいう。

【宮出し】 20日午前6時30分頃、寒川神社境内には神社名入りの白い半纏、白の地下足袋を身に付けた担ぎ手等が30人くらい集まった。町内会役員は揃いの浴衣に白足袋、草履姿で、豆絞りの手拭いを首にかけ、麦わら帽子をかぶっている。奉賛会会員は白い着物にグレーの袴、白足袋、草履姿で、祭りを引き締めている。高張提灯を持った人も8人ほど集合している。6時40分大きな音で太鼓が鳴り、神輿に「鳳凰」を掲げ稲穂を咥えさせる。6時50分、2人で太鼓を本格的に叩き始める。

7時、神輿の前で、御祓い、宮司による祝詞、役員挨拶、乾杯、寒川締めによる3回の手締めの後、神輿が威勢よく出発した(写真6-6)。境内で何度も激しく揉んだ後、鳥居をくぐり道路を渡って少し進んだところで神輿をトラックに乗せた。午前中は車輛で各町内を巡幸する。トラックの荷台は四方に斉竹が立てられ注連縄で囲まれている。そこに神輿を安置し、神輿を守るように担ぎ手が周囲を取り囲む形で乗車した。お囃子、太鼓、宮司や役員等も各々車輛に乗車し連なって出発した。

【神輿渡御】 神輿の渡御経路は年番区がどの町会になるかで毎年変わる。今年の経路は次のとおりであった。

車両巡幸(神輿を車両に乗せて氏子各町会を運行)

7:30 寒川神社発 8:00 出洲港自治会館 8:40 神明神社(神明町)
8:45 白幡神社(新宿町) 9:10 道祖神社(新田町) 9:45 市役所(千葉港)
10:00 巖島神社(港町) 10:35 寒川一丁目 11:20 海津見神社(寒川三丁目)
11:45 海津見神社(寒川二丁目) 12:35 末広町民館

年番区神輿渡御(神輿を担いで当番町を練り歩く)

13:30 末広町民館出発 14:30 長洲二丁目 15:40 駅前休憩所(本千葉駅前)
16:15 龍蔵神社(長洲一丁目)

この後16時30分頃に「御浜下り」の会場である千葉ポートパークへ向かう

神輿が立ち寄るところでは各町会で御旅所を設け、大勢の人が神輿を出迎える。神輿が到着すると会場には大きな歓声が沸き起こる。神明神社(神明町)ではフウカシ(アサリの味噌汁)とオニギリが、寒川一丁目ではワタリガニが出されるなど、各中

継所で趣向を凝らした接待が行われた。午後は年番区が神輿を担いで渡御する。先頭には先導役の猿田彦が練り歩き、宮司、役員も神輿に従い歩いて行く。道路では時折4人で太鼓を叩く。

(5) 御浜下り・宮入

20 日夕刻、高張提灯の灯に照らされながら神輿を海中に渡御する「御浜下り」が行われ、その後、神明公園から寒川神社まで神輿が練り歩き、寒川神社への宮入を行う。

【御浜下り】 16 時 30 分頃から千葉ポートパークの砂浜に担ぎ手が集まり始め、17 時頃には神輿が到着し、18 日に設営した海岸の御仮屋に安置された。17 時 30 分に「御浜下り」安全祈願神事が執り行われた後、海岸の舞台から紅白の餅が撒かれた。海岸に設けられた竹の鳥居前から海まで続く神輿が通る道の両側には、20 本ほどの高張提灯が整然と並ぶ。17 時 55 分、太鼓が打ち鳴らされ3 回の手締めの後、猿田彦が御仮屋を囲む注連縄を断ち切ったのを合図に、神輿が竹鳥居をくぐりゆっくりと海中に入っていく（写真 6-7）。

「ソヤ ソヤ」の掛け声をかけながら 70～80 人の担ぎ手が海の中を左右に何度か移動する。海の深さや安全性を考えて 10 人ほどが神輿の周りを護るように取り囲み、灯のともった弓張提灯を片手に掲げながら一緒に移動していく（写真 6-8）。夕闇迫る海辺の「御浜下り」は、美しく勇壮な雰囲気で見客を魅了する光景である。10 分くらい経つと一旦浜に上がり、大きな歓声の中で神輿を激しく揉む。海岸でも海中でも神輿を大きく揉みながら海に入ったり浜に上がったりを 3 回繰り返す。浜では太鼓が打ち鳴らされている。

18 時 30 分、3 回の海中渡御を終えた神輿は浜に上がり、ゆっくりと海岸の竹鳥居をくぐり、高張提灯を先頭に千葉ポートパークの海岸を後にした。その後、神輿、担ぎ手、役員も皆神明公園まで車などで移動する。

【宮入】 20 時頃「御浜下り」を終えた神輿は神明公園を出発した。20 本ほどの高張提灯と移動式の大きなライトに照らされながら寒川神社を目指し渡御を続ける。神輿の担ぎ手は 100 人くらいに膨れ上がり沿道の観客も増え続け、大きな盛り上がりを見せながらゆっくりと進んでいった。神社の鳥居前に到着すると何度も大きく揉み、ようやく 21 時に宮入となる。境内に入ってから神輿の還御を祝い 20 回ほど揉み、境内も鳥居前の道路も人であふれ大きな熱気に包まれた。太鼓の披露も最高潮に達する。現在は境内でも神輿を肩に担ぐが、昔は境内では肩に担がず手と腕で支えたという。

21 時 20 分、境内に神輿が納められ、3 回の寒川締めで約 14 時間にわたる神輿巡幸は終了した。境内では帰還祭が行われ、帰還祭が終わるとすぐにその場で来年の祭礼への引き継ぎが行われた。

(6) 祭礼式典

21 日 10 時から祭礼式典が行われた。参列者は 50 人ほどで、5 名の神職が神輿庫に納められた神輿の前で御祓いを受けた後本殿に昇殿し、巫女舞の奉納、玉串奉奠が行われた。大鳥居と中鳥居の間には 3 メートルほどの高さのところに五色（赤、黄、青、白、桃）の幡が 100 枚ほど吊るされ風に舞っていた。

境内が暗くなる 19 時頃御霊返しが行われ、これで祭りはすべて終了する。

V 古老の記憶

三代前から寒川二丁目に居住の元漁師だった古老の方に、「御浜下り」を中心とした祭礼と昔の寒川地域についての話を伺った。内容を整理すると次のとおりである。

〈寒川地域について〉 ◇現在、この辺りで漁師をしている人はいないが、当時は捕れる魚の種類も多く、天秤棒を担いで千葉中央へ売りに行ったものだ。蓮池（現在の中央区二・三丁目。かつての花街）の料理屋などにもよく行った。アサリは1斗枡に100杯採れたこともあり、まさかアサリを店で買うような時代が来るとは思わなかった。また戦前からワタリガニが捕れた。 ◇祭りにはお金がかかるため、祭りに備えて隣組10軒で日掛けの貯金をして交替で集めた。当番が袋を作って下げておき、定額と家名を書いて次の家に渡す方法だった。このようなことは昭和30（1955）年頃まで行っていた。

〈祭りの日〉 ◇祭りはマツリではなくマチといい、19日をヨイマチ（宵宮）、20日をホンマチ（本祭）、21日をアガリマチ（例祭）といった。昔は18日が準備、23日は片付けと決まっており、暑い季節なので夜中の12時頃に起きて涼しいうちにやった。 ◇年に1回の楽しみで非常に待ち遠しかった。当時は子供も沢山いて、親戚がみんなやって来て飲んだり食べたりして楽しんだ。コワ飯（赤飯）を持って迎えに行ったものだ。これをマチムカエといった。祭りの日のごちそうは、スイカ、カニ、赤飯、フウカシ（アサリの味噌汁）、テンプラだった。 ◇祭りの日は漁を休んだ。漁をしたら没収され、それを売って3町内で分けたものだ。 ◇4年に1度〔現在は3年に1度〕、祭りの年番（当番）が回ってくる。昔は住民も多く、年番でないと太鼓にも神輿にも触ることができなかった。全区域を年番区の人が夜中の12時頃まで神輿を担いで練り歩いたものだ。当時の寒川は漁師と魚屋が多く、神輿は年寄（30代後半～40代）が担ぎ、太鼓は若い人が叩いた。

〈太鼓〉 ◇祭りの大きな比重を占めている太鼓は、米が殻を破って飛び出すように、叩いて破るのが縁起がよいとされた。若い頃は人のいないところで電信柱などを叩いて練習したものだ。アイウチといい4人で叩いた。太鼓の叩き方は昔と今では叩く調子が違う。昔は上から体全体で叩いていたので、祭りの次の日は体が痛くて容易にしゃがむこともできなかった。 ◇ブチ（撥）は、昔は椿の木だった。桜の木は縦に割れるし檜は重すぎる。中央公園などでブチに使う木を伐って作った。

〈神輿渡御・御浜下り〉 ◇神輿は、ずっと千葉神社から借りていた。寒川で海に入れるので傷んでしょうがなかったようだ。海には18時から22時頃まで入り、なかなか上がってこなかった。 ◇昭和24（1949）年に寒川神社で神輿を新調したが、何代目かの神輿は、注文のときに単位を間違えたため、とてつもない大きな神輿ができてしまった。角を曲がるのも大変で、渡御のときに危険なので救急車が付きっきりだったこともある。ツバメ〔神輿の四隅の蕨手の上にある小鳥〕とぶつかって血だらけになることもあったし、海の中で貝を踏んで足に怪我をすることもあり、救急車で運ばれたこともある。 ◇昔は、「孔雀」は稲穂を咥えていなかった。稲穂を咥えるようになったのは戦後（昭和40年代までは咥えていない）のことだ。 ◇市民文化会館〔要町〕のところは、昔は田んぼだった。この田んぼに妙見様を埋めていたといわれる。8月の月夜の晩に妙見様を掘りだして海〔妙見洲〕で洗ったので、これを始まりとして千葉神社の神輿を海に入れるようになったという言い伝えもある。神輿を上下に揉むのは汚れを落とす意味があったともいわれる。

「御浜下り」は、年を重ね共に成長してきた生活の一部であり、「御浜下り」で1年が始まりそして1年が終わる重要な行事であることがひしひしと伝わってきた。最後に「『御浜下り』について調べたり伝えたりしてもらえるのは本当にありがたい」としみじみと語っていた。その一言に「御浜下り」への深い思いが凝縮されているようだ。

寒川地域では「御浜下り」のことを、敬った気持ちを込めて「オハマ」とよぶ。「オハマ」は1年の終わりであり始まりでもある。「オハマ」が終わると新たな気持ちになるという。祭りの準備や当日の神輿渡御などの際に地域住民から聞いた話には、皆一様にオハマをなつかしみ誇りに思う気持ちが表れていた。そして地域の発展とともに次第に変化していくことは仕方がないが、できるだけ昔の伝統を守り存続させていきたいという願いが込められているのを強く感じる事ができた。

寒川で生まれ育った40代の男性は「小さい時に父親からよくオハマについての話を聞いたが、その時の父の顔はイキイキとして目が輝いていた。自分も、将来、昔のオハマはこうだったと伝えていけるようになりたい」と語っていた。オハマは寒川地域の人々にとって心の拠り所であり、ふるさとであり未来への希望であると同時に地域の大きな求心力となっているようである。

VI 二つの祭礼にみられる妙見の現代的意義

千葉神社「妙見大祭」と寒川神社例大祭「御浜下り」は、かつては一つの祭りであり、地域をあげて祝う一大行事であった。現在この二つの祭りは別々の祭りとしてそれぞれの地域で行われており、「御浜下り」は寒川神社例大祭での主要行事となっている。そしてこの二つの祭礼を実地調査した結果、祭りの中に妙見に結びつく次のような特徴が認められた。

① 祭礼の期間が7日間である

16日から22日までの7日間という開催期間を今も守り続けている。この7日間は北斗七星の数を象徴しているといわれる。また、この辺りの盂蘭盆会の日程は通常7月13日から16日の4日間だが、16日から「妙見大祭」が行われるため1日短くし、15日までの3日間としていた。大祭が8月に変更された現在でも、それは改められることなく3日間のままとされている。千葉神社では妙見の縁日を22日としており、22日を祭りの開催期間に含めるためこのような日程になったということだが、妙見の祭礼として伝統を守り地域に深く浸透した結果であろう。

「妙見大祭」の祭礼の期間が7日間であること以外この実地調査では見つけることはできなかったが、北斗七星の星の数「7」に由来する「7の数を尊重する」ことは、他の妙見に係る事象において広く認めることができる。例えば、今から1000年ほど前、千葉氏の祖先・平良文は、領地争いから兄の国香と七日七夜にわたる激しい戦いを繰り広げた結果、国香の軍に押され、良文の軍勢は最後にはわずか7人になってしまった。そこに少年の姿をした妙見菩薩が顕れ剣を降らせて国香の軍を敗走させたという説話（前述の『源平闘諍録』などにある妙見菩薩の説話）が残されている。また、今は行われないが昔は行われていたという、22日の「妙見大祭」神輿還御の際の「山門の攻防」という行事で、押し合いをする回数が7回であったという記録もある。

② 千葉氏の家紋「月星」と「九曜」がみられる

「妙見大祭」では神輿渡御に参加する人の半纏、高張提灯、昇殿勇めを行う人のハチマ

キ、太鼓のブチ、祭りの期間中掲げられる町中の提灯などに、千葉氏の家紋「月星」と「九曜」を認めることができた。「御浜下り」でも太鼓のブチや神社の提灯にみることもできた。千葉氏は熱心な妙見尊の尊崇者であり、千葉氏の家紋を付けることは妙見信仰を象徴していると捉えることができる。

③ 潮垢離神事を出洲（妙見洲）址で行う

潮垢離神事は、現在は出洲址地の舗装された道路上で執り行われている。そこは昔、「妙見大祭」の主要行事の一つである「御浜下り」で、神輿が海中に入る際にくぐった出洲大鳥居のあった場所でもある。少し先へ進めば海岸があるにもかかわらず出洲址地で行われているのは、妙見に由来する事柄についてはできるだけ昔と変わらない方法で行うことにこだわりを持っているからであろう。この神事の際に神職が着替えを行う「まあとの家」の習慣も、ほぼ昔どおり行われている。

④ 神輿を、妙見尊を洗うしぐさのようにして揉む

神輿は、寒川神社境内では現在は肩に担ぐが、千葉神社境内と御仮屋では肩に担ぐことは許されない。揉み方は、両神社とも低く持ち下で揉んで手と腕で天高く掲げることとを繰り返す。下で低く揉むのは水の中で妙見尊を洗っているしぐさといわれ、天高く掲げるのは水の中から出すしぐさといわれる。これは妙見尊の体を洗っているしぐさだといわれる。

⑤ 太鼓の音が波の音のように聞こえる。太鼓のブチ（撥）が椿で作られる

神輿渡御の間、「妙見大祭」でも「御浜下り」でも、太鼓は神輿に同行し太鼓の音が絶えることはない。波の音に聞こえるといわれる二段ウチという叩き方は「大きく」「小さく」を繰り返して叩く方法で、祭りにもその叩き方で情緒ある音を伝えていた。太鼓を叩くブチは、今は桜や榎の木で作られた物が多いが、椿が一番適しており重要視された。千葉県柏市大青田にある妙見神社の妙見菩薩が亀に乗り右手に椿を持つことについて『千葉県の歴史 別編 民俗Ⅰ』には「ここで、注目されるのは妙見神が椿を持つことである。椿が霊木として古くから神聖視されてきたことはよく知られている。椿森の伝承や、白椿を持つ八百比丘尼などがその代表である」と述べられ(千葉県史料研究財団 1999 381)、妙見尊と椿の関係に注目している。

⑥ 「御浜下り」を行う

神輿を海中で渡御する「御浜下り」は、「妙見大祭」の中で地域の生活に密着した行事として長い間受け継がれてきた。現在は寒川神社例大祭の行事として千葉神社「妙見大祭」とは別の祭りになっているが、かつて妙見尊を祀った重要な行事として、形を変えながらも昔の伝統を守り引き継がれている。

⑦ 祭祀における香取神社への配慮

香取神社について、千葉神社神職の話によると「いつから祠が存在したかははっきりしていないが、700年頃から祠があり渡来人が勧請したとも千葉氏が分霊を祀っていたともいわれている。やがて千葉氏が力をつけ妙見尊の存在が大きくなり力関係が逆転してしまったが、千葉神社では今も香取神社に礼を尽くし篤く敬っている」とのことであった。「妙見大祭」の際にも16日の神輿出御の際、千葉神社境内では神輿の上に「孔雀」を付けず、神社を出てすぐに香取神社へ挨拶に出向き、そこで初めて神輿の上に「孔雀」を掲げた。22日に神社へ分霊が戻るときも、千葉神社より先に香取神社に詣で、そこで「孔雀」を

はずし千葉神社境内へ帰っていった。千葉神社境内で神輿の上に「孔雀」が付けられることはなかった。

また、千葉神社の神輿は千葉神社の大鳥居はくぐらないというしきたりがある。これは、大鳥居が昔は香取神社のものであったので、香取神社に礼を尽くすためであり、神輿は出御の際も還御の際も鳥居のない山門をくぐっていた。

おわりに

本章では、妙見が地域に果たす役割を明らかにすることを課題とし、千葉神社「妙見大祭」と寒川神社「御浜下り」の二つの妙見の祭礼の实地調査から、現代の生活における妙見の位置付けと地域に及ぼす影響を探った。

「妙見大祭」は、かつて寺院（金剛授寺）の行事であった祭りが、今は神社（千葉神社）の行事として昔の伝統を引き継ぎ、以前と同様の形式で行われている点の一つの大きな特色である。これは祭りに込められた庶民の願いが、今も同じように祭りの中に生き続けているからと考えられる。

二つの祭礼を实地調査したところ、それぞれの地域の人々の間では、信仰という形での妙見への意識は薄かったが、妙見の祭りという事実については明確に意識していた。そして「VI 二つの祭礼にみられる妙見の現代的意義」で述べたように、神輿の担ぎ方・揉み方、太鼓の叩きかた、祭礼の期間が北斗七星の数を象徴した7日間であること、神輿渡御に参加する人の半纏、高張提灯、昇殿勇めを行う人のハチマキ、太鼓のブチ、町中の提灯などに千葉氏の家紋「月星」と「九曜」が掲げられるなど、祭りの中に妙見につながる特徴を認めることができた。その特徴の具体的な事象は次のようなところにもみることができる。

千葉神社では祭礼の名称が今も「妙見大祭」と名付けられ、神輿還御の際にも「一言妙見」という言い伝えがあり、神輿を担ぐときにも「みょうけん みょうけん」という掛け声が聞かれることがあった。寒川地域では「妙見様が海に入らないと漁がない」という古くからの言い伝えがあり、出洲（妙見洲）海岸の大鳥居の辺りで「御浜下り」が行われてきた。妙見様を乗せ神輿を海に入れ神輿を揉む行為は、妙見尊を海水で洗い天高く掲げるしぐさそのものであり、これは妙見信仰に基づくものであろう。また出洲海岸の大鳥居が、昭和30年代後半の埋め立て事業により一時寒川神社の境内に遷されたことがあるが、これも妙見に関わりのある神社であるからと捉えることができる。これらの特徴は、地域住民の心意気も含め、「御浜下り」により深く認められるように思われる。

二つの祭礼において、これらの特徴が伝えられているということは、妙見を念頭に置いた祭りを今も忠実に伝えていることであり、妙見が二つの祭りを結び付ける役割を持っているといえる。両地域とも「祭りの起源・由来について誇りと情熱を持って語り」「祭りを昔の方法に沿って守り伝え」「それぞれの地域の人々がお互いを認めて尊敬し合い一目置いている」のがその所以である。通常、二つに分かれてしまった祭りは独自性を強調し、その結果、分化していくことが多いが、この二つの祭りでは、地域の旧住民が妙見を介した一つの祭りだったということを明確に記憶していた。

現在の千葉神社を中心とした地域と寒川地域とを比べるとまちの成り立ちや趣は大きく異なる。前者は大きな市街地であり後者は静かなかつての港まちである。勢いの大きく異なる寒川地域の住民が、「妙見大祭」において「御浜下り」という祭りの重要な役回りを何故

担っていたのか疑問であった。しかし『千葉いまむかし 13号』には寒川地域が当時は港湾施設を有する千葉の重要な拠点であり、千葉の市街地に対抗し得る力を蓄えた大きな港町であったことが示唆されていた。現在、両地域の勢いは大きく異なるが、かつて同じような勢いを持つ二つの地域が、千葉神社「妙見大祭」において同じような比重を占める重要な役割を担っていたのである。寒川地域の人々は千葉のまちの最大の祭り「妙見大祭」の重要な部分である「潮垢離」「御浜下り」を任され、寒川地域の人々は誇りを持ってそれを担ってきた。文献資料によると、「妙見大祭」で最も重要視された行事が「御浜下り」であり、本章では触れなかったが、かつては「千葉舟」「結城舟」という大舟を仕立て、華やかに執り行われていたという。そして今も変わらず、お互いの地域を尊重し合い、たどってきた歴史と今の姿に誇りを持ちながら均衡を保ち共存している。「妙見大祭」は時代とともに次第に変化していったが、両地域では伝統を後世に伝えていこうという心意気を認めることができた。一時中断した「御浜下り」を大変な苦労を重ね復活させたのもその表れである。

かつて千葉氏が妙見尊を篤信したのは、妙見信仰が御利益、靈驗あらたかなことも然る事ながら、一族の求心力を保つことが目的だったのではないだろうか。一族の繁栄、地域の結び付きと発展、それは日々の生活の安定、一家の繁栄に結び付く。それらの願いを妙見尊に託し、その結果一族の求心力を得て、千葉氏はこの千葉の地に着実に根を張り大きく繁栄してきた。それは妙見の祭礼にも如実に表れ、地域住民に受け継がれている。

現在、この二つの祭りには、毎日をよりよく暮らしていけることへの想い、そして地域の平和と繁栄への願いが込められている。この願いは必ずしも妙見信仰独自のものではないが、かつて千葉氏が武神としての妙見尊へ捧げた「地域融和の醸成」という願いと共通するものであろう。それは昔から伝わる妙見信仰の役割の一つであり、今も同じように伝えられ地域を結び付けているということができる。

今回の調査では、祭りの中に妙見に繋がるいくつかの特徴を認めることができた。そして実地調査を行った千葉神社を中心とした市街地と寒川地域の人々は、「妙見大祭」「御浜下り」など昔の祭りを受け伝え、同時に自身の住む地域の伝統を忠実に子孫に伝えていた。

地域の結び付き、地域の発展、一族の平和という生き様を先人から受け継ぎ、伝えられた歴史を、誇りを持って未来へ繋げようとしている。それは妙見信仰の持つ役割を持ち続けていることの表れでもある。信仰の持っている地域を結び付けるという役割を、昔と同じように今も持ち続けていることも、現代の信仰のあり方の一つの形態であろう。

《引用・参考資料》

- 石井秀美 2000 「千葉の妙見大祭」『西郊民俗』第171号 西郊民俗談話会
伊藤一男 1994 「中世の妙見信仰と祭祀組織—千葉市の守護神と金剛授寺について」
佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
小澤清男 2000 「寒川神社に伝来する『大舟の飾り幕』について」『千葉市立郷土博物館研究紀要』第9号
金指正三 2007 『星占い星祭り』 青蛙房
小村純江 2015 「祭礼民俗誌における妙見信仰—千葉神社・寒川神社の事例を中心に—」
『日本民俗学』282号 日本民俗学会
佐野賢治 1994 『星の信仰—妙見・虚空蔵—』 溪水社

- 寒川神社 2010 「下総國 寒川神社略記」
- 千葉県郷土資料刊行会 1972 『千学集抄』（『改訂 房総叢書 複製版』に収録）
- 千葉県郷土資料刊行会 1972 『妙見實録千集記』（『改訂 房総叢書 複製版』に収録）
- 千葉県史料研究財団 1999 『千葉県の歴史 別編 民俗Ⅰ』 千葉県
- 千葉県立大利根博物館 2002 『千葉県 祭り・行事調査報告書』 千葉県教育委員会
- 千葉市史編纂委員会 2000 『千葉いまむかし 13号』 千葉市教育委員会
- 千葉市立郷土博物館 1999 坂尾山栄福寺所蔵『紙本著色 千葉妙見大縁起絵巻』
- 千葉市立郷土博物館 2004 「千葉市民俗調査報告書 1『寒川の民俗』」『千葉市立郷土博物館研究紀要』第10号
- 千葉神社 2009 「妙見本宮 千葉神社略記」
- 土屋賢泰 1994 「妙見信仰の千葉氏」佐野賢治編『『星の信仰』所収 溪水社
- 中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
- 福田豊彦・服部幸造 1999 『源平闘諍録』上 講談社学術文庫
- 福田豊彦・服部幸造 2000 『源平闘諍録』下 講談社学術文庫
- 丸井敬司 1995 「千葉氏の武士団形成に関する一考察」『千葉市立郷土博物館研究紀要』第1号
- 丸井敬司 2003 「千葉妙見の縁起とその成立に関する考察」『千葉市立郷土博物館研究紀要』第9号
- 宮原さつき 1999 「千葉氏の妙見信仰と房総の神仏」千葉市美術館編『房総の神と仏』（平成11年度千葉市美術館秋季特別展図録）
- 和田茂右衛門 1984 『社寺よりみた千葉の歴史』 千葉市教育委員会

《引用・参考映像・ホームページ》

- 文化庁 2010 DVDビデオ『無形の民俗文化財 房総のお浜下り習俗』（「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」により作成された）
- 千葉市寒川神社：<http://www5a.biglobe.ne.jp/~samugawa> (2012/7/1)
- 寒川神社氏子青年会：<http://www5a.biglobe.ne.jp/~samugawa/seinenkai.htm> (2012/10/1)
- 千葉神社：<http://www.chibajinnjya.com> (2012/7/1)
- 星の見えるページ：<http://www2.tba.t-com.ne.jp/tty-gt/index.html> (2012/10/23)
- （後藤哲也，2006，「日本における星信仰について―妙見菩薩信仰を中心として―」『駒澤地理』第42号（駒澤大学地理学教室卒業論文〔未公開〕）

第七章 大衆文化的妙見の需要

—東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界限に伝わる妙見—

はじめに

妙見信仰は北極星・北斗七星を神格化した信仰であり、同一の仏神でありながら形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきたといえることができる。

長く続いた戦国の世が終焉を迎え平穏な時代が訪れた江戸時代、妙見信仰はどのような形で大衆の中に存在してきたのであろうか。中西用康によると、江戸時代は檀林における学僧の妙見信敬といった形で日蓮宗における妙見尊信が盛んになり、修学僧にとって妙見菩薩は試験の神様でもあったという(中西 2008 224)。坂本勝成は「近世における妙見信仰は、日蓮宗での信仰が圧倒的に盛んであり、その中心地は上方圏と江戸圏に大別できる」と述べている(坂本 1977 25)。

本稿の目的は、東京都墨田区業平にある日蓮宗寺院「柳嶋妙見山法性寺」(以下「柳嶋妙見」と記す)界限を事例とし、現在伝わる妙見の様相と、妙見がどのような位置付けであり地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、その特徴と役割を探ることである。「柳嶋妙見」は江戸の町で一番古い妙見といわれ繁栄を続けた歴史がある。江戸時代全期を通して多くの庶民が信仰し遊山の場所としても賑わいをみせ、界限では様々な江戸文化が醸成された。

研究方法としては、第一に、文献資料から得た調査結果により、江戸時代の妙見信仰について概観する。第二に、江戸時代の妙見信仰の代表的な三つの拠点「江戸の『柳嶋妙見』」「摂津の『能勢妙見山』」「久々知の『廣濟寺』」のうち、「江戸の『柳嶋妙見』」と「摂津の『能勢妙見山』」について、その概要と現在の様相を述べる。「摂津の『能勢妙見山』」は、「柳嶋妙見」にほど近い東京都墨田区本所に「能勢妙見山東京別院」があり、江戸時代後期に多くの人々の信仰を集めていたことが知られている。第三に、江戸時代に遊興の場として賑わった「柳嶋妙見」界限を題材とした文献・資料・芸能・芸術等を中心に、「妙見信仰関係の書の公刊」「日常の中にみられる妙見」「芸能・芸術などにみられる妙見」「浮世絵にみられる妙見」「北辰一刀流と妙見」について述べる。以上の内容と、2014年から2017年にかけて行った聞き取りの結果を踏まえ、江戸時代に大衆文化の中で花開いた妙見の現在の様相と位置付け、地域へ及ぼす影響を明らかにし、その特徴と役割について考察する。

I 江戸時代の妙見に係る諸問題

I-1 研究史—江戸時代の妙見を中心として

江戸時代の妙見について、坂本は「妙見の信仰機能は幅広く、雨乞いの霊応による五穀豊穡を約束する農業神を基本的性格としているが、とくに、天明・寛政以降には芸能界、花柳界の守護神としても人気を集め、霊応を振まい、病氣平癒、息災延命をも約束し、厄除開運をもたらす八百万の流行仏であった」と述べている(坂本 1977 68)。野村耀昌は古代から近世までの妙見信仰について、近世に重点を置いて述べているが、「或るときは儒教と習合し、或るときは神道と習合し、更には道教と習合し、再転三転して大いに土俗化するとともに、広汎な庶民大衆の尊信を集めて現在に到ったのである」とする(野村 1968 245)。中西は「当代〔江戸時代〕においては、〔中略〕武士は武神として、農民は

農業神として妙見を尊崇していたのである。〔中略〕が、武士の妙見信仰も農民のそれも当代の妙見信仰を代表するものではなかった。〔中略〕都市の大衆の妙見信仰が、それを代表していたのである」と述べる(中西 2008 312)。金指正三も「近世になると、妙見信仰は全く民俗信仰となり、妙見は全国各地に祭られ、『妙見さん』と呼ばれ、庶民の間に広く信仰された。〔中略〕妙見菩薩はもっぱら日蓮宗信者の対象となった観を呈する」と述べている(金指 1974 262)。

このように、江戸時代の妙見信仰は、それまでの信仰を踏まえながらも八百万の神として幅広く大衆の間に流布していったと考えられる。それは次のような先行研究のなかにも様々な事例としてみることができる。

宮崎茂夫は東京(一部千葉)に現在も残る主だった妙見について調査し、民俗学的な視点からの見解も加味し、その結果を簡潔に述べている。有楽町のそごうデパート屋上には、現在よみうりランドの聖地公園内妙見堂に安置され、国の重要文化財に指定されている妙見菩薩の身代わり本尊である掛図が、昭和 52(1977)年に奉られたとの報告もある(宮崎 1997 41)。村田典生は、妙見を事例として流行神の持続していく道筋について考察しており、流行神について次のように述べている。「普段の信仰形態では賄いきれない状況になったとき、普段信仰している神仏から別の神仏へ祈願対象を変更し流行神が現出する。しかし急激に祀り上げられた流行神は普通の信仰で対処できる状況に戻った時点で役目は終わると考えられる」(村田 2012 105)。流行神の展開は、江戸時代、大衆の間に大きく受け入れられた妙見信仰の一つの顕れ方と共通すると考えられる。大島建彦は、本所にある能勢家(能勢本家の分院)の狐落としての黒札について論じている。能勢家は江戸時代の代表的な妙見の信奉者である。能勢家の黒札は、現在も受ける人が少なくないが、狐落しというより現在では魔よけの札と考えられており(大島 2012 10-13)、流行神の展開との共通性をみることができる。石出猛史は、江戸時代、人々の身近にあった疾病を対象としその一つとして、妙見と眼病について述べている。中世以降は日蓮宗で妙見を尊崇し、眼病に靈驗ありとした(石出 2001 3-4)。

このように江戸時代は日蓮宗を背景として多くの身近な神への帰依という多様な形態の妙見信仰が盛んに行われ、雨乞い、農業神を機軸としながらも八百万の神として広く大衆の中に浸透していったことが分かる。

一方、若月正吾(1971)は、仏教文化が庶民の間に拡張伝播していった状況を述べた。初期仏教の時代は貴族層、中世から近世初頭にかけては中間層、江戸時代中期以降にかけては、庶民文化の向上と、伝道者側の布教対象の民衆化によって村落の寺院や仏堂・村を中心とした宗教活動が活発化したという(若月 1971 32)。その中で、近世社会以降の民衆の信仰対象の一つとして妙見信仰にも触れている。仏教文化と妙見信仰はその発展の道筋で時代と対象が共通しており、時代を代表する文化乃至信仰であったといえるのであろう。

I-2 問題の所在

以上のように江戸時代の妙見信仰は、日蓮宗での信仰が圧倒的に盛んであり、その中心地は上方圏と江戸圏に大別でき、その表れ方は、都市を中心とした粹で華やかな様子であったことが類推できる。これらの論考の中に事例として「柳嶋妙見」の記述があるが、そ

れらは現在の「柳嶋妙見」境界の妙見を民俗学的な視点で捉えたものとは言い難い。

筆者が調査した東京都墨田区の「柳嶋妙見」境界は、江戸時代と様相を一変させながらも「柳嶋妙見」と称する法性寺が現存し、またそのほど近くには「能勢妙見山東京別院」があり今でも日常生活の中で身近に妙見を認めることのできる地域であると考えられる。

そこで、この調査地の事例を基に「柳嶋妙見」境界に現在伝わる妙見の様相、妙見の位置付けと地域へ及ぼす影響について民俗学的な視点で取り上げることが、妙見が現在その地域でどのような特徴を持ち、地域にどのような役割を果たしているのかを明らかにする上で重要な意義があるのではないか。

「柳嶋妙見」は江戸の町で一番古い妙見といわれ繁栄を続けた歴史がある。そこで、この調査地の事例を基に、現在「柳嶋妙見」境界に伝わる妙見の様相、妙見の位置付けと地域に及ぼす影響、妙見の特徴と役割はどのようなものであるかを本稿の問題の所在とした。

したがって、本稿では、「柳嶋妙見」境界に現在も伝わる妙見がどのような特徴を持ち、地域にどのような役割を果たしているのかを課題とし、そのための方法として、現在伝わる妙見の様相と、妙見がどのような位置付けであり地域にどのような影響を及ぼしているのかの2点を中心に明らかにしていく。

Ⅱ 江戸時代の妙見信仰

江戸時代中期、「江戸は武士・町人合わせて、定住人口 100 万人を越える世界最大級の都市に成長していたと推定されている。〔中略〕町人人口は 50 万人を越えていた。〔中略〕武士の人口は残念ながら正確な数字は分からず、町人と同じくらいの 50 万人と考えられている」（安藤優一郎 2005 47-49）。この時代、江戸には多くの宗教施設があったが「宗教施設への参詣とは、江戸市民にとって信仰心を満たすことはもちろん、余暇を楽しみ、癒しも得られる機会であり（安藤 2005 70）、その周辺は多くの人で賑わい盛り場が生まれ、様々な芸能・文化が醸成されていった。寺社は靈験よりも見世物や開帳で参拝客を集客したという。また江戸時代中期、江戸では、武家が屋敷の邸内に祀られた神仏を公開し、多くの参詣者を集めた。お札等も配布されるなど、その収入は武家の生活に大きな経済的効果をもたらした。その様子は『江戸名所図会』『斎藤月岑日記』などから知ることができる。

池上真由美によると、18 世紀後半は江戸の社会構造や住民意識に大きな変化が生じた時期であり、それまで上方中心だった資本に対抗して江戸資本が形成された時期でもあり、上方文化に圧倒されていた江戸文化に対し独自の江戸町人文化を開花させることになったという。近代前期の元禄文化が上方中心の文化であったのに対して、上方から江戸への文化移動のあった近世後期の化政文化は江戸文化と呼ばれる（池上 2002 35）。

本章では、このような背景の中で信仰されてきた江戸時代の妙見の様相を探っていく。

江戸時代の妙見について、中西は、徳川家康の室・萬（養珠院）が安房で成人し、日蓮宗に三歸していたことから、徳川家康、養珠院をはじめ徳川一門は飯高檀林を篤く外護し、檀林で修業した日蓮僧たちが妙見の教説を伝道したため、日蓮宗での信仰が盛んになっていったと述べる（中西 2008 219-221）。妙見信仰と日蓮宗の関係について、金指は「弘長元年（1261）辛酉の秋、日蓮が勢州常明寺において、三七の誦經の折り、北辰が来向したので、

日蓮が大菩薩と尊称したことから、妙見大菩薩を日蓮宗の守護神として、題目を唱えて崇拝するようになったという説が生まれた（北辰妙見経和訓図会）」と日蓮の星辰崇拝について述べている（金指 1974 264）。一方、日蓮宗以外でも、真言系の相馬氏、天台宗の度会氏、天台・真言両宗の八代などで妙見が伝えられ、妙見信仰の宗旨関係は各種各様であった。そのような状況の中、「江戸を大都市として発展させるきっかけとなった家康の江戸入部の際、家康は江戸入城に先立って秩父に妙見宮を参拝し、50石を寄進し、妙見信仰江戸集中のための一環をなしたという（中西 2008 237）。

妙見社の分布については、「江戸時代になると、戦国末期の混乱で荒廃したままの妙見社もあったが、妙見信仰も時代相応の様相を繰り広げた。当時、約230が全国に散在していたといわれる。大多数は地方大衆の生活に即して、地方村落の産土神として尊崇される小さな堂宇であり社祠であった。妙見社が比較的多く存在していた地方は、北九州・中国地方・紀州全土・武蔵房総三国の関東南部であった」（中西 2008 246）。『新編武蔵風土記稿』『江戸名所図会』などの伝えるところによれば、江戸の町には約14の、大阪とその近郊には4の妙見安置の寺院や堂舎があったという（中西 2008 235）。このような状況の中、日蓮宗を背景に上方と江戸で盛んに信仰された妙見信仰の代表的な拠点に、「江戸の『柳嶋妙見』（墨田区柳嶋）、「摂津の『能勢妙見山』（大阪府能勢町）、「久々知の『廣濟寺』妙見堂」（尼ヶ崎市久々知）の3件があげられる。現在も日蓮宗寺院として広く人々の信心を集めている。

III 江戸時代に民衆の間で花ひらいた妙見信仰の代表的拠点

江戸時代の妙見信仰は日蓮宗を背景とした信仰が盛んであり、その中心地は、大きく上方圏と江戸圏に大別できる。その代表的拠点は「江戸の『柳嶋妙見』『摂津の『能勢妙見山』『久々知の『廣濟寺』妙見堂」であった。ここでは「江戸の『柳嶋妙見』と「能勢妙見山東京別院」について、その概要と現在の様相を述べる。「能勢妙見山東京別院」は、「柳嶋妙見」にほど近い東京都墨田区本所にあり、江戸時代後期には多くの人々の信仰を集めていたことが知られている。

久々知の廣濟寺は、兵庫県尼崎市久々知にある日蓮宗寺院である。境内には近松門左衛門の墓があり、俗称、近松寺といわれる。容姿芸能が生活の糧であった役者達が廣濟寺妙見堂に祀られた妙見を信仰したため、妙見が容姿守護の神とされることになったともいわれる。江戸時代後期には、上方で能勢の妙見とともに大いに賑わった。

III-1 江戸の「柳嶋妙見」

柳嶋妙見山法性寺と称する「柳嶋妙見」は、東京都墨田区業平にある日蓮宗寺院であり、北十軒川と横十軒川の交わるところに位置する。寺内の妙見堂には開運北辰妙見大菩薩を祀っている。妙見大菩薩の像容は、七曜（北斗七星）を表した七条の光をまとい、右手に悪星退散の利剣を持ち、左手に善星皆来の印を結ぶ。右足下に気血水循環旺盛の亀を、左足に身心柔軟の白蛇を従えている。妙見堂は江戸城の鬼門除けとして置かれたが、「柳嶋妙見」として多くの人々の信仰を集め、江戸時代は左岸の名勝として、江戸時代全期を通して繁栄を続けた。特に、1・5・9月の1・15日の開帳、降臨日は参

詣者で賑わったという。『江戸名所図会』には、境内にあった影向松も含め「柳嶋妙見」の様子が次のように記され、広く江戸の大衆の信仰を集めていたことがうかがえる。

同じ川端〔横十間川が十間川と交わるところ、柳島橋の西詰にある〕、橋を越えて向かふ角にあり。日蓮宗法性寺に安ず。本尊の来由詳らかならず。近世靈驗著しとて、詣人つねに絶えず。堂前に影向松と号くる靈樹あり。本尊初めてこの樹上に降臨ありしといふ。ゆゑに星降り松とも、千年松とも呼べり。元和〔1615-24〕の頃、大樹このところのに至らせたまひし頃、更て鏡の松と号を賜ひしといひ伝ふ（『新訂 江戸名所図会 6』 1997 152）。

また『新編 武蔵風土記稿』には、法性寺の縁起について次のように記されている。

法性寺 法華宗下総国真間弘法寺末、妙見山玄和院と号す、本尊三宝祖師。開山日蓮寂年を傳へず、妙見堂 妙見の像は長1尺許古色に見ゆれど作詳ならず、靈驗ありとて参詣の者多し、縁起によるに真間山主日興上人の門人日蓮或夜靈夢を蒙りて感得せる像と云、鐘楼 宝暦5年鑄造の鐘なり 影向松 妙見堂の前にあり、囲1丈3尺余、この松樹の梢に屢北斗星降臨なす故、妙見の影向松と名付と、及星下り松とも云由縁起に見ゆ（蘆田 1996 40-41）、

「柳嶋妙見」の縁起について、柳嶋妙見山法性寺発行の「柳嶋妙見山法性寺」しおり（2015）、『柳島の妙見さま』（2015）には、足利幕府の明応元（1492）年に日蓮宗の法性房日蓮上人が開山したとある。本尊は久遠実成本師釈迦牟尼佛（大曼荼羅）であり、寺内の妙見堂には開運北辰妙見大菩薩が祀られ、その像容は、七曜（北斗七星）を表した七条の光をまとい、右手に智慧の剣をかがげ、左手に想いをすべてかなえる宝珠を持ち、足元に亀と白蛇を踏まえていると述べられている（柳嶋妙見山法性寺 2015）。

『江戸名所図会』に描かれた「柳嶋妙見」の絵図には、広い境内に大きな松が描かれており、その松は周囲2メートル余りで「影向松」「星降り松」「千年松」ともいわれていたという。その松には「松の大樹の上に毎夜光明があらわれ、樹下に妙見像をさげた信女があらわれた」という「法性寺妙見の松上示現の伝説」が伝えられるが、『柳島の妙見さま』（2015）によると、次のような譚も伝えられているという。

治承4（1180）年、伊豆の石橋山の合戦にやぶれた源頼朝は、再起して上総から下総へ入り、柳島に陣をしいて、そこにあった松の大木に源氏の白旗をかがげた。すると上総介広常、千葉介常胤はもとより、江戸の豊島や武蔵の川越・秩父・入間の軍勢もはせ参じたので、たちまち戦局は一変したという。やがて天下を統一し、建久3（1192）年に征夷大將軍に任ぜられた源頼朝は、源氏の旗をかがげた土地、開運の土地である柳島を千葉介常胤に下賜したが、そのときから、この松を「鎌倉殿旗あげの松」とよぶことになったという。／鎌倉幕府は源氏の手から北条氏へうつり北条氏から足利氏へうつったが、足利幕府の明応元（1492）年の春、宵のうちから「鎌倉殿旗あげの松」のこずえが光りだした（柳嶋妙見山法性寺 2015）。

この後、「柳嶋妙見山法性寺」しおりに記されているように、日蓮宗の法性房日蓮上

人によって開山されたという（柳嶋妙見山法性寺 2015）。この「鎌倉殿旗あげの松」伝説は、妙見に係る力が戦況不利な状況から勝利に導いたという点で、『源平闘諍録』の妙見の説話を思い起こすことができる。

また「柳嶋妙見」に隣接して川沿いには「橋本」という料亭があった。錦絵に見ることができるが、2階建ての大きな料亭で、料理屋の番付（文久元<1861>年発行「魚盡見立評判会席献立料理通番付第初輯」）では東の最高位から数えて十番目に位置し「柳島 骨も残さぬ若鮎 橋本」と掲載されている。また『江戸の夕栄』には、「まだ肌寒き頃より通人粋客は、梅見に出掛けるもの多し。船を横川に入れ柳島の橋本にて枯れ野を見晴らしつつ、鯉こくで一酌して戻るなどは、この頃の楽しみなりし」と書かれており（鹿島 2005 97）、当時の賑わいに思いを馳せることができる。『柳島の妙見さま』（2015）には次のような記述もある。

横十軒川東がわは、むかしは蓮田であったので、その蓮の花の開く音を聞くと運が開けると信じられており、また、交通の便のわるかった時代なので、日本橋方面からチョキ舟や屋形船で田園風景をたのしみにでかけてくる人も多かった。五代目菊五郎などもその1人であり、イキな客が舟でくりこみ、妙見さまへおまいりしたのち、となりの料亭「はしもと」で休んだらしい（柳嶋妙見山法性寺 2015 1）。

しかし昭和2（1927）年東京日日新聞に掲載された芥川龍之介の連載記事「本所両国」（芥川 1995）の「柳島」には、次のような一節がある。

僕等は「橋本」の前で円タクを下り、水のどす黒い掘割伝いに亀戸の天神様に行ってみることにした。名高い柳島の「橋本」も今は食堂に変わっている。尤もこの家は焼けずにすんだらしい。現に古風な家の一部やあれ果てた庭なども残っている。けれども磨り硝子へ緑いろに「食堂」と書いた軒燈は少なくとも僕にははかなかつた。僕は勿論「橋本」の料理を云々するほどの通人ではない。のみならず「橋本」へ来たことさえあるかないかわからない位である。が、五代目菊五郎の最初の脳溢血を起したのは確かこの「橋本」の二階だったであらう。／掘割りを隔てた妙見様も今ではもうすっかり裸になっている。それから掘割に沿うた往来も―（芥川 2013 34）。

この界限は、おそらく大正時代には見る影もなく寂れてしまったのであろう。

現在の「柳嶋妙見」（写真 7-1・7-2）は、当時と同じ場所にあるものの、震災、戦火ですべて焼失し、レンガ色のマンションの1・2階部分となり大きく変貌を遂げ、影向松も枯死して今はない。当初は「境内 754 坪」であった（金指 1974 269）が大幅に縮小され、伝えられる昔の面影はほとんど失われてしまったが、数々の錦絵に当時の繁栄を偲ぶことができる。「妙見堂には、信者たちが妙見講を組織して、参詣を盛んにおこなった」（金指 1974 270）という。葛飾北斎が信仰していた寺としても知られており、歌川広重、豊国、中村仲蔵、市河左団次、六代目菊五郎、六世桂文治など多くの画伯や名優などが妙見のご利益を得て吉運を開いたと伝えられている。境内には近松門左衛門百回忌の遺稿供養跡、歌川豊国筆塚、落語柳家などの碑がある。女性の髪の毛の塚（毛塚）が

あったとの言い伝えもあり、針供養が宝前で営まれたとの記録もある。

妙見のお使いは白蛇とされる説があるが、法性寺でもかつて白蛇が飼われていた。本堂には、今も木に巻きついた白蛇の剥製が飾られている。

Ⅲ－２ 能勢妙見山東京別院

「能勢妙見山東京別院」（写真 7-3・7-4）は、第二章Ⅲ－２「大阪府の能勢妙見山」の唯一の別院である。東京都墨田区本所にある能勢氏の江戸の下屋敷（墨田区本所）に、安永 3〔1774〕年能勢妙見山から妙見大菩薩を分祀し建立したもので、境内の略縁起には次のように記されている。

能勢妙見山東京別院

當山は大阪能勢妙見山の全國唯一の別院であり能勢家の子孫が代々守護に任じて居ります／今より 195 年前安永 3〔1774〕年 5 月 11 日の創建です／この地は當時下総ノ國葛飾郡本所横川町と稱し能勢筑前守頼直の江戸下屋敷であり妙見堂を建立して知行所たる摂津ノ國妙見山より妙見尊像を分祀したものです／江戸末期幕臣勝小吉が愛息麟太郎後の海舟の開運勝利を水垢離を取って祈願したことは子母沢寛氏が「父子鷹」に詳しく記して居ります／震災戦災と二度の火災の為め宝物尽く烏有に歸しましたが妙見尊像は巨難を免れ御内陣に奉呈されて在ります／境内に鵜大善神の祠ありその黒札は魔よけの御守として江戸時代より能勢の黒札として有名なり

昭和 44 巳酉年 5 月

能勢家 36 代能勢日妙誌す

「能勢妙見山東京別院」は、江戸時代中期の創建であり勝海舟父子が信仰を得ていたことが知られる。堂宇は、大正の大震災、昭和 20（1945）年の東京大空襲で焼失したが、院主が「本尊を背負って逃げたので火難を免れ、昭和 43（1968）年復興」した（金指 1974 272）。明治維新後について、大島建彦は「能勢氏の分家にあたるものが、この地にくらしてきたが、戦後の昭和四十八〔1973〕年に、その三代目の頼武氏が、この堂を寺院として届けでており、改めて能勢妙見山東京別院と称することとなった。それまでは、太平〔墨田区太平〕の法恩寺の住職が、この堂の管理にあたっていたが、ここにいたって、能勢頼武氏が自ら出家して、この寺の住職をつとめることとなり、今日でも、その子息の頼昭氏が、その役割をうけついでおられる」とその経過を述べている（大島 2012 12）。現在の住職も能勢頼昭氏である。

江戸時代中期には、各地の大名や旗本の江戸屋敷に祀られている神仏を、地域の一般民衆が邸内に入り参詣することを許したが、「能勢妙見山東京別院」でも行われ、多くの民衆の信仰を集めた。

「能勢妙見山」「能勢妙見山東京別院」とも矢筈の紋章が使われているが、これは第 23 代能勢頼次の代から使われたもので、「能勢妙見山」独特のものである。能勢家の者は代々弓が達者であったと伝えられており、矢筈は矢の末端の弓の弦を受ける部分のことで、まっすぐに飛ぶという意味を持つという。その形状から十字架を思い起こし隠れキリシタンとの関係を連想させるが、そのような記録は見つかっていないとのことである。

また妙見への信仰とは異なるが、境内にある鷗大善神の火伏札である「能勢の黒札」は、火事の多かった江戸の町で大いに流行したという。この黒札は狐落しの黒札ともいわれるが、大島は、能勢家の家筋が狐落しの法とかかわってきたが、現在は狐落しというより魔よけの札と考えられていると述べる（大島 2012 9-13）。『斎藤月岑日記』（後述）の安政5（1859）年8月28日の欄にも、この黒札について「今日方能勢侯承札出処、暁方押合門前溝へ落入相果候もの二人程有之、朝方其入口門をメ、参詣を停られし由（能勢侯屋敷内妙見社参詣を停ラレシ由）」と、その盛況ぶりが語られている。境内の鷗大善神は、もとは神田佐久間町（秋葉原の三井記念病院の辺り）にあった能勢家の上屋敷に明和8（1771）年に祀られた鷗稻荷で、狐落しの靈験のある黒札を配布し大変な人気を得ていた。明治35（1902）年「能勢妙見山東京別院」の地に遷され、現在も例大祭の4月15日に黒札を1000枚ほど配布しているが、ホームページの情報などを得て、近隣だけでなく日本全国から多くの参拝者が訪れるという。

IV 江戸時代の文献・資料・芸能等から妙見をみる

IV-1 妙見信仰関係の書の公刊

江戸時代には妙見信仰関係の書籍が出版され、妙見信仰が盛んになっていく一端を担った。ここでは、『妙見信仰の史的考察』（中西 2008）、『星占い星祭り』（金指 1974）を基に、江戸時代に出版された妙見信仰関係の書籍について述べていく。

1 道教的色彩の濃い書物の編纂

当時は、道教的妙見信仰が広く流布していたと思われる。

『北辰妙見菩薩陀羅尼直解』：宝暦元（1751）年再刻（初版は1680年）。相馬尊胤（1697～1772、相馬氏第23代当主、陸奥相馬中村藩第7代藩主）の意向で真言宗嚴迫山歆喜寺の住職が再版。相馬氏の氏神である妙見菩薩を賛美し、藩主相馬氏を王者に見立てる内容。領民を妙見菩薩に服従させた相馬氏の藩政が神呪の説くところのようであると述べているが、内容に特異な点はなく、妙見信仰を指導する指導者用ないし教師用であったと考えられる。

『鎮宅靈符縁起集説』：宝永4（1707）年発行。京都出雲路十念寺住職澤了が儒仏神の行者が執り行った行法を集めたと記されているが、内容は江戸中期における比較的有名な妙見菩薩の縁起が記述されており道教的な色彩が濃い。

『北辰妙見菩薩靈応編』：安永年間（1772～1781）に大江匡弼が著した。妙見菩薩とは、神道では天御中主尊、国常立尊といい、道教では神仙の祖・真武太一上帝靈応天尊といい、仏教では妙見菩薩、儒教では太一上帝、易では太極元神として尊崇するといって、『北辰妙見菩薩呪』を五つの面から物語風に注釈した。道教色が最も濃厚である。

『北辰妙見大菩薩実鏡録』：天保5（1834）年刊。日微（若い頃、飯高檀林で修業）独自の妙見観を述べている。儒教における北辰尊崇、日蓮宗における祖師以来の妙見信敬を説いた。天地の中心は人の心の中にあるとし、妙見菩薩の本地は無始本覚如来だとする。

『北辰妙見経和訓図会』：かな交じりの平易な『北辰妙見菩薩呪』の注釈書。『神呪陀

羅尼經』を和訓し画図を加えた。3冊本。妙見信仰の篤信者である近松門左衛門の曾孫春屋織月(春翠軒門三郎)が日蓮宗の信徒の立場で編述したもの。嘉永2(1849)年刊。相当の反響がありこの教えを普及させる役割を演じたが俗説の混入を避けることはできなかった。

2 仮名文の小説の創作

この時代には、妙見をテーマとした仮名文の小説が創作された。これらは作家達の妙見観を説くと同時に、前述した宗教書などとは違った形で、大衆に影響を及ぼしたと考えられる。

『下総国妙見寺月星千葉功』：鈴木吉路作。安永6(1777)年刊行。頼朝からの預かり物を盗んだ千田判官を千葉胤政が妙見菩薩の助力で討取り取返したという物語。

『防州氷上妙見宮利益の助剣』：十辺舎一九(近松金七と名乗ったほど近松門左衛門を尊敬していた)作。文化2(1805)年刊行。周防国氷上山妙見と摂津能勢妙見の助力で若者が父の仇討を遂げたという歴史小説。

『多々良大内家一代記』：十辺舎一九作。刊年不明。妙見大名大内氏の興亡の跡をたどった物歴史小説。

平瀬直樹は、『防州氷上妙見宮利益の助剣』について、「大内氏自体に対する一九の好奇心が創作の原動力となったと言っても過言ではないだろう」と述べている(平瀬 2014 4)。大内氏は天文20(1551)年に滅んだが、防州の地に妙見を背景にした独自の静謐で華やかな空間を創りあげた。その興亡を描いた二つの作品は、日本人の心に訴える物語であったことがうかがわれる。

『春色梅児簪美』：為永春水作。天保3(1832)年刊行。江戸時代の人情本の代表作といわれる。美男子の丹次郎と女たちとの三角関係を描いたもので、「巻頭に、芸者米八が恋人の丹次郎を、その隠家に探し当て、『十二今朝は妙見さまへ参りに来たつもりで宅は出ましたヨ。〔中略〕今日の朝参りには、なんでも訪ねようと思って、十五日〔妙見の縁日〕を楽しみにして、出てきたんでありますな。日頃の念力とはいうものの、ふとしたことから、おまはんの在家が知れるというのは、妙見様のおかげだ』と云わせている(金指 1973 270)。

3 その他の図書

江戸時代後期は、江戸が文化の中心地となり江戸の名所を案内する本が出版された。「神社や寺院が景勝の地にあったため、江戸庶民にとっては、神社や寺院に出かけることが気晴らしとなり、やがて物見遊山の性格を帯びていく(池上 2002 36-37)。

そのような状況の中、江戸の案内書『江戸名所記』(1662)、『江戸雀』(1677)、『江戸砂子』(1732)、『続江戸砂子』(1735)等が出版された。18世紀後半になると『都名所図会』(1780)、『都名所図会拾遺』(1787)、『大和名所図会』(1796)、『摂津名所図会』⁽¹⁾(1796)、『江戸名所図会』(1834、1837)等の図版を中心としたも

のが出版され多くの庶民の人気を博した。

『江戸名所図会』は、江戸時代後期の天保年間に斎藤月岑が7巻20冊で刊行した。神田の町名主であった斎藤長秋（幸雄）・莞斎（幸孝）・月岑（幸成）の3代にわたる実地調査に基づき書き継がれたものである。鳥瞰図が用いられ、挿図は長谷川雪旦が当時の景観を克明に描いている。凡例に「凡そこの編の次序は、大城を以つて首とし、余は南方に回環するまで、北斗七星の位に配当して、すべて七巻を以つて全部とす」と記されているように、江戸城を北辰とし八百八町とその近郊を北斗七星に配当して巻を七つに分け北斗七星の名称を配して編集している。具体的には北斗七星の中国名である天樞、天璇、天璣、天權、玉衡、開陽、搖光の名を本書巻1から7の各巻に付け、これをさらに3冊ずつに分冊してある。この編纂方法について中西は、『都名所図会』が皇居を中心に、京都の町を星宿四神に配して編まれたこと、または浅井了意が唱えた、武蔵の国に「妙見菩薩の御嵩一秩父大宮の妙見の周囲の七つの峰の意一」があったという伝説に習ったものと思われると述べている（中西 2008 229）。この「七つの峰の意」は、第八章Ⅲ-2「村地域の氏神としての妙見」で述べる「秩父七妙見」を指していると思われる。『江戸名所図会』には「柳嶋妙見」も描かれており、当時の大衆であふれた「柳嶋妙見」界限の様子を偲ぶことができる。斎藤月岑は、その後、江戸を知る上で欠かせない資料である『武江年表』（1850）を刊行した。

IV-2 日常の中にみられる妙見

『江戸学事典』に「江戸という都市社会は構成員の職種ごとに行なわれる行事それぞれに特徴がある。このほかに、武士たちの民俗が重なり合っているものであり、そこに江戸独自の民俗文化が生まれていたのである」と述べられている（西山松之助ほか 1984 361）ように、日々の生活の中に定着し今も大切に伝えられている事象が数多く存在する。これらの事象の根底には、都市社会に累積した厄災を払おうとする江戸庶民の心意気が指摘できる。ここでは、江戸の庶民の生活の中に垣間見られる妙見について、『斎藤月岑日記』から探っていく。

『斎藤月岑日記』は、『江戸名所図会』を著した斎藤月岑（1804～1878）の日記36冊である。天保元（文政13、1830）年正月元旦から明治8（1875）年12月31日までの46年間、月岑24歳から71歳までの記録である。斎藤月岑は、名を幸成、通称市左衛門と称した。斎藤家は、前述したように徳川家康の江戸入府（天正18<1590>年）以前からの神田の町名主であり、幕府からも一目置かれていた家柄である。月岑はまた考証家でもあった。文化15（1818）年父が47歳で急死し、15歳で家を継ぎ、町名主を続けながら精力的に著作を続けた。晩年は2度にわたる妻の死や、養子との確執とその急死などで家庭的には恵まれなかったという。

『斎藤月岑日記』は、当時よく行なわれた行事や日常の習慣、興味の対象など、江戸の町についての基本資料を著述しており、江戸時代後期の庶民の日常生活を偲ぶことができる。この日記の中の「妙見」「柳島」「星」に関する記述を抜粋したところ次のとおりであった。

【『斎藤月岑日記』から：「妙見」「柳島」「星」の記述のある箇所】

天保6（1836）年3月8日：柳島妙見宮（法性寺）開ちやうへも参る、
 弘化4（1848）年7月4日：朝曇、後晴、此節申西方 白晝星見へ候由、
 嘉永2（1849）年2月28日：柳島・亀戸へ参る、夕方かへる、橋元や二而支度する、
 嘉永3（1850）年11月19日：冬至、星祭両国やけん堀こんひら様別當へ頼む、
 安政3（1857）年11月24日：冬至、眞土山（待乳山聖天宮）浴油供、市左衛門、おまち・おきさ（月峯娘）・お常・小あミ丁おゑつ連れ参る、柳島妙見宮へ廻り、日暮
 帰る、
 安政5（1859）年8月24日：天氣よし、後くもる、小あミ丁姉被参、夕方暮方彗星見る、
 乾の方也、始て今夜見る、是迄度々出候由、
 安政5（1859）年8月28日：曇り、冷氣なり、今日方能勢侯承札出處、暁方押合門前溝
 へ落入相果候もの二人程有之、朝方其入口門をゞ、参詣を停られし由（能勢侯屋敷
 内妙見社参詣を停ラレシ由）、
 安政5（1859）年8月29日：宵彗星見ゆる、少し先ちいさし、
 安政5（1859）年8月晦日：夕方雨ふる、又やむ、夜晴、彗星見る、ひくし、彗星大き
 く豎ニミゆる、
 文久2（1862）年11月2日：冬至に付眞土山（待乳山聖天宮）へ参る、柳島妙見宮へ参
 る、暮前かへる、
 文久3（1863）年7月19日：異星屑の中天漢（天の川）の脇二あらはれ候由、
 元治元（1864）年9月5日：銀丁清正公二而五日の間妙見宮内拝、
 慶應元（1865）年9月17日：おまち・松之介・九十九殿・今村老母、柳しまへ参る、お
 つやとまる、
 慶應2（1866）年5月17日：今村老母・おまち・松之助、柳しま妙見宮へ参る、日暮
 方小雨、おつやも来、柳島へ行、
 慶應2（1866）年9月17日：おそめ殿被参とまり、今村老母とまり、柳しま妙見宮祭
 二付行、今村老母、大橋おそめ殿、供定吉・下女、此方・松之介・直蔵（月峯奉公
 人）、合七人行、酒飯出る、

（東京大学史料編纂所 1997）

ここに抜粋した「柳島妙見宮」「柳しま」「柳嶋」は、東京都墨田区業平の「柳嶋妙見」を指している。「柳嶋妙見」は、前述したように江戸時代の妙見の代表的拠点の一つであり、四季折々の自然に恵まれた江戸庶民の憩いの場であった。また、いち早く文化の集合する場であったという。妙見の縁日は1・15日であるが、縁日にこだわらず「柳嶋妙見」にはたびたび出かけていることが分かる。安政5（1859）年8月28日に「能勢侯屋敷内妙見社〔前述の「能勢妙見山東京別院」の前進〕」のことが記されており、また元治元（1864）年9月5日には「銀丁清正公二而五日の間妙見宮内拝」とあり、5日間清正公の妙見宮が開扉されたことが分かる。清正公は、「柳嶋妙見」からそれほど遠くない日本橋浜町の細川藩下屋敷に、熊本の本妙寺に祀られた加藤清正公の分霊を勧請して祀ったものであり、現在は清正公寺という日蓮宗の寺院となっている。加藤清正は「母親が妙見菩薩に願をかけて生まれたという伝承」（福西大輔 2012 11）も伝わっており、妙見との関わりが認め

られる。また、日蓮宗寺院と妙見との関係について、福西（2007）は「1810年の200回忌に清正公信仰は盛んになり、日蓮宗の各地の寺院で祀られるようになる。その結果、妙見菩薩と並んで一緒に清正が日蓮宗寺院で祀られる状態が生まれていく」と述べる（福西2007）。

『斎藤月峯日記』の中には清正公への参詣について次のように多くの記述がある。「銀丁」は、現在、清正公寺のある日本橋浜町の近くに旧町名で本^{ほんしろがねちょう}銀町という所があり、そこを指しているものと思われる。

【『斎藤月峯日記』から：「清正公」の記述のある箇所】

文久2（1862）年11月24日：今村大老母・喜之助・大川はた清正公（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）へ参る、

文久2（1862）年12月24日：今村大老母・喜之助・松之介（月峯息子）、大川はた清正公社（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）へ参詣する、

元治元（1864）年8月27日：銀町南の突當りにありし清正公、東北よこ北側へ今日引越し也、

慶應元（1865）年9月24日：今村老母・松之介、大川端清正公（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）へ参詣、喜之助も跡方参る、

慶應元（1865）年11月24日：二の酉也、晝方今村老母・市左衛門・おまち・松之助、大川端清正公（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）へ参る、

慶應2（1866）年5月4日：清正公（銀町）奉燈繪かく、

慶應2（1866）年6月24日：晝頃より雨降る、今村氏老母被参、市左衛門（月峯）・おまち・梅漬同道、大川端細川侯御やしき（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）清正公へ参る、

慶應2（1866）年7月24日：今村老母・峯之介大川はた清正公（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）へ参る、

慶應2（1866）年8月24日：今村氏老母・おまち・峯之助大川端清正公（濱町河岸肥後熊本藩中屋敷内）へ参る、

慶應2（1866）年9月13日：おまち十日頃方寸白おこり、昨日方痛寝る、御佛新銀町清正公の坊様招き、おまち御加持たのむ（今村氏老母同道参候）

（東京大学史料編纂所 1997）

このように江戸時代後期には、「柳嶋妙見」の他にも「能勢妙見山東京別院」や「清正公」など妙見への参詣が頻繁に行われていたことが分かる。

また、前述したように江戸時代後期は、武士が屋敷の邸内社を公開し、多くの参詣者を集めるのが一つの風潮となっていた。一方、大衆は現生利益的な祈願のために「複数の神仏を巡拝するハシゴ祈願のおこなわれていたことがうかがえる」（長沢利明 1996 5）。親戚や親しい人とともに柳嶋を訪れ、神仏へハシゴ参りをし、行楽も楽しみながら1日ゆっくりと過ごすことが、庶民の娯楽であり気晴らしであった様相を読み取ることができる。当時の「柳嶋妙見」は、江戸庶民の妙見の中心地であったと同時に、何でも願いを聞き届けてもらえる親しみのある対象として、篤く広い信仰を集めていたことがうかがえる。

IV-3 芸能・芸術などにみられる妙見

17世紀末から18世紀初めの幕藩体制の安定期には上方中心の文化が栄えたが、18世紀後半は独自の江戸における町人中心の文化が形成された。その内容は、権力者に対する皮肉や洒落、滑稽等が喜ばれる批判的なもので、享乐的・退廃的であった。

当時の妙見について、坂本は、妙見は天明・寛政〔1781～1801〕以降には芸能界、花柳界の守護神としても人気を集め、霊応を振るまい、病氣平癒、息災延命をも約束し、厄除開運をもたらす八百万の流行仏であったと述べる(坂本 1977 68)。またこの時期、「妙見といえば花柳界の婦女を連想させ、さらに、妙見およびそれと同義語の北辰北斗などの言葉が華街の婦女の代名詞としていくようになった」(中西 2008 242)という。ここでは、その一部であるが江戸時代の芸能・芸術などに見られる妙見について述べていく。

1 歌舞伎・人形浄瑠璃

○「仮名手本忠臣蔵五段目」歌舞伎・人形浄瑠璃

二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作。歌舞伎役者・中村^{なかぞう}仲蔵は立作者とのけんかから、名題役者がやるような役ではない五段目の斧定九郎一役だけといういやがらせをされた。そこで、仲蔵は「柳嶋妙見」へ日参したが、満願の帰り道、雨に降られ蕎麦屋に入ったところ、粋な浪人者が入ってきた。仲蔵はその姿を定九郎の扮装に取り入れ、山賊然とした扮装とは異なる二枚目風の役に仕上げた。以後ほかの役者も定九郎をこの姿で演じるようになり、若手人気役者の役となった。妙見さまのご利益のおかげで定九郎の型を編み出し、仲蔵自身も大きく出世する節目となった。

○「絵本太功記 夕顔棚の段」歌舞伎・人形浄瑠璃

近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作。文中に妙見講が登場する。妙見講は妙見菩薩を信仰する日蓮宗の信者の集まりであり、この「夕顔棚の段」の幕開きは楽屋でお題目を唱えながら始まる。

○「関取千両幟」歌舞伎・人形浄瑠璃

近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛合作。当時大坂で人気のあった力士、稲川、千田川をモデルにした相撲物。ひいきの若旦那礼三郎が遊女・錦木を身請けするための不足金二百両を用立てしなければならなくなった力士岩川は、恋敵側のひいき力士鉄ヶ嶽との勝負に負けて若旦那の思いを果たさせようとする。土俵上の勝負の最中に「二百両進上ひいきより」の声がかかり、岩川は気を取り直して鉄ヶ嶽を倒す。この場面で稲川の妻・音羽が夫の安否を気遣い「夫に怪我のないようにと、祈る神様仏様、妙見さまへ精進も、戻らしゃんして顔見るまで」との科白がある。

○「隅田^{すだ}春妓女^{はるげいしや}容^{かたぎ}」歌舞伎

初世並木五瓶作。通称「梅の由兵衛」、浄瑠璃では「茜染野中の^{こもりいど}隠井」という。元禄2(1689)年に処刑されたという大坂の梅浜吉兵衛という殺人犯をモデルに、義侠(ぎきょう)の男として脚色されており、恩人の娘を助けようとした男伊達が描かれている。下座音楽として「どうぞ叶えて」という次の江戸端唄が使われる。

どうぞ叶えて下さんせ／妙見さんへ願掛けて／帰る道にもその人に／逢いたい
／見たい／恋しやと／こっちばかりで／先や知らぬ／ええ／辛気らしいじゃな

いかいな

「妙見さん」は墨田区柳島の「柳嶋妙見」のお堂をさす。この楽しい江戸端唄は、若い娘が恋い慕う人にどうぞ会わせてと願をかける唄であり、歌舞伎・狂言世話物の下座音楽として、現在もよく使われている。

○「於染久松色讀販」歌舞伎・人形浄瑠璃

四世鶴屋南北作。序幕・第一場「柳島妙見の場」は、参詣人で賑わう「柳嶋妙見」を背景に芝居が進行する。

○「東都名物錦絵始」歌舞伎・人形浄瑠璃

奈河篤助作。序幕の舞台が参詣人が行き交う「柳嶋妙見」となっている。

2 小唄

○江戸芸者年々つづきこまり唄

「文政 10 (1827) 年に花柳の婦女が風紀の上の事件に連座して入牢の上町方預けにされたことがあったが、こうした婦女を揶揄した落書きの一つに手毬歌を捻った『江戸芸者年々つづきこまり唄』があり、その七番めは『七ツとやあ／何卒御慈悲の／済むように／々々／妙見様へ／願を掛け／々々』というものであった（中西 2008 242）。

この小唄は、江戸後期にくちずさまれた小唄「どうぞ叶えて下さんせ／妙見さんへ願掛けて／帰る道にもその人に／逢いたい／見たい／恋しやと／こっちはかりで／先や知らぬ／ええ／辛気らしいじゃないかいな」（『江戸小唄集』）に発展し、歌舞伎の下座音楽などでたびたび耳にするようになっていく。中西が「妙見が良縁与恵の仏神としても崇敬されていたことが想像できる」と述べている（中西 2008 242）ように、願をかければきっと叶えてくれるという情のある親しみやすい仏神として、花柳界の女性たちにも信仰されていたことが分かる。

○しりとり唄

文久 2 (1862) 年頃から明治初期に掛けて流行り、お手玉唄・子守唄としても歌われた。次のような内容で非常な人気を呼び、おもちゃ絵やすごろくなどにも用いられた。

サアーツと 来い来い。／江渡名物のは尻とりは一に牡丹じゃア！

「牡丹に唐獅子竹に虎／虎を踏んまえ和藤内／内藤様は下がり藤／富士見西行うしろ向き…中略…ロンドン異国の大港／登山するのはお富士山／三べんまわって煙草にしょ／正直正大夫伊勢のこと／琴に三味線笛太鼓／太閤様は関白じゃ／白蛇の出るのは柳島／縞の財布に五十両／五郎十郎曾我兄弟／鏡台針箱蓑盆／坊やはいいい子だねんねしな／品川女郎衆は十匁／十匁の鉄砲二つ玉／玉屋は花火の大元祖／宗匠の出るのは芭蕉庵／あんかけ豆腐に夜たかそば／相場のお金がドンチャンチャン／ちゃんやおっかあ四文おくれ／お暮れが過ぎたらお正月／お正月の宝船／宝船には七福神〔後略〕」（尾原 1979 284-285）

ここでは、江戸時代の大衆の間で、身近で親しみ深く、誇りに思える事象ばかりが唄われている。「柳嶋妙見の白蛇」が登場するが、「柳嶋妙見」が江戸の庶民にとって誇れる場所の一つであったのであろう。

この他に、川柳では『柳多留』⁽²⁾に「北斗の星が嫁入りにさわる也」「北辰に向かふ衆星土手を飛び」などと花柳界の女性の様子を、妙見を表す北辰、北斗に例えて伝えている。落語では、「中村仲蔵」「無精の代参さん」に妙見が登場する。「中村仲蔵」は前述の歌舞伎・浄瑠璃の演目「仮名手本忠臣蔵五段目」に登場する中村仲蔵が斧定九郎の役を工夫し評判となった噺であり「柳嶋妙見」が舞台となる。「無精の代参さん」は能勢妙見山に無精者が代参する道中を描いている。

IV-4 浮世絵にみられる妙見

池上は、江戸時代の浮世絵について次のように述べている。

黒摺り手彩色から色刷り二、三色の時代を経て、多色刷りで安価な錦絵が生まれ、江戸時代後期には、葛飾北斎〔1760～1849〕や歌川広重〔1797～1858、安藤広重ともいわれる〕が風景画の新境地を開いた。天保2（1831）年頃より、北斎は『富嶽三十六景』『諸国滝廻り』等を、広重は『東都名所』のシリーズを出し『東海道五拾三次』で浮世絵の地位を確立した。他にも『京都名所』『近江八景』『江戸近郊八景』等を出版し、『江戸名所百景』〔120枚の版面で構成〕で名所ブームの一役を担った（池上 2002 33）。

1 葛飾北斎と妙見

葛飾北斎は、「柳嶋妙見」に近い本所（墨田区）に生まれ、同寺の妙見菩薩を篤く信仰した。現在「柳嶋妙見」の門前には、入口に大きく法性寺と書いた看板が立てられており、その下に「葛飾北斎篤信の寺」とある。「柳嶋妙見」との縁を表す次の譚はよく知られている。

北斎は熱心な日蓮宗の信者で、とりわけ柳島の妙見様を深く信仰していました。妙見とは妙見大菩薩のことで、北斗七星の化身とされています。別称は「北辰」とか「七政」ともいわれたことから、自身の名も「北斎辰政」としたといわれています。／またある時、柳島の妙見様へ詣でた〔寛政6（1794）年、師匠に破門され生活に窮した北斎は、「柳嶋妙見」へ21日間お参りしたが、その満願の日〕帰り道で、北斎の近くに雷が落ちたことがありました。驚いた北斎は、田圃の中に転げ落ちてしまったそうです〔北斎30代の半ばと考えられる〕。しかし、間もなく不思議なことが起こりました。北斎の描く絵が売れ出したのです。これも妙見様のご靈験と信じた北斎は、名を「雷震」と名乗ったとも伝えられています（「北斎かわらばん」 墨田区文化振興課 2013.3）。

北斎が生涯で使用した画号は30にも上るといわれるが、『葛飾北斎 生涯と作品』（2005）には、次のような画号や落款が登場する。勝川春朗、^{くさわ}叢、群馬亭、俵屋宗理、宗理、北斎辰政、師造化、不染居北斎、可候、画狂人北斎、葛飾北斎、葛飾載斗、九々蜃、^{きゅうだそく}亀毛蛇足、載斗、卅、万字、為一、不染居為一、前北斎為一、三浦屋八右衛門である。

『葛飾北斎伝』には「同十一年宗理画風を一変し、其の名を門人宗二に譲り、北斎辰政と号す。妙見を信仰するをもて名づく。妙見は、北斗七星、即北辰星なり。其の祠、今本所柳島にあり。又嘗て柳島妙見に賽せし途中、大雷のおつるに遇ひて、堤下の田圃に陥りたり。其の頃より名を著はしたりとて、雷斗と名づけ、又雷震とふ」と述べ（飯島虚心、鈴木重三 1999 54）、いずれも天文すなわち妙見と関わりのある名といえる。

これらの画号について、すみだ北斎美術館ホームページから次のようなことが分かる。

【葛飾北斎の画号の変遷：すみだ北斎美術館ホームページから】

宝暦 10 (1760) 年～安永 6 (1777) 年 (1 歳～18 歳)：幼名は時太郎、のちに鉄蔵と
いった。

安永 7 (1778) 年～寛政 6 (1794) 年 (19 歳～35 歳)：勝川春草に入門し、勝川春
朗の雅号で浮世絵の世界に登場。

寛政 6 (1794) 年～文化元 (1804) 年 (35 歳～45 歳)：勝川派を去り新しく宗理の
雅号を用いる。宗理は俵屋宗達らによって開かれた琳派の頭領が使用した雅号で
ある。北斎は独自の宗理様式を完成させた。寛政 10 (1798) 年には北斎辰政を名
乗り琳派から独立し、どの流派にも属さないことを宣言する。この 10 年余りを
宗理様式の時代と呼ぶ。

文化元 (1804) 年～文化 8 (1811) 年 (45 歳～52 歳)：読本挿絵を精力的に描く。

洋風風景版画、肉筆画も多く残した。葛飾北斎、戴斗の雅号を用いた。

文化 9 (1812) 年～文政 12 (1829) 年 (53 歳～70 歳)：門人が増え絵手本の制作に
力を入れた。『北斎漫画』の制作も始められた。文化 10 (1813) 年亀毛蛇足の印
を門人北明に譲る。文政 3 (1820) 年から為一の雅号を使い始める。

天保元 (1830) 年～天保 4 (1833) 年 (71 歳～74 歳)：「富嶽三十六景」などの風
景や花鳥画など、有名な錦絵が生み出された。浮世絵に風景画を確立したのは北
斎の偉大な業績の一つである。

天保 5 (1834) 年～嘉永 2 (1849) 年 (75 歳～90 歳)：卍の雅号を用い始めた。肉
筆画に傾倒し、題材も風俗画から和漢の故事に則した作品や宗教画へと大きく変
化した。嘉永 2 (1849) 年 90 歳で生涯を終えた。

北斎は、天地万物すべてを対象に、生涯で約 3 万点を超える作品を生み出したといわ
れる。それらの中から、妙見を表現していると思われる次のような作品を見つけるこ
тоができた。

【妙見に係る葛飾北斎の作品】

風流東都方角 柳寫法性寺妙見堂の図 (版下絵)：天明末年 (1785-87) 頃刊行。晴
朗画。永田生慈は「江戸と近郊を題材とした春朗時代の名所絵の揃物として貴
重である。〔中略〕版下絵ではあるが二十歳代に直接筆を下した唯一の作品と
して、現在のところ北斎直筆の最上限に位置する作例といえる」と述べる (日
経新聞社 2005 308)。

亀図：寛政 10 (1798) 年刊行。北斎辰政画。「宗理号を俵屋に返上し、北斎辰政とな
ったことを報せるため知己に配布した摺物。図中に見える賛は『宗理ぬしの改名

に北辰の光いよいよましなん事を 蒼む花こや衆生のもてはやし 友人華溪題』とある（永田 2005 18）。

妙見宮（摺物）：享和～文化初期（1801-05）刊行。画狂老人北斎画。「柳嶋妙見」の影向松の根元に、白蛇の絵馬が奉納されている。

鯉魚図：文化 10（1813）年刊行。北斎筆。印は亀毛蛇足。紙本着色。「画面左端には、文化 10 年 4 月 25 日に作画し、『亀毛蛇足』印とともに門人に譲渡した作品であるとの北斎の添書が見える。その門人とは女流絵師の葛飾北明といわれている」（永田 2005 40）。「『亀毛蛇足』の亀と蛇は北方を守る玄武から暗示を受けたのではないとも言われている」（埼玉県立歴史と民俗の博物館 <http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>, 2017.10.5）。

文昌星図：天保 14（1843）年刊行。八十四老叢筆 印（印文不明）。絹本着色一幅。永田は「文昌星は、北斗七星第一の星のことである。その呼び名から文学を司る神とされ、学士を志す者が尊崇した。擬人化される場合は、通常、右手に筆を持ち、左手には北斗第一星の別名を斗魁（斗）と呼ぶことに由来して升を持って描かれる。本図も、由来どおりの図様を示した作品である。画面は、赤い体躯の文昌星を前面に描き、天空上部に六星を配している。その文昌星の面貌は理知的で、体躯は筋骨たくましく、着物や背景の表現は広大な宇宙に飛遊しているかのようなスケールの大きさをみせている。北斎自身が北斗信者であっただけに、力強く神秘的な画面となっているが、晩年期の武者図にも共通する独特な迫力をも見逃すこともできない」と述べる（日本経済新聞社 2005 366）。

2 歌川広重ほか

山口桂三郎は広重について、次のように述べている。

火消し同心という武士の出身でありながら、江戸をこよなく愛し、江戸庶民の生活に溶け込み、初期の頃から数えきれない程繰り返し江戸の町を描いてきた。ヨーロッパやアメリカでは藍色の美しさで評価が高く、遠近法は、印象派画家ゴッホに影響を与えたことで知られている（山口 2008 84）。安政 3（1856）年～同 5（1858）年に制作した浮世絵の名所絵『江戸名所百景』についても、「江戸に生まれ、江戸をこよなく愛した広重が、その血生臭い世間の風をどこ吹くものかという庶民の視点で、騒がしい時代とは相反するような和やかで静かな江戸の風景を描いているのも興味深い」と述べている（山口 2008 83）。

広重が妙見を信仰していたとの記録は見つけることができない。広重は、妙見にはとらわれずに江戸の代表的な風物を表す題材の一つとして「柳嶋妙見」を選び、その構図の中に、様々な行事や行きかう人々の様子を生き生きと描いている。2 代目歌川広重、一寿斎芳員、溪斎栄泉もまた「柳嶋妙見」を題材とした作品を残している。「柳嶋妙見」界限は、江戸時代後期の粋で垢抜けた都市の風景を表すのに格好の土地柄であったのであろう。いずれも当時の柳嶋界限の風物を知ることのできる貴重な資料となっている。

【「柳嶋妙見」に係る作品】

柳嶋しま：歌川広重。『名所江戸百景』の 32 番目に所収。安政 4（1857）年刊行。

『浮世絵「江戸名所百景」復刻物語』に「画面左、朱塗りの堀の内側には江戸庶民に『柳島の妙見さま』の名で親しまれた妙見堂、柳島橋の袂には会席料理で有名だった料亭橋本が描かれる」とある（小林忠監修 2008 63）。

柳嶋之図 橋本：歌川広重。『江戸高名会帝尽』所収。画の右上に、狂句会は「橋本まで御紋 橋本に七つ梅」とある。御紋とは妙見の七星、七つ梅とは橋本の酒のことである。

柳島妙見：2代目歌川広重（1826-1869）。『江戸名勝図会』所収。江戸時代末期刊行。

柳しま妙けん：2代目歌川広重（1826-1869）。『東都三十六景』所収。文久2（1862）年刊行。

柳島妙見堂：一寿斎芳員（生没年不詳。江戸時代末期から明治時代初期にかけての浮世絵師。歌川国芳門人）。『東都名所』所収。

江戸の松名木尽 押上 妙見の松：溪斎栄泉（1790-1848）。江戸時代後期刊行。栄泉は江戸時代後期に活躍した浮世絵師。退廃的で妖艶な美人画と名所絵で知られる。この作品は、雪華模様の着物をまとった美人画である。江戸時代は庶民の間で雪華模様が流行したという。

今様縁日詣 妙見：溪斎栄泉。文化・天保期（1815-1842）刊行。浴衣姿の女性が妙見へ詣でる様子が描かれている。

IV-5 北辰一刀流と妙見

千葉氏は、北条氏の滅亡とともに退転し歴史の表舞台から姿を消したが、武道の「北辰一刀流」は、妙見を尊崇した千葉氏の流れを汲んだ流派として知られている。北辰一刀流について『日本武術・武道大事典』によると、その概略は次のとおりである。

北辰一刀流は、江戸時代後期、千葉周作によって創始された一刀流の派生である。千葉周作は、相馬藩の剣術師範であった祖父・千葉吉之丞より北辰夢想流、浅利義信より小野派（中西派）一刀流を習い、それを組み込んだ北辰一刀流を創始した。日本橋品川町に道場「玄武館」を建設、3年後には神田お玉ヶ池に道場を移設し、江戸で著名な道場となった。弟の定吉は京橋桶町に別の道場を構え「桶町千葉」と呼ばれたが、ここには坂本龍馬が入門していたという。北辰一刀流は、開祖・千葉周作以来、政治色は持たない中庸なものであり、門人も多かった。現代でも、水戸藩講道館の系統、水戸東武館、北辰一刀流兵法千葉道場、千葉家正伝北辰一刀流、小樽玄武館の系統が、それぞれ道統を継承している（池嶋 2015：61-63）。

千葉周作の先祖は、千葉家中興の祖、北辰流千葉常胤であるといわれ、周作は宮城県気仙沼出身であると伝えられる。

北辰一刀流兵法の公式サイトには、北辰一刀流兵法の巻物に北斗七星に直接関係のある技や教えが数多く記されており、「月星紋」「北斗七星」「七つ星紋」は、妙見菩薩並びに北辰一刀流兵法のシンボルになったとあり（北辰一刀流兵法 <http://hokushinittoryu.jp/>, 2017. 10. 29）、北辰一刀流の「北辰」、道場名の「玄武」も妙見に由来すると捉えることができる。また「千葉周作の開いた道場の玄武館には、妙見大菩薩が安置されてあった」（松本 2014 109）と伝えられる。

北辰一刀流の公式サイトには、また、北辰一刀流における最高位の技は「星王剣」で、これも北極星を意味する。千葉家に古くから伝わる「我らは北辰の人！」という言葉は今なお北辰一刀流兵法の門人の信条であり、妙見菩薩の加護と流派に対する忠誠の表れと言えると述べられている（北辰一刀流兵法 <http://hokushinittoryu.jp/>, 2017. 10. 29）。

明治 13（1880）年に一刀正伝無刀流を創始した山岡鉄舟も、20 歳前後のころ千葉道場で北辰一刀流の修業を積んだといわれる。鉄舟は、剣や禅とともに書でもよく知られているが、本論文第五章「氏神として伝わる妙見―東京都稲城市百村の『妙見尊』行事から―」で述べた妙見尊の民俗行事の際に掲げられる幟旗は、山岡鉄舟の直筆だと伝えられており、百村の妙見寺で大切に保管されている。松本清蔵は「〔東京都稲城市の〕鶴川街道の浜坂の三叉路の交差点から、平尾方面へ坂を上がって、100 メートルくらい行った右側に山口理容店があります。その近辺には、大正時代ころまで、剣道指南の中山道場があり、そこに山岡鉄舟がよく見えていたと聞いております」と述べている（松本 2014 110）。また妙見菩薩を祀る本所の「能勢妙見山東京別院」は、勝海舟父子が篤信したことでよく知られているが、そのすぐ近くの墨田区亀沢は鉄舟生誕の地であり、10 歳ごろまで過ごしたことが記録に残されている。鉄舟は、勝海舟、高橋泥舟とともに「幕末三舟」といわれる剣の達人であり、勝海舟との交流など身近に妙見信仰のある環境で活躍していたであろうことが推測できる。

北辰一刀流は、千葉氏の篤信した武神として伝わる妙見信仰の精神を今も伝えているのではないか。かつて千葉氏が妙見尊を篤信したのは、妙見信仰が御利益、靈験あらたかなことも然る事ながら、一族の求心力を保つことが目的であったと考えられる。一族の繁栄、地域の結び付きと発展、それは日々の生活の安定、一家の繁栄に結び付く。それらの願いを妙見尊に託し、その結果一族の求心力を得て、千葉氏は千葉の地に着実に根を張り大きく繁栄してきた。根底に地域の平和と繁栄への願いが込められている妙見信仰は、今も北辰一刀流の精神世界の中に反映されているのではないだろうか。

V 現在の「柳嶋妙見」界隈における妙見

V-1 「柳嶋妙見」界隈における妙見への意識

現在「柳嶋妙見」界隈で妙見を祀っている寺社には、「柳嶋妙見」の他に「能勢妙見山東京別院」があるが、この二つの寺院は、今は資料に述べられているような昔の盛況とは異なる落ち着いた雰囲気を漂わせている。現在この地域で妙見を信仰している人は、江戸時代と比べると減少していると言えるが、その信仰の内容は、どんな願いでも聞き入れてくれる八百万の神としての信仰であり、江戸時代の大衆と同じであるといえる。そして芸術・芸能の分野に表れる妙見に誇りを感じていることが認識できる。

1 柳嶋妙見山法性寺

柳嶋妙見山法性寺住職から次のようなお話を伺うことができた。

現在「柳嶋妙見」で行われている妙見に係る催しには、毎月 1 日に妙見堂（写真 7-5）で行われる「妙見さま大祭」があり、誰でも気軽に参詣することができる。心を清らかにし、心の大きな支えとなるようにと願い、5 名の僧による祈祷が行われ（写真 7-6）、妙見菩薩の御姿と「開運北辰妙見大菩薩」という文字の書かれた肌守りが授与さ

れる。縦 5.5 センチ、横 2 センチの大きさで、七曜の紋が描かれた包装紙に包まれている。1 月は初妙見として 3 日間行われるが、このときには 30 センチほどの開帳の木札を授与している。

江戸時代に浮世絵師として活躍した葛飾北斎は、前述したように、妙見を篤く信仰し「柳嶋妙見」に度々参拝していたという。前述したが、ある満願の日の帰り道、落雷に遭って失神し、その後、画が売れ出して有名になり多くの作品を残したというエピソードはよく知られている。「柳嶋妙見」では、現在 2 階を展示室として葛飾北斎をはじめとした江戸時代の浮世絵や「柳嶋妙見」を題材とした作品などを展示し、一般の人々に公開している。最近では、海外でも浮世絵の人気は高く、観光客ももちろんだが、浮世絵の研究者も「柳嶋妙見」を訪れ、熱心に作品に見入っているという。大英博物館館長が訪れたこともあったそうだ。

2016 年 11 月には隅田区亀沢にある「すみだ北斎美術館」が開館し大勢の観光客で賑わっている。「柳嶋妙見」も北斎に縁のあるお寺であることから、「すみだ北斎美術館」の共同創設者となり、同美術館の特別展や企画展をはじめ様々な催しの事業協力を積極的に行っている。ご住職によると、北斎ゆかりのお寺の住職として、地元の隅田のため今後もできるだけ協力を続けていきたいとのことであった。

「柳嶋妙見」の境内には近松門左衛門の供養碑や歌川豊国筆塚、落語柳家などの碑があり、芸術、芸能に縁のある寺院であることから、現在、音楽会や落語会、書道展などを本堂で開催し、地域の芸能、芸術の育成の一助となるよう努めているという。また「柳嶋妙見」を題材とした歌舞伎が上演されるときには、歌舞伎役者がお参りに訪れたり祈祷を依頼されたりすることがあるという。ときには「柳嶋妙見」の前で記者発表を行うこともあり、また上演前の紹介に「柳嶋妙見」の映像を使うため、撮影に見えることもあるとのことであった。

2 能勢妙見山東京別院

能勢一族の末裔である能勢頼昭住職から伺ったお話は次のような内容であった。

現在行われている妙見に係る催しは、4 月 15 日に行われる春季大祭と 11 月 15 日に最も近い日曜日に行われる秋季大祭である。当日は 100 人前後の人々が妙見菩薩へお参りするが、春季大祭の日は黒札を授与するため更に大きな賑わいとなる。この黒札は、境内にある鷗稲荷大善神が授与するもので妙見への信仰とは異なるが、妙見菩薩とともに篤く信仰されている。江戸時代後期に、火伏札として、また狐落としの札として知られていた「能勢の黒札」は、火事の多い江戸の町で大いに流行し、門前に人々が押し寄せたという。現在は 1000 枚ほどを 6 時から 18 時まで授与しているが、狐を落とすというより、如何なる疫病も免れる魔よけの札としてありがたがられ、ホームページの情報などを得て、近隣だけでなく日本全国から多くの参拝者が訪れるそうである。

また「能勢妙見山東京別院」は、勝海舟の父・勝小吉が篤信していた寺として、よく知られている。勝小吉は本所に長く居住し、本所の能勢妙見に日頃から熱心に参拝していた。100 人くらいの妙見講をつくり大勢の人を連れてお参りにくることがあったという。子母沢寛作の『父子鷹』には、麟太郎（勝海舟の幼名）が 9 歳の時に犬に噛まれ生

死の境をさまよったとき、父・小吉が毎日この境内で（写真 7-7）水垢離をして麟太郎の回復を願い、70 日目に生還したというエピソードが記されている。その後も小吉は麟太郎の開運出世を妙見に祈り続け、麟太郎は勝海舟として大成した。その水垢離の様子は、昭和 49（1974）年のNHK大河ドラマ「勝海舟」（子母沢寛原作）でも放映された。

毎年 2 月 15 日には、国家安泰を祈る千葉県中山法華寺の荒行堂で 100 日間の修業を終えた修行僧十数人がそろって「能勢妙見山東京別院」の境内で水垢離を行う行事が行われる。この行事は昭和 28（1953）年から始められたもので、現在では年間を通じて一番大きな行事となっている。妙見の行事とは異なる行事だが、NHK大河ドラマ「勝海舟」で水垢離の様子が放映されたことから、勝海舟の父が行った水垢離を連想し、勝海舟にあやかり開運出世を願う人が多く訪れて、今は大変な盛況であるという。NHK大河ドラマでは平成 22（2010）年に「龍馬伝」も放映され、現在は、勝海舟に因む観光ルートの一つとなり、20～30 人の団体客も訪れるなど参拝者も多い。若い世代の参拝者も増えたことから、若い人の意見を取り入れて、勝海舟の「勝」の文字や咸臨丸をデザインしたお守りや、妙見信仰に係る北斗七星をあしらったお守りを作り（写真 7-8）、2017 年から授与を始めたところ大いに好評を得ている。また、妙見は花柳界の人々の信仰があったといわれるが、今も芸者さんの妙見に対する親しみと信頼を込めた様相を認めることができるという。

墨田区本所の辺りは震災や戦災で大きな被害を蒙り、現在は新しく移り住んできた人が多いが、「能勢妙見山東京別院」近くに長くお住いの人は、別院は子供のときからいつも通っていた所で「妙見さん」と呼んでいるが、妙見信仰を特に意識している訳ではなく、お参りにいくと晴れ晴れとした安心した気持ちになる日常の一コマという位置付けであり、生活の一部になっている場所だとのことであった。

V-2 「柳嶋妙見」界限に伝えられる妙見の現代的意義

妙見の「妙」は「いうにいわれぬほどすぐれていること。きわめてよいこと、また、そのさま」という意味を持ち、「見」は「みる。みえる。あらわれる」という意味を持つ（『デジタル大辞泉』 小学館）。『日蓮宗事典』には、妙見菩薩について「『妙見』の語義が『麗妙なる容姿』と解せられて〔近世には〕江戸・大阪の役者及び花街の婦女の尊信するところとなり、また檀林の守護神より転じて受験の神となるなど」とあり（日蓮宗新聞社 1999 393）、『日本民俗宗教辞典』には「妙見の字が妙齡な外見の意に解しうるとのこじつけから、役者や花柳界の信仰も生んだ」とある（佐々木・宮田・山折監修 1998 544）ように、江戸時代、妙見信仰は、役者や芸能人などの間に容姿・芸能・学問の仏神として広まっていった。

中西は、江戸時代の妙見について、次のように述べている。

妙見信仰は梨園の人々の間で 2、3 世代にわたる妙見信仰の持続・広がりを生じさせるとともに華街の婦女の信仰も集めた。華街の婦女は、観劇の機会も多く、また「曾根崎心中」の遊女「お初」や「傾城仏の原」の遊女「今川」のように劇に取り入れられるほど劇作者や俳優に接することも多く、その影響も受けやすかった。妙見篤信者であった十返舎

一九の戯作本は、華街に多くの読者を持っていたといわれる。江戸後期になると、妙見といえば花柳界の婦女を連想させ、さらに、妙見およびそれと同義語の北辰北斗などの言葉が華街の婦女の代名詞となっていた（中西 2008 240-243）。

本章では、現在も残る江戸時代の妙見の軌跡を調査した。その結果、妙見は、仮名文小説、歌舞伎、人形浄瑠璃、落語、小唄、浮世絵などの中に今も引き継がれ伝えられていることが分かった。「柳嶋妙見山法性寺」や「能勢妙見山東京別院」の住職も、江戸時代の大衆のような勢いはないが、今も妙見を篤く信仰している人々が大勢いるという。本論文では触れなかったが、台東区の長國寺で毎年盛大に行われる酉の市も驚妙見大菩薩を開帳する行事である。

現在、墨田区業平にある「柳嶋妙見」の門前では、押上駅近くの「東京スカイツリー」を間近に見ることができる。この界限には、桜の名所である墨田川堤、吾妻橋、言問橋、向島、長命寺等が点在し、墨田川を越えると、吉原、浅草へと向かう。「柳嶋妙見」から南西に進んでいくと、葛飾北斎ゆかりの本所があり、本所には「能勢妙見山東京別院」がある。少し行くと両国、南東に進むと亀戸天神がある。これらの観光名所を繋ぐ町筋には、藍染め、手拭い、団扇、扇子、足袋、江戸切子、^{かざりかんざし}簪等を制作・販売する風情あるスポットが点在している。「柳嶋妙見」界限は、日本を代表する伝統文化とは趣を異にするが、日本の風情あふれる雰囲気は今も残されており、江戸・東京の観光スポットとなる絶好の地域である。この雰囲気は、江戸時代に妙見が大衆の間で大きく花開いた世相を伝えているといえる。

江戸時代後期、「柳嶋妙見」界限で広く信仰された妙見は、大衆の間に容姿・芸能・学問の仏神として受け入れられるとともに、どんな願いでも聞き入れてくれて誰にでも分け隔てなくご利益を与えてくれる八百万の神として、日常生活の支えとなる役割を果たしており、流行神のような存在であったことがうかがえる。村田は、流行神について、普段の信仰形態では賄いきれない状況が現れたとき、普段信仰している神仏から別の神仏へ祈願対象を変更した状況を流行神の現出とし、急激に祀り上げられた流行神は普通の信仰で対処できるようになった時点でその役目を終えると述べている（村田 2012 105）。明治維新という政治・社会秩序の変化を経て、妙見の繁栄は過去のものとなっていた。江戸時代、大衆の間に花開いた妙見信仰は、流行神の展開と共通する一面を持つと考えられる。

現在、「柳嶋妙見」「能勢妙見山東京別院」では、妙見は、日々の生活を守り安心して暮らしていくためのありがたい存在として地域の人々に信仰されていた。江戸時代、大衆の信仰の中に身近で親しみやすい容姿・芸能・学問の仏神として広く受け入れられた妙見としての意識は薄く、妙見に対しての具体的な思いはあまり認められない。過去に流行神のような存在として繁栄した名残は、今は見当たらないと言える。妙見信仰という形での地域の人々と妙見との関わりは、都市化の波の中で身近なものではなくなり、妙見が大衆の生活の中で必要とされた流行神としての役目は終えたと捉えることができよう。

しかし江戸時代後期に生み出され、江戸を舞台として華やかに繰広げられた芸術や芸能の中には、本章Ⅳ「江戸時代の文献・資料・芸能等から妙見をみる」で述べたように、妙見に係る多くの痕跡を認めることができる。これらの作品には、妙見そのものではないが、流行神としての妙見を受け入れた社会の雰囲気を写し出している一面も存在する。歌

舞伎、浄瑠璃、落語、小唄等は、今も上演され多くの人々に鑑賞されており、当時の心意気を現代に伝えている。浮世絵にも華やかな妙見詣りの様子を描いたものや、妙見信仰そのものではないが、妙見を示唆する題材を認めることができる。武道の北辰一刀流も妙見に端を発したものであろう。

これらの芸術・芸能等を妙見が創り出したということはできないが、江戸時代 260 年余りの間に醸成された芸術・芸能を築き上げてきた大衆の信仰の中に、妙見は身近で親しみやすい容姿・芸能・学問の仏神として広く受け入れられ、作品の中に表現されてきた。当時の社会情勢に妙見が適合したという一面もあろう。その結果、一気に花開いた大衆文化の中に妙見の痕跡が認められる結果となったのではないか。民衆の生活の中の妙見の存在は広く深く親しみやすいものであったことが想像できる。

江戸時代後期、都市の大衆の間で多くの信仰を集めた、容姿・芸能・学問の仏神としての特徴を持つ妙見は、その心意気を現代に伝え、日本が誇りを持って伝える江戸文化という形で、現在の「柳嶋妙見」界隈の地域の世相に反映させている。また妙見を題材とした葛飾北斎や歌川広重の浮世絵、歌舞伎や落語、小唄などは、芸術・芸能の分野で今も人気を博しており文化・芸能・学問の守護神としての役割を、江戸時代の妙見と同じように現在も果たしているといえる。現在、各地に様々な形で妙見が伝えられているが、容姿・芸能・学問の仏神として伝わる妙見、これも現代に伝わる妙見の特徴の一つであろう。

おわりに

本章では、江戸の町で一番古い妙見といわれ繁栄を続けた東京都墨田区業平にある日蓮宗寺院「柳嶋妙見」界隈を事例とし、現在伝わる妙見の様相と、妙見がどのような位置付けであり、地域にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、その特徴と役割を探ることを目的とした。

現在「柳嶋妙見」界隈で妙見を祀っている寺社には、他に「能勢妙見山東京別院」があるが、この二つの寺院では、妙見を現代に伝え生かすために次のような試みを行っていた。

「柳嶋妙見」では、毎月 1 日に妙見堂で「妙見さま大祭」と銘打った 5 名の僧による祈祷が行われる。心を清らかにし、心の大きな支えとなるよう願うもので、誰でも気軽に参ることができる開放的な催しであり、祖父や親の代からの参加者もいる。また 2 階のギャラリーでは、常時、葛飾北斎をはじめとした江戸時代の浮世絵や、「柳嶋妙見」を題材とした作品等を展示し、地域の文化と歴史を伝えている。多くの画伯や名優などが妙見のご利益を得て吉運を開いたと伝えられている寺院であることから、現在、2016 年に開館した「すみだ北斎美術館」の共同創設者となり、同美術館の特別展や企画展をはじめ様々な催しの事業協力を積極的に行っている。また、本堂で音楽会や落語会、書道展などを本堂で開催するなど、地域の芸能、芸術の育成の一助となるよう努めているという。

「能勢妙見山東京別院」では、NHK大河ドラマ「勝海舟」をきっかけに開運出世を願う人が多く訪れるようになり、今も盛況であるという。2017 年から勝海舟の「勝」の文字や咸臨丸をデザインしたお守りや、妙見信仰に係る北斗七星をあしらったお守りを作り授与を始めたところ、大いに好評を得ているとのことである。

この二つの寺院では、現在、妙見は日々の生活を守り安心して暮らしていくためのありが

たい存在として、地域の人々に信仰されていたが、江戸時代、大衆の信仰の中に身近で親しみやすい容姿・芸能・学問の仏神として広く受け入れられていた妙見としての意識は薄く、妙見に対しての具体的な思いはあまり認められない。過去に繁栄した流行神としての名残は、今はわずかに認められる程度だが、地域の人々からは親しみを込めて「妙見さま」と呼ばれ、身近なありがたい神仏として信仰されている。

一方、江戸時代に流行した芸術・芸能の中には多くの妙見の痕跡が残されている。それは現代に伝えられ、今も演じられ鑑賞されている。そして現在の「柳嶋妙見」界隈には、江戸時代後期に大衆の間で大きく花開いた芸術・芸能の中に妙見を反映した世相が伝えられていた。それは日本が誇りを持って伝える江戸文化として表れており、容姿・芸能・学問の仏神としての特徴を持つ妙見の心意気が表現されている。また妙見を題材とした浮世絵、歌舞伎や落語、小唄など、芸術・芸能の分野は今も人気を博しており、文化・芸能・学問の守護神としての役割を果たしているといえる。現在、各地に様々な形で妙見が伝えられているが、容姿・芸能・学問の仏神として伝わる妙見、これも現代に伝わる妙見の特徴の一つであろう。

《註》

- (1) 寛政 8～10 (1796～98) 年に刊行された摂津国の観光案内書。
- (2) 江戸時代中期から幕末までの長期にわたって、毎年刊行された川柳の句集。167 編が刊行。

《先行研究・参考文献》

- 芥川龍之介 2013 『本所両国』（講談社文芸文庫編『大東京繁昌記 下町篇』所収） 講談社
- 安藤優一郎 2005 『観光都市 江戸の誕生』 新潮社
- 蘆田伊人 1996 『新編武蔵風土記稿』第2巻 雄山閣
- 飯島虚心、鈴木重三校注 1999 『葛飾北斎伝』 岩波書店
- 池上真由美 2002 『江戸庶民の信仰と行楽』 同成社
- 池嶋洋次 2015 『日本武術・武道大事典』 勉誠出版
- 石出猛史 2001 「江戸の病と信仰」『千葉医学雑誌』 千葉医学会
- 内田千鶴子 2011 『宇宙をめざした北斎』 日本経済新聞出版社
- 大島建彦 2012 「家伝の呪符」『西郊民俗』第219号 西郊民俗談話会
- 金指正三 1974 『星占い星祭り』 青蛙房
- 鹿島萬兵衛 2005 『江戸の夕栄』 中公文庫
- 小林忠監修 2008 『浮世絵「名所江戸百景」復刻物語』 芸艸堂
- 坂本勝成 1977 「上方の妙見信仰」『立正大学文学部論叢』第58号 立正大学文学部
- 佐々木宏幹・宮田登・山折哲雄監修 1998 『日本民俗宗教辞典』 東京堂出版
- 佐野賢治 1994 『星の信仰 - 妙見・虚空蔵』 溪水社
- 滋賀県立近代美術館・京都新聞社 2008 「葛飾北斎展」図録 滋賀県立近代美術館・京都新聞社
- 鈴木堂三・朝倉治彦（校註） 1975 『新版 江戸名所図会』上・中・下 角川書店

- 墨田区文化振興財団北斎事業部 2013「北斎かわらばん」第20号 墨田区区民活動推進部
文化振興課北斎美術館開設担当
- 諏訪春雄 2001 『北斎の謎を解く』 吉川弘文館
- 東京大学史料編纂所 1997 『大日本古記録 斎藤月岑日記』(一)～(九) 岩波書店
- 長沢利明 1996 『江戸の庶民信仰』 三弥井書店
- 永田生慈監修 2005 『もっと知りたい 葛飾北斎 生涯と作品』 東京美術
- 中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
- 西山松之助ほか7名 1984 『江戸学事典』 弘文堂
- 日蓮宗新聞社 1999 『日蓮宗事典』 東京堂出版
- 日本経済新聞社 2005 『北斎展』(東京国立博物館特別展 図録) 日本経済新聞社
- 野村耀昌 1968 「近代における妙見信仰」 望月敏厚編『近代日本の法華仏教』所収 平楽寺書店
- 平瀬直樹 2014 「近世の文学・演劇に描かれた大内氏」『山口県地方史研究』第112号 山口県地方史学会
- 福西大輔 2007 「清正公信仰と妙見信仰との関わりについて—熊本博物館所蔵資料を中心に—」 熊本市立熊本博物館館報 No. 20 熊本市立熊本博物館
- 福西大輔 2012 『加藤清正公信仰一人を神に祀る習俗—』 岩田書院
- 古市夏生・鈴木健一 1997 『新訂 江戸名所図会 6』 筑摩書房
- 松本清蔵 2014 『青龍降臨の宮—稲城百村妙見譚』 松本清蔵
- 宮崎茂夫 1997 「江戸・東京 妙見さま巡り」『あしなか』第249輯 山村民俗の会
- 村田典生 2012 「流行神の展開過程—近世山科妙見を事例として—」『佛教大学大学院紀要』第40号 佛教大学大学院
- 山口桂三郎 2008 「『名所江戸百景』の成りたちと復刻事業」『浮世絵「名所江戸百景」復刻物語』 芸艸堂
- 若月正吾 1971 「江戸時代における仏教庶民化の諸様相」『駒澤大学佛教学部論集』1 駒澤大学
- 柳嶋妙見山法性寺 2015 『柳嶋の妙見さま』
- 柳嶋妙見山法性寺 2015 「柳嶋妙見山法性寺」しおり

《引用・参考映像・ホームページ》

- 廣濟寺 <https://www.kosaiji.org/>, 2017. 9. 10
- 埼玉県立歴史と民俗の博物館 <http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>, 2017. 10. 5
- すみだ北斎美術館 <http://hokusai-museum.jp/>, 2017. 10. 5.
- 『デジタル大辞泉』(小学館) <http://www.daijisen.jp/digital/>, 2017. 10. 1
- 能勢妙見山 <http://www.myoken.org/>, 2017. 9. 10
- 能勢妙見山東京別院 <http://www.myoken.org/tokyobetsuin/>, 2017. 9. 10
- 北辰一刀流兵法 <http://hokushinittoryu.jp/>, 2017. 10. 29
- 柳嶋妙見山法性寺 <http://www.yanagishima-myouken.net/>, 2017. 9. 10

第八章 変遷をたどり現代に息づく妙見

—埼玉県秩父地方に伝わる現代的意義—

はじめに

秩父地方は古くから妙見信仰が伝わった地域であり、その信仰体系の中には、現在、次の三つの要素を認めることができる。

その一つは「妙見塚」を敷地内に祀る秩父市宮地の関根家とその地域に伝わる「屋敷神⁽¹⁾的要素」である。二つ目は地域の祭神、すなわち地主神的な一面を持つ「氏神⁽²⁾的要素」である。それは秩父地方の妙見の中心である秩父神社（秩父市番場町）を災いから守るために祀られたという「秩父七妙見」にもみることができる。三つ目は「生産神⁽³⁾的要素」である。妙見の祭祀等に係る人々は、現在、秩父市内で農業や商業、加工業等主に生産業に携わっている人々であり、生活への身近な願いを妙見へ託し、その願いは秩父神社の「御田植祭」や、かつて「お蚕祭り」といわれた「秩父夜祭」という形で伝えられている。「秩父夜祭」を華やかに盛り上げている付祭りは、近代の秩父において織物産業をバックアップし、産業都市としての発展に大きく貢献する役目を果たしてきた。江戸幕府による屋台行事の禁止など、社会情勢の影響を受けながらも都市祭礼として大きく発展してきている。

本章の目的は、現在、様々な場所や生活・習慣、行事・祭礼の中に妙見の存在を認めることができる秩父地方を事例とし、前述した三つの要素を持つ妙見が地域に果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて探ることである。

研究方法は、2014年から2016年にかけて行った秩父市中宮地の関根家とその地域に伝わる妙見、秩父地方に伝わる「秩父七妙見」、秩父神社の祭礼「御田植祭」と「秩父夜祭」の三つの調査を基に、秩父地方に伝わる妙見の現状と地域の人々の妙見に対する意識を明らかにしていく方法をとる。

本章では、Ⅰで秩父地方に伝わる妙見に係る諸問題を取り上げ、Ⅱで調査地の概要を述べる。Ⅲでは「秩父地方の信仰体系にみる妙見信仰との関わり」というテーマのもと、宮地地域に伝わる妙見の現況、「秩父七妙見」の様相、「御田植祭」と「秩父夜祭」の経緯を取り上げる。以上を踏まえ、Ⅳで秩父地方に現代も伝わる妙見について考察する。

Ⅰ 秩父地方に伝わる妙見に係る諸問題

Ⅰ－１ 研究史—秩父地方の妙見を中心として

「御田植祭」と「秩父夜祭」については多くの先行研究にその内容が詳しく述べられている。特に「秩父夜祭」の成り立ちや運営、屋台（祭礼のときなどに、飾り物をしたり、踊り手や囃子方をのせたりして練り歩く小屋形の台）については、中村孚美（1972）や浅賀ひろみ（2009）等数多くの先行研究がなされている。本稿では、祭祀や行事の概要ではなく、現在、秩父地方に伝わる妙見に視点を置いた先行研究について述べていく。

千嶋壽（1981 57）は、祭りや神々の体系が社会的構造を反映するものとして認められるならば、その頂点に立つ秩父神社やその祭神は、当然地域社会の統一的象徴であり、必ず政治的・社会的発展段階を経ることによって成り立ったものだと考えなければならないと述べた。その祭神とは、妙見神を指しており、秩父神社で行う「秩父夜祭」や「御田植祭」などの祭祀の中に認められる妙見についてあらゆる角度から見解を述べ、秩父地方

における妙見信仰について深く考察している。現在、天之御中主神（明治時代より前は妙見）を祭神の一つとする秩父神社の宮司である藺田稔（2005）は、秩父に妙見が伝えられ現在に至るまでの過程と秩父における妙見の奥深い存在感を追求している。

現在の秩父地方を民俗学的な視点で捉えた栃原嗣雄（2005）は、秩父地方一帯の日常の伝統的な行事、祭礼、信仰、芸能、民具等についての詳細な調査内容から、秩父地方の人々が妙見を育んできた環境を中心に述べているが、妙見信仰と秩父地方との関わりを論じたものではない。

外秩父地方に伝わる妙見について克明な実地調査に基づく見解を述べた若松良一（2011）は、「秩父七妙見」についても言及しているが、文書等による歴史的な視点からの分析を中心とした見解を述べている。

I-2 問題の所在

以上のように秩父地方における妙見の研究は、現在、天之御中主神（明治時代より前は妙見）を祭神の一つとして祀る秩父神社を基点とし祭祀からたどっていくもの、妙見を育んできた秩父の様相を述べたもの、そして歴史的な視点から妙見を分析したものであった。それらは現在の秩父地方の妙見を民俗学的な視点で捉えたものとは言い難い。

筆者が調査した秩父地方の秩父市宮地、東秩父村は、現在も祭祀や日常生活の中に妙見が認められる地域であり、妙見が伝えられた過程と現状を地域の人々の視点を通して知ることができる考える。そこで、この調査地の事例を基に、現在どのような形で妙見が秩父地方に伝えられているのか、地域の人々は妙見をどのように思っているのかを本稿の問題の所在としたい。

したがって、本稿では秩父地方に現在も伝わる妙見について、民俗学の視点からその特徴を明らかにし、妙見が地域に果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて探ることを課題とし、そのための方法として、秩父地方に伝わる妙見の現状と地域の人々の妙見に対する意識を明らかにしていく。

II 調査地の概要

II-1 秩父地方

本稿では、秩父市と秩父郡（横瀬町・皆野町・長瀬町・小鹿野町・東秩父村）からなる地域（資料 8-3）を秩父地方として述べていく。秩父地方は、埼玉県、東京都を流れ東京湾に注ぐ荒川の上流部で埼玉県の西部に位置し、東京都、山梨県、長野県、群馬県に接しており、武甲山、三峰山、両神山、城峰山などの秩父山地に囲まれている自然豊かな地方である。

秩父地方の南端には、秩父市と横瀬町にまたがる標高 1,304 メートルの武甲山がそびえている。武甲山は、過去に「嶽（山）、知知父嶽、祖父（おおじ）ヶ岳、武光山（たけみつやま）、妙見山」（千嶋 1981 112）と山名を変えてきたが、現在は奥武蔵・秩父の象徴となっている。

秩父地方は、古代、708 年に和銅が朝廷へ献上され「和銅」と改元されるなど銅の産地として栄え、また名馬の産地でもあった。平安時代は、桓武平氏流の平良文を祖とす

る坂東八平氏・秩父氏の根拠地となり、武蔵国周辺で有力武士団を率いた。

かつて秩父地方は、この武甲山から採掘された石灰を加工するセメント産業と秩父銘仙を主力とした絹織物産業を主要な産業として発展してきた。そして絹織物産業の発展とともに江戸と秩父を結ぶ秩父往還は絹商人の往来で賑わい、秩父地方に多くの江戸文化が流入した。絹織物産業は時代の流れとともに衰退していったが、昔からの伝統を伝える行事・慣習は、時代を経た今も変わることなく残されており、秩父地方は民俗芸能の宝庫であるといわれている。その一つに歌舞伎があげられる。小鹿野歌舞伎をはじめ各地域でたくさんの地芝居が行われており、「秩父夜祭」では「屋台芝居」（歌舞伎）が屋台の上で上演され、祭りを華やかに彩っている。

Ⅱ-2 秩父地方と妙見

妙見信仰は、秩父に最初に伝わった時期は明らかではないが『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』の「秩父神社」に「天慶年間〔938～947〕、平将門と…（中略）…平国香が戦った上野国染谷川の合戦で、国香に加勢した平良文は、同国群馬郡花園村に鎮まる妙見菩薩の加護を得て、将門の軍勢を撃ち破ることができた。以来、良文は妙見菩薩を厚く信仰し、後年、秩父に居を構えた際、花園村から妙見社を勧請した。これが、秩父の妙見社の創建であると、社記や『風土記稿』は伝えている。良文はその後、下総国に居を移したが、その子孫は秩父に土着し秩父平氏と呼ばれる武士団を形成した。また、武蔵七党の丹党の惣領である中村氏も、秩父に土着した」（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1226-1227）とあり、妙見菩薩を尊崇する平良文の移動に伴い上野国群馬郡花園村から秩父に流入したものと伝えている。

ここで妙見の伝播について、次の資料に基づき、その経過をみていくと以下のようにとらえることができよう（資料 8-1、資料 8-2）。

A『新編埼玉県史 通史編2』：『秩父大宮妙見宮縁起』に、四条天皇の嘉禎元年（一二三五）九月の落雷で秩父神社の社殿が焼失したため、妙見宮（旧鎮座地を秩父市内の大野原及び宮地あたりとする伝承がある）を秩父大神の鎮座する^{はそのもり}杵森〔秩父市番場町〕に合祀し、従来より祭っていた知々夫彦命（秩父大神）は、神宮地司摂社に祭られることになったとある。しかし、これは秩父神社の廃絶を意味するものではなく、氏神祭祀や地主神の祭祀を基層信仰として保持しながら、外界の現世利益的な機能を有する勧請神を受容付加することにより、社名や神格を変容していったというのが実体だろう。（埼玉県 1988 1014）

B『秩父大宮妙見宮縁起』：1235 年秩父神社社殿が焼失しとあり（園田 2014 7）、その後再建を果たした 1320 年代ごろ秩父神社に妙見大菩薩が合祀されたと考えられるが、地域で伝えられる伝承や民話、記録などから、1320 年より前に秩父神社近辺の宮地周辺では妙見の痕跡が語り継がれていたことが察せられる。

C『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』：〔秩父市大野原（大野原字宮崎）にある愛宕神社について〕当社は、口碑によれば、元来は村の東に位置する字峰沢にある前山の山上に祀られていたが、1619 年に字宮崎にある現在の境内へ遷座したという。この話に出てくる前山には、往古、妙見宮（現秩父神社）が祀られていたと伝えられ、妙見

宮は、その後、宮崎、杵の森と社地を移していったという。これらの伝説と、秩父神社文書の「嘉禎の火雷後妙見宮を杵森に祭祀されその宮籬の辺りに火神愛宕の神祠を営みける」という記事と合わせて考えると、当社は、落雷による社殿焼失のために遷座した妙見宮の跡地に火防の神として祀られた社で、妙見宮がその土地を移すにしたがって、当社も前山から宮崎に社地を移したと見ることもできるが、いまだ推論の域を出ない。（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1196）

D『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』：〔秩父神社について〕当初、妙見社は、秩父神社の北東の宮地（一説には大野原）に鎮座していたが、嘉禎元〔1235〕年に落雷に遭い社殿を焼失したため、翌年、幕府は再建を命じ、杵の森に妙見社を移し、火神である愛宕神を旧地に祀り、後難を防がした。1314年に至ってようやく社殿が落成し、遷宮が行われた。（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1227）

E『秩父大祭 歴史と信仰と』：来秩した妙見が合祀以前に先祀された土地として宮崎山→オトクボ→宮崎台地へと移動し、やがて秩父神社の母巢の森へ遷座したことは認めないわけにはいかない。（千嶋 1981 174）

F 宮地町と宮崎町とが接する地点に、曹洞宗の大林山広見寺がある。この寺の山門手前に妙見堂と呼ぶ小堂がある。これは広見寺の南（宮崎台地）にあった妙見宮が秩父神社に合祀されて形を失った時、その名残をとどめるために建てられたものであると伝えている。『広見寺記』（延享四年〈一七四七〉著述）では、寺の境内そのものが妙見を地主神とし、妙見に寺地を譲り受けた、という縁起がある。そのために妙見堂を建立した…と読める。（千嶋 1981 172）

これらの文献資料に記されている地名と現在の所在地、妙見の伝播について整理すると次のとおりである。

妙見と関わりのある所		現在の所在地	妙見との関わり
愛宕神社		秩父市大野原	遷座した妙見宮の跡地に祀られた
愛宕神社		秩父市中宮地	遷座した妙見宮の跡地に祀られた
音窪	=オトクボ	秩父市下宮地	妙見が秩父で2番目に祀られた所
廣見寺		秩父市下宮地	次の二つの伝承がある。「妙見に寺地を譲り受けたので妙見堂を建立した」「妙見宮が秩父神社に合祀されたのでその名残をとどめるために建てられた」
妙見塚		秩父市中宮地	妙見が「妙見七ツ井戸」を渡って行く途中で10年間滞在した所
妙見堂		秩父市下宮地	妙見宮が秩父神社に合祀されたので、名残をとどめるために建てられたと伝わる
宮崎台地	=宮地	秩父市 (上・中・下)宮地	妙見が秩父で3番目に祀られた所
宮崎山の丘陵地	=字峰沢の前山	秩父市大野原	妙見が秩父で最初に祀られた所

- ① 10 世紀中頃、平良文が上野国群馬郡花園村から妙見を勧請した。良文は下総国に居を移したが、子孫は土着し武士団「秩父平氏」を形成、武神として妙見菩薩を篤く信仰した。
- ② 妙見宮は最初、宮崎山の丘陵地（字峰沢の前山、秩父市大野原）に祀られた。
- ③ 妙見宮は、次に音窪（秩父市下宮地）に祀られた。音窪は、伝承によると廣見寺の南側にある旧県立秩父東高校東側丘陵の窪地といわれる。
- ④ 1235 年、落雷のため秩父神社が炎上。秩父神社再建にあたり妙見宮を合祀することとなる。
- ⑤ 妙見は「妙見七ツ井戸」（上宮地・中宮地・下宮地）を渡り秩父神社へ向かう。秩父神社へ渡って行く途中に 10 年ほど「妙見塚」（秩父市中宮地）に留まる。
- ⑥ 1320 年頃、秩父神社社殿が再建され妙見菩薩が秩父神社に奉斎される。
- ⑦ 明治の神仏分離により、妙見菩薩と習合していた天之御中主神に祭神を改め、社名も「秩父神社」と旧に復し現在に至る。天之御中主神について、秩父神社では「宇宙創造神、俗に北斗七星の神として妙見様といわれる」と位置付け、地域で身近な妙見様として敬われ親しまれている。

以上のことから、妙見菩薩は宮崎山（前山）から音窪、そして「妙見七ツ井戸」を渡り宮地へと移動して秩父神社へ向かい、現在の秩父総鎮守である秩父神社に奉斎されたということが分かる（資料 8-1）。妙見菩薩が渡っていった道筋は上宮地（JR 秩父駅東側辺り）から北へ進む国道 140 号線沿いで、この道筋 7 カ所に妙見の足跡を示したといわれる「妙見七ツ井戸」が伝えられ、この地域には妙見との縁が深いことから宮地（上宮地・中宮地・下宮地がある）という地名が残されている。妙見菩薩は七つの井戸を渡っていく途中、道中の真ん中辺り（「三の井戸」と「四の井戸」の中間）に 10 年ほど鎮座していたという。その場所は秩父市中宮地の関根家の敷地内にあり、現在も「妙見塚」として祀られており、神聖な場所として市の有形民俗文化財に指定されている。

次に妙見宮と愛宕神社の関係について述べていきたい。

現在、大野原にある愛宕神社については、前述したように（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1196）推論の域を出ないが、落雷による社殿焼失のために遷座した妙見宮の跡地に火防の神として祀られた社で、妙見宮がその土地を移すにしたがって前山から宮崎に社地を移したとみることもでき、かつて妙見宮があった前山（宮崎山）に祀られていたことが分かる。

また妙見が移動していった道筋には、他所にもう一つ愛宕神社が存在する。それは中宮地にある愛宕神社である。境内に掲げられた改修誌には『秩父大宮妙見宮縁起』の中の次のような一文が記されている。「嘉禎元年（一二三五年）秋九月このあたりに祀られありし妙見宮が火雷の災にて煙炎となり果てぬ 夫以来は妙見宮を柞の杜（秩父神社）に合祀されたり 後の世すがに又の災をよきまつらんとてさりし宮籬の邊に火伏愛宕の神祠を営てけるは今にのこれり」。この文中の初めに出てくる「妙見宮」は「秩父神社」を指し、次に出てくる「妙見宮」は「宮崎台地の妙見宮」、「宮籬」は「妙見塚」を指していると考えられる。「宮崎台地の妙見宮」は「宮地の妙見宮」ということであるか

ら、それは「妙見塚」を指していることになる。つまり『秩父大宮妙見宮縁起』の中の一文の2番目に記された「妙見宮」と「宮籬」は双方とも「妙見塚」を指していることになるのではないか。なぜなら愛宕神社は「妙見塚」から300メートルほどの所に位置しており「宮籬の邊」に当てはまるし、その境内には「秩父夜祭」の6基の山車⁽⁴⁾のうち妙見の由緒を伝えているといわれる宮地屋台の収蔵庫があり、妙見由来の神社であるという伝承を裏付ける要素を持っているからである。また地域をあげて妙見の祭祀を守り伝えている地域でもある。改修誌には続けて「七百余年の昔からこの地の産土神として鎮座し」とある。今から七百余年の昔とは妙見宮が秩父神社へ合祀された時期である1320年頃に当たり、妙見宮が遷座した後、この地に愛宕神社が産土神として祀られたのではないだろうか。

これらのことから、筆者は、一つの愛宕神社が妙見宮の遷座した跡地に順々に移って行ったのではなく、妙見宮が遷座した各々の跡地にそれぞれ愛宕神社が祀られていき、その結果、現在、大原野と中宮地に妙見の由緒を持つ二つの愛宕神社が存在することになったのではないかと考える。

つまり、秩父地方の妙見は、最初宮崎山（前山）に祀られ、音窪へ遷座し、その後「妙見七ツ井戸（一～三の井戸）」を渡り宮地の「妙見塚」に祀られ、再び「妙見七ツ井戸（四～七の井戸）」を渡って秩父神社に奉斎されたということができよう。

Ⅲ 秩父地方の信仰体系にみる妙見との関わり

Ⅲ-1 屋敷神として宮地地域に伝わる妙見

秩父市中宮地の関根家の敷地内には「妙見塚」が祀られている（写真8-1）。この「妙見塚」は、妙見菩薩が秩父神社へ奉斎されるにあたり、秩父神社へ渡っていく途中に10年ほど鎮座していたと伝えられるところで、この道筋には7カ所に妙見の足跡を示したといわれる「妙見七ツ井戸」が伝えられている。妙見との縁が深いことから宮地という地名が残されており、神聖な場所として市の有形民俗文化財に指定されている。

関根家は、秩父神社から徒歩20分ほどのところにある九代続く秩父市内の旧家で、現在の当主は関根^{かずいち}一一氏である。「妙見塚」は広い敷地を有する関根家の玄関前の庭に祀られている。平地より少し高くなった石塚で、石塚の上に木製の小さな祠があり中には御神体である直径20センチほどの丸い石を認めることができる。祠の両側には一對の丸い石が置かれており「妙見様の座り石」といわれている。

この「妙見塚」を守り伝えている関根家の周囲は、清く豊かな湧水をあちこちに認めることができる。この一帯は真名井原といわれ、かつて関根九兵衛氏（一一氏の本家の当主）が一帯を所有し管理していたという。真名井は、清浄な水につけられる最大級の敬称とされるが、宮地周辺は、その呼び名にふさわしい清々しい雰囲気を感じられる。

また関根家は、現在「妙見塚」を祀る家であり、妙見様が出て行ったという意味を表す『出久知』という屋号でも呼ばれている。出久知は出口とも書き、関根家ではお墓にもその屋号が入っているそうである。1764年、4人の家族（一一氏の祖先となる）が馬1頭を伴い分家してこの地に住むようになったが、そのときすでに「妙見塚」は存在していたという。

江戸時代には神職を呼んで「妙見塚」で祭典を行い、近所の五人組で女性だけのヒマチ⁽⁵⁾講を行っていた(浅見 2013 77)。関根家では代々願い事や受験のときには必ず「妙見塚」にお参りしてきたという。また身内に戦死した人がいないのも妙見様のおかげだと伝えられている。

これらのことから、「妙見塚」は関根家が当地に移り住んだときから関根家の屋敷神的な存在として祀られ伝えられてきたのではないか。そして歴史的な伝承を持つ「妙見塚」は、関根家だけでなく地域の屋敷神としての役目も果たしてきたと考えられる。現在、次の三つの事例の中に「屋敷神的要素」を認めることができる。

1 「妙見塚」の幟立て

「妙見塚」の幟立てとは、「秩父夜祭」の2日前に、一対の幟旗を「妙見塚」の前に掲げる行事である。幟旗は、秩父妙見宮(現 秩父神社)から奉納されたもので、「奉獻妙見宮 文久3年」と書かれている。「妙見塚」とこの一対の幟旗は、2003年に市の有形民俗文化財に指定された。『秩父志』には「出口ハ往昔、妙見神ヲ字宮地ヨリ大宮町ヘ遷請シ奉シ時ニ、此所ヨリ奉送セシニ依テ今ニ此所ニハ十一月三日〔旧暦による秩父夜祭の日〕ノ夜、旗ヲ立テ祀ヲ舊式トス」(大野 1983 179)とあり、千嶋は「いまこの祭式は少し変形し塚上の妙見社の前にたたんだままの旗を供えている。旗は秩父神社から奉納されたものである」と述べており(千嶋 1981 174)、「妙見塚」と幟旗の歴史的な裏付けを知ることができる。普段、この幟旗は関根家の屋敷内の茶箱にしまわれ保管されている。関根一氏によると、幟旗は「秩父夜祭」の期間中「妙見塚」の前にたたんで供えていたが、市の有形民俗文化財に指定されたのをきっかけに、2003年から再び「妙見塚」の前に掲げることにしたそうである。筆者は2015年11月29日に行われた幟立ての行事を見学する機会を得た。その内容は次のとおりである。

7時30分頃から「妙見塚」の前に地元青年部の人が集まり始め、8時頃から30人ほどで作業が始められた。関根家の軒から10メートルほどの2本の丸太を降ろし刺股でささえながら準備に取り掛かる。最初に、丸太の上につける2本の櫓を竹筒に挿し櫓に紙垂をつける。竹筒はかなり長いもので、この竹筒を2本の丸太の先に挿す。その後丸太を立ち上げ、この丸太を「妙見塚」の前の心棒(当日立てたもの)にボルトで固定する。次に幟旗を板棒につるし乳に結びながら少しずつ上げていき、8時30分頃立ち上げられた(写真8-2)。この一対の幟旗は「秩父夜祭」の期間中掲げられ、宮地の田園風景の中にはためく様子をかなり遠くから望むことができる。

2 「秩父夜祭」本マチの朝の「妙見塚」への参詣

「秩父夜祭」は「妙見祭り」ともいわれるように、祭りの中に妙見の存在を認めることができる。宮地の辺りは特に妙見に対する意識が強く、宮地屋台関係者は、本マチの日の宮地屋台曳行開始前(12月3日7時30分頃)に「妙見塚」に参詣し、祭りの無事な遂行を妙見様にお願いし、その後、愛宕神社から屋台を曳き出す慣わしになっている。筆者は2015年12月3日の「秩父夜祭」本マチの日にこの行事に立ち会うことができた。その内容は次のとおりである。

7時30分頃から祭りの衣装をまとった宮地屋台関係者が関根家に集まり始め、8時頃から順々に幟旗の掲げられた「妙見塚」に参詣した（写真 8-3）。参詣者は80人ほどに達した。その後、「妙見塚」の横で関根家から参詣者に朝食がふるまわれる。関根一氏の妻トキ江さんの手料理で、ナマス、ポテトサラダ、煮しめ、オッキリコミなどたくさんの郷土料理が並べられた。朝食をふるまうというこの習慣は、「妙見塚」が市の有形民俗文化財に指定された2003年から続けられてきたという。朝食後、屋台関係者は宮地屋台曳行のため愛宕神社へ向かった。

3 宮地に伝わる「妙見七ツ井戸」

『秩父志』に「妙見七ツ井戸」について「七星井八字宮地ニアリテセヶ所ノ名水トス、此ノ水ハ上中下ノ三所名井ニシテ一ハ上組天池ト云、一ハ井上ト云中組ニ二所アリ、一ハ下組井上ト云ニ二所アリ、一ハ中芝ト云ニ二所アリ、旱ニモ涸コトナク霖ニモ溢コトナシ、奇井ト云フ」（大野 1983 179）とあり、『新編武蔵風土記稿』にも「七ツ井本社より西北の間に、其数七つ往々にあり、里民常用とす徑四尺許、平水二尺餘の清水にて、旱魃にも涸れず、洪水にも溢れずと云う」（蘆田 1996 190）と記され、七星井は宮地にある7カ所の名水で、旱魃にも涸れず長雨や洪水にも溢れることがなく奇井といわれると述べている。

妙見は、前述したように宮地と称する所に祀られていたが、やがて7カ所の井戸を渡り1320年ごろ秩父神社に合祀されたと伝えられている（資料 8-1）。この道筋7カ所に妙見の足跡を示した「妙見七ツ井戸」が今も伝えられ観光ルートの一つとなっている。実際に「妙見七ツ井戸」を巡ると、井戸というより小規模な七つの水場が整備されており清潔で豊かな湧水を認めることができる。

また、秩父市役所経済部観光課・彩の国ふるさと秩父観光情報館作成の説明書「秩父まちなか 伝説の道 妙見七ツ井戸」（2012）には、「妙見七ツ井戸」の由来について、妙見が秩父神社へ渡っていった地とする伝説の他に、二つの話が伝わっていると記されている。一つは弘法大師が水不足をいたく思ひ召され清水を与えられたという譚、もう一つはやはり水飢饉に悩む木こりに柳の精が7カ所の湧き水の在処を教えたという譚である。

このルートの「三の井戸」と「四の井戸」の中間にある関根一氏の家の敷地内には「妙見塚」が祀られている。

「五の井戸」（写真 8-4）の近くにお住まいでこの井戸を所有している関根徳治氏から「五の井戸」について次のようなお話を伺った。「お正月には、先祖代々『星の水』を仏様、神棚にあげ、それで1年が始まる。『星の水』は、元旦の午前5時頃、北斗七星が輝いているときに『五の井戸』から汲んだ水で、関根家〔関根徳治氏の家〕では若水といわず『星の水』という。宮地は妙見様に近い屋台を持つ地域であり、妙見様つまり北斗七星にちなみ七ツの井戸が伝わっている」（2015・12・2）。

「七の井戸」のある所は「天帝場（デンデイバ）」という呼び名が残されており、『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』に「〔「妙見七ツ井戸」のうち〕『当地の井戸は主星北辰（北極星）に当っており、北辰は天帝であることから、この地を天帝を祀る場一デ

ンデイバーという』とある」（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1198）と述べられている。

Ⅲ-2 村地域の氏神としての妙見

1 秩父七妙見

秩父地方では、妙見菩薩が「妙見七ツ井戸」を渡り秩父神社の社地に奉斎された後、秩父妙見の分社を郡境の交通の要所7カ所（第1所：小鹿野町藤倉 第2所：皆野町金沢 第3所：長瀨町矢那瀬 第4所：東秩父村安戸 第5所：都幾川村大野〔現 ときがわ町大野〕 第6所：名栗村上名栗〔現 飯能市上名栗〕 第7所：飯能市北川）に秩父妙見宮（現秩父神社）の守護神として祀ったと伝えられている。この7カ所の妙見社は「秩父七妙見」と称され、秩父妙見宮（現秩父神社）の鬼門にあたる箇所には置かれたといわれる（資料8-3）。

『秩父志』（大野 1983）にも、「秩父七妙見」の置かれた位置について「郡境二祭ル」「郡境七所二往古分祀セシナリ」「群境ノ村々七所二遷請シ奉ル」と記され、秩父妙見の分社を郡境の交通の要所7カ所に攘災の守り神として祀ったことが分かる。祀られた時期は明記されていないが、位置は資料8-3に示したとおりである。その多くが現在の秩父地方に含まれない境界辺りに位置しているが、当時は寄居、嵐山、ときがわ町、飯能も秩父と称していた。資料8-4は、「秩父七妙見」について、『秩父志』（大野 1983）、「秩父妙見研究序論～外秩父の妙見を祀る社寺の検討から～」（若松 2011）、「秩父七妙見社」（宮澤 1994）の三つの資料を基に筆者が作成したものである。その結果「秩父七妙見」の第1・2・3所は不明であり、第5・6・7所は現在の秩父地方に含まれていないことが分かった。第4所の東秩父村安戸の^{みかた}身形神社のみが現在の秩父地方の内側に位置し、今も秩父地方に伝えられていると考えられる。そこで本稿では身形神社の氏子地区である安戸の帯沢地区に伝えられる妙見について調査を行った。

2 東秩父村安戸帯沢地区に伝わる妙見

(1) 東秩父村

東秩父村は、1956年大河原村と槻川村が合併してできた村である。埼玉県西部、秩父地方の最も東側に位置した埼玉県内唯一の村であり、外秩父山地に囲まれた自然豊かな山村である。平安時代から鎌倉時代にかけては、武蔵七党の一つである丹党の一族大河原氏が居住していたと伝えられる。都心から約70キロメートルのところに位置し、秩父の玄関口として、和紙や林業、養蚕を生業としてきた。特に和紙は伝統的特産品として1300年にわたり受け継がれ、東秩父村の「細川紙」は、「石州半紙」（島根県浜田市）と「本美濃紙」（岐阜県美濃市）とともに、2014年11月ユネスコ無形文化遺産に登録された。

東秩父村の大字は、東から安戸、御堂、奥沢、坂本、大内沢、皆谷、白石となっており、大字の一つである安戸は村の東部に位置している。帯沢川、入山沢の谷あいには集落が散在する山村で、槻川沿いに東西を貫く県道11号線（熊谷小川秩父線）が通じている。北辺のほとんどは官ノ倉山の稜線にあたり車両の通行は不可能であ

る。安戸の小字には帯沢、宿、小滝、町北、大都、在家がある。安戸も江戸時代には和紙の市が立ち、宿地区は江戸から秩父へと通じる幹線路であった秩父往還の宿場町として栄えた。本稿では帯沢地区の氏神である身形神社を調査した。内容は次のとおりである。

(2) 身形神社―東秩父村安戸 872 (安戸帯沢)

身形神社は、県道 11 号線から南西へ 500 メートルほど入った小高い場所にあり(写真 8-5)、帯沢地区を一望することができる。社殿には妙見宮の額が掲げられ(写真 8-6) 静謐な雰囲気漂う穏やかな社である。神社の本殿を囲む社叢(森)の中にある大スギは御神木として地元の信仰を集めている。本殿前の境内には、並んで立つ高さ 1～2 メートルの 3 本の石棒(写真 8-7) が祀られている。身形神社の御神体である妙見は、一説には秩父神社の姉妹にあたるといわれ、秩父三姉妹伝説(三姉妹伝説の伝えられる神社については諸説あり)の 1 人と伝えられている。

身形神社の御神体(妙見立像)の像容について、若松は「岩座の上に立つ、高さ 20 センチ前後の木彫彩色立像であり、左手に蓮華を持ち、右手は施無畏印を示していた。また面相は温和かつふくよかであり、金銅製らしき宝冠を戴き、宝珠の付く輪光と天衣を伴っている。観音像との類似性もあるが、先の反り上がる履を履き、袖の長い袍の上に腰甲らしきものを付けている点が相違している。髪型が確認できていないが、女性的な御姿の天部である。」(若松 2011 29)と述べている。安戸に隣接する東秩父村御堂にある浄蓮寺住職・奥澤文請氏も、身形神社の御神体は妙見神立像であり厨子の後側に「天明二寅 天 成福寺」と書かれていると述べる(2014 12 5)。身形神社では御神体を修理に出していたため拝覧することはできなかったが、護守聖司氏(身形神社氏子総代 1942 年生)に写真を見せていただいた。彩色が施された色彩豊かな像であり唇の朱が印象的である。若松が述べているように天部であろうと思われる。本殿には御神体として別に鏡も祀られていた。

成福寺については、護守氏によると「身形神社の御神体の台座裏に記された『成福寺』は、今は廃寺となっているが元は真言宗の寺で薬師堂(身形神社から徒歩 5 分ほどの帯沢地区にあり今は無人となっている)の辺りにあったといわれている。成福寺の物はみな薬師堂が引き継ぎ、現在は檀家だった 13 人が薬師堂を管理している」とのことである。

『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』(埼玉県神社庁神社調査団 1986)作成のために、当時の調査申告者である身形神社責任総代の山崎平太郎氏が神社庁に提出した身形神社についての「昭和 58・59 年神社庁調査申告控」によると、通称名を妙見様とし「この山中に宗像三女神(福岡県宗像大社の御祭神)、海の守り神と申し上げてもよい神様が祀られて居る」と記され、宗像三女神と妙見との関連を示唆している。神体については、現在の御神体として鏡と女神立像、法体神像、神体に準ずるものとして石(約 1 キログラム)、その他に 3 本の石棒と記されていた。この石は、若松の述べる「長径二十センチメートルほどの石皿の中心部に赤く塗った細い角棒を貼り付けた形代」で、「境内の社殿前方に据えられている〔3 本の〕石棒と対をなすもの」(若松 2011 29-30)であろう。棟札には「天下泰平」「国土安穩」「郷

中繁盛」「五穀成就」と記されており、地域の人々の身形妙見への祈りは「古態の持続性を維持する」志向が認められた。氏子区域については、帯沢、宮地、下川原、松ノ木平であったが、後に「帯沢、下川原、松ノ木平の字を一括して大字安戸帯沢区と云う」と記されている。妙見が祀られていた地域を宮地と称する場合があるが、今の帯沢地区辺りにも宮地という小字名が存在していたことが分かる。

現在、身形神社では毎月 28 日に行ってきた月次祭も行われなくなり、代わりに毎月最終日曜日に神社の掃除を実施するなど徐々に簡素化されるようになった。高齢化・少子化の影響で以前のように執り行うことは難しい状況であるという。

筆者は 2015 年の春祭りと夏祭りに参加した。祭りの後の直会では御神酒と豆腐と弁当がふるまわれた。直会の会場には、床の間に大きな金精様（木製）が飾られ、別室には磐裂神の掛け軸が掲げられていた。祭りの内容は次のとおりである。

【春祭り 2015 年 3 月 3 日】

午前 10 時、普段無人の拝殿が開け放たれ、氏子役員が清掃・準備を行った拝殿に宮司、氏子役員、奏楽者、他の参加者 7 人が参集し、神職 2 人で祭典を執り行った。宮司は、祭典の途中で参拝に訪れた近くの保育園児たちのすぐ近くまで進みお祓いを行った。園児たちは頭を垂れ神妙な様子である。この祭祀は「星祭り」でもあり、星祭御札が授与される。奏上が述べられ、奏楽、玉串奉奠が行われ 30 分ほどで終了した。祭典終了後は直会となる。この祭りは豊作を祈願する祭りであるが、現在では新入学の祈願祭も兼ねている。氏子地区で今年は新入学児童が 1 名あったがこの春祭りには出席しなかった。

かつて「この日は『どうする日待（どうするびまち）』ともいわれ、年度替わりに当たっていたため、奉公人が祭りに合わせて里に帰り、『奉公またいくのかよ、どうするよ』と思案したものだという。当時の奉公先は、男なら紙屋、女なら秩父の機屋が多かった」（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1426）そうである。

【夏祭り 2015 年 7 月 20 日】

夏祭りは「悪疫退散を祈願する祭り」で、お祇園（オギオン）とも呼ばれている。神輿がないため村を祓う行事は行わない」（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1426）。宮司、氏子役員、奏楽者、他の参加者 10 人ほどが本殿に参集し、午前 10 時から祭典が執り行われた。奏上が述べられ、奏楽、玉串奉奠が行われ 20 分ほどで終了した。

Ⅲ－3 生産神として地域振興の育成に係る妙見

1 秩父神社の「御田植祭」と「秩父夜祭」

秩父地方では今も数多くの祭祀や民俗行事が伝えられている。本稿では、鎌倉時代末期から江戸時代まで妙見宮と称されていた秩父神社で行われる祭祀の中から「御田植祭」と「秩父夜祭」を調査し、祭祀の中にみられる妙見の特徴を明らかにした。

「御田植祭」「秩父夜祭」という二つの祭りの中で共通して重要な位置を占めているのは「水口の竜」といわれる新藁で作られた竜の存在である。この「水口の竜」が核となった二つの祭りは、秩父地方の 1 年を単位とした次のような譚を地域に伝えている。

4月4日、「御田植祭」の日に秩父神社入り口の大鳥居前を神田入り口に見立て、ア一チ形の木製の枠に長さ約5メートルの新藁が巻きつけられたものが設置される。「水口」と称するこの藁は「水口の竜」といわれ、竜頭尾が分かる竜の形状をしている（写真8-8）。この水口の竜を中心に行われる予祝神事が「御田植祭」であり、神社境内の敷石を神田に見立て、神歌を歌いながら模擬水田耕作が行われる。「御田植祭」が終わると、この「水口の竜」は11月まで秩父神社で祀られ保管される。そして豪華な屋台行事が繰り広げられる「秩父夜祭」本マチの12月3日に、大真櫓を立てる櫓樽（神籬神輿）に巻き付けられ（写真8-9）、神輿・笠鉾・屋台の神幸行列とともにお旅所〔大祭の3日の夜に6基の山車が終結して神事が行われる場所。この日に限って「お山」とも呼ばれる〕へ供奉し、亀の子石脇に奉安される。

春の「御田植祭」と冬の「秩父夜祭」という季節の対をなす二つの祭りは、一説には、武甲山（妙見山）の山の神が竜神となって春に里へ下りて人々に豊かな稔りをもたらし、冬の初めに再び山へ帰るという日本の伝統的な祭祀形態を伝えるものであり、「祖先から連綿と伝えられ、人々に豊かな稔と幸福をもたらしてきた神事」（秩父神社社務所2016）であるという。「水口の竜」はこの譚の核となる存在である。

「御田植祭」に登場する今宮神社は、秩父神社から西へ600メートルほど行った秩父市中町に位置しており、埼玉県神社庁ホームページで伝えている概要は次のとおりである。

今宮神社は古代より龍神池と言われる霊泉があり、ここに伊邪那岐・伊邪那美の二神が祀られていたが、大宝年間（701～714年）役行者が飛来し、神仏混淆を旨とする修験の教えを広めるとともに八大龍王⁽⁶⁾を合祀した。八大龍王神は「水」をつかさどる偉大な神である。毎年4月4日に行われる水分（みまくり）神事では、今宮神社から秩父神社に「水麻^{みずぬさ}」が授与され、この「お水」が御田植祭に用いられる。この「お水」で育った稲が秋になり無事収穫されたことの喜びとともに、感謝の気持ちを込めてこの「お水」を再び武甲山に戻すお祭り、それが12月3日に行われる秩父神社の「秩父夜祭り」である（埼玉県神社庁：<http://www.saitama-jinjacho.or.jp/2016.2.28>）。

また「御田植祭」の準備について、『新編武蔵風土記稿』には「妙見の神事二月三日を田植の祭としてそれまでは女の業絹・木綿など織ることをせず、往古よりの風俗なりと云」（蘆田 1996 186）とあり、「御田植祭」の前10日あまりは、近在の農家が仕事（糸引き、機織り、農耕作業）を控えて日常の生活を慎み、祭りの準備のために過ごすこととしている。また、1709年2月に書かれた「忍藩秩父領百姓年中業覚」は秩父領の百姓（農民）の1年間の暮らしをひと月ごとに箇条書きにしたものであるが、その中にも、旧暦2月3日と11月3日（現在の3月3日と12月3日）の妙見の神事の前2週間は農耕作業や機織などを避けるようにと記され、祭りに備える気持ちが並々ならぬものであることを表わしている。

2 秩父神社「御田植祭」（4月4日）

秩父地方の「御田植祭」について栃原嗣雄は『秩父の民俗』の中で次のように述べている。

秩父の御田植祭りは、三月三日秩父市上蒔田の棕神社と、四月四日秩父神社の二か所で行われる。／御田植祭りは、その年の稲の豊作を祈る神事なので古くからの稲栽培地帯には、広く分布しているようである。／しかし内容的には年の初めに予祝として行う田遊び、春鋤、春田打などのように、芸能化されたものや、実際に田植の季節に神田などに植えるもの、境内を神田にみたと、模擬的に行うものなどいろいろある。秩父の田植祭りは、季節に先がけ予祝的に行うもので、境内に注連縄を張りめぐらし神田とみたと、実際の農耕順序に従い、苗代に水を引き入れ、種籾を播き、本田の収穫までの所作を田植歌を歌いながら模擬的に行うものである（栃原 2005 70）。

秩父神社「御田植祭」は 2009 年に埼玉県無形民俗文化財に指定されたが、その起源について、『日本民俗芸能事典』に「いつごろからこの神事がはじまったのかは未詳。万治 2（1659）年の『秩父大宮妙見宮縁起写』が記録に現われる田植神事の初見であるが、その内容についての詳細は不明である。天保年間（1830～1844）には現在と同じ形式で行なわれていたようである。」（文化庁 1976 233）と記されており、約 200 年前には現在の形式で執り行われていたことが分かる。しかし 1986 年に行った埼玉県神社庁神社調査団による『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』には、秩父神社「御田植祭」について次のような記述がある。

この神事は元来、市内蒔田の棕神社において古代から連綿と伝えられてきたものであった。ところが、永禄 12（1569）年の武田信玄の焼き討ちにより同社が衰微し、この神事を続けることができなくなったため、棕神社氏子中の願い出により、元亀 2（1571）年以降当社で行うようになったものである（埼玉県神社庁神社調査団 1986 1228）。

この資料から、秩父神社「御田植祭」は、1571 年頃始められたということが分かる。また棕神社「御田植祭」は、信玄の焼き討ちの後「明治維新を迎えるまで中絶のやむなきに至った」（浅見 1975 76）という。現在は秩父神社と棕神社の両神社で行われており、稲作の過程を儀礼化した豊作の予祝として古式豊かな形式で始められ、その後も「秩父夜祭」のような華やかな付祭りを伴わず行われてきたといえよう。

秩父神社の「御田植祭」の具体的な祭りの進行は次のとおりである。

四月四日、神社境内の敷石を神田に見立て、苗代作りから種蒔き、田植え、収穫までの模擬水田耕作が、神歌を歌いながら行われる予祝祭事。…（中略）…秩父中央地区農家組合の人々十二名が神部（白丁）となって奉仕する。…（中略）…〔神事に当たっては、まず五穀豊穡を祈る祭典があり〕、午後一時三十分、神官、笛、太鼓を鳴らす楽師に先導されて神部らが行列で西方の今宮神社へ「お水乞い」に行き、水幣に水神を憑依して頂く。順路を替えて戻ると、鳥居下に飾った蛇縄〔藁の竜神〕の鎌首の下に水幣を立てる。次いで白丁たちは社殿内で米飯・煮豆の供応を受ける。神官二名が「ささら」を摺りながら呪歌〔祈祷の場を清めるために唱える歌。また、福を呼び込み、災いや魔物を避けるために唱える歌〕

を歌い、竹筒を使って坪割り擬態を演じる。終わると神田に出る（藺田稔監修 2005 24）。

次に、2016年の秩父神社「御田植祭」について、妙見を中心とした視点で述べていく。現在「御田植祭」は、秩父中央地区農家組合が核となり組織された御田植保存会（47名）を中心として行われている。

3 2016年4月4日の秩父神社「御田植祭」

本殿の下両脇に注連縄を張り、長い参道（長さ15間＝約27.3メートル、幅2間＝約3.6メートル）を、南北に長方形をなす神田（御田代）に見立て、祭場とする。この祭りの中で「御田植神事」の様々な所作を行う人を神部と称する。神部は、氏子農家を中心とした御田植保存会会員から選出されるが中には農業に従事していない人も含まれる。以前は1年12月を表し12名が選出されたが今回は22名であった。神部は白丁という白い装束、白いわらじ、菅笠をつけ、竹製の鍬を手にしている。この鍬は田をならす道具で、秩父神社で作られ、代掻き（水田に水を引き入れ土を砕きならして田植の準備をすること）の場で使用する。22名の神部の中から神事の主演となる作家老が1名選ばれる。作家老は黄色い衣装を纏い、先頭で伝統的所作を披露する。

御本殿の儀：13時～13時30分。本殿で秩父神社神事が行われる。宮司以下の神職と作家老が昇殿し、作家老は最後に水分の神の分霊の依代となる水幣を受ける。21名の神部は境内に並べられた椅子に座り神事に参加する。

御神幸行列（往）：13時30分～13時45分。「①先導大麻 ②水幣（作家老）③太鼓（2名で担ぎ、1名が太鼓打ち）④笛（楽人）2名 ⑤唐櫃（2名で担ぐ）⑥神職 ⑦神部全員」（秩父神社社務所 2016）の順に列をなし、秩父神社から今宮神社へ向かう。

水分神：14時～14時30分。今宮神社で、今宮神社宮司により水幣に水分の神の分霊が憑依される。これで「田作りの水が戴けた」（秩父神社社務所 2016）ことになる。

直来：14時30分～14時45分。今宮神社でお神酒と塩を添えた大根の薄切りを神部以下全員に配る。この大根は秩父神社が今宮神社へ届けたお供物で最初に神前に供えることから、神人共食の意味合いがあり、神事後、参加者全員に振る舞われる。

御神幸行列（還）：14時45分～15時。来たときと違う道を通り、今宮神社から秩父神社へと帰還する。秩父神社に到着すると、秩父神社入り口大鳥居前の「水口の竜」の鎌首の下に水分の神の分霊が憑依した水幣を差し立てる。これで神田に水が満たされたことになる。実際に今宮から水を汲んでくることはしない。

坪割神事：15時～15時30分。神部全員が昇殿し、白飯・煮豆の供応を受けた後、本殿で坪割神事（稲の作付けの目安を立てる儀礼）が行われる。

御田植神事：15時30分～16時。作家老に続き21名の神部が、神田に見立てた細長い参道を何度も往復しながら、「田仕事の相談、苗代づくり：田打ち・くろぬり（畦ぬり）・代掻き・田ならし・種蒔まき、本田づくり：田打ち・くろぬり（畦ぬり）・

肥料まき・代掻き・田ならし・田植え・餅まき」の順に田仕事の所作を行う。演技中は田植唄が歌われる。「種蒔まき」の際に使用する種蒔は、6月の「神饌田御田植祭」で植えた苗を秋に収穫し、12月の「秩父夜祭」の新穀奉獻祭、例祭で供えた稲穂が使われる。この種蒔は再び御神田に作付けされる(秩父神社社務所 2016)。

御田植神事では音頭とりのもと、太鼓を鳴らしながら神部全員で田植唄を繰り返し歌い、それに合わせて順番に田植の所作を行う(写真 8-10)。田植唄は田の神を讃え豊作を願うとともに大変な作業への慰みでもあった。歌詞は次のとおりである。

御代ノ永田ニ 手ニ手ヲ揃ヘテ 急ゲヤ早苗 手ニ手ヲ揃ヘテ
一本植ウレバ 千本ニナル 神ノミタマノ 御年ノ苗 (秩父神社社務所 2016)

田植唄の最後の歌詞「神ノミタマノ 御年ノ苗」の箇所は、江戸時代まで「とーとーほーしーのたーね」であった。「星から頂いた種蒔は一粒が千粒になると唱ったのであるが、この歌詞は明治初年『かみのみたまのとしのな一え』と改められた。『とーとーほーしー』が北斗・妙見神を意味していたからであろう。これが星霊＝穀霊信仰を反映する祭りであったと思われる」(千嶋 1989 28-29)と解釈する説がある一方、「とーとーほーしー」は「トウトウボシと呼ぶ中国伝来の品種名か」(栃原 2005 80)、「大切な忌種の意を唄い込んだものであるか。またハウシとは二十四節気の一、芒種の転訛であるかもしれない(柿界欣一郎氏教示)」(浅見 1975 75)とする説もある。

4 秩父神社「秩父夜祭」(12月1～6日)

「秩父夜祭」は、毎年12月1～6日に行われる「秩父神社例大祭」で、この6日間に秩父神社で行われる祭祀は次のとおりである。

- 1日：御本殿清浄の儀 例大祭奉行祈願祭
- 2日(宵マチ)：御神馬奉納の儀 新穀奉獻祭 番場町諏訪渡り
- 3日(本マチ)：献幣使参向例大祭々典 御神幸祭 神幸行列進發御 神輿發御
御斎場祭(御花畑御旅所) 御神輿還幸
- 4日：蚕糸祭
- 5日：産業発展・交通安全祈願祭
- 6日：新穀奉獻感謝祭、併せて例大祭完遂奉告祭

この他、2日と3日に付祭りとして六つの屋台町(中近、下郷、宮地、上町、中町、本町の6町会)による豪華な6基の山車(屋台4台、笠鉦2台)が曳行され(2日は4基の屋台のみ)、屋台行事が繰り広げられる。この日のために各町の人々は何か月前からその準備のための日々を過ごす。

6基の山車は、1962年に国の重要有形民俗文化財に指定された。そしてこれらの山車で行われる屋台行事(笠鉦・屋台の曳行、屋台囃子、屋台芝居、曳き踊り)と秩父神社神楽は1979年に国の重要無形民俗文化財に指定され、2016年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。秩父神社宮司・藺田稔は、秩父神社社報「柞乃杜」第11号「秩父の風土と『夜祭』」の中で「秩父夜祭」について次のように述べている。

いま全国に知られる「秩父夜祭」を、地元の住民たちは端的に「冬まつり」と

言う。また近郷近在では「妙見まち」、北関東一帯の養蚕農家では「お蚕（カイコ）まつり」、そして東北から関東一円の露天商は「妙見さんの大市（タカマチ）」と呼び慣わしてきた。こうした通称はそれぞれ、この祭がもつ性格をよく表しているが、正式には、いうまでもなく埼玉県秩父地方の総鎮守、秩父神社の年に一度の大祭である。〔中略〕この大祭を彩る祭礼行事は、〔中略〕いずれも秩父神社の神幸祭にともなう「付け祭り」、つまり付帯の神賑わい行事として江戸時代の中期から明治・大正にかけて地元各町が盛んにしたものにはかならない。

そして、その核心をなす祭神出御の神事は、はるか古代に発祥した地元風土の神を祭る形式を今に伝えるはなはだ貴重な伝承祭祀なのである（藺田 1994 4）。

また千嶋は、付祭りの始まった時期について「“屋台の発生＝付祭りの起源”と考えた上で、その発生時期を正徳2（1712）年から享保の初期頃（1722）までの十年間であろう」（千嶋 1981 252）としている。

「秩父夜祭」は、秩父の総鎮守である秩父神社の霜月大祭という神幸祭（信仰行事）が根底にあり、近代に地元各町が中心となった芸能・娯楽的性格を備えた付祭り（神賑わい）、屋台行事が盛んに行われるようになり、現在の大掛かりで華やかな「秩父夜祭」の形式ができあがっていった。本来の神迎えという神幸祭がいつ始まったかということについては諸説あるが、屋台や笠鉾による華やかな付祭りを伴う形式になったのは、前述の資料から1700年代半ばと考えられる。現在の付祭りの形式は、寛政の改革のころ派手な付祭りが禁止されたが、江戸時代後期に復活し、その後、地元住民が作り上げてきた形式といえる。付祭りには次のような背景もある。

江戸末期から明治にかけて、秩父地方の名産「秩父銘仙」が絹織物の人気ブランドとして全国的に広まり、盆地の街道沿いのあちこちで絹市が開かれた。「年間を通して六歳市が開かれ、これによって近世農民の経済生活が支えられていた」（千嶋 1981 198）。中でも霜月大祭で行われる「妙見さんの大市（タカマチ）」は盛大で、「お蚕まつり」ともいわれ多くの人で賑わったことから、大市に合わせ、付祭りが充実していった。千嶋は「秩父夜祭」は「付祭り＝産業振興祭という性格がはっきりうかがえる」（千嶋 1981 9）と述べている。祭りはその時代の経済構造を反映する一面を持つと考えられるが、「秩父夜祭」の付祭りは、近代の秩父において織物産業をバックアップし、産業都市としての発展に大きく貢献する役目を果たしたといえる。時代の流れとともに織物産業は衰退していったが付祭りを伴う「秩父夜祭」は、今も京都の祇園祭、飛騨の高山祭とともに「日本三大曳山祭り」に数えられる華やかな祭りとして全国に知られている。

また「秩父夜祭」には、地域住民に好意的に受け入れられ語り継がれている次のような譚がある。

神社にまつる妙見菩薩は女神さま、武甲山に棲む神は男神さまで、互いに相思相愛の仲である。ところが残念なことに、実は武甲山さまの正妻が近くの町内に鎮まるお諏訪さまなので、お二方も毎晩逢瀬を重ねるわけにもゆかず、かろうじて夜祭の晩だけはお諏訪さまの許しを得て、年に一度の逢引きをされるというの

である。〔中略〕二日の晩に「お諏訪渡り」と言って、神幸路の途中にある諏訪社に予め神幸祭執行を報告する神事があり、翌三日の晩には、神幸行列を先導する六台の笠鉦と屋台も、この諏訪社に近い地点を通過するときには屋台囃子の鳴りをひそめて静かにする例が守られている（秩父神社：<http://www.chichibu-jinja.or.jp/2015/4/14>）。

「秩父夜祭」については、祭りの成り立ちや運営、屋台などを対象にした数多くの先行研究がなされている。本稿では行事の概要についての記載は最小限に留め、2015年の調査について、妙見を中心とした視点で述べていくこととする。筆者は、6基の山車（中近・下郷笠鉦、宮地・上町・中町・本町屋台）のうち妙見に縁があるという宮地の屋台について、組立、祭りに係る行事、2日と3日の屋台曳行について調査を行った。宮地屋台は六つの屋台町の一つである上宮地、中宮地、下宮地の3町連合で管理されており、普段は収蔵庫に厳重に保管されている。屋台収蔵庫は秩父神社から東へ1キロメートルほどのところに位置する愛宕神社（秩父市中宮地）境内にあり、宮地屋台保存会が所有している。愛宕神社は清々しい雰囲気漂い、氏神として地域の人々に慕われている様子をうかがうことができる。

5 2014年・2015年12月の秩父神社「秩父夜祭」

A 準備（2015年11月29日）

【宮地屋台の組立】

秩父の屋台のうち、最初にできたのが宮地屋台で格調高い雰囲気を持つといわれる。宮地屋台について、「秩父夜祭」の際に配布される「宮地屋台と秩父歌舞伎」と題した1996年のプログラムには「宮地町はその昔、宮地と言う名前の示すとおり、妙見大菩薩が祀られていたという伝承を持ち、高張提灯と日月万灯一對を奉持して御神幸の先頭に立つこと。お旅所の屋台配置で最右翼に位置すること。三番叟の祝儀曲を踊ること。大祭当日、神社境内で歌舞伎の上演をする等々の特権を有す屋台である」（宮地屋台保存会 1996）と記されている。三番叟について、浅見は「宮地では三日の早朝町内を曳き出す際、屋台蔵のある愛宕神社境内で一回、秩父神社境内に曳きつけて一回、御斎場において一回、かならず三番叟を奉納する取り決めになっている。これを宮地の三々番という」（浅見 1975 236）と述べている。

屋台については、多くの詳しい先行研究、調査報告があるので、ここでは説明を省略するが、2015年12月の組立作業や屋台曳行の場で、宮地にお住まいの宮地屋台関係者から、妙見に関して古くから伝わる次のような話を伺うことができた。

- ・地域に病疫、凶作が続いたため宮地屋台が船出して蓬莱山（不老長寿の仙人がいるという）を目指したのが始まりで、流れ着いた先は蓬莱、すなわち八代妙見であった。そのとき船を支えたのが15匹の亀で、『腰支輪の波に百態の亀の彫刻』といわれるように、屋台の腰支輪には波に漂う100匹の亀が表されている。
- ・屋台の4枚の襖は、波に大きく描いた日の出の図柄で、前幕を巻き上げると正面に太陽が出てくる構造になっており、昼の部と夜の部の2組を有し星辰信仰に通

じる。

- ・老亀の描かれた前幕を巻き上げると、屋台下段の竜の彫刻と合体し玄武となる（写真 8-11）。
- ・日月万灯は宮地のみに伝わる日月一對の万灯（日月の作り物）である。12月3日の早朝（午前5～6時頃）、15人ほどで愛宕神社を出発し秩父神社境内の宮地屋台を置く箇所はこの日月万灯を立ててくる行事があり、これは妙見に由来するといわれる。朝は「右側（東）に日（太陽）、左側（西）が月」、夜は「右側（東）に月、左側（西）が日」となるように置く。3日夜の神幸行列では、先頭の先導大麻、大櫛、猿田彦の次に日月万灯が続く。
- ・三番叟は物事の始めということで、天下泰平、五穀豊穡を寿ぐ踊りである。

B 宵マチ（宵宮）（2014年・2015年12月2日）

秩父神社の行事「御神馬奉納の儀」「新穀奉獻祭」「番場町諏訪渡り」と、付祭りである4基の屋台曳き回しが行われ多くの観光客で賑わった。この日の特徴ある行事はお諏訪渡りである。

【お諏訪渡り】

お諏訪様は秩父神社から徒歩5分ほどの所にある広い駐車場の一角（番場町にある市場の跡地）に祀られている（写真 8-12）。「お諏訪渡り」は、実際は祭りが無事に終わるように祈りを捧げる神事であったが、その内容が入れ替わり江戸時代からおもしろおかしく伝えられ、現在では前述した姿の話が広く伝えられている。

19時、番場町会所前（秩父神社鳥居前の妙見通りを渡り、少し進んだ所）に番場町会役員、関係者、市場関係者、屋台町会代表者など100人ほどが集まり、高張提灯、神職を先頭に行列となって、太鼓・笛を奉奏しながらお諏訪様に向かって進んでいく（写真 8-13）。19時10分頃からお諏訪様の前の祭場で祭典が厳粛かつ盛大に行われた。秩父神社の神職3名が、お諏訪様へ祝詞を奏上し、各屋台町代表者による玉串奉奠の後19時35分に終了した。その後は直来となる。

C 本マチ（2015年12月3日）

【宮地屋台出発】（宮地の愛宕神社→秩父神社）

8時20分に愛宕神社の倉庫が開けられ、8時30分からの式典の後、境内で三番叟を奉納し10時に出発した。秩父神社到着までの間、町の辻などに屋台を止め7回の「曳き踊り」を行った。7回行うのは北斗七星に通じるとも七ツ井戸にそれぞれ奉納するともいわれる。13時、秩父神社に到着し宮参りを行う。秩父神社神門前で三番叟奉納（写真 8-14）後、神楽殿の方へ移動し19時の曳行行列出発までの間境内に待機する。

【神幸行列・山車の曳行】

17時頃から秩父神社は入場規制となり、17時30分に神幸行列が出発した。

先頭は、神の依代となる紙垂をつけた大櫛である。その根元には4月に秩父神社で行われた「御田植祭」の時の藁の竜が巻きつけられている（写真 8-15）。大櫛に続くのは道案内役の猿田彦、宮地町の日月万灯、楽人、錦旗、妙見様の化粧箱である御手箱、太刀箱の列である。次に氏子各町の供物と高張提灯の行列。御神饌、大幣束に

続き神霊を遷した神輿、秩父神社の宮司や神官、氏子の大総代、市町村長など。しんがりを2頭の御神馬がつとめる（藺田稔監修 2005 46）。

18時15分に中近屋台、18時55分に宮地屋台が秩父神社を出発し、続いて下郷笠鉾も神社前を通過した。その動きは海に出た八幡船に例えられ、常世の国へ向かって船出するかのような豊かで優雅な雰囲気を漂わせている。昼間に見る屋台・笠鉾からは想像できない情景である。19時頃からたくさんの花火があがり、祭りをいっそう盛り上げている。

神幸行列、屋台・笠鉾は、2時間ほどかけて市内の大通りをゆっくりと巡行し、お旅所へ向かう。地域住民や観光客はその光景を見ながら市内を歩き回りあちこちで声援を上げる。21時10分、最後の屋台が団子坂の角を曲がりお旅所へ到着すると、6基の山車が斎場を中心に扇を開げた形で勢ぞろいし華やかな光景が繰り広げられた。

22時になると入場規制で自由に出入りすることができなくなったお旅所が開放となった。斎場には「亀の子石」が祀られており、その背中に神霊の宿る大幣束が立てられ神輿が安置されている。これは妙見神が出現したことを表しているという。その横には神馬がつながれ、根元に藁の竜が巻きつけられた大櫛が安置されている。幕に囲まれた斎場の中で神楽奉納、玉串奉奠など神事がおごそかに執り行われた。神事終了後、来場者は大櫛の紙垂をつけた枝を奪い合う。この櫛は縁起物として1年間大切に家に飾るそうだ。養蚕が盛んなころには、この大櫛に繭の豊作を託したものだという。屋台では、最初に宮地屋台が三番叟を奉納し順次舞が奉納された。

23時20分頃、中近屋台を先頭に6基の山車が順次お旅所から降りていった。宮地屋台は4日の午前3時頃愛宕神社に帰還したという。午前10時頃から、80人ほどで屋台の解体が行われた。

IV 現在の秩父地方における妙見

IV-1 秩父地方における妙見への意識—聞き書きを中心に

これまで秩父市中宮地の関根家とその地域に伝わる妙見、秩父地方に伝わる「秩父七妙見」、秩父神社の祭礼「御田植祭」と「秩父夜祭」を調査してきたが、ここでは秩父地方の人々の妙见到に係る意識を民俗の視点から探してみる。

【秩父市上宮地・中宮地・下宮地に伝わる妙見】

2015年6月27日に、「妙見塚」を守り伝えている関根家（秩父市中宮地）を訪問し、秩父市宮地に伝わる妙见到についてお話を伺う機会を得た。

＜語ってくださった人＞

関根一一氏（関根家当主、1943年生）

関根トキ江氏（関根一一氏の妻、1947年生）

加藤喜男氏（関根一一氏の親戚、1933年生）

- ・〔「妙見塚」に太く美しい注連縄が掲げられていることについて〕「妙見塚」の祠の注連縄は志木（埼玉県志木市）の農家の人が作って届けてくれたため、勝手に新しいものに替えられずそのままにしてある。祠の中には丸石のご神体を認めることができるが、どこかに金精様のような形状のご神体があるといわれている。

- ・夜祭で屋台を倉庫にしまった途端に大雨になった年があるが、屋台がぬれずにすんだのは妙見様のおかげといわれている。
- ・大雨で屋台に上ることができなかった年は「妙見塚」にお参りしなかったからだというエピソードもある。
- ・関根家では、体調がすぐれないときや子供の受験、気の迷いなどの際には「妙見塚」に参詣した。子供たちも小さなころから願い事があると必ず「妙見塚」へお参りした。一族のものは今でも受験のときには必ずお参りにやって来る。
- ・今 70 歳代の人からは、戦後しばらくの間、近所の人も神社の代わりに「妙見塚」に参拝したという話を聞く。
- ・江戸時代には 5 人組制度があり 5 件の家で女性だけの妙見の祭りを行っていた。次第に近所の人も参加するようになり、1965 年頃までは「妙見塚」の前で 4 月 15 日に妙見祭を行い、15 人くらいでお日待ちをし、秩父神社からいらした神職が「妙見塚」を拝んでいた。
- ・夜祭は正月が 1 年に 2 回あるといわれるほど大掛かりなものだ。夜祭が終わるまで針仕事はしないといわれるが、これは祭りの準備で女性がいかに大変かということを表している。夜祭が終わると秩父の冬が始まる。

【身形神社のある東秩父村安戸帯沢地区】

- ・夏祭りはオギオンともいわれる。身形神社は八坂神社も合祀しているが、八坂神社は身形神社の境内にはなく安戸地区の別の場所にある。オギオンは、悪疫退散を祈願する祇園祭が起源だが今は身形神社の祭りとなっている。昔は神輿があり、山車も出たというが、いつごろのことか分からない。今は神輿がないので祭典のみが行なわれている。前日のお籠もりも行われなくなった。（身形神社氏子総代の護守聖司氏、2015. 6. 18）
- ・集落は全員で 100 人位であり独り暮らしが多い。帯沢地区では桃などを生産しているが、今は勤め人がほとんどである。身形神社は帯沢地区の中心に位置しており、帯沢川には、昔、妙見淵という地元の人に親しまれている水のきれいな場所があった。夏には大人も子供も喜んで飛び込んだり泳いだりしたものだ。妙見淵には大きな石があったが工事で壊され今はなくなってしまった。帯沢川は昔から水がきれいで、たくさんのアユがとれる。（帯沢地区にお住まいの Y 氏、2015. 7. 20）

【その他妙見に係ること】

- ・夜暗くなると、秩父神社本殿の屋根の真上に北極星が輝くのを見ることができるが、これは星の信仰に通じるのではないか。（秩父神社神職、2015. 11. 28）
- ・番場通りは何故か後家が多いといわれ、子供のころから母親や祖母が番場通りを「後家通り」と呼んでいた。理由は、番場通りは秩父神社に通じる道で、本妻（お諏訪様）のいる場所から 1 本ずれており、妙見様が本妻でないからだといわれる。（番場町にお住まいの 50 代女性、2015. 12. 2）

IV-2 秩父地方に伝わる妙見の現代的意義

ここまで現在の秩父地方における妙見の信仰体系の中の三つの要素「屋敷神的要素」、

地域の「氏神的要素」、「生産神的要素」を視点とし秩父地方に伝わる妙見について調査を進めたところ、現在の秩父地方の妙見には、「古態の持続性を維持する」志向と、妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する様相を認めることができた。

まず今回調査した三つの要素の調査内容から述べる。

一つ目の「屋敷神的要素」については、秩父市中宮地にある関根家の敷地内に祀られている「妙見塚」とその周辺地域に伝えられる妙見を調査した。その結果、「妙見塚」は関根家の屋敷神的な存在であり、現在も守り伝えられているとともに、地域の人々からも大切な存在として意識されていた。それは「秩父夜祭」に備えて「妙見塚」の前に幟旗を掲げたり、本マチの早朝、屋台関係者が祭りの無事な成就を願い参詣したりするなど「秩父夜祭」の重要な祭祀を担っていること、秩父地方の妙見の中心である秩父神社とも密接な関係を保っていることなどに表れている。またこの辺りの宮地と称する一帯には、妙見菩薩が秩父神社に奉斎されるときに渡って行ったとする「妙見七ツ井戸」が伝えられ、豊かで清潔な湧水が生活用水に使われているとともに妙見に由来する譚も伝えられていた。

二つ目の地域の祭神としての一面を持つ「氏神的要素」については、秩父地方の妙見の中心である秩父神社を災いから守るために祀られたと伝わる「秩父七妙見」の一つ、身形神社を調査した。明治時代の神仏分離まで妙見社といわれた身形神社は、静謐な雰囲気漂う穏やかな社であり、厄災消除、五穀豊穡という「古態の持続性を維持する」志向が代々引き継がれ、地域の人々が集まるための地域の求心力となっていることがうかがえる。御神体についても、寺院に伝えられていたことがほぼ確実である天部と思われる妙見立像を、地域の人々の協力のもと、神社の御神体として丁重に祀り保存し伝えている様子は、神仏混淆の時代の妙見をそのまま伝えているということであり、妙見に対する地域の人々の意識は以前と変わらず、そして今後も守り伝えていく心意気が伝わってくる。

三つ目の「生産神的要素」については、秩父神社で行われる祭祀「御田植祭」と、「お蚕祭」ともいわれた「秩父夜祭」を調査した。この二つの祭祀に係る人々は、現在、秩父市内で農業や商業、加工業等、主に生産業に携わっており、妙見への祈りは生産神への祈りとなっている。

次に三つの要素「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の相互関係について述べると、この三つの要素は、互いに影響し合う一面を持っていた。それは「秩父夜祭」の中で「屋敷神的要素」である「妙見塚」に係る祭祀「『妙見塚』の幟立て」「本マチ早朝の『妙見塚』への参詣」が行われている点や、「御田植祭」「秩父夜祭」の中に地域の氏神としての要素が含まれている点である。また「妙見七ツ井戸」から湧き出る伏流水は農業や生活用水に使われており、妙見は、生産神に係る神である農業神としても信仰されている。生産には水が重要な位置を占めるが、「御田植祭」は、伏流水、水脈、竜水などに象徴される水神の存在にも関わっていた。

以上の調査を踏まえ、現在の秩父地方の妙見を概観すると、次の二つの様相が認められた。

一つは「古態の持続性の維持」、もう一つは生産神としての妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する妙見である。

「古態の持続性を維持する」妙見は、「屋敷神的要素」を持つ妙見と「氏神的要素」を

持つ妙見の中に伝えられていた。

人々の祈願の内容について松本三喜夫は「神社が宣伝している『ご利益』をみると、〔中略〕信仰の古さや本来の意味からすれば、息災と厄除を神にお願いするといったかたちがおそらくは最も基本ではなかったろうか（松本 2015 20-21）」と述べ、祈願内容は概ね二つに分類でき、一つは厄災消除、五穀豊穡という基本的な祈りの形態であり、もう一つは人間の欲や煩悩に基づいた祈願といえると論じている。

中宮地の関根家での妙見への祈りは日常生活への身近な事柄であり、身形神社の棟札には「天下泰平」「五穀成就」など基本的な祈願が掲げられていた。「屋敷神的要素」を持つ妙見と「氏神的要素」を持つ妙見への人々の祈りは、厄災消除、五穀豊穡という「古態の持続性を維持する」志向が代々引き継がれているといえよう。

「地域振興の育成」に貢献する妙見は、「生産神的要素」を持つ妙見の祭祀の中に伝えられていた。生産神の関わりの一つに都市祭礼があげられるが、都市祭礼は人々を集客し町を観光事業化して収入増につなげ、「地域振興の育成」に大きく貢献する作用がある。

「秩父夜祭」の展開にもその作用を読み取ることができる。「秩父夜祭」は、まず妙見信仰があり、その信仰行事である神幸祭が伝統を守り伝えられているが、「秩父夜祭」を華やかに盛り上げている付祭りは絹大市に来る人を歓迎するための催しとして始められ、当時の社会情勢に影響を受けながらも秩父神社を中心に勢いを増し、産業都市としての発展に大きく貢献する役目を果たしてきた。現在は夜祭最大の祭礼行事となっている。祭りはその時代の経済構造を反映する一面を持つが、「秩父夜祭」の変遷は秩父地方の産業都市としての近代化への推移を反映してきたといえる。

おわりに

本稿では、多くの場面で妙見の存在を認めることができる秩父地方を事例とし、秩父地方に今も伝わる妙見を明らかにすることを目的とした。

秩父地方における妙見の信仰体系の中には「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」を認めることができる。この三つの要素に基づく現地調査の結果、現在の秩父地方には、「古態の持続性を維持する」妙見と、妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する妙見の二つの様相が認められた。

「屋敷神的要素」「氏神的要素」に基づく調査では主に「古態の持続性を維持する」妙見が認められ、「生産神的要素」に基づく調査では「地域振興の育成」に貢献する妙見を認めることができた。しかし「屋敷神的要素」に基づく調査では、「妙見塚」の祭祀が一部「秩父夜祭」に係るものであるなど、「地域振興の育成」に貢献する妙見との関わりも認められた。秩父地方における妙見の信仰体系の中に位置する「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の三つの要素は互いに影響し合う一面を持っているということができよう。また、生産神の関わりの一つに都市祭礼があげられるが、都市祭礼は人々を集客し町を観光事業化して収入増につなげ、「地域振興の育成」に大きく貢献する作用があり、「秩父夜祭」付祭りの展開にもその作用を読み取ることができた。「秩父夜祭」付祭りの変遷は秩父地方の産業都市としての近代化への推移を反映してきたといえることができる。

現在、妙見は秩父地方に深く根付き、地域に「古態の持続性を維持する」一面と、生産

神としての妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する一面を持っている。秩父地方の人々は好感と誇りを持って妙見を受け入れ、「秩父夜祭」をはじめ一年を通じて妙見の行事に積極的に取り組む日々を過ごしている。今後も、妙見を地域の屋敷神・氏神として尊ぶとともに、秩父神社を核とし妙見を求心力として地域振興をさらに推し進めていくことであろう。

《註》

- (1) 直江廣治は、祭祀者の範囲という観点から屋敷神を「各戸屋敷神」「本家屋敷神」「一門屋敷神」に類型化した。本論文では、本家に属する屋敷神を同族が一同となって祀る「一門屋敷神」と定義する。
- (2) 「氏神は時代により場所により複雑な変化を遂げた。現在『うじがみ』と呼ばれるものは、柳田國男によれば、①村氏神、②屋敷氏神、③一門屋敷神の三種に分けられる、という。」(『日本の神仏の辞典 2001 169)とあるが、本章では、①にあたる広義な意味での地域を守護する神と定義する。
- (3) 本章では、「漁業・商業・農業などの生産活動に幸をもたらす神霊」とされる「えびす」(『日本民俗辞典』 2006 85)に通じる福神と定義する。
- (4) 「秩父夜祭」の付祭りでは、屋台4基(宮地、上町、中町、本町の4町会)と笠鉾2基(中近、下郷の2町会)による屋台行事が行われる。本章では、屋台と笠鉾の両方を合わせて言い表すときは「山車」と表現する。
- (5) 特定の日に集まったり、あるいは籠りをしたりすること。講が組織されていることが多い(『日本民俗辞典』 2006 453)。
- (6) 竜は蛇型の鬼神で、天竜八部衆の一。わが国では水神信仰と習合して、湖沼の水神に八竜権現など、八大竜王にあやかった神格を付している場合が多く、雨乞いの神ともなっている(『岩波仏教辞典』 2002 825)。

《引用・参考文献》

- 浅賀ひろみ 2009 「秩父の祭り」と秩父屋台囃子の歴史に関する研究」(『白鷗大学論集』第23巻第2号) 399-421 白鷗大学
- 浅見清一郎 1975 『秩父 祭と民間信仰』 有峰書店
- 浅見清一郎 2013 『秩父神社例大祭屋台とその沿革』 秩父市教育委員会
- 蘆田伊人 1996 『新編武蔵風土記稿』第12巻 雄山閣
- 飯野頼治 2009 『東秩父村風土記 地図で歩く里山19コース7』 野外調査研究所
- 井上勝海 1997 「奥武蔵妙見考―我野神社・喜多川神社と秩父妙見」(『あしなな』第249号) 山村民俗の会
- 大島建彦・他編 2001 『日本の神仏の辞典』 大修館書店
- 大野満穂 1983 『秩父志』(『埼玉県叢書第1巻』) 国書刊行会
- 金指正三 2007 『星占い星祭り』 青蛙房
- 埼玉県 1988 『新編埼玉県史 通史編3』 埼玉県
- 埼玉県 1991 『新編埼玉県史 資料編14』 埼玉県
- 埼玉県神社庁神社調査団 1986 『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』 埼玉県神社庁

- 佐野賢治 1994 『星の信仰 妙見・虚空蔵』 溪水社
- 清水武甲・千嶋壽 1983 『写真集明治大正昭和秩父一ふるさとの思い出』 国書刊行会
- 清水武甲・千嶋壽 1986 『秩父路 50 年』 新潮社
- 藺田建 2014 「秩父神社の縁起について」 (秩父神社社報「柞乃杜」第 50 号) 秩父神社社務所
- 藺田稔 1994 「秩父の風土と『夜祭』」 (秩父神社社報「柞乃杜」第 11 号) 秩父神社社務所
- 藺田稔 1990 『祭りの現象学』 弘文堂
- 藺田稔監修 2005 『秩父夜祭』 さきたま出版会
- 千嶋壽 1981 『秩父大祭 歴史と信仰と』 埼玉新聞社
- 千嶋壽 1989 『秩父神社』 さきたま出版会
- 秩父市観光協会 2015 「所作・曳き踊り」 (平成 27 年 秩父夜祭解説書)
- 秩父市役所経済部観光課・彩の国ふるさと秩父観光情報館 2012 「秩父まちなか 伝説の道 妙見七ツ井戸」
- 秩父地区文化財担当者会 2001 『中世の秩父 資料集』 秩父地区文化財保護協会
- 栃原嗣雄 2005 『秩父の民俗 山里の祭りと暮らし』 幹書房
- 直江廣治 1966 『屋敷神の研究—日本信仰伝承論—』 吉川弘文館
- 中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
- 中村元・他編 2002 『岩波 仏教辞典 第二版』 吉川弘文館
- 中村孚美 1972 「秩父祭り 都市の祭りの社会人類学」 (『季刊人類学』第 3 巻第 4 号) 京都大学人類学研究会
- 林英男 2006 『精選 日本民俗辞典』 吉川弘文館
- 福田アジオ・他編 2006 『精選 日本民俗辞典』 岩波書店
- 東秩父村 2005 『東秩父村の歴史』 東秩父村
- 文化庁 1976 『日本民俗芸能事典』 文化庁
- 松本三喜夫 2015 『歴史と文学から信心をよむ』 岩田書院
- 丸井敬司 2013 『千葉氏と妙見信仰 岩田選書 地域の中世 13』 岩田書院
- 宮澤傳 1994 「秩父七妙見社」 (埼玉県神社庁報 No. 134) 埼玉県神社庁
- 宮地屋台保存会 1996 「宮地屋台と秩父歌舞伎」 (平成 8 年 秩父夜祭プログラム)
- 若松良一 2011 「秩父妙見研究序論 外秩父の妙見を祀る社寺の検討から」 (『埼玉県立川の博物館紀要』第 11 号) 埼玉県立川の博物館

《引用・参考映像・ホームページ》

- 埼玉県神社庁:<http://www.saitama-jinjacho.or.jp/> (2016/2/28)
- 神社本庁:<http://www.jinjahoncho.or.jp/> (2016/2/28)
- 秩父市:<http://www.city.chichibu.lg.jp/> (2015/4/14)
- 秩父神社:<http://www.chichibu-jinja.or.jp/> (2015/4/14)
- 廣見寺:<http://www.chichibu.ne.jp/~kokenzi/> (2015/4/14)

終章

本論文では、第一部で妙見の概要を多方面から述べ、第二部で、現代の生活の中に展開する関東地方の特徴的な四つの事象の中にみられる妙見の位置付けと地域に及ぼす影響を、現地調査に基づき民俗誌的な視点で述べてきた。

本章では、第一部で位置付けた日本における妙見の存在を振り返りながら、現在地域に伝えられる妙見がどのような役割を果たしているのかを民俗学的な視点から明らかにする。

Ⅰ 現在地域に伝えられる妙見の役割

本論文第一部第一章から第三章では、6世紀半ばに日本に伝えられたといわれる妙見信仰について、先行研究、文献資料等に基づき、その概要を多方面から整理した形で述べた。この中で肝心なことは、妙見が時代や地域により多彩な表情を見せていた状況を確認できたことである。第四章では、先行研究と第一章から第三章までの内容を基に、民俗学的視点から日本の妙見の特性を収集分析した。その結果から、現在地域に伝えられる妙見には、主な特徴として「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つの特徴を認めることができた。

この四つの特徴を持つと思われる関東地方の四つの事象について、第二部第五章から第八章で、現代の生活の中に展開する妙見の位置付けと地域に及ぼす影響について民俗誌的な視点で事例研究を行い、妙見が地域にどのような役割を果たしているのかを民俗学的な視点から明らかにした。事例研究の対象とした四つの事象は「東京都稲城市の『妙見尊』行事」「千葉県千葉市中央区の祭礼」「東京都墨田区柳嶋妙見山法性寺界隈の風俗や文化」「埼玉県秩父地方に伝わる祭礼や行事」である。

事例研究の結果は次のとおりであった。

「氏神として伝わる妙見—東京都稲城市百村の「妙見尊」行事から—」と題した第五章の百村地域に伝わる妙見には、三つの特徴を認めることができた。一つ目は「『神化まつり』『蛇より行事』の二つの祭祀は同じ祭りだったものが二つに分化したのではないかと考えられること」、二つ目は「民俗行事が行われる妙見寺・妙見宮に妙見信仰の痕跡が認められること」、三つ目は「妙見が氏神として存在していること」である。この三つの特徴のなかで肝心なのは三つ目の「妙見が氏神として存在していること」であった。妙見は百村の三つの民俗行事において重要な位置を占めていると同時に、妙見信仰を背景とした基本的な祈りと祭祀における古態の持続性を維持した地域の氏神としての役割を果たしていた。

「祭礼の中に武神として伝わる妙見—千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から—」と題した第六章では、二つの祭りの中に、毎日をよりよく暮らしていけることへの想い、そして地域の平和と繁栄への願いが込められていた。この願いは必ずしも妙見信仰独自のものではないが、かつて千葉氏が武神としての妙見尊へ捧げた「地域融和の醸成」という願いと共通するものであろう。それは昔から伝わる妙見信仰の役割の一つであり、今も同じように伝えられ地域を結び付けているといえることができる。

「大衆文化的妙見信仰の需要—東京都墨田区柳嶋妙見山法性寺界隈に伝わる妙見—」

と題した第七章の「柳嶋妙見」界限に伝わる妙見は、江戸時代後期に容姿・芸能・学問の仏神として都市の大衆の間で多くの信仰を集めた。今も地域の人々に信仰され、同時に容姿・芸能・学問の仏神としての心意気を、江戸文化という形で地域の世相に反映させている。それは、江戸時代の妙見と同じように、文化・芸能・学問の守護神としての役割を現在も果たしているといえることができる。

「変遷をたどり現代に息づく妙見―埼玉県秩父地方に伝わる現代的意義―」と題した第八章の秩父地方における妙見は、その信仰体系の中に「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」を認めることができた。この三つの要素に基づく現地調査の結果、「屋敷神的要素」「氏神的要素」に基づく調査では主に「古態の持続性を維持する」妙見が認められ、「生産神的要素」に基づく調査では「地域振興の育成」に貢献する妙見を認めることができた。しかし「屋敷神的要素」に基づく調査では、「妙見塚」の祭祀が一部「秩父夜祭」に係るものであるなど、「地域振興の育成」に貢献する妙見との関わりも認められた。秩父地方における妙見の信仰体系の中に位置する「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の三つの要素は、互いに影響しあう一面を持っているといえる。

以上の現地調査の結果から、妙見は、持っている特徴に呼応した役割を地域で果たしていることが分かった。「地域に伝わる氏神」としての特徴を持つ妙見は「古態の持続性の維持」という役割を果たし、「武神の名残」という特徴を持つ妙見は「地域融和の醸成」という役割を果たしていた。そして「容姿・芸能・学問の仏神」という特徴を持つ妙見は「文化・芸能・学問の守護神」としての役割を、「生産神」としての特徴を持つ妙見は「地域振興の育成」という役割を果たしていた。その内容を整理すると次のとおりである。

事例研究	妙見の特徴	妙見の役割
第五章 氏神として伝わる妙見 ―東京都稲城市百村の「妙見尊」行事から―	地域に伝わる氏神	古態の持続性の維持
第六章 祭礼の中に武神として伝わる妙見 ―千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から―	武神の名残	地域融和の醸成
第七章 大衆文化的妙見信仰の需要 ―東京都墨田区の柳島妙見山法性寺界限に伝わる妙見―	容姿・芸能・学問の仏神	文化・芸能・学問の守護神
第八章 変遷をたどり現代に息づく妙見 ―秩父地方に伝わる現代的意義―	・地域に伝わる氏神（屋敷神） ・生産神	・古態の持続性の維持 ・地域振興の育成

第四章「Ⅲ 南関東地域における妙見の特性」では、江戸時代に存在した南関東地域の妙見 48 件のうち現在も伝わる 25 件について、「Ⅱ 先行研究からみた妙見の特性の分析」結果から得た四つの特性「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」、すなわち四つの特徴に該当することを確認した（資料 4-4）。次

にその 25 件について、地域で果たしている役割を確認してみると、第二部の事例研究で認められた役割、すなわち四つの特徴に呼応した四つの役割を果たしていることが認識できた。

また第二章「Ⅲ代表的な妙見」で述べた「福島県相馬市の相馬妙見」「大阪府の能勢妙見山の妙見」「山口県山口市の大内氏の妙見」「熊本県八代市の八代妙見」についても、今後詳しい調査を行っていくことを課題としているが、次のように、第四章で述べた四つの特徴を有し、特徴に呼応する役割を地域で果たしていると捉えることができる。

千葉氏の妙見信仰に端を発した福島県相馬市の相馬氏の妙見は、「武神の名残」の特徴を持ち「地域融和の醸成」という役割を果たしていると考えられる。相馬市では、今も相馬馬追の祭りが地域をあげて盛大に取り行われている。その根底にある信仰は、地域の結び付き、地域の発展、一族の平和への願いであり、かつて武神として妙見尊を尊崇してきた信仰を引き継いでいるものであろう。地域の人々は、相馬氏の歴史に誇りを持ち、未来へ繋げようという心意気を持っている。信仰の持っている地域を結び付けるという役割を、昔と同じように今も持ち続けていると捉えることができる。

能勢妙見山の妙見は、「容姿・芸能・学問の仏神」としての特徴を持ち、その心意気を現代に伝えており、「文化・芸能・学問の守護神」としての役割を、江戸時代の妙見と同じように今も果たしていると考えられる。江戸時代中期「能勢の妙見さん」として、近畿のみならず全国的に名が知られるようになった大阪府の能勢妙見山では、寛政年間（1789～1801）に俳優たちの能勢参詣が盛んになっていったという。『摂津名所図会』にも「特に花魁優伶の輩、厚く信じて誉を願ふも妙見の一字によるものならんや」と記されている（秋里・竹原 1798 9ノ51）。そして今も歌舞伎役者や芸能関係者、受験生等の参詣者も多く訪れるという。

山口県山口市の大内氏の妙見は、「武神の名残」の特徴を持ち「地域融和の醸成」という役割を果たしていると考えられる。氷上山興隆寺は大内氏滅亡後衰えたが、興隆寺内の氷上妙見宮に勧請される前に妙見を祀っていた山口市下松の鷺頭妙見宮が、今は「降松神社」と改称し、「妙見さん」と呼ばれて地域の人々に親しまれている。10月には3基の神輿が渡御する秋の例大祭が行われ、地域の人々で大いに賑わうという。その根底にある信仰は、地域の結び付き、地域の発展、一族の平和への願いであり、かつて武神として妙見尊を篤信した大内氏の信仰と共通するものであろう。信仰の持っている地域を結び付けるという役割を、昔と同じように今も持ち続けていると捉えることができる。

熊本県八代市の八代妙見は、「生産神」としての特徴を持ち「地域振興の育成」という役割を果たしていると考えられる。「八代妙見祭」は八代地方最大の祭礼行事であり、異国情緒豊かな妙見の祭礼として日本全国に広く知られている。平成2（1990）年からはふるさと創生事業として祭りの出し物の復活事業が本格化し、町の人たちの笠鉾への認識が新たになり、市民の妙見祭への関心がさらに高まったという。祭祀に係る人々は、現在、市内で農業・漁業・商業・加工業等主に生産業に携わっており、妙見への祈りは生産神への祈りと重なる。生産神の関わり一つに都市祭礼があげられるが、都市祭礼は集客力があり街を観光事業化して収入増につなげ、「地域振興の育成」に大きく貢献する側面がある。「八代妙見祭」付祭りの展開にもその側面を読み取ることができる。

以上のことから、現在地域に伝わる妙見には、「地域に伝わる氏神」「武神の名残」「容姿・芸能・学問の仏神」「生産神」の四つの特徴が認められ、それぞれの特徴に呼応した「古態の持続性の維持」「地域融和の醸成」「文化・芸能・学問の守護神」「地域振興の育成」という四つの役割を果たしていることが認識できた。

人々が重きを置く事項は地域や時代により異なっている。妙見は、時代や地域により様相を変化させてきたが、それは人々が地域をよりよい形で維持していくために妙見を活用し、妙見もそれに応え得る多様性を持った信仰であったからといえることができる。今、地域で認められる妙見の霊験や妙見への願いは、その地域で最大限さかのぼれる時代の妙見を象徴していると考えられる。それは、その地域に初めて妙見が伝えられた時期ではなく、妙見が盛んに信仰された時代だといえよう。盛んに信仰された時代の妙見の痕跡が現在まで引き継がれ、地域における現在の妙見の特徴となっているのではない。これらの特徴は、現在地域に伝わる妙見の中に引き継がれ、特徴に呼応した役割を地域で果たしながら、今後も伝えられていくことであろう。

II 民俗信仰の視点からみた妙見信仰の位置付け

日本の妙見信仰は、民俗信仰⁽¹⁾を視点とした場合、どのように位置づけられるのだろうか。

佐野賢治（1998）は、「比較民俗研究の一視覚—固有信仰論から民族宗教論へ—」の中で民俗信仰の実態に基盤をおき、「固有信仰」からみた「成立宗教」との集合関係から、「固有信仰」「民間信仰」「民俗宗教」「民族宗教」の四つの類型について論じている。

「固有信仰」「民間信仰」「民俗宗教」「民族宗教」については、多くの研究者による論考があるが、本章では、佐野（1998）の「比較民俗研究の一視覚—固有信仰論から民族宗教論へ—」に述べられた論考を基にし、妙見信仰が、この四つのタイプのどこに位置付けられるのかということについて論じていく。

佐野（1998）は、「固有信仰」「民間信仰」「民俗宗教」「民族宗教」の範囲とそれに対する研究視角を次のように提示した。

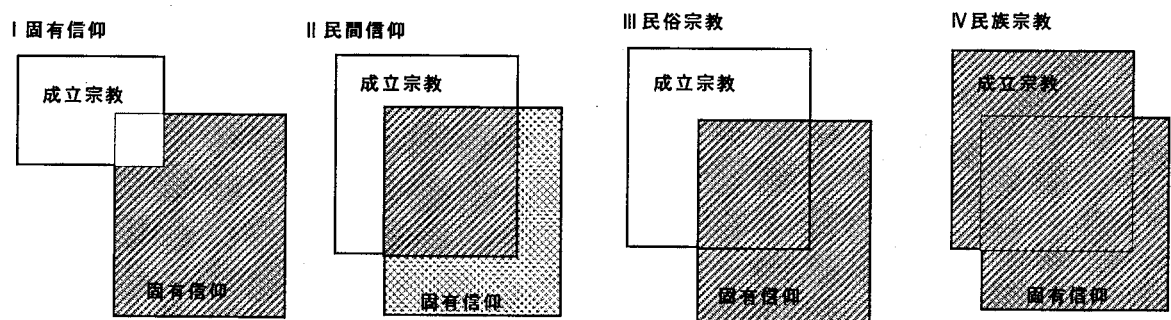


図 民俗信仰の諸類型
「比較民俗研究の一視覚」（佐野 1998）より

そしてこの「図 民俗信仰の諸類型」について、次のように解説している。

I 固有信仰：成立宗教と接触がないか、接触してもその影響を被らない斜線の部分。

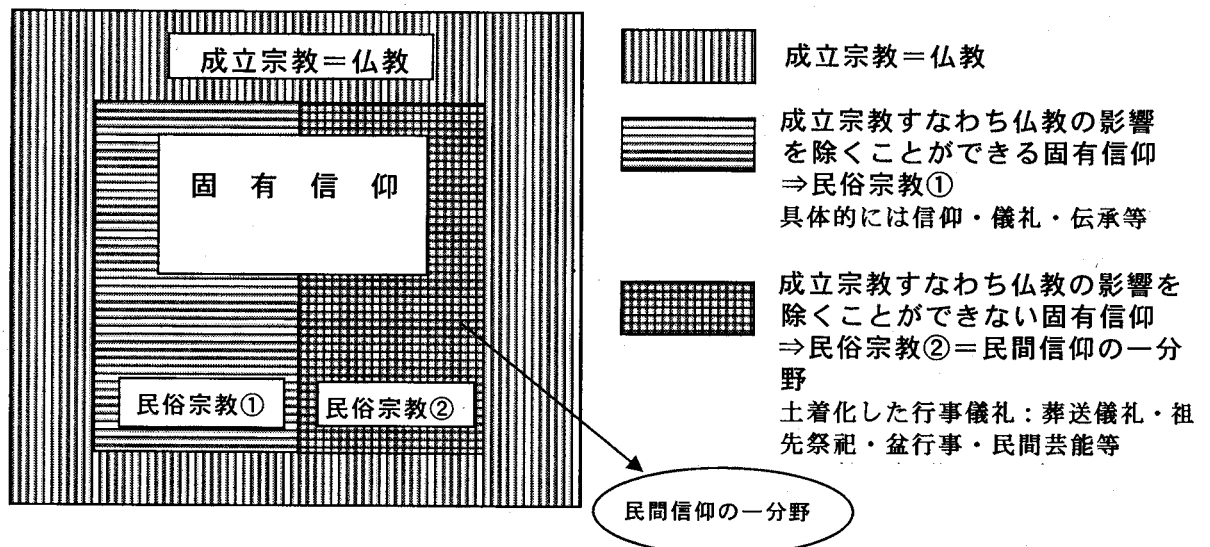
Ⅱ 民間信仰：成立宗教と固有信仰が接触・習合した斜線の部分。従来の民間信仰論では、図の点で表した部分も含んで考えるのが一般的であったが、成立宗教と固有信仰の通時的関係から醸成された信仰形態すなわち民間信仰の実態を成立宗教と固有信仰の習合とみる立場を強調した。この民間信仰の範疇は仏教民俗として扱う。

Ⅲ 民俗宗教：成立宗教と固有信仰が接触・習合した部分と固有信仰を合わせた部分。

Ⅳ 民族宗教：成立宗教と固有信仰を合わせた部分。Ⅰを民族宗教と把らえる柳田国男に代表される考え方もあるが、民族宗教の範囲は一民族内で展開している成立宗教・民間信仰・固有信仰すべてを含み、それらを止揚・融合した宗教形態を想定している。Ⅰ～Ⅲは民族宗教の一部を構成すると考えることもできる(佐野 1998 61～63)。

前述の「図 民俗信仰の諸類型」に基づき、Ⅰ 固有信仰、Ⅱ 民間信仰、Ⅲ 民俗宗教について、別の方法で図解したところ、次のように表すことができた。

図 終-1 成立宗教と固有信仰



成立宗教は外来の宗教文化であり、ここでは仏教を指す。

民俗宗教については、1970年代ごろから地域社会変貌によるあらたな研究視角が求められ「土着信仰〔固有信仰〕と外来宗教〔仏教〕の複合という視点ではなく、自立的な地域共同体の中で発生・展開し、他の生活要素とも有機的に関係して、完結的な体系を示している」(佐野 1998 60)とする視点が解かれるようになった。その視点からたどった結果、民俗宗教は、固有信仰の中に二つの様相で存在していた。一つは「民俗宗教①」と記した範囲で、仏教の影響を除くことができる固有信仰である。日本固有の信仰概念をうかがうことができ、具体的には信仰・儀礼・伝承である。もう一つは「民俗宗教②」と記した範囲で、仏教と固有信仰が習合し仏教の影響を除くことができない固有信仰であり、民間信仰の一分野（民間信仰を成立宗教と固有信仰の習合とみる立場の場合）でもある。具体的には仏教の影響を受けて生活化・習俗化した行事、葬送儀礼・祖先崇拜・盆行事・民間伝承などであり、ここには仏教民俗学という分野が提唱された。

Ⅳ 民族宗教については、「図 民俗信仰の諸類型」と「比較民俗研究の一視角—固有

信仰論から民族宗教論へ」（佐野 1998）から、次のように表すことができた。

表 終-1 日本の民族宗教

A : 成立宗教	仏教、道教、儒教等	A、B、A+Bの 信仰すべてが現在の 日本の民族宗教 ⇒日本の民族宗教 は修験道と考えら れると述べている (佐野 1998)
B (A+C) : 固有信仰	神祇信仰、神道、土着信仰、在来 信仰、民俗信仰が含まれる ・仏教の影響を除くことができる 範囲⇒民俗宗教① ・仏教の影響を除くことができな い範囲⇒民俗宗教② ・民俗宗教②は民間信仰の一分野 でもある。	
C : 固有信仰	神祇信仰、神道	従来の日本の民族 宗教

この表 終-1 のCは、A成立宗教（仏教）の影響を受ける前の固有信仰を指す。内容は神祇信仰、神道である。Cに、土着信仰、在来信仰、仏教伝来による影響を受けた民俗信仰等が加わった固有信仰がBである。Bは同時に民俗宗教に位置付けられる。民俗宗教は仏教の影響を除くことのできる事象（民俗宗教①）と、除くことのできない事象（民俗宗教②）に分けられるが、民俗宗教②は、同時に民間信仰の一分野でもある。

民族宗教について佐野（1998）は、「自然崇拜・民俗信仰・成立宗教を融合した重層的な性格を示して」おり（佐野 1998 63）、「成立宗教と固有信仰の対比よりもその集合性に特質を認めた範囲」（同前 61）と位置付けている。また前述したように「図 民俗信仰の諸類型」の解説でも「一民族内で展開している成立宗教・民間信仰・固有信仰・すべてを含み、さらにそれらを止揚・融合した宗教形態」（同前 61）と述べていることから、民族宗教は、A成立宗教、B固有信仰、A成立宗教とB固有信仰が合わさった神祇信仰、神道、土着信仰、在来信仰、民俗信仰すべてが融合し、そこから発展してきた信仰と捉えることができる。

この定義から、日本の妙見信仰は、「固有信仰」「民間信仰」「民俗宗教」「民族宗教」の四つのタイプのうち「民族宗教」に位置付けることができると考える。その理由は次のとおりであるが、はじめに妙見信仰の概要を簡潔に述べる。

妙見信仰は北極星や北斗七星を神格化した信仰であり、古代、中近東の遊牧民や漁民に信仰された。やがて中国に伝わり天文道や道教と混じり合い、仏教に取り入れられて妙見菩薩への信仰となり、中国、朝鮮からの渡来人により日本に伝わった。仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられたといわれる。現在、妙見信仰の背景には天文道、密教、道教、陰陽道、神道などが認められるが、妙見信仰が日本に伝えられた六世紀半ばは「儒教と道教も伝えられ、神仏の習合が進み、仏教を主体とする仏主神従の神道思想が成立した」（村上重良 1988 2）時期でもあった。日本へ伝わった当時、妙見信仰は、教祖・教義・教団を有さず、成立宗教としての要件を満たした宗教とはいえなかったが、その信仰は妙見菩薩へ祈る信仰であり仏教と深い

関わりを持っていたことは否定できない。

妙見信仰は、奈良時代・平安時代は執政の中心である公家の間で篤く信仰され、やがて武士が台頭すると武士の間で武神として信仰されるようになった。近世以降民衆へと広まった妙見信仰は、地域の信仰も取り入れ、次第に多彩な様相を定着させていくことになる。このように時代の変遷に伴い妙見信仰の様相も変化していったが、それぞれの時代の妙見信仰の様相をみると、成立宗教と深く関わっていることが分かる。本論文の第五章～第八章の事例研究においても、背景にある寺社の存在は大きい。

そしてこの四つの事例研究からも、妙見にはさまざまな様相がみられることが分かった。百村の妙見尊のように、長い歴史の中で地域を守り氏神として人々に親しまれている妙見、千葉氏が尊崇した武神としての妙見が、現在も地域の人たちを結び付ける役割を果たしている妙見、江戸時代の大衆文化の中にその存在を示す妙見、秩父地方の祭祀を通して地域振興に貢献する妙見である。本論文の中で繰り返し述べてきたが、妙見は、同一の仏神でありながら形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきた。その信仰は、成立宗教、固有信仰、成立宗教と固有信仰が合わさった神祇信仰、神道、土着信仰、在来信仰、民俗信仰など全てが融合し、そこから発展して各信仰のさまざまな要素を取り入れ、地域や時代に沿った信仰形態となっていたと捉えることができる。それはまさに、ここで定義された民族宗教と同じ要素を持つということができる。

したがって、妙見信仰は、「固有信仰」「民間信仰」「民俗宗教」「民族宗教」の四つのタイプのうち、成立宗教・民間信仰・固有信仰などすべてが融合し展開していった「民族宗教」であると位置付けることができるのではないか。

民族宗教について、佐野（1998）は「従来、日本の民族宗教は神祇、神道に指定されてきたが、固有信仰と仏教・道教・儒教などの成立宗教を止揚統合した修験道こそがまさに日本民族の民族宗教と考えられるのである」（佐野 1998 65）とし、対象神仏・図像、唱える真言、手印、持物などに象徴される修験道の諸儀礼の中に、民族宗教のエッセンスを見出すことができると述べる（佐野 1998 65）。

本論文第五章から第八章の事例研究では、妙見寺社の由緒、妙見の祭祀における護摩供養、全国でも珍しい神仏混淆の持続、神聖な水へのこだわり等、修験の影響と思われる事象も数多く認めることができた。また妙見信仰の各地方への伝播には修験が関わっていたであろうことも示唆されている。修験道と妙見との関わりについては今後の課題としたいと考えているが、修験道の信仰や儀礼に妙見信仰との共通性も見出すことができる。修験道が日本の民族宗教と考えられるという論考からも、妙見信仰は日本の民族宗教であると位置付けることができると考える。

《註》

- (1) 本論文では、地域に伝承されてきた伝統的な信仰と定義する。固有信仰の一つの要素となる。

《引用・参考資料》

秋里籬 篤・竹原春朝 齋 1798 『摂津名所図会』 柳原喜兵衛 ほか

- 金指正三 1943 『我が國に於ける星の信仰』 森北書店
- 佐野賢治 1998 「比較民俗研究の一視覚－固有信仰論から民俗宗教論へ－」 『日中文化研究』 勉誠出版
- 村上重良 1978 『日本宗教事典』 講談社

「妙見」に関する先行研究一覧

資料 序-1

番号	地域・時代等	著者名	年	論文・著書名	収録文献	巻・号	発行機関	概要
1	妙見総論 北辰・北斗 信仰、妙見 信仰の展開	井原木憲紹	2005	「日本における星神信仰の一考察」	『桂林學叢』	第19号	法華宗宗務院	<p>【問い】北辰・北斗、つまり星神と考えられる。日本における北辰・北斗への信仰の始まりはどこにあるのか。日蓮聖人は妙見についてどのように考えていたのか（宗祖御遺文から）。</p> <p>【結び】奈良時代から平安時代にかけて北辰信仰は、儒教や道教・仏教の影響を受け、朝廷や民衆の間に展開し、民俗信仰としての北辰崇拝・妙見信仰が形成された。なかでも仏教と習合することで朝廷から民衆へ、畿内から地方へ、さらに武士層の守護神として展開した。法華経の立場からは妙見を本仏釈尊の垂迹と認めず、遺文等には妙見を記さず、本地釈尊の北斗七星として遺文に記した。当時の民俗信仰の一端をみることが出来る。中山日祐によって門下に取り入れられた妙見信仰は本来宗祖の本意に合わないもので、江戸時代にかけて民衆や為政者に迎合することに汲々とした当時の門下門流のあり方に注視せねばならない。</p> <p>【主な内容】古代の日本では星への関心は希薄であった。日本における星神への信仰は大陸文化の受容とともに定着し展開していった。日本での北辰・北斗信仰の始まりは天武朝以後の天皇の権威確立と時期を同じくする。日蓮宗門下で妙見信仰を取り入れたのは、下総中山四世日祐（1298-1374）である。妙見信仰は、武士を介して民衆の信仰として地方へも展開し、これ以降各地の日蓮門下寺院に妙見が祀られた。江戸時代には日蓮門下寺院において妙見信仰が盛んであった。多彩な信仰を含み込んだものとして様々な説を伝えている。</p>
2		金指正三	1943	『我が國に於ける星の信仰』			森北書店	<p>【目的】「星の信仰」は、上代の信仰にはほとんど認められず、支那文化が輸入されるや、我が民族信仰の中にしだいに現れ、上は宮廷において一つの儀式となり、下は民間に俗信ではあったが根強い信仰となった。かかる一文化現象ではあるが、その伝播と受容と同化、発達過程及び星の信仰そのものについて史的に考察する。</p> <p>【内容】日本人の民族信仰の一つとして星をとりあげ、その信仰を様々な視点から論じており、日本人の「神仏の信仰」の原点を示唆している。約230の妙見堂・妙見社が全国に散在していたことを指摘し、所在地、祭礼日などを列記している。「民族信仰は、民族の生活がその基調である。生活が即ち思想であるからである。ここに、民族信仰の生命があり、根強さがあり、歴史性がある。そして文化が民族的たる所以である」と述べる。</p> <p>【結語】北辰北斗の信仰が神道に影響して、神社として現れたことは、民族信仰史上興味ある問題である。仏教においてすら、妙見の本地は種々考えられたが、神仏混淆の民俗信仰においては、雑糅として色々の神に結び付けられた。多くは我が民族の神祇觀念に抱擁されて神社となり、あるいは固有の神々を祭神として祀る様になったものであろう。</p>
3		金指正三	2007	『星占い星祭り』			青蛙房	<p>『我が國に於ける星の信仰』（1943 金指）をさらに発展させたものであり、日本で展開していった星辰信仰を構造的に解説し、そこから派生した妙見信仰についても詳細に考察している。すべての時代ではないが、庶民の視点からの妙見信仰も論じている。日本人の星に対する視点から、星への意識、星占い、星祭りについて述べ、それを踏まえて、時代ごと地域ごとの妙見信仰を詳述している。</p>
4		小峰智行	2007	「妙見菩薩の信仰と展開」	『密教学研究』	39	日本密教会事務局	<p>【目的】特殊性や多様性の背景にあると思われる複雑な妙見菩薩の信仰の状況について、記録や説明、伝説等の資料を調査して整理すること。</p> <p>【結論】妙見菩薩として遅くとも奈良時代後期頃には民間に広く伝わり信仰されていた。地上の国家体制を天に描くという中国の天体観を反映し、天帝・太一と日本における地上の支配者との同化が行われたと考えられる。つまり鎮宅靈符等の異名に象徴される道教的信仰を起源として仏教と融合した星宿信仰と、律令国家形成の過程で天皇と結びついた中国の儒教的天文観を根源とする星宿信仰という、二元的な展開があったのではないかと。そして平安期以降、密教などを媒体として同化され習合尊的な性格を持った妙見菩薩へと変容していったとは考えられないか。このような仮説を提示している。</p> <p>【内容】妙見信仰が日本に伝来した時代ははっきりしていない。妙見信仰の伝来、北辰祭（御灯）、斎王群行、説話（日本霊異記）、妙見の異名と習合尊的性格、天御中主尊への変貌についても論じている。</p>
5		佐野賢治	1994	「日本星神信仰史概論 ―妙見・虚空蔵信仰を中心にして―」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	<p>星辰信仰の流れを述べている。民俗学の視点から、星に関する日本全国の諸相を広く紹介し、日本人にとっての星の意味、星神信仰の世界を総合的に概説するとともに、鋭い視点で日本人の星辰信仰観を解き明かし、そこから日本での妙見信仰に係る課題を指摘している。わが国には体系的星神信仰は存在しないこと、その欠如の理由などを考えることは、日本人の世界観、自然観の一端を明らかにする方法となる。</p>
6		中西用康	2008	『妙見信仰の史的考察』			相模書房	<p>【目的】展開されていく妙見信仰の多様さは、妙見信仰という人間の動きが歴史の展望の上にどのような意味を有したか考える。</p> <p>【結び】妙見信仰は二十世紀にわたってそれ相応な信仰形態を展開してきた。その展開の状況はそれぞれの世の内容に則して、その文化の一端を形成していたのである。そうした意味において過去の人々の妙見信仰は歴史的意義を有するのである。妙見信仰の変遷が日本人の一つの解説となっている。また日本人の多神尊崇は、歴史上の上における日本人の伝統であり、日本の歴史における一貫したものであった。妙見の神格の通年の変替は、神の新造の一つの変相であったとみることもできる。</p> <p>【内容】多くの文献史料を紐解き、日本における古代、中世、近世の妙見信仰の展開について緻密な調査を重ねまとめ上げたもので、壮大な国史ともいべき文献である。時代ごとそして日本全国の地域ごとに、主に歴史的な視点から妙見信仰について広く深く概観している。妙見信仰は各々の時代の代表的な通念として形を変えて表れ、ときの文化の一つの側面であることを一貫して述べている。そして、歴史書でありながら古代からたどる妙見信仰の推移の中に民俗的視点も読み取ることができる。</p>

7			吉田光邦	1970	『星の宗教』			淡交社	宗教的な視点で世界の代表的地域の星と人との関係を概説的に述べ、日本の展開では、道教、天文道と陰陽道、泰山信仰そして妙見信仰に触れている。同時代に階層の違う二つの系統の妙見信仰が並行に存在していたと論じている。 【吉田氏の考え】北辰を祀る妙見信仰は、日本人の宗教のひとつの典型であるということもできよう。北斗七星の神は中国、朝鮮を経由して日本にやってきた。その北斗七星の神が日本に來たときは、むしろ個人のための神、個人に幸福を与える神となっていた。その靈符はもともと個人救済のシンボルなのである。靈異記の伝える妙見菩薩も個人の利益を与えていた。けれども一方、密教と結合し、その本地が菩薩、薬師、観音、仏眼などとなった妙見菩薩は、国家鎮護、王城守護の菩薩とされてしまい、天子や貴族の熱心な信仰をあつめるものとなった。同じ北斗七星信仰でありながら、一は個人のものとなり、一は国家、帝王のものとなってゆくことは、今もつづく日本人の思考の伝統的な型をそのまま反映するのではないか。妙見信仰に現れたこの二側面は、日本人の観念のあり方、思考の側面なのであろう。それは中国での儒教と道教が、階層的にはっきりと分離しているのと対応するのかもしれない。信仰対象が普遍的な星であっても、日本はやはり日本としての独自の姿をもってきたのであった。
8		古代の北辰崇拝・御燈	西本昌弘	2002	「八・九世紀の妙見信仰と御燈」	『關西大學文學論集』	第51巻第4号	關西大學文學會	8世紀から9世紀までの妙見信仰の様相を検討し、古代における妙見信仰の展開過程や天皇による「御燈」の創始時期などについて論じている。「御燈」は、民間の世俗的な行事が藤原氏を介して宮廷内に持ち込まれた例といえる、天皇個人の儀としての性格が強いと論じる。
9			廣畑軸雄	1994	「日本古代における北辰崇拝について」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	【目的】奈良朝以前の日本における北辰崇拝の特徴について考察している。奈良朝以前の北辰崇拝は、中国から伝来したものであって、天皇崇拝と深い関係を持つ。 【結論】古代日本には星に対する関心がなく、星に関する文化がなかったと考える人もあるが、中国渡来の天文学は朝廷では盛んに行われていた。ただ朝廷以外に出ることは禁じられていた。朝廷において作られた『古事記』の開闢(かいびやく)の神々の配列が、中国の天文学の知識によっているとしても当然と言えよう。
10			増尾伸一郎	1994	「〈天罡〉呪符の成立 一日本古代における北辰・北斗信仰の受容過程をめぐって」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	【目的】「天罡(てんこう)」呪の成立と性格の検討を通じて、古代日本における北辰・北斗信仰の展開過程を跡付けることにより、道教受容史の一端を考察する。 【内容】奈良時代以前、妙見信仰は上層社会に鎮護国家の目的の下に存在していたが、一方、延命招福といった現世利益を求める民衆の間にも受容されており、前者は道教的な星辰信仰を取り込んだ宮廷儀式(元旦四方拝、御燈)として成立していった。 【考察】「天罡」と記された呪符は、奈良末期民衆社会における、妙見信仰を基調とした北辰崇拝の盛行に対応する形で、奈良末から平安初期以降、上層社会で公私にわたり行われるようになった陰陽道の星辰祭で成立し、中期以降民間陰陽師によって広く一般に普及した、とみてよいのではないか。
11		鎮宅靈符神・真武大帝・道教との関わり	窪徳忠	1983	「中国から日本へ一星をめぐる民間信仰」	『日本民俗文化体系』	2	小学館	日本における星の信仰は、中国からの影響を受けて陰陽道が成立するとともに宮廷貴族の間に取り入れられ、その普及につれて一般に広まった。信仰の内容は大体中国に準じており、その成立過程を中国の文献を根拠に、陰陽五行説、三尸説、道教、風水説、庚申信仰などの視点から詳しく述べている。北斗信仰、妙見信仰にもふれており、民俗文化の根底である古代人の宇宙観や死生観を、慣習や儀礼、考古遺物、『記紀』などの文献資料を基に今日的視点からとらえている。また日本の星の信仰について、その性格は大体中国と似ているが、中国と異なる点は「人間を守り、恵みをたれるやさしい神としての性格が強い」ことのように思われると述べている。
12			二階堂義弘	2012	『アジアの民間信仰と文化交渉』			関西大学出版部	【目的】渡来神の中から、道教の神である真武大帝の影響を受けたとされる妙見神の変容について、文化交渉学の立場から分析する。 【考察】妙見神の真武大帝との関連を中心に、妙見の姿の差異について考察した。妙見はもともと密教の一神格であったものが、様々な神の影響を受けて変容していったものであると考えられる。一方真武大帝は鎮宅靈符神として、妙見神の信仰に被さる形で融合していった。妙見神は、様々な神格が合わさった複合的な神と考える。 【内容】妙見神の変容について、古代の玄武から変化した道教の神武大帝が、日本において妙見菩薩と混淆され信仰される状況について分析している。吉岡義豊氏の説を引いている。妙見と「大將軍」との係りについても触れている。
13			平瀬直樹	2013	「日本中世の妙見信仰と鎮宅靈符信仰—その基礎的考察—」	『仏教史学研究』	第56号	仏教史学会	【目的】中世に伝来した多様な信仰の中から、鎮宅靈符信仰をとりあげ、日本の妙見信仰に与えた影響について、「鎮宅靈符信仰が伝来する以前の妙見信仰の性格」「中世武士団の『星』の信仰に真武神のイメージが導入された意義」「鎮宅靈符神が既成の宗教に与えた影響と伝えた修行者の姿の追求」から考察する。 【結論】・鎮宅靈符信仰が伝来する以前の妙見信仰は延命に関わる「星」の信仰という性格を持ち、当時の社会は、延命を得意とする呪術を求めていた。 ・中世武士団の「星」の信仰に真武神のイメージが導入された意義については、千葉氏と大内氏の場合、真武神のイメージによって、妙見信仰を領国支配イデオロギーにまで高めていったといえる。 ・鎮宅靈符信仰は、密教各派から神道各派に至るまで、広く既成の信仰に新たなスタイルを与えていたこと、鎮宅靈符信仰の修行者は、多様な呪術者に交じり合うかたちで活動していた。 以上のことから鎮宅靈符信仰は、日本の諸信仰に取って替わるものではないこと、そして武士団、密教各派、神道各派による妙見信仰は、鎮宅靈符信仰によって補強され、中世社会により広く深く浸透していったといえることができる。
14			山極哲平	2007	「鎮宅靈符神信仰研究史の整理」	『国文学』	91	関西大学国文学会	「鎮宅靈符信仰」の各研究史について概観した。 鎮宅靈符神は靈符を司る神であり、靈符の中でも鎮宅靈符という72種をセットとする特定の靈符と関係し、玄天上帝、太乙神、妙見菩薩や国常立命等諸神仏と習合しながら、中国から日本へ渡り広く伝えられた神である。 吉岡義豊の論文「妙見信仰と道教の真武神」について「道教の真武神が日本では妙見菩薩として受容された点を実証的に考察した。道教側の文献、並びに密教經典を用いて中国・日本双方向(これまででは日本側の文献から北斗信仰と妙見菩薩の習合が説かれてきた)から、真武が如何にして妙見菩薩と習合したかを論証した。これにより真武=妙見=靈符神という構図はほぼ確定された」との論証を肯定した。
15			吉岡義豊	1966	「妙見信仰と道教の真武神—附天正写本『靈符の秘伝』」	『智山学報』	14	智山勤学会	【目的】密教と道教の思想的交流の一端を考察し、且つ日本における道教思想究明の一助とする。 【結論】靈符神を媒介として妙見と真武とが同一神格とされた道筋を明らかにした。つまり靈符に関わりのある妙見信仰は真武神と団体異名であり、同様に靈符に関わりのある真武神(靈符とかかわりのない真武神もある)は日本に渡ると妙見菩薩として転生すると説く。つまり妙見の本体が靈符神であるということになる。中国ではこのような関係は認められず、日本において密教家の手が加えられて作り出されたものである。中国の民間では妙見信仰が行われた形跡はない。民間信仰については、同一源に発したものであっても時処を異にすると、ほとんど基本形を探ることができないほど変化する。その一例といえよう。

16		庚申信仰との関わり	窪徳忠	1957	「庚申信仰と北斗信仰」	『季刊民族学研究』	21	日本文化人類学会	中国での北斗信仰と道教で説く三尸信仰との関係を述べ、それが日本にもたらされて庚申信仰の中に入っていることを、日本での特異な例を引きながら述べている。
17		船霊信仰との関わり	国分直一	1994	「舟と航海と信仰」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	北斗七星と船霊信仰との関わり、さらにサイコロの意味を述べている。
18			谷川健一ほか	1983	『太陽と月～古代人の宇宙観と死生観』	『日本民俗文化体系』	2	小学館	日本人の風に対する反応を、縄文時代の狩猟・漁撈民、稲作開始後の農民、帆の使用を知った後の時代の漁民、風邪を利用して金属精錬に従事した人たち四者に分け、民俗の視点から論じている。農漁民の目あてになった星の一つが北斗七星であったと論じている。
19		南斗六星との関わり	丸山顯徳	1994	「北斗七星と南斗六星」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	中国、韓国、北朝鮮、日本に分布している49話の「子供の寿命」の採話資料から、その内容を分析し、南北斗星の信仰と民俗の関わりについて論じている。その中の「南北斗星と宇宙観」の項で窪徳忠の説を引いて南北斗七星について次のように述べている。 中国・朝鮮では死を司る神が北斗七星であり、生を司る神が南斗六星だという。北斗はしだいに禍福を司る神から死のみを司る神とされるようになった。 ・道教『太上洞玄靈寶護諸童子經』：一つの例は「人間の命はすべて北斗七星に属しているが、人間を生成、育養する能力をそなえている七神童子は北斗の精気である。ねんごろに焼香転経して、七元氣童子に祈れば、降福度災死、北斗は死籍をけずるようになる」。 そのほかに韓国、台湾、沖縄地方の南北斗星の信仰について例を引いて書かれている。 ・仏教『北斗七星護魔法』護魔法を行えば、北斗が死籍を削って自分の姓名が長寿の札に記されるようになるから命はのび、災いが除かれるうえに富がふえる。だからこれ以上の延命法はない。 ・仏教『北斗七星護摩秘要儀軌』北斗は日月五星の精で、下は人間をただし、善悪を司り、禍福をわけるから、北斗を礼拝供養すれば、富貴記長となることができる。
20	像容		小峰智行	2008	「妙見菩薩の圖像について」	『智山学報』	第57号	智山勤学会	圖像調査により妙見信仰やその展開、その成立に関わった思想や他の尊格との関わりを明らかにしようとするもの。
21			清水眞澄	2014	「読売新聞社所蔵の木造妙見菩薩立像について」	『三井美術文化史論集』	第7号	三井記念美術館	読売新聞社所蔵の木造妙見菩薩立像は、体内に墨書された梵字により妙見菩薩像と確認される貴重な作例であること、院派の通海が発願した可能性が高いこと、神道と仏教と道教の複雑な交流を示す像であることが確認できたとしている。妙見菩薩として最も早い武将形の姿は、大將軍八神社神像のような先例にならない、陰陽道と星宿信仰が道教において同化した姿と位置付けた。
22			林温	1997	「妙見菩薩と星曼荼羅」	『日本の美術』	第377号	至文堂	星に対する信仰史・思想史を体系的に叙述しようとするものではなく、北極星・北斗七星を神格化した妙見菩薩の概説を述べ、星が日本の美術のなかにどのように造形されてきたかを概観している。
23			山下立	1999	「妙見菩薩の変容 - 千葉・個人蔵銅造妙見菩薩像懸仏の像容の研究を中心に」	『密教図像』	18	密教図像学会法蔵館	千葉・個人宅で発見された妙見菩薩懸仏の像容から、妙見菩薩の造像の歴史・特徴や信仰背景、真武神、鎮宅靈符神、大將軍信仰との関わりについて論じた。仏教的妙見信仰の基盤の上に複合的な混沌が進み、信仰のあり方が造像にも波及したとする。
24	千葉氏の妙見		石井秀美	2000	「千葉の妙見大祭」	『西郊民俗』	第171号	西郊民俗談話会	千葉神社妙見大祭の詳細な現地調査報告と、地域の人と祭りの関わり、祭りの伝えられてきた経過等について記している。
25			石出猛史	2006	「七天王塚伝説に関する文献的考察」	『千葉いまむかし』	19号	千葉市教育委員会	千葉市中央区猪鼻山に散在する七天王塚にまつわる伝承について様々な文献から論じている。
26			伊藤一男	1994	「中世の妙見信仰と祭祀組織 - 千葉市の守護神と金剛授寺について」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	『千学集抄』をもとに、千葉氏の守護神である妙見と金剛授寺について述べた。千葉氏の妙見信仰を概観し、妙見社の神事、金剛授寺の性格、神領相論などを論じている。千葉氏は妙見神の前での儀式や行事を通して国内の武士をまとめあげていった。
27			沖本博	1997	「妙見信仰序説—千葉氏妙見とその源流」	『あしなか』	第249輯	山村民俗の会	千葉一族が信仰した妙見についてその歴史をたどり、千葉県内に今も伝わる妙見について調査した内容を述べている。羊妙見についても詳しく述べられている。妙見の信仰が「鎮魂」「疫病神」「祟り」に恐れおののくなど災厄に対する靈験に重きを置いている。
28			小澤清男	2000	「寒川神社に伝来する『大舟の飾り幕』について」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第6号		寒川神社に伝来する「結城(寒川)船」の飾り幕の論考で、中世の田楽の伝統をよく継承している岐阜県明見神社の「栗栖郷妙見大菩薩縁起」と福島県歡喜寺蔵「下総国千葉郷妙見大縁起絵巻」を比較検討した。
29			後藤有	1998	「近世妙見寺と両村の村落 - 旧妙見寺文書の考察から -」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第4号		千葉町は佐倉藩の港町であると同時に上・下総の妙見信仰の中心地として栄えた。旧妙見寺文書の研究を進めることは、今後の近世千葉町研究に大きな意義があると考ええる。
30			段木一行	2005	「千葉妙見の祭礼—その原始的風景—」	『房総の郷土史』	第33号	千葉県郷土史研究連絡協議会	旧妙見寺文書に基づき、長い歴史に裏付けされた伝統的な妙見寺の祭礼について考察した。「御船」、「八乙女神楽」、千葉氏の繁栄と没落、神仏判然之令などの影響を受けた妙見寺の変遷にも詳しく触れている。
31			津田徹英	1998	「現存作例からみた千葉氏の妙見信仰をめぐる二、三の問題」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第4号		十三世紀後半に、千葉氏が信仰する「妙見」の圖像に大きな変革と転換があったことを明らかにし、この変革と転換がわが国の妙見信仰の流れの中でどのような意味を持っているかを考察した。「千葉氏は真武神に由来する妙見を信奉することで一族としての結束をはかりながらも、家それぞれに独自の圖像を伝え、これを家の象徴として奉祀していた。そして真武神に由来する妙見像を『神』の姿として捉え一族の間でこの意識が長く守られた」と述べている。
32			土屋賢泰	1994	「妙見信仰の千葉氏」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	妙見信仰の流れをたどりながら、千葉氏を中心に妙見信仰の意味と役割を明らかにする。千葉神社の妙見祭は現在も盛大に行われているが、これは妙見の信仰を社会におけるひとつの文化伝承として位置づけたと言える」と述べている。
33			中野洋平	2009	「下総国妙見寺祭礼における神事舞太夫—寺社祭礼における先払い役の担い手—」	『鷹陵史学』	第35号	鷹陵史学会	千葉妙見寺の祭礼に出仕する神事舞太夫を中心に、房総地方における神事舞太夫の活動とその姿を明らかにした。千葉妙見寺に伝えられた妙見菩薩が上野国息災寺から勧請されたことは、多くの文献に記され広く伝えられているが、この詳しい経過を記述し、そこに神事舞太夫の先祖が関わった事象経過を明らかにしている。

34			眞野寿美子	1987	「『源平闘諍録』の妙見説話について」	『青山語文』	第17号	青山学院大学日本文学会	『源平闘諍録』の妙見説話について、『千学集抄』『妙見実録千集記』と比較検討した結果、『源平闘諍録』の妙見説話は、千葉氏の妙見説話と深く関わっているが、現在の千葉妙見宮の伝承とは差異が生じていることがわかった。そして千葉妙見宮の宣揚に変質し『千学集抄』『妙見実録千集記』として現在に伝わっているといえることができる。
35			丸井敬司	1995	「千葉氏の武士団形成に関する一考察」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第1号		関東の代表的な武士団であった千葉氏の武士団形成と、武士団の成立に重要な役割を果たした守護神（妙見）について考察している。
36			丸井敬司	2003	「千葉妙見の縁起とその成立に関する考察」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第9号		千葉妙見寺（現在の千葉神社）から発見された妙見縁起等（江戸時代制作）に基づき、妙見縁起や説話について考察し、妙見信仰の成立、伝来、千葉氏の妙見信仰について述べられている。
37			丸井敬司	2005	「房総地方の妙見信仰と製鉄・鍛冶について」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第11号		千葉県内妙見社の信仰の内容を武神と製鉄・鍛冶という視点で調査し分析を行っている。
38			丸井敬司	2006	「千葉妙見寺より発行された二つの御影（妙見象）について」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第12号		千葉妙見寺（現在の千葉神社）より発行されていた（現存しない）2種類の御影に描かれた妙見像から千葉の妙見信仰と千葉武士団との関係を考察している。
39			丸井敬司	2008	「『千葉わらい』と妙見信仰に関する一考察」	橋本裕之編『パフォーマンスの民族誌的研究（2005～2007年度）』		千葉大学大学院人文社会科学研究科	「千葉笑い」は、江戸時代千葉町を中心とした地域の人々が、妙見信仰にあった「悪態」と「笑い」を利用してお互いの欠点を自由に発言し地域の人々の間のわだかまりをなくし、地域の安定を図るために作り出されたものと捉えている。そして「千葉笑い」の呪術的な力は、「歌垣」「鈴振りの神事」に通じるものと述べている。
40			丸井敬司	2013	『千葉氏と妙見信仰』			岩田書院	【目的】関東の代表的武士団であった千葉氏とその守護神であった妙見菩薩に関わる縁起・説話や、妙見像などの標的資料から、千葉氏武士団の成立と妙見信仰に関して考察した。 【内容】千葉氏武士団の盛衰と妙見信仰について史的に考察したものであり、千葉氏に限定された妙見であるが、妙見が千葉氏の特殊な信仰から、我が国に於ける様々な妙見信仰とも密接な関わりを持ちながら、普遍的な信仰へと変容していった過程を明らかにしている。また妙見像の表裏の事象の変遷を巧みに分析している。
41			源健一郎	1991	「千葉妙見の本体・本地説―源平闘諍録と千葉妙見社関係資料との間」	『巡礼研究』	第3号	巡礼研究会	千葉妙見の本体・本地説としては、『源平闘諍録』に〈北辰・十一面観音〉説が記される一方、『千学集抄』等には〈北斗七星・七仏薬師〉説が伝えられている。これをどう捉えるかは、津田徹英氏・丸井敬司氏に言及があるが、鎌倉後期から南北朝期、千葉寺周辺における関東天台の動向を前提にした場合、再考の余地があるように思われる。
42			宮原さつき	1995	「鷲と妙見」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第1号		鷲と妙見、特に千葉妙見との関わりについて考察し、鉾山との関係についても課題を提起している。
43			宮原さつき	1996	「牛頭天王について(1)―千葉妙見との関わりを中心に」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第2号		牛頭天王について、七天王塚、千葉氏の妙見信仰、将門信仰、御霊信仰と合わせ考察している。
44			宮原さつき	1997	「牛頭天王について(2)―千葉妙見との関わりを中心に」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第3号		御霊神としての牛頭天王、天神や天刑星、祇園との関係、八幡と天神との関わりを考察し、千葉妙見における牛頭天王の意味を述べている。
45			宮原さつき	1999	「千葉市内の優しい表情の妙見像と女性の信仰について」	『千葉市立郷土博物館研究紀要』	第5号		千葉氏の守護神・武神として信仰されていた妙見の像容が優しくなり、女性の守り神と認識されるに至った過程を考察している。「特に優しい表情の妙見像は安産や子育てに功德が付加され、信仰心の厚い女性達によって千葉氏の妙見信仰は続いているといえよう」(p.28)と述べ、子安神と妙見との関係は、千葉氏の妙見信仰を考える上で重要であると指摘している。
46			宮原さつき	1999	「千葉氏の妙見信仰と房総の神仏」	千葉市美術館編『房総の神と仏』（平成11年度千葉市美術館秋季特別展図録）		千葉市美術館	千葉市美術館で開催された平成11年度秋季特別展図録に収録されたものである。千葉県内の妙見は神社や寺院で祀られたり、村の片隅の祠で手を合わせられたりと、その信仰形態はさまざまであり特定の神仏と矛盾せず共存し、『原始妙見信仰』に八幡、天神、牛頭天王、将門などの信仰が複雑に付加され千葉の妙見信仰になったと考えられると述べている。
47			築瀬裕一	2000	「中世の千葉―千葉堀内の景観について―」	『千葉いまむかし』	13号	千葉市教育委員会	千葉氏が館を構えていた時代である中世の千葉について、様々な材料からできる限り具体的に明らかにした。中世、千葉氏が館を構えた現在の千葉市中央区あたりの下総における位置づけは、大きな港町として経済的にも重要な基点であったことが知られる。
48	近世の妙見		石出猛史	2001	「江戸の病と信仰」	『千葉医学雑誌』		千葉医学会	江戸時代当時の人々の身近にあった疾病を対象とし、その取組について触れている。その一つとして、妙見と眼病について述べられている。中世以降は日蓮宗で妙見を尊崇し、眼病に靈験ありとした。
49			大島建彦	2012	「家伝の呪符」	『西郊民俗』	第219号	西郊民俗談話会	能勢家の孤落としての御礼の話。能勢家の家筋が孤落としての法とかかわってきたことが知られる。
50			小山満	2001	「名画の背景―北斎と広重」	『創価大学教育学部論集』	第51号	創価大学教育学部	葛飾北斎が妙見信仰の篤信者であり、雅号や作品の中に妙見に由来するものを見ることができる。
51			坂本勝成	1977	「上方の妙見信仰」	『立正大学文学部論叢』	第58号	立正大学文学部	近世における上方の妙見信仰について、能勢妙見、久々知妙見、岩倉の妙見などについて成立とその展開について述べた。全体を通じて日蓮宗の妙見がテーマになっており雨乞いの霊応による農業神を基本としているが、天明・寛政以降は芸能界・花柳界の守護神としても人気を集め、厄除開運をもたらす八百万の流行仏であった。
52			諏訪春雄	2001	『北斎の謎を解く』			吉川弘文館	葛飾北斎は、号に北斎、辰政を使用し、墨田区の柳嶋妙見山法性寺に足繁く参詣するなど妙見信仰を篤信していたことが述べられている。北斎を切り口に、妙見信仰と日蓮宗の関係についても言及する。
53			野村耀昌	1974	「近代における妙見信仰」	望月敏厚編『近代日本の法華仏教』所収		平楽寺書店	上代、中世の妙見信仰についての概説も加えながら、江戸時代以降の妙見信仰について、具体的な例を引きながら詳しく述べている。
54			宮崎茂夫	1997	「江戸・東京 妙見さま巡り」	『あしなな』	第249号	山村民俗の会	東京（一部千葉）に現在も残る主だった妙見について調査したもの。詳しくはないが、民俗的な視点からの見解もある。有楽町のそごうデパート屋上には、よみうりランドにある重文妙見菩薩の身代わり本尊が昭和53年に奉られたとある。

55		村田典生	2012	「流行神の展開過程—近世山科妙見を事例として—」	『佛敎大学大学院紀要』	第40号	佛敎大学大学院	近世京都における流行神の展開過程を考察している。事例として享保期に流行をみた山科妙見を取り上げ、流行神の祀り上げられる過程と社寺側の運営戦略や市井の人々の信仰と遊山の関係、流行神の土着化の進行を明らかにした。
56		若月正吾	1971	「江戸時代における仏敎庶民化の諸様相」	『駒澤大学佛敎学部論集』	1	駒澤大学	仏敎文化が庶民の間に拡張伝播していった状況を述べた。初期仏敎の時代は貴族層、中世から近世初頭にかけては中間層、江戸時代中期以降にかけては、庶民文化の向上と、伝道者側の布敎対象の民衆化によって村落の寺院や仏堂・村を中心とした宗教活動が活発化した。
57	秩父地方の妙見	井上勝海	1997	「奥武蔵妙見考—我野神社・喜多川神社と秩父妙見」	『あしなかな』	第249輯	山村民俗の会	旧秩父郡周縁に点在した妙見社をたどりながら妙見信仰について考察している。秩父七妙見、製鉄民・鉦山師（山伏）、修験との関係、三姉妹神などについても言及している。
58		内田賢作	2002	「女神と信仰」	『埼玉民俗』	第27号	埼玉民俗の会	日本人は自然に対する畏怖畏敬の念から自然崇拝、山岳・海・河川・湖水に対する信仰が生まれ、農耕信仰が生まれ、山中他界観などの祖霊信仰が生じた。このような素朴な民間信仰を組織化したのは修験道であった。利根川筋を下るかたちでこれらの信仰を考察している
59		大明教	2002	「埼玉県秩父地方の将門伝説」	『埼玉民俗』	第27号	埼玉民俗の会	先学の研究を基に、秩父地方における将門伝説を収集し、構造化した上で、特色や成立の要因等について分析的に考察している。将門伝説における妙見信仰の影響についても言及している。その結果、秩父地方の将門伝説は、将門を英雄視したり讃えたりするものではなく、将門は仇役としての姿であり、秩父地方の自然環境の中で周囲の人々の姿が伝えられているのではないか。
60		千嶋寿	1981	『秩父大祭—歴史と信仰と』			埼玉新聞社	大和朝廷の関東進出と国造である知知父氏の関係、秩父神社、シャーマン信仰ともいえる武甲山信仰などについて、伝承からの推論が主体であるが、秩父大祭を見つめる視点で深く踏み込んで述べられている。
61		中嶋信彰	1997	「埼玉北部妙見信仰—上州引間妙見寺・鼻高町達磨寺—」	『あしなかな』	第249輯	山村民俗の会	埼玉県と関わりの深い隣接の群馬県内の妙見信仰について紹介している。引間の妙見、高崎市の少林寺達磨寺の二寺について述べている。
62		山立虎魚	1997	「妙見・鍛冶・修験—赤沢星神社と鍛冶絵馬の周辺」	『あしなかな』	第249輯	山村民俗の会	埼玉県飯能市にある赤沢星宮神社に古くから伝わる鍛冶絵馬がある。絵馬が奉納された時代の星への信仰、この地方の地域性を背景に、妙見と鍛冶、修験との関係から、この地方に伝わる妙見について考察している。
63		若松良一	2011	「秩父妙見序論—外秩父の妙見を祀る社寺の検討から—」	『埼玉県立川の博物館紀要』	第11号	埼玉県立川の博物館	秩父盆地の東側に接する外秩父地方の妙見を祀る社寺を対象として行った現地調査の概要と考察を述べている。
64	相馬氏の妙見	岩崎真幸	1997	「相馬地方の妙見信仰」	『あしなかな』	第249輯	山村民俗の会	相馬地方にはさまざまな形の妙見信仰が見られることを、主に民俗の視点から述べている。相馬地方の妙見には馬の信仰が顕著である。
65		二本松文雄	2004	「千葉・相馬の羽衣伝説と妙見信仰」	『野馬追の里原町市立博物館研究紀要』	第6号		千葉と相馬の羽衣伝説について5つの文献からの考察を民俗的な視点から紹介している。羽衣伝説、将門伝説、妙見信仰が融合したものもみることができる。
66		二本松文雄	2007	「七に関する将門伝説と妙見信仰—千葉・相馬地方を中心として」	『野馬追の里原町市立博物館研究紀要』	第7号		現在伝わっている平将門、千葉氏、相馬氏と七に関する伝承の背景を文献史料から探っている。
67		丸井敬司	2004	「尊星王（妙見）法と千葉氏・相馬氏の妙見信仰」	『野馬追の里原町市立博物館研究紀要』	第6号		千葉・相馬氏の妙見信仰について、近畿地方の妙見信仰や摂関期・院政期・鎌倉幕府での妙見信仰を比較検討し、歴史的な視点から詳細に考察している。
68		村上春樹	2009	「将門伝説を探る」	川尻秋生編『将門記を読む』所収		吉川弘文館	将門の代表的な伝説として、異界伝説、調伏伝説、王城伝説、首の伝説、七人将門の伝説、東西呼応の伝説の六種をあげて論じている
69	大内氏の妙見	太田順三	1963	「大内氏の氷上山二月会神事と徳政」	『九州中世社会の研究』		渡部澄夫先生古希記念事業会	大内氏の二月会神事と徳政の関わりを検討している。大内氏の徳政は天下一同の「惣徳政」ではなく、奉公に励むもののみの債務を破棄する徳政令であり、家臣団を救済し領国経営を安定させ、権力編成を強化するために実施されたものであった。大内氏の最大の仏神事である二月会においても大頭役勤仕の被官層を対象に徳政適用を認めていた。ここでは二月会神事の運営について、詳細な記述がされている。
70		金谷匡人	1992	「大内氏における妙見信仰の断片」	『山口県文書館紀要』	19	山口県文書館	「大内氏の系譜」「亀童丸の聖性」「大内氏の氏神祭祀や妙見信仰にはたした陰陽師の役割」の3つの視点から、大内氏が妙見に求めたものを考察した。その結果、大内氏の妙見信仰は、政治であり経済でもあり文化でもあった。
71		金谷匡人	1992	「山口県から見た北辰信仰の諸相」	『地域文化研究』	7	梅光女学院	個人の不老長寿から帝王学まで北辰の顕れ方は様々である。最初に船を導く北辰について述べ、次に星が降るといふ言い伝えから金属との関連、渡来人の関与が思い起こされる。3点目に海に潜る現象として亀、海士とのかかわりについて述べている。
72		金谷匡人	1997	「山口県の北辰信仰」	『あしなかな』	第249輯	山村民俗の会	山口県にみられる北辰に対する思想・信仰の痕跡を紹介している。特に夜の妙見＝北極星に対する人口の北極星として航海を見守った存在としての見解が興味深い。
73		平瀬直樹	1990	「大内氏の妙見信仰と興隆寺二月会」	『山口県文書館研究紀要』	第17号	山口県文書館	大内氏は、領国支配政策の一環として寺社を利用したが、ここでは、氷上山興隆寺について考察している。興隆寺は大内氏の氏神として妙見信仰の中心であり、重要な年中行事である二月会が行われた。そこには、豊作予祝への奉仕の形を借りて、大内宗家を家臣領民に敬わせ、領国支配を正当化する役割があったのではないか。
74		平瀬直樹	2014	「室町期における大内氏の妙見信仰と祖先伝説」	『史林』	第97号	史学研究会	大内氏の妙見信仰と祖先伝説の関係を論じ、大内政弘が真武神的なイメージを活用し、祖先伝説を体系化することによって領国内に妙見信仰という独自の宗教的秩序を構築したことが述べられている。
75		平瀬直樹	2014	「近世の文学・演劇に描かれた大内氏」	『山口県地方史研究』	第112号別冊	山口県地方史学会	大内氏は、妙見を篤信したが、一方、妙見への信仰を領国支配のイデオロギーとした。近世の文学・演劇作品から大内氏の姿を伝えているものを取り上げ、民衆が大内氏に対して抱いた思いを考察している。
76		平瀬直樹	2015	「南北朝期大内氏の本拠地 弘世期を中心に」	『日本歴史』		吉川弘文館	弘世期における大内氏の本拠地は、興隆寺（境内にある氷上妙見社で祭祀を行っていた）や乗福寺のある大内であった。義弘期の内戦で勢力が衰え山口を新たな本拠地として整備し敵ったと考えられる。

77	八代の妙見		福西大輔	2008	「清正公信仰と妙見信仰との関わりについて」	『熊本博物館館報』	No. 20	熊本市立熊本博物館	加藤清正と妙見信仰との関わりをテーマに各地を調査したところ、直接的な繋がりほとんどなく、清正が妙見信仰の熱心な信者であったとは言えない。慶長年間（1569～1615）以降、妙見信仰が日蓮宗に取り込まれるようになり清正も日蓮宗の信者であったことから、死後、清正公信仰が進むなかで日蓮宗を媒体に民衆に拡がりつつあった妙見信仰が組み込まれていった可能性がある。
78			福西大輔	2012	『加藤清正公信仰』			岩田書院	加藤清正のイメージは常に変化し続けており、熊本における清正公信仰も変化しながら続いていることを通して、日本人の神概念の再検討を行っており、清正公信仰と妙見信仰との関連についても触れている。
79			安田宗生	1991	「熊本の妙見信仰」	『市史研究くまもと』	第2号	熊本市	八代妙見を除いた熊本の妙見信仰について調査した結果、祀られている妙見は大部分が水神であると伝承されており、八代妙見との関連を説く事例が少なく、本来の妙見信仰とはかけ離れている述べている。今後、妙見と鉢山や修験との関わりについての考察が必要であることを示唆している。
80			安田宗生	1994	「八代妙見祭りについて」	『比較民俗研究』	第1号	筑波大学比較民俗研究会	八代妙見の祭りについて、形成、組織、妙見大祭の時系列による調査内容が述べられている。星祭りとしての要素はなく、多くの人達は稲の収穫儀礼であると意識している。
81			安田宗生	1999	「八代妙見における祭りの変化」	『文学部論叢』	第64号	熊本大学文学部	八代市の妙見宮大祭の、明治以降の祭日と祭りの内容の変化について述べられている。旧暦から新暦に移行した後また旧暦に戻しており、そこに政治的な対立が存在したであろうことを示唆している。
82			安田宗生	2008	「都市祭礼の成立と展開 一八代妙見大祭を例として」	『東アジアの文化構造と日本の展開』		熊本大学 拠点形成研究プロジェクト	八代市の妙見宮大祭は肥後藩唯一の都市祭礼である。都市祭礼はほとんどが夏の祭りとして御霊信仰との関係で論じられてきたが、妙見宮大祭は、五穀豊稔の秋祭りであり夏祭りの性格を有していない。八代城下町の運営とこの祭りがどのような関わりあいの中で形成されたかを論じている。
83	稲城の妙見		遠藤聖一	1997	「妙見探索記行」	『あしなか』	第249輯	山村民俗の会	百村妙家、八代妙見、峽東東山妙見、但馬妙見、千葉妙見、御殿場妙見など9件の調査報告。
84			松本清蔵	2014	『青龍降臨の宮ー稲城百村妙見譚』			松本清蔵	稲城百村妙見の年間の行事とその歴史について詳細に調査し、民俗の視点から考察している。
85			松本三喜夫	2015	『歴史と文学から信心をよむ』			岩田書院	「信心の宿るところ」をテーマに日本の5つの地域の信仰について深く考察している。作者は百村にお住まいなので、百村の妙見尊行事について述べている。
86	その他の地方の妙見		田地春江	1980	「備後三原地方の妙見信仰」	『日本民俗学』	第130号	日本民俗学会	広島県三原市を中心とした地域における妙見信仰の実態が、聞き書きにより克明に報告されている。修験者の影響が多くみられる。
87			田中君於	1994	「斎王群行と北辰崇拝について」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	北辰祭は平安中期に年中行事として定着したが、この北辰祭による北辰の奉燈を斎王群行の年には禁止している。この経過を考察すると、北辰祭は道教的色彩が濃厚といえるが仏教的な要素も含んでいた。斎王群行は神事であり仏教的なものを避けたためであると考えられる。北辰祭の根拠となる文献に、行事の内容が詳しく述べられ、また禁止の根拠となる資料が提示されている。
88			山本ひろ子	1994	「度会氏の星宿信仰ー『高庫蔵等秘抄』をめぐって」	佐野賢治編『星の信仰』所収		溪水社	『高庫蔵等秘抄』に基づき伊勢神宮外宮祀官度会氏の星宿信仰の多様な姿を考察している。中世的な伊勢の星宿信仰の一端を明らかにしている。
89			植野加代子	2010	『素氏と妙見信仰』			岩田書院	素氏がどのような理由で妙見菩薩を祀る必要があったのか、水上交通を中心に様々な角度から検討している。

日本における星辰信仰の経過

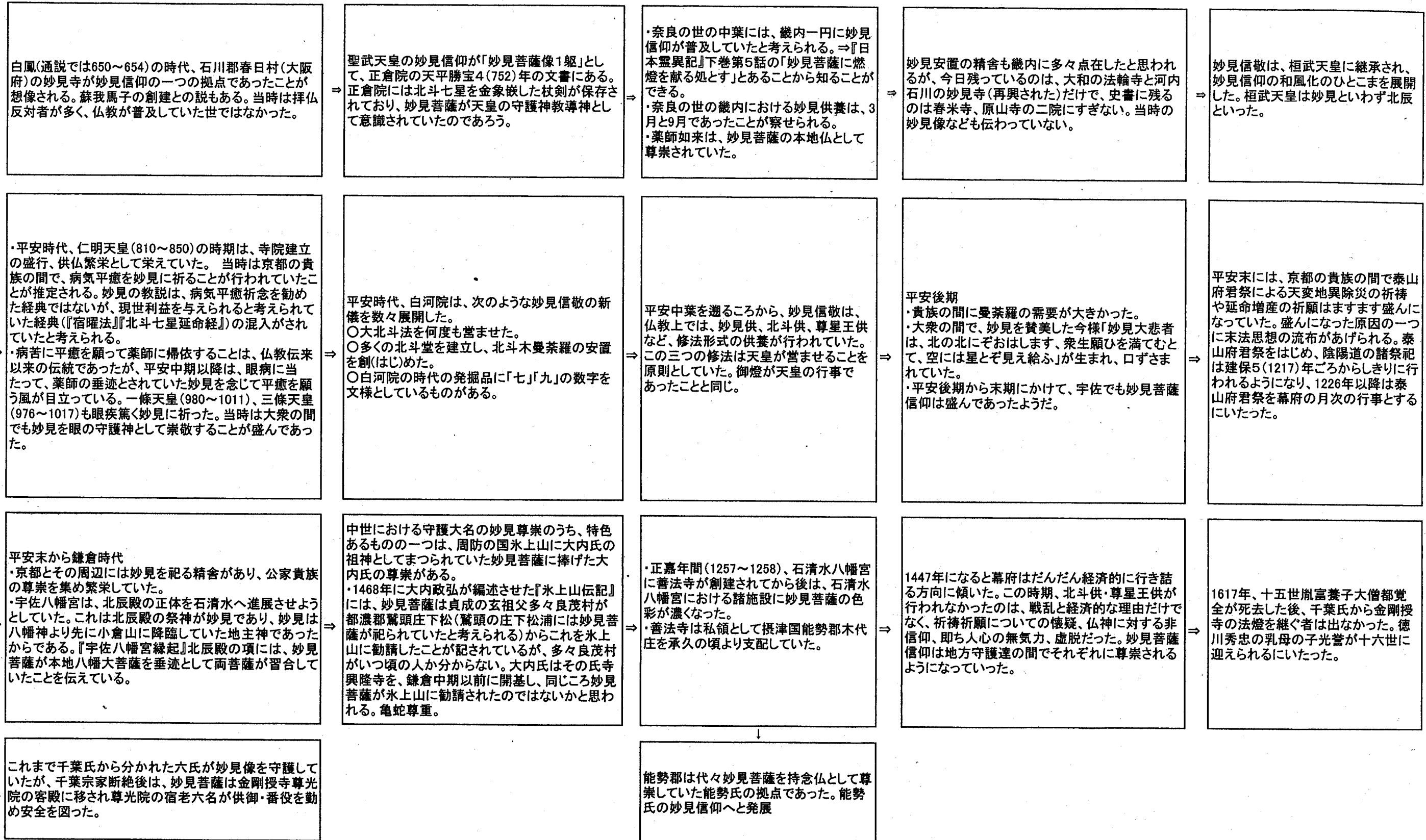
資料 1-1

中国				日本				
	戦国時代～漢代に発達した中国天文学 ⇒百済僧や遣隋留学僧により日本に伝えられる	道教の星辰信仰の視点	仏教の星辰信仰の視点	飛鳥時代	奈良時代	平安時代	中世	近世
北極星 (北辰ともいう)	北極星を天の主宰者である天帝、太一神とみなし、天人相関の思想により星や星座を地上の国家機構になぞらえ天官と称し、天文変異現象を国家的な変事の前兆とみなした。	玉皇大帝の命を受けて星や三界を支配する北極大帝、北極玄天上帝、北極紫微上帝として崇拜される。	北辰を妙見とする。	・『日本書紀』には、天武紀に惑星や星座名、陰陽寮、占星台の記述があり、この時期に天文観測制度が整備されたと考えられる。	『続日本紀』に詳しい星座名が記されている。	・『日本三代実録』や貴族の日誌等に豊富な星の記録がある。 【道教の視点から】さまざまな星が神格化され、北極星(北辰)、北斗七星は人の禍福、寿命、運勢を司る星として重視された。「御灯」や「元旦四方拝」は天皇の宮中行事として9世紀初め頃定着した。次いで陰陽師により延寿、攘災などを目的とするさまざまな星祭が行われた。		
北斗七星	古来から重視され『史記』天官書には、天帝の乗車であり陰陽を分かち四時を建て五行を整える星とする。	司命神として寿命禍福を掌る神とする。	密教では本来北斗信仰は希薄であったが、中晩唐期には、道教の星神信仰を取り入れた『仏説北斗七星延命経』等の道仏混淆の経典がつけられた。	・7世紀末～8世紀初頭の頃の築造とされる高松塚古墳には、北極五星を中心に四輔星、二十八宿等の主要な星座が描かれており、国家支配における星の知識の浸透を窺わせる。		【仏教の視点から】 ・密教の北辰北斗信仰は、9世紀に入唐僧により道密混淆の多数の星辰関係経典が伝えられ、それを典拠として10世紀に様々な手法が成立した。 ・密教はインド天文学・占星術の要素を含み、九曜、二十七(八)宿、黄道十二宮が信奉された。 ・平安中期から室町時代にかけて、密教占星術としての宿曜道も行われ、宿曜師が天皇・貴族のために運勢や寿命を占い星供を行った。 【10世紀中頃】密教の星辰信仰と道教の北辰・北斗信仰が結合し、延寿、攘災のために本命供や北斗法、尊星王法、妙見供等さまざまな密教の修法、星供が成立した。	第七星が破軍星と呼ばれた。	日蓮宗の守護神との説が生まれる。
妙見			北斗信仰は希薄であったが、『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』に、北辰を妙見とし、神呪を称えることで国家擁護の利益や延寿・滅罪・増福や除災・五穀豊穡などの幅広い利益を説いている。		北辰を神格化した妙見信仰が民間で盛んであった。 ⇒『日本霊異記』『類聚国史』『年中行事抄』『権記』等に妙見の記述がみられる。	・京都畿内で多く信仰された。 ・密教の星辰信仰と道教の北辰・北斗信仰が結合し、北斗法、尊星王法、妙見供等さまざまな密教の修法、星供が成立。	・千葉氏、大内氏等地方の豪族や武士の間で守護神や軍神として信仰された。 ・日蓮宗が妙見信仰を取り入れたことにより民間に普及した。	・海上安全の神、商業の神、眼病平癒の神などとして、民衆に広く尊信された。 ・各地に妙見社、妙見堂が建てられ様々な靈験が宣伝されるようになった。

『日本神仏の辞典』〔大島建彦ほか3名 2001 大修館書店〕の「北斗七星」「星」「北極星」「妙見」を基に筆者が作成

日本における妙見信仰の推移

資料1-2



妙見寺社地理的分布表

(我が国における星の信仰) 所載分布表訂正補編 一九六五・六・二

国名	郡名	市町村名	社祠堂名	祭礼日	備考
山城	愛宕	京都今出川	妙見菩薩社		雍州府志
"	"	京都三年坂上	北斗堂		今不知其処(雍州府志)
"	"	花園	妙見社		地主神(郡名所図会)
"	"	鷹峯北	摩露堂寺		
"	"	"	摩露林寺		
"	乙訓	奥海印寺	妙見寺	九・二十一	鳥居額、妙見菩薩 堅額并殿 南向、社同、土人 為摩露神
"	"	岩倉	朝日妙見		実相院
"	"	山梨	大毛寺(現在なきにひとし)		妙見
"	葛野	小野	妙見堂	七・十五	めけん堂という
"	宇治	大塚	妙見庵寺		
"	"	星宮			所祭妙見菩薩也(雍州府志)

河内	交野	星田	妙見神祠		旧名小松明神見 真鑑也
"	石川	春日	妙見寺		
摂津	東生(後西成)	上本町	妙見堂(現在なし)		常国寺内(慶 十二年建立)
"	"	大阪	妙見祠		四天王寺
"	"	"	六時堂		同、北辰星、計都 羅摩星
"	"	浅沢	星之宮		大白星、盤裂、 裂の三屋
"	能勢	地寅	妙見堂		真如寺
"	川辺	尼崎(現在近松公 園)	"		在、廣濟寺、折 門左衛門など傳
"	"	道頓堀	"		自安寺
"	"	土佐堀	妙見祠		徳山侯勸請
伊勢	桑名	東方	妙見寺		早瀬重山城主 少将折原所山伏
"	度会	(山田) 妙見町	妙見堂		常明寺内、度会 氏寺内
"	三重	星ノ宮			

尾張	海西	西保	星ノ宮	八・十八	
"	熱田		魔社(左星ノ社 左星ノ社)		
"	愛知	本地	星ノ宮ノ社 星ノ宮別所		天建星ノ神 下知我麻袋社
"	春日井	上小田井	星ノ宮		大白貴命、天加加 曾男、華牛、織女
"	"	内津	妙見寺		内津神社別当
駿河	益津		妙見地蔵		
"	志太		妙見社		
"	安倍		"		
"	鷹原		"		
"	富士		"		
甲斐	山梨	桜井	大星権現 小星権現		
"	"	西後屋敷	妙見祠		
"	八代	井上	妙見明神		
"	巨摩	中篠	大星明神		黒印神額一石四斗 四升、社記曰社寺 四百坪
伊豆	加茂	下田	妙見神社		新羅三郎義光勸請 鏡光ノ尊ヲ配祀
"	"	榑木	妙見寺		日蓮宗、文明十八 年、玉堤、日朝の 化で改宗
相模	大住	池端	妙見		御縁社末社
"	愛甲	中萩野	妙見社		神体、唐銅の辨像
"	"	下萩野	"	九・九	社領一石
"	"	"	妙見寺		妙見社別当
"	足柄下	須雲川	妙見		駒形社末社
"	"	早川庄	妙見社		

相模	足柄下	今井	妙見堂		日蓮宗本久寺内
"	淘綾	二宮	妙見社		棟札、寛文九年 建立
"	"	川勾	"		
"	鎌倉	永谷上	妙見		
"	高座	用田	"	九・二	
"	"	下草柳	"		慶安二年八月生 有り
武蔵	秩父	大野	妙見社	一・十四 四・八	
"	足立	大谷田	"		神体土彫(在綴)
"	"	本木	"		
"	多摩	西分	"		神像南向方二 五寸
"	"	青梅	七星権現		本殿方一間半 拜殿一間半二間
"	"	原宿	妙見社		
"	"	八王寺	妙見祠		
"	"	高尾山	"		
"	"	久保宿	"		
"	"	百	"		
"	都筑	山田	妙見社	四・六 九・二十六	
"	荏原	小山	"	九・二十八	社三間、四間 妙見八幡宮
"	"	中延	妙見堂		堂二間九尺、後 白金、妙円寺
"	"	妙見社			社三間、二間
"	"	大井	妙見堂		北極殿と稱す 隨筆寺妙見
"	葛飾	東一之江	"		妙見寺内
"	"	柳島	"		妙見山法住寺内

武蔵	千代田			千代田城守護 享
"	橋本	芝生	妙見社	
"	秩父	大宮	"	二・三 十二・六
"	"	三峰山	"	
"	"	定霧	"	八・三 神休薬師
"	"	安戸	"	二・三
"	"	上名栗	"	神・大呂貴神
"	"	南	"	六・十五 十二・三
安房		小湊	妙見堂	
上総		横田	妙見社	
"		網田	"	
"		洲西	"	
"		人見	"	
下総	千葉	千葉	"	
"	"	岡田	"	
"	"	飯高	飯高寺	妙見像二休、面像
"	"	"	妙見寺	二
"	"	(昌山)	妙見寺	三体、北庭殿額有
"	"	三里塚	"	り
"	"	銚子	妙見堂	正徳年間創建 海
常陸	新治	栗原	北斗寺	上山妙見寺
"	真壁	直井	星宮	
"	"	大島	"	
"	"	林	星宮	
"	"	大谷	星宮寺	
近江	志賀	比叡山	妙見堂	北谷、八部院

近江	志賀	上坂本	妙見社	
"	野洲	比江	星之宮	
"	"	比留田	秩父妙見明神社	
"	甲賀	杉谷	妙見社	
"	栗太	東	"	
信濃	筑摩	筑摩	星之宮	
"	"	山家	星大明神	
"	"	桐原	"	
上野	群馬	定間	妙見神社	
"	"	"	妙見寺	
下野	都賀	小栗川	星之宮	
"	河内	多功駅	多功星之宮	
"	安蘇	佐野天明	星宮明神	
陸奥	信夫	上飯坂	星宮	八・一
(霧)	"	"	村崎社	
"	"	町太往生	紫神社	八・一
"	"	下島渡	妙見社	
"	伊達	大渡	星宮権現	
"	会津	西田面	妙見神	八幡宮境内
"	"	小塩	星宮	諏訪神社境内
"	大沼	相川	妙見神	稲荷神社相殿
"	"	和泉田	星宮	天垂神社境内
"	耶麻	鎌名	明見神	熊野宮相殿
"	"	"	妙見堂	岩松寺境内
能登	鷹島	千野	妙見宮	
加賀				
越前				

越後	岩船	山北町邊		
但馬	但馬	八鹿	妙見宮	日笠院内
"	"	"	妙見神	
出雲	島根	浜佐田	妙見寺隱堂	
"	"	名分	妙見神社	九・二十七
"	"	大井	明見	森之神とす
"	"	別所	"	
"	"	野波浦	妙見神社	六・十五
"	意宇	乃木	妙見	九・二十八 二・九
"	"	林	妙見社	九・九 初五
"	能義	和田	"	日
"	"	清水	"	七・二十三
"	"	切川	妙見	
"	仁多	前布施	妙見社	九・十三
"	"	八代	"	
"	"	中村	"	
"	"	西湯野	星神	
"	"	久比須	三昧妙見	十・十五
"	"	下布施	妙見社	
"	大原	大々谷	妙見	八・十二
"	"	上佐世	妙見社	
"	"	日井郷山	妙見	十・十三
"	"	宇治	妙見	
"	"	三代	妙見	
"	"	東谷	星之宮	
"	"	加茂	妙見	二廟あり像を祀る

出雲	大原	山田	明現	二・一
"	"	湯	妙現	十・十三
"	"	下久野	"	"
"	磐石	志津見	妙見祠	
"	桶縫	小境	妙見	
"	"	福	"	九月中の 九日
播磨	神門	武志	"	
"	"	辨原	星宮明神	六・十五 九・二十九
"	"	所原	星神	
"	"	西園	妙見社	九・八・九
"	"	蔵波	"	九・一 十五 二社あり
"	明石	摺谷	妙見宮	境、東西両 南北二百十
"	"	如意寺	"	
"	加古	溝口	妙見大明神	九・八
"	赤穂	坂越浦	妙見寺	
"	"	留瀬寺	妙見大菩薩堂	
"	印南	宮前	妙見大明神	九・二十三
"	加西	別府	"	
"	国正	妙見社		
美作	吉野	長谷	妙見宮	九・十七
"	"	青野	"	
"	"	奥海	瀬宮	二廟
"	"	後山	妙見社	
"	"	長尾	"	九・十九 十一・十九
"	"	影石	"	

美作	吉野	川上	妙見	
"	"	田井	妙見社	
"	"	赤田	"	
"	"	五名	妙見宮	
"	"	壬生	妙見社	
"	"	金岡	"	
"	"	中山	"	
"	英田	上山	妙見山	
"	"	尾谷	妙見社	西向き
"	"	蓮華寺	"	
"	"	竹田	"	南向き
"	"	柿ノ原	"	
"	"	葛巻(念)	"	南向き
"	"	平田	"	"
"	"	倉敷	妙見宮	北向き
"	"	山口	妙見社	
"	勝北	小坂	妙見宮	
"	"	沢村	妙見社	
"	"	西上村	妙見宮	
"	"	石生	妙見社	
"	"	田井	"	
"	"	横月北	"	
"	"	河面	"	
"	"	鷹戸	"	九・二・三
"	勝南	島淵	"	
"	"	占相	"	二廟
"	"	為本	"	
"	"	百々	明見社	
"	"	川辺	明見大明神	

美作	東北条	宇野	妙見宮	二廟
"	"	原口	"	
"	"	戸賀	妙見社	
"	"	阿波	妙見堂	
"	"	公郷上村	妙見社	
"	"	下小瀬村	"	
"	"	行重	妙見	
"	東陣家	勝部	妙見社	
"	"	和山	"	
"	"	東一宮	"	
"	"	高倉	"	
"	"	奥谷	"	
備前	御野	三野	明見宮	
"	津高	西橋津	"	
"	赤坂	大鹿	"	
"	"	多賀	紫明現	
"	"	南佐古田	旭妙現宮	
"	"	太田	妙見社	
"	"	小原	妙現宮	
"	"	上師方	明現七社明神	
"	"	佐野	明現宮	
"	磐梨	神田	"	
"	"	大内	"	
"	和気	吉田	明現	
"	"	野谷	北庭備現	
"	邑久	宗三	明現宮	
"	"	尾張	"	
"	"	奥津	"	
"	"	西片	明現	

備前	児島	引綱	明現社	
"	"	榎江	明現宮	
"	"	尾原	三石明現宮	
"	"	広江	天形屋	
"	上道	海面	吉備明現	
備中	笠屋	三輪	明見宮	
備後	深津	深津	明見神	
"	蘆田	栗江	妙見	
"	"	大野	妙見社	
"	御調	菅	明現社	
"	"	小国	"	
"	"	立宮	"	
"	"	公方	"	
"	"	市	"	
"	三萩(世羅)	矢野地	妙見社	
"	"	太谷	"	
"	"	重永	"	
"	"	三若	"	
"	"	萬杉	妙眼寺	
"	奴可	小奴可	妙現社	
"	"	標代	"	
安芸	安芸	広島	妙見社	
"	"	仁保(高)	"	
"	"	向瀬	"	
"	"	尾長	妙見社	
"	沼田	小河	"	
"	高田	吉田	"	
"	"	福原	"	
"	"	上振	"	

安芸	加茂	孝家	明現社	
"	"	継	"	
"	"	下見	"	
"	"	原畑	"	
"	"	南方	"	
"	"	若山	妙見社	
"	"	原飯田	明現社	
周防		氷上山		興隆寺
"	都濃	鷺澤	妙見	妙見澤(伝説の地)
因幡	八上	牛戸	"	
"	八束	岩屋臺	"	
"	"	志谷	"	
"	"	志子郎	"	
"	"	水木中	"	廿五社大明神
"	"	明延	"	
"	"	山志谷	"	
"	智頭	大屋	"	
"	"	穂野見	"	
"	"	河戸	"	
"	"	山根	"	
"	"	井上	"	
"	"	木野下	"	
"	"	智頭	"	
"	"	東井	"	
"	"	福園	"	
"	"	尾瀬	"	
"	"	大井	"	
"	気多	大井	"	
"	"	田原谷	"	

因幡	多	河内	妙見
"	高草	伏野	"
"	"	矢塚	"
"	"	細見	"
"	"	下段	"
紀伊	名草	中野島	妙見寺
"	"	延時	妙見社
"	"	西土入	"
"	"	蘭部	"
"	"	栄谷	"
"	"	直川	"
"	"	弘西	"
"	"	北	"
"	"	島	"
"	"	瀧畑	"
"	"	西	"
"	"	藤田	"
"	"	彌宣(彌 か宣の誤り)	"
"	"	津秦 (秦?)	"
"	"	江南	"
"	"	坂田	"
"	"	内原	"
"	"	境原	"
"	"	口須佑	"
"	"	堀谷	"
"	"	平尾	"
"	"	明王寺	妙見森社

紀伊	名草	広原	妙見社
"	"	冬野	"
"	"	仁井田	"
"	"	岡田	"
"	"	小野田	"
"	"	冷水浦 (百方 連)	里神熊野神と共に 土産神社に合祀
"	"	神田	"
"	"	山田	"
"	"	幡川	"
"	"	別所	"
"	"	和田村	"
"	"	吉原	"
"	海部	和歌浦	妙見堂
"	"	西庄	妙見社
"	"	大川浦	"
"	"	橋本	"
"	"	大窪	"
"	"	小畑	"
"	"	市坪	"
"	"	三尾川浦	"
"	"	畑	妙見宮
"	那賀	中野黒木	妙見社
"	"	境谷	"
"	"	川尻	"
"	"	古稲田	"

天明元年、能勢より勧請という(紀伊続記)

里神熊野神と共に土産神社に合祀

紀伊	那賀	尾寺	妙見社
"	"	九品寺	妙見森
"	"	東坂本	妙見宮
"	"	勢田	妙見社
"	"	鑑	"
"	"	野尻	妙見森
"	"	新	"
"	"	別院	妙見社
"	"	下佐々	"
"	"	海老谷	妙見
"	"	七山	妙見社
"	"	上野	"
"	"	真野	妙見森
"	"	宮	妙見社
"	"	円明寺	妙見寺
"	"	四郷	妙見社
"	"	峯	"
"	"	本川	妙見寺
"	"	新庄	妙見社
"	"	福田	"
"	"	梅本	"
"	"	永谷	"
"	"	大角	"
"	"	野田	"
"	"	下津野 (木?)	妙見社八社、其中一社妙見、余五相殿
"	"	明王寺	"

春日、熊野等三神と相殿

本社五社あり妙見影向庭

熊野と合祀八幡の神宮寺

妙見社八社、其中一社妙見、余五相殿

紀伊	那賀	熊井	妙見社
"	"	中野	"
"	"	奥	"
"	"	船坂	二社あり
"	"	中	"
"	"	小川	"
"	"	川口	"
"	在田	田口	妙見宮
"	"	出口	妙見社
"	"	中	二社あり
"	"	沼田	"
"	"	小川	"
"	"	吉見	妙見宮
"	"	吉原	妙見社
"	"	糸川	"
"	"	栗生	"
"	"	中原	"
"	"	二川	"
"	日高	中産賀	"
"	"	上産賀	"
"	"	亥子	"
"	"	藤野川	"
"	"	伊佐野川	"
"	"	神野川	"
"	"	尾曾	"
"	"	小原最著	"
"	"	中木	"
"	"	三庄	"
"	"	樽子浜	"

二社あり

二社あり

二社

紀伊	牟婁	塩野	妙見社		
"	"	矢田	妙見宮		
*以上の他に新宮十二所権現の末社の妙見社あり					
土佐	安芸	甲浦	妙見		
"	"	元	妙見大権現	九五五	この他に二社
"	"	羽根	"	九九	
"	"	尾曾	妙見		
"	"	奈牟利	"	九九	
"	"	中島	明現	九四	
"	"	崎浜	妙見	九八	
"	"	椎名	"	九二八	
"	"	室津	"	毎月八日	
"	"	井口	"		
"	"	江川	妙見権現	九十五	
"	"	安曇川	妙見		
"	"	別役	"	十一月初	
"	"	赤野	妙見宮	九八	
"	"	馬ノ上	妙見	"	
"	"	加茂	"	九六十五	
"	"	田野	"	九八	
"	"	西谷	"	"	
"	"	成願寺	七社妙見	正月初申	
"	"	久木	五社妙見		
"	"	菅上	七社妙見	九九	
"	"	中川	妙見		

土佐	安芸	西川	妙見地主相殿	九三	
"	"	与床	妙見	五五	
"	"	小川	妙見林	九九	
"	"	上川	黒明神		
"	長岡	立川下名	三茶妙見		
"	"	奥大田	"		
"	"	穴内	"		
"	"	高津野	"		
"	"	馬瀬	"	十二十二	
"	"	楠木	"		
"	"	菴谷	三大妙見宮		
"	"	中尾	三休妙見		
"	"	栗生	三休妙見		他に二社
"	"	西峰	三休妙見		
"	"	桃原	"		
"	"	十市	妙見大明神		
"	"	五基山	"		
"	"	新改	"	九十八	
"	"	久礼田	三休妙見	九九	
"	香美	夜須	野地宮妙見		
"	"	羽尾	三休妙見		
"	"	眞家	妙見明神		
"	"	大谷	妙見		
"	"	徳松	妙見大明神		
"	"	山田島	三休妙見		
"	"	宮ノ口	三休妙見	正・二十 九六十五	

土佐	香美	佐岡	妙見大明神		
"	"	佐竹	妙見宮		
"	土佐	宮	"		
"	"	藺野	"		
"	"	久蔵	"		
"	"	大北川	"		
"	吾川	秋山	妙見	九九	
"	"	森山	妙見宮	九六十六	妙見寺あり
"	"	加田	妙見	九六十六	権現と相殿
"	"	勝賀瀬	妙見大菩薩	正・元 五三・二五 九十一	住吉大明神と相殿
"	"	鍛木山	三社妙見大明神		
"	高岡	明見	"		
"	"	甲原	明現		
"	"	日下	妙見権現		
"	"	名越屋	妙見大明神	正・二 五三・二五 九十九	
"	"	今成	"		
"	"	見之川	妙見宮		
"	"	大野	妙見		
"	"	池内	妙見		
"	"	桑田山	妙見八王寺		
"	"	吾井郷	妙見		
"	"	多野郷	妙見大明神		
"	"	神田	"	十一月午 の日	二祠及び明見宮

土佐	高岡	奥津	明現		
"	幡多	観音寺	明見大明神	九十一	
"	"	津崎	妙見	正・十	
"	"	山田	明見神社	正九五五	三社
"	"	"	"	九二七	
"	"	有岡	妙見	正・九五	
"	"	森次	妙見神社	十五	
"	"	和田	妙見	十三	
"	"	小深浦	妙見	九九	
"	"	大深浦	明現		
"	"	藤野川	明見	九十九	
"	"	大野	明見神社	十一十五	
"	"	吉尾	妙見大明神	十二二十	
"	"	山田	妙見	十二二	
筑前	遠賀	山田	山田妙見社	十一	山伏
"	"	別府	高倉妙見社	十一	
"	"	手野	妙見社	十一	
"	"	原	山妙見 浜妙見		大笠堂内志
"	豪摩	下益	北斗社	九九	祭神天御中主命 後醍醐天皇
"	宗像	大島	星ノ宮		
"	"	山田	妙見社	正・一	
"	"	吉田	"	"	
"	早良	飯盛	"		
筑後	生葉	新川	"	九二十五	
"	山本	柳坂山	星祭		
豊前	企救	足立	妙見社	三十二	
"	京都	入賀	"	九九	

豐前	仲津	元永	妙見宮	九・二十三
"	筑城	岩丸	妙見神社	
"	下毛	一戸	妙見社	
豊前	下毛	落合	妙見社	六・二十八
"	"	倉無浜	北辰社	十二・酉
"	字佐	字佐	"	十二・晦
"	大分	高岡山	妙見社	
肥後	八代	八代	"	

伝承から見た妙見の特性 その1

資料4-1

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
奈良時代以降		現世利益		民衆		
中世		現世利益		武士団		武士が北斗を守護神とするのは「破軍星」によるもの。
鎌倉時代～室町時代						日蓮門下には妙見信仰は見当たらない。日蓮聖人は、妙見を本仏釈尊の垂迹とは認めなかった。本地釈尊の北斗七星とした。
江戸時代						日蓮門下寺院においてに妙見信仰が盛んであった。

『我が國に於ける星の信仰』(1943 金指正三 森北書店)

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
鎌倉時代	越後	呪詛		武家		香妻鎮に城四郎永用と言う地方武士が妙見菩薩を崇拜し、源氏を呪詛している、とある。
中世		破軍星、弓箭の神		武家		北斗の第七星は破軍星ともいわれ、弓箭の神として武家に信仰された。(千葉集抄)
中世				千葉氏とその一門		千葉氏は家紋に三星、七曜、月星、六星等を用いた。就中、七曜、月星の紋は、北辰北斗を象る妙見を信仰の対象としている。岩城の相馬、田村、亙理、陸奥の千葉、國分、陸奥の南部、六郷、陸奥の津軽、出羽の伊達の諸氏が、七曜、月星の紋を用いているのは、千葉氏の東北における発展とともに、その家紋の由来する妙見信仰の一端を推察できる。また、関東の畠山、豊島、河越、曾我、中村の諸氏も妙見を信仰していた。(千葉傳記考)
中世				千葉氏とその一門		千葉氏の家例には、正月三箇日精進潔斎してその尊影を拝した。
						民間信仰として発達したのは、朝廷で行われた御灯が普及したよりも、密教が弘通して、その妙見信仰が、民間に流布したものと見るべきであろう。
						民俗信仰の中心となった妙見は、北辰北斗を礼拝する意義は薄くなり、自然崇拜から発達した我民族の多神的神祇感念の中に、密教の流布によって菩薩の一として、神々と同じ様に考えられて祭祀されたものが、礼拝の対象となった。妙見寺、妙見社、北辰社、北斗堂、尊星王堂は、かかる民間信仰の中心であり、源泉となつたのである。
平安初期				上層武家⇒下層武家⇒民間に広まった		(妙見信仰の)民間への流布の橋渡しをしたものに、武家がある。上層武家は概ね公卿に似寄った宗教を信仰した。従って下層武家に伝播し、民間に広まった。また、地方の大名、豪族が信仰して建立すると、それが民間の信仰を集め、民俗信仰へ展開したものと考えられる。妙見の信仰は、平安初期に現れ、日本霊異記には、妙見菩薩の靈驗を語った二つの説話が見える。

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
中世		弓箭守護の軍神		千葉氏		諸星の紋を家紋とした。宗家は月星の紋を用い、その一門は六曜、七曜、八曜、九曜、十曜の紋を用いた。
中世		馬の守護神	馬が妙見の化生、あるいは妙見の神使である	相馬家		九曜の星の紋は、北辰信仰にもとづくもの。野馬追を行う。
中世			玄武像に現れた蛇と亀を神の使として崇敬した	大内氏	亀とスッポンと蛇を捕えることを禁じた。その禁忌は、蛇に姿の似たウミウナギ、亀に姿の似たスッポンにおよんだ。	水上妙見宮として山口県大内地区の興隆寺内に大内家の一大霊場がつくりあげられ、隆盛を極めた。
室町						仏教的な妙見や北斗堂が、神道的な妙見社や北辰社として地方へ分布普及していった。
近世	全国各地			庶民		民俗信仰となり、妙見は全国各地に祭られ、「妙見さん」と呼ばれ、庶民の間に広く信仰された。
近世				日蓮宗信者		日蓮宗の寺院内には妙見が祭られた。
江戸時代	能勢妙見					能勢妙見に初詣でをすることを初妙見という。
江戸時代				陰陽師		北辰妙見を本尊として奉仕していた。
江戸時代	柳島妙見堂			大衆		「影向松(妙見松)」に棲む白蛇を見て礼拝する徒もありけり」との当時の記事にあり。
江戸時代	柳島妙見堂			大衆		信者たちが妙見講を意識して、参詣を盛んにおこなった。「どうぞかなえて下さんせ 妙見様へ願かけて…」という歌さえ流行した。
江戸時代	柳島妙見堂			大衆		正月・5月・9月の1日と15日を降臨日として開帳し、その日は柳島の妙見様の日として参詣者が群集した。
江戸時代	柳島妙見堂			大衆		江戸町民には馴染のところでもあったから、この境内の情景は、よく芝居に使われている。
江戸時代	柳島妙見堂			葛飾北斎		北斎が柳島妙見を尊信し、北斗七星に因って北斎と号し印章にも「亀手蛇足」の4字を刻んだものを使用していた。
江戸時代	本所能勢妙見	開運厄除		江戸の人々		文政年間に一般庶民に邸内に入って参詣することを許した。
江戸時代	鳴門妙見神社	航海の安全		航海業者や廻船問屋、海上商人たち		海を見下す山頂に妙見を祭った。
江戸時代						地方に分布した妙見の名称は、妙見神社、妙見社(明見、明現、明賢、妙現)、妙見宮、妙見神、妙見明神、妙見権現、妙見寺、妙見堂、妙見院、妙見森、妙見森社、妙見、北極殿、北辰社、北辰権現、北斗堂、星の宮、星ノ社、大星明神、小星明神、七星権現、紫明現、妙剣社、紫神社、村崎社など種々ある。

江戸時代						社寺としては数多くなく、多くは社、祠堂として小さなもので、末社とか寺院の境内、村里の森や丘や山頂などに、また塚や森が祭られ、その方向も一定せず、祭礼も殆ど根拠なくおこなわれていた。
江戸時代						祠堂に祭られているもののほか、石祠、石仏、森、樹木が妙見として、山頂、山麓、路傍、岬といったところにも祭られていることが多い。
江戸時代						
江戸時代					航海業者や漁民たち	海に臨んだ山や岬には、妙見山、妙見山し、妙見鼻など、妙見の名称をつけたものが各地にある。
江戸時代					靈神などいろいろの神に結び付けられた	

『星の信仰—妙見・虚空蔵』(佐野賢治 1994)

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
						星祭り、星供は寺院行事として行われ、真言家では北斗七星をその生年にあてた。
						中国や韓国にみられる七星信仰のように、司命星的な考えは日本人の間では非常に希薄である。
中世				武士		日蓮宗寺院において崇敬された。
						日本では北極・北辰が、地上の天皇に重ねられてイメージされ、また、神話においては天御中主神として天井至高の神に比定された。
						北極・北辰が古代天皇制に結び付いていた一方で、実際の北極星・北斗七星に対する信仰、妙見信仰も奈良時代の後半までには広く流布していた。妙見は北辰・北極星を神格化したもので、『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪經』には「我北星菩薩名けて妙見」と曰ふ、今神呪を説き国土を擁護せんと欲す、所作甚だ奇特の故に妙見と名く、閻浮体に如し、衆星中の最勝、神仙中仙菩薩の大將広く諸群生を済う。」とあり、『日本書紀』には妙見菩薩の靈験が23記されている。
古代	近畿地方					妙見菩薩に対する燃燈が盛んに行われていた(北辰祭⇒北辰に燈火を献じ、不祥を退け、最善を祈る祭りで道教的色彩が濃かった)『類聚国史』には男女混交してこれを祭ることは禁止するとの記事がみられる。
						朝廷でも3月と9月の3日に北辰に対して燃燈を行う儀式、御燈が行われた。
						妙見信仰の展開を知るとは日本民族の民俗性を知る手掛かりにもなっていくのである。
中世				千葉氏(武士の信仰)		馬の放牧を展開。
中世		戦勝祈願		千葉氏		北斗七星の信仰が破軍星などにも関係して戦勝祈願にむすびつく。
中世				千葉氏		馬との結びつき。
		戦いに加護があること。一族の栄枯盛衰と。		大内氏		渡来系の人により担われた。七の数の尊重。

								虚空蔵菩薩と、同じ星に関係する妙見信仰との係わり。
								虚空蔵信仰(明星、明星天子)、妙見信仰(北辰、北斗七星)の混交が顕れている。北斗七星に対する信仰も虚空蔵信仰とともに早く奈良時代までには渡来していたことは明らかだ。
								虚空蔵菩薩、妙見菩薩への転換・並列がある。伝説中に驚が多く登場する。
								虚空蔵は、後には星を同根とする妙見菩薩(北斗七星)との混淆もみられるようになり、星→虚空蔵=妙見尊星の関係も派生した。
								天野香々背男命の流れを汲む人々が機織り、染色に従事したであろうとし、そのシンボルとして北斗七星を祀ってきた。
								千葉県の星宮神社・星神社は北斗星、北斗七星に対する信仰が基調にある。
中世								北斗七星に対する信仰が仏教と結合して妙見信仰として盛行し星信仰も一般に流布するようになった。
								星と仏教との関係は、求聞持法が先蹤であり、後に北斗七星と結びついた妙見信仰と混淆していくことが推測された。

『妙見信仰の史的、考察』(中西用康 2008)

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
古代	奈良	豊作招福				
古代	河内摂津の山峡	豊穡感謝				
古代	奈良	天皇の眼病平癒				新薬師寺を建立。
古代	京都	病疾平癒		貴族		
古代			妙見は宇佐八幡宮北辰殿祭神			妙見は八幡神より先に小倉山に降臨。
奈良時代			八幡大菩薩は妙見菩薩の垂迹			
平安中葉以降		天皇の眼疾平癒	妙見は薬師如来の垂迹			
平安中葉以降		天皇の眼病平癒		一條天皇、三條天皇、鳥羽院		
平安～		眼疾平癒、視力守護の仏神		大衆		
平安						庚申の夜、妙見の功德を称え願詩した。
平安後期	近畿	視力守護の仏神		大衆		今様「妙見大悲者は、北の北にぞおはします。衆生願ひを満てむとて、空には星とぞ見え給う」(『梁塵秘抄』より)
中世				千葉氏		北斗山尊光院における元服の様子は婚姻の様であった。

中世						千葉氏		正月の行事に「三夜の鈴」(中世的性格が強い。千葉氏一統の融和を推進)「放射」(弓技の妙見菩薩への奉納)が行われた。
中世						大内氏		亀童丸(大内氏三代の幼名)の初社参の盛儀。庚申の日に行われた。
中世						相馬家	正月3日が日潔斎をして、白い餅と肉食を絶つ	将門との関係。独特な伝説がある。萬歳衆、射技、御水。
中世						相馬家		御水(妙見の神域に湧く霊水)で傷を洗うと治癒する。
中世						相馬家		野間追の行事は妙見菩薩への最大の捧げもの。7日間の潔斎。
中世	周防					大内氏	鷹を飼育するのに亀と蛇を餌としてはならない。鱧を食用にしない	祖神は妙見菩薩。大内氏は琳聖太子の末裔。幼名に亀という文字を用いた(三代の幼名は亀童丸)。亀蛇の尊重一威厳を誇示。
中世以前	伊勢神宮外宮	子孫繁栄 母乳豊				度会家(伊勢神宮外宮)		胞衣埋葬。胞衣社「神落萱社」を祀っていた。
室町時代	地方	武神、守護神						
室町時代				後世、稻荷神との合祀、妙見菩薩の鎮守として稻荷神を祀ることもあった				妙見菩薩に祈禱すると狐に化かされない。
江戸	八代					大衆		独特な妙見の祭礼を演じた。
江戸	能勢	息災				民衆		10月の亥の日に御玄猪餅をついて息災を祈った。
江戸	飯高壇林	試験の神様				修学僧		
江戸						日蓮僧		妙見菩薩を信敬した日蓮僧が広く妙見の教説を伝道した。日蓮は妙見菩薩を尊重しながら表面に打ち出さず七面明神を祀った。
江戸						江戸の大衆		大都市における妙見信仰の典型。法性寺界隈は江戸全期を通じて繁栄した。初代歌川豊国の筆塚と近松門左衛門の遺稿供養碑がある。
江戸	摂津	容姿守護の神				大衆。俳優や梨園の人人々殊に花魁嬢伶が信仰した		久々知の廣濟寺は近松門左衛門以下大衆が協力して建立した妙見寺院。

江戸後期	江戸	良縁与恵の仏神			大衆	星に祈りをかける江戸端唄 「どうぞ叶えて」 「どうぞ叶えて下さい」 「どうぞ叶えたい 恋しやと こっちはかりで 先や知らぬ ええ 辛氣らしいじゃないかい」 (この妙見様は柳島妙見)
江戸時代後期	江戸、大阪				大衆	妙見といえは花柳界の婦女を道徳させた。北辰北斗は華街の婦女の代名詞となった。落書き、小唄にも残る。
江戸時代後期	足立山	眼疾平癒			宇佐一族	北極星を妙見星という。
江戸時代後期	但馬妙見	農業色が強い			大衆	4月の通即に当たっては種初の一部を妙見の宝前に備え豊作を祈願した。素人相撲奉納。
江戸時代後期	名草郡三葛村 (紀伊) 妙見社	生産神				
江戸時代後期	房総3国	農業的色彩を強めていた		武士もいたが、多くは大衆		7月の祭礼は以前の伝統を継承していた (寒川船、結城船)。農業神的色彩は里にも唄われている。
江戸時代後期	秋父	武神から農業神へ		大衆		徳川家康の秋父妙見参拝は、大衆の妙見尊崇を大きく誘引し、妙見の神威を高めた。
現代	南部、茨城県北の馬産地	馬匹の守護神、養馬の神				野間の放牧が妙見菩薩と結ばれた。

『星の宗教』(1970 吉田光邦 淡交社)より

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
	八代					妙見信仰の場ではよく亀蛇の姿を見ることが多い。
	山科大塚の妙見寺					絵馬や堂内の奉納品に付けられた銘は、妙見大菩薩、妙見宮、妙見寺とまちまちである。妙見信仰はまさに神仏融合の典型なのであった。亀蛇の組合せがみられる。
	京都寺町の行願寺					北斗会と染められた旗があった。…奉納された提灯には、側面に七曜星がどれもつけられている。
奉納されたものは大正、昭和初期のものが多く	星田の妙見宮(大阪府北河内交野町)					星田妙見宮の降臨地の一つ。(二大石が並立することについて)これは日本の伝統的な巨石信仰の典型であろう。…北辰妙見信仰に結びついて、星が降臨された聖石となったものだろう。神鏡と亀蛇塚、すなわち中国の玄武の姿である。祭壇の周にめぐらされた幕は七曜星である。玄武の亀像がこま丈とならんで寄進されたものもあった。
	星御所(大阪府北河内交野町)					星田妙見宮の降臨地の一つ。屋根をふく瓦の軒丸瓦の文様は、九曜星を用いたものが見えたりとまらぶ。

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
奈良末期	民衆社会	現世利益				民衆社会における北辰崇拜は妙見信仰を基調として上層社会のそれよりも現世利益的な傾向が強い。
『中国から日本へ―星をめぐる民間信仰』(1983 窪徳忠 小学館)						
時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
中世		弓矢の神				北斗七星を破軍星というところから弓矢の神として信仰していた武士もいた。
						北斗は国家や人々を守ってくれる神と考えられていたように思われる。

「日本中世の妙見信仰と鎮宅霊符信仰 ―その基礎的考察―」『仏教史学研究』第56号所収 (2013 平瀬直樹 仏教史学会)

時代	地域	仏神の効能	垂迹・神使等	崇敬した者	禁忌	伝承
奈良時代以降		人間の寿命を司る「星」としての性格を保つ				妙見が人間の寿命を司る「星」としての性格を保っていた。
平安中期						陰陽師によって「北君」と呼ばれた。京都の北方にある霊巖寺で祀られるようになった。
平安中期			土公神や靈神と共に「宅神」という崇りの神の一種とされた。			
13世紀以前		延命に関わる「星」の信仰				13世紀以前において、妙見信仰は、延命に関わる「星」の信仰という性格を保っており、当時の社会は、仏教(特に密教)と陰陽道が絡まり合った、延命を得意とする呪術を求めている。
平安末期	越後国	敵方を呪術する際に祈願する軍神		武士団		敵方を呪術する際に祈願する軍神として妙見が崇められた。北斗七星を信仰する。「七」の数字を用いて潤色された表現が用いられた。
中世		領国支配イデオロギーにまで高めていった		武士団		真武神のイメージによる。妙見信仰は鎮宅霊符神によって補強され、中世社会により広く浸透していった
室町時代	周防国			大内氏	スッポン・カメ・ヘビを鷹の餌にしてはいけ	
室町時代	周防国			大内氏		嫡男に三代にわたり亀童丸という幼名を使用した。これは嫡子の若死にを防ぎ、家督継承を回避する意味合いがあった。
中世	伊勢	一族の守護神		渡会氏(伊勢外宮)		

妙見寺社地理的分布表

国名	都名	市町村名	社廟堂名	祭礼日	備考
山城	愛宕	京都今出川	妙見菩薩社		雍州府志
"	"	京都三年坂上	北斗堂		今不知其地(雍州府志)
"	"	花園	妙見社		地主神(都名所図会)
"	"	鷹峯北	鹿嶋寺		
"	"	"	眉目林寺		
"	乙訓	奥津印寺	妙見寺	九・二十一	鳥居領、妙見菩薩、南無、社同、土人、為産科神
"	"	岩倉	朝日妙見		延和院
"	"	山梨	大寺(現在なきにひとし)		妙見
"	葛野	小野	妙見堂	七・十五	めけん堂という
"	宇治	大塚	妙見庵寺		
"	"	星宮			所祭妙見菩薩也(雍州府志)

(我が国における星の信仰) 所載分布表訂正増補 一九六五・六・二

河内	交野	星田	妙見神祠		旧名小松明神見頂鎮也
"	石川	春日	妙見寺		
摂津	東生(後西成)	上本町	妙見堂(現在なし)		常因寺内(勝十一年建立)
"	"	大阪	妙見祠		四天王寺
"	"	"	六時堂		同、北底風、計
"	"	浅沢	星之宮		太白山、紫雲、翠の三星
"	能勢	地黄	妙見堂		真如寺
"	川辺	尼崎(現在近松公園)	"		在、廣濟寺、門左衛門など建
"	"	通領堀	"		自安寺
"	"	土佐堀	妙見祠		徳山祭御膳
伊勢	桑名	東方	妙見寺		号徳重山城主、少将折原山伏
"	度会	(山田) 妙見町	妙見堂		常明寺内、度会氏寺内
"	三重	星ノ宮			

尾張	海西	西保	星ノ宮	八・十八	
"	熱田		陸社(古屋ノ社、左屋ノ社)		
"	愛知	本地	星ノ宮(所)		天津彦彦ノ神、下知我麻呂社
"	春日井	上小田井	星ノ宮		大己貴命、天加加、曹男、華年、織女
"	"	内津	妙見寺		内津神社別当
美濃	笠井		妙見地蔵		
"	志太		妙見社		
"	安倍		"		
"	鹿原		"		
"	富士		"		
甲斐	山梨	桜井	大星権現、小星権現		
"	"	西後屋敷	妙見祠		
"	八代	井上	妙見明神		
"	巨摩	中森	大星明神		黒印神領一石四斗四升、社記日社寺
伊豆	加茂	下田	妙見神社		新羅三郎義光勳、義光ノ尊ノ配祀
"	"	梅木	妙見寺		日蓮宗・文明十八年、玉桂、日朝の化で改宗
相模	大住	池端	妙見		御嶽社本社
"	愛甲	中森野	妙見社		神体、唐崎の姥娘
"	"	下森野	"	九九	社領一石
"	"	"	妙見寺		妙見社別当
"	足柄下	須賀川	妙見		駒形社本社
"	"	星川庄	妙見社		

相模	足柄下	今井	妙見堂		日蓮宗本久寺内
"	海老	二宮	妙見社		棟札、寛文九年建
"	"	川勾	"		
"	鎌倉	永谷上	妙見		
"	高座	用田	"	九・二	
"	"	下草柳	"		慶安二年八月奉有り
武蔵	秩父	大野	妙見社	一・十四	
"	足立	大谷田	"	四・八	神体古廟(在)
"	"	本木	"		
"	多摩	西分	"		神殿南向、方二五寸
"	"	青梅	七星権現		本殿方一間半、拝殿一間半二間
"	"	原宿	妙見社		
"	"	八王寺	妙見祠		
"	"	高尾山	"		
"	"	久保宿	"		
"	"	百	"		
"	都筑	山田	妙見社	四・六	
"	荏原	小山	"	九・二十六	
"	"	中延	妙見堂		社三間、四間、妙見八幡宮
"	"	妙見社	"		堂三間九尺、後、白金、妙内寺
"	"	大井	妙見堂		社三間、二間、北堀殿と廟、臨海寺妙見
"	葛飾	東一之江	"		妙見寺内
"	柳島	"	"		妙見山法住寺内

武蔵	千代田			千代田城守護 享
"	横溝	芝生	妙見社	
"	秩父	大宮	"	二・三 十二・六
"	"	三峰山	"	
"	"	定家	"	八・三 神休養節
"	"	客戸	"	二・三
"	"	土名栗	"	神・大白真神
"	"	南	"	六・十五 十一・三
安房	小湊	妙見堂		
上総	横田	妙見社		
"	網田	"		
"	洲西	"		
"	人見	"		
下総	千葉	千葉	"	
"	"	西田	"	妙見像二休、画像
"	"	飯高	飯高寺	二
"	"	"	妙福寺	三休、北辰殿額有
"	"	(昌山)	"	り
"	"	三重塚	"	正徳年間創建 毎
"	"	鏡子	妙見堂	上山妙福寺
常陸	新治	栗原	北斗寺	
"	真壁	直井	星宮	
"	"	大島	"	
"	"	林	星宮	
"	"	大谷	星宮寺	
近江	志賀	比叡山	妙見堂	北谷、八部院

近江	志賀	上京本	妙見社	
"	野洲	比江	星ノ宮	
"	"	比留田	秩父妙見神社	
"	甲賀	杉谷	妙見社	
"	栗太	東	"	
信濃	筑摩	筑摩	星之宮	
"	"	山家	星大明神	
"	"	桐原	"	
上野	群馬	疋間	妙見神社	
"	"	"	妙見寺	
下野	都賀	小来川	星之宮	
"	河内	多功駅	多功星之宮	
"	安蘇	佐野天明	星宮明神	
陸奥	俱夫	上飯坂	星宮	八・一
意	"	"	村岡社	
"	"	町大佐生	星神社	八・一
"	"	下島渡	妙見社	
"	伊達	大森	星宮権現	
"	会津	西田面	妙見神	八幡宮境内
"	"	小堀	星宮	諏訪神社境内
"	大沼	相川	妙見神	稲荷神社相殿
"	"	和泉田	星宮	天重神社境内
"	耶麻	鎌召	明見神	熊野宮相殿
"	"	"	妙見堂	岩松寺境内
能登	鹿島	千野	妙見宮	
加賀				
越前				

越後	岩船	山北町通		
但馬	但馬	八幡	妙見宮	日光院内
"	"	"	妙見神	
出雲	島根	浜田田	妙見菩薩堂	
"	"	各分	妙見神社	九・二十七
"	"	大井	明見	森名神子
"	"	別所	"	
"	"	野添浦	妙見神社	六・十五
"	意字	乃木	妙見	九・二十八
"	"	林	妙見社	九・九
"	能義	和田	"	七・初五
"	"	清水	"	の日
"	"	切川	妙見	十一・十三
"	仁多	前布施	妙見社	九・十三
"	"	八代	"	
"	"	中村	"	
"	"	西瀬野	星神	
"	"	久比須	三昧妙見	十・十五
"	"	下布馬	妙見社	
"	大原	大ヶ谷	妙見	八・十二
"	"	上佐世	妙見社	
"	"	日井郷山	妙見	十・十三
"	"	宇治	妙見	
"	"	三代	妙見	
"	"	東谷	星之宮	
"	"	加茂	妙見	二祠あり像を配る

出雲	大原	山田	明現	二・一
"	"	湯	妙現	十・十三
"	"	下久野	"	"
"	磐石	吉澤見	妙見祠	
"	熊籠	小境	妙見	
"	"	福	"	九月中の
播磨	神門	武元	"	九日の
"	"	神原	星宮明神	六・十五
"	"	所原	星神	九・二十九
"	"	西園	妙見社	九・八、九
"	"	蘆荻	"	九・一十五
"	明石	福谷	妙見宮	二社あり
"	"	如意寺	"	境、東西百間 南北百二十間
"	加古	溝口	妙見大明神	九・八
"	赤穂	衣越浦	妙見寺	
"	"	留過寺	妙見大菩薩堂	
"	印南	宮前	妙見大明神	九・二十三
"	加西	別府	"	
"	"	園正	妙見社	
美作	吉野	長谷	妙見宮	九・十七
"	"	青野	"	
"	"	奥海	妙見宮	二祠
"	"	後山	妙見社	
"	"	長尾	"	九・十九
"	"	影石	"	十一・十九

南関東地域に伝わる妙見(江戸時代に存在し現在も伝えられる妙見)

資料4-4

国名	郡名	市町村名	社団堂名	祭礼日	備考	文献調査後の付記	現在の寺社名	分類	現住所	祭神	妙見について	現在の妙見の状況	特性
相模	愛甲	下牧野	妙見社	9・9	社領一石	村の鎮守として妙見社と称していた(『新編相模國風土記』)。別当妙見寺(明治初期廃寺)。明治3年日吉神社に改号。社殿の後に妙見山があった。	日吉神社	神社	厚木市下牧野547	倉稲魂命	以前は妙見さんのまつりといったが、今は総代以下20人ほどが参列し神事を行う。	氏子による祭祀が行われる	A
	足柄下	今井	妙見堂		日蓮宗本久寺内	元武家屋敷。ムツキヨヤスの持仏であったと伝えられる。代々伝えられた妙見菩薩は本堂に、前立は境内の北庭殿に祀られている。	法光山本久寺境内北庭殿	寺院	小田原市中町3-11-57	日蓮宗	冬至に星祭りが行われている。	氏子による祭祀が行われる	A
	海城	二宮	妙見社		横領、寛文9年焼	二宮町妙見地区にある。大石寺(妙見神社が守護神)正面の小山の頂上に建つ。	神明社(和名)大石寺(妙見神社が守護神)と前をわって妙見神社と呼ばれている	神社	中郡二宮町二宮1303		正月、5月、9月の10日に近所の信者が集まって題目を唱え大石寺住職が経をあげる。	氏子による祭祀が行われる	A
	秩父	大野	妙見社	1・14、4・8		江戸時代秩父七妙見の一つで北落山妙見宮と称していた。明治初期(身形妙見)と改称、明治22年神明社を合併し大野神社となった。	大野神社(みかたさま)	神社	埼玉県比企郡ときがわ町大野329	国常立尊	年配者は妙見を知る人もいる。神社内に妙見が祀られていると予想される。	氏子による祭祀が行われる	A
足立	足立	本木	妙見社			中曽根城は、戦国時代に下総を治めた下総千葉氏の千手菩薩が築いた城であったとされる。境内は城の一部で千葉市の守り神である妙見社が祀られていた。昭和7年(現野の霊社)と合せて中曽根神社とし、当地の氏神として祀った。	中曽根神社	神社	足立区本木2-5-7	大雷神 国常立尊	神社には文政8(1825)年の妙見と書かれた扁額があり、江戸時代後期の参詣の様子を描いた絵巻が残っているなど、妙見を祀っていた痕跡が残されている。絵巻の中には妙見大菩薩と書かれた提灯も描かれている。現在の神社は妙見を祀っており、星祭やカササギを見ることできる。地元の人々は妙見を認識しているが特有な習俗や祭りが残っているとは言えない。	千葉氏の痕跡を残す	A
	多摩	西分	妙見社		神祇南向方2尺5寸	室町時代初期に妙見山宗徳寺開山が等の守護神として妙見社を創建。江戸時代に西分村の鎮守だった。明治初年に西分神社と改称し、明治初年に村社となる。本尊の妙見像は宗徳寺(西分町1-33、臨濟宗)に保存されている。	西分(にしぶん)神社(通称 妙見さま)	神社	青梅市西分町2-34	天御中主神	安産の神様といわれる。昭和47(1972)年西分神社運営百年の記念として山車が制作された。青梅の山車で唯一といわれる提灯彩り(提灯)とあり、額縁の北斗七星の妙見菩薩にちなんで、「北庭」とし妙見尊の座である竜が描かれている。	地域振興	D
	多摩	原宿	妙見社			境内に妙見堂があり妙見菩薩が祀られている。江戸時代のものと思われる。	常盤寺	寺院	東京都目黒区八雲1-2-10	日蓮宗	冬至の日に星祭りが行われる。	江戸時代に築かれた日蓮宗の寺	C
	多摩	百村	妙見社			妙見尊の別当として妙見寺が妙見の行事を執り行う。	妙見寺、妙見尊	寺院、神社	稲城市百村1588		「神化まつり」(起より行事「星まつり」の3つの民俗行事が行われている)。	氏子や地域の人間による祭祀が行われる	A
都筑	都筑	山田	妙見社	4・6、9・28		妙見社は文安5(1445)年の創建。明治43年近隣の村社神田神社を合併し、八幡神社、稲荷神社等14社とともに妙見社に合併。地名によつて山田神社と改称した。かつては長泉寺(都筑区北山田1-10-4)が別当。	山田神社	神社	横濱市都筑区南山田町3795	大日靈尊 他	「神化まつり」(起より行事「星まつり」の3つの民俗行事が行われている)。	地域で妙見の名残がある行事が行われる	A
	在野	(中狂)	妙見社		社3町2間	千葉氏の一族領木外記裏面に当地へ住みつき、千葉氏の守護神である妙見社として弘治2(1556)年創建したという。明治時代の神仏分離により、祭神を千葉氏(祖である)桓武平氏の祖桓武天皇第三皇子葛原親王としたのであろう。	葛原(かつばら)神社	神社	品川区荏原6-2-13	葛原親王	個人宅から寄贈された小さな妙見像を本堂に祀っている。この妙見像は妙見山の妙見神社から移ってきたと説かれる。この像とは別に昭和61(1986)年に境内に新しく妙見堂を建て新しい妙見像を祀った。冬至に星まつりを行う。	千葉氏の痕跡を残す	A
	葛飾	第一之江	妙見堂		妙見寺内	東葛23区の唯一の自然島である妙見島の北部にある。初代の妙見堂は妙見寺(江戸川区一之江)に移されている。千葉代々葛原の領地とある妙見菩薩像は、妙見島→小松川村→第一之江村へと移されたとの記録がある。	妙見神社	神社	江戸川区葛西3-17(妙見島)		冬至に星まつりを行う。		
	葛飾	柳島	妙見堂		妙見山法性寺内	妙見寺は弘安7(1244)年千葉氏の創建。祀られる妙見菩薩は、古は利根川の中流の妙見島に安置されていたが、小松川に移し、貞治元(1362)年妙見寺に勧請された。妙見島には形を変えた妙見堂が残っている。	柳島妙見山法性寺(妙見山)	寺院	江戸川区一之江6-19-10	日蓮宗	現在も地域で信仰されている。毎月1日を妙見の縁日としている。星まつりも行う。	江戸時代に築かれた日蓮宗の寺	C

資料4-4

秩父	大宮	妙見社	2・3、11・11・6			秩父地方の総鎮守。中世以降妙見大菩薩の信仰を兼ねてきた。明治時代の神仏分離以降も妙見への信仰は衰えない。	秩父神社(妙見様)	神社	秩父市番場1-1	八意思兼命、八咫神、天之御主神	「秩父の夜祭」をはじめ、地域をあげて妙見に由来する行事が行われる。	地域振興	D
秩父	安戸	妙見社	2・3			秩父七妙見社の一社。江戸時代までは妙見社として祀られ、今でも村人は妙見様と呼ぶ。	身形神社(みようけんさま)	神社	秩父市番場1-1	市杵島姫命、多紀理理命、浦津姫命	妙見の祭祀が伝えられている。	氏子による祭祀が行われる	A
秩父	上名栗	妙見社				『風土記』に「住古天より降る星を祀ると云」とある。社記によれば、応永元年、小野中將權房の一行が和歌修行に閑居へ下り、鎌倉から閑居より方面へ向かい途中当社に参詣し、社号の星を珍しと心に留め、翌年鎌倉を派遣して山城国紀伊郡伏見より大己尊命を当社に勧請して妙見堂と改称したとある。社名は明治三年に至り古称に復し現在に至っている。	上名栗・星宮神社(みようけんさま)	神社	飯能市上名栗217	天御中主命、天照大神、大己貴命	秋まつり江戸時代から妙見のお祭りと呼ばれる。	氏子による祭祀が行われる	A
秩父	南	妙見社	6・15、11・3			源頼朝の造営と伝えられる。飯能で一番大きい妙見社。赤星伝説がある。内陣に銅製妙見菩薩が奉安されている。口陣によると、これは後世のものではない。本来の伝説と伝えられる。	我野(あかの)神社(みようけんさま)	神社	飯能市南1152	天御中主神	妙見に由来する祭礼に川瀬祭りがあり獅子舞が奉納される。祭りの際の提灯に北斗七星が描かれ、稲穂の先端には神ではなく金木犀(金木犀に通じる)が描かれている。地境には天御中主神を祀った神社が多く、妙見様と呼ぶ人もある。安産や子育てのため、髪を切つて奉納した時期もあったという。	地域振興	D
安房	小湫	妙見堂				日蓮聖人修行の地。天台宗の寺として開創されたが、その後、真言宗を経て、昭和24年に日蓮宗へ改宗し現在に至る。日蓮宗大本山。日蓮四大本尊の一つ。清浄山(妙見山)頂の奥ノ院には根本鎮守である北庭妙見大菩薩が祀られている。	千光山清浄寺	寺院	鴨川市清浄322-1	日蓮宗	毎年7月21・22日の年に一度だけの開帳があり、多くの人々が訪れ賑わいをみせる	江戸時代に築かれた日蓮宗の寺院	C
上総	網田<網田の殿>	妙見社				久留里城主平忠常が浦田妙見堂として勧請。別名を細田妙見といふ。境内には電をモチーフにした像が多く見られる。千葉六妙見の一社。	久留里神社	神社	君津市浦田14-1	天之御中主命 他	7月22日前後の土曜日に「久留里夏祭り」が開催される。	千葉氏の妙見が基軸にある。地域融和	B
	洲西<洲西>	妙見社				人見神社の妙見菩薩像を本堂内に祀る。	青蓮寺	寺院	君津市人見1-11-7	真言宗	毎日妙見様にお参りに来る人がいる。妙見の掛け軸をブロッコリーに描いて、それを掲げて毎月22日に妙見の会を行っているが、今は行っていない。妙見講も盛んだったがだんだん廃れていった。	千葉氏の痕跡を残す	A
	人見	妙見社				白雉元年(650)年創建。千葉市の守護神妙見大菩薩を、上総介に任せられた平忠常が鎌倉の地から人見山に移し祀ったと伝えられる。西総妙見の一つとして知られる。	人見神社(みようけんさま)	神社	君津市人見892	天御中主命 他	毎年7月22日の祭礼には「おめし」と呼ばれる350年余の伝説ある神馬奉納が行われる。	千葉氏の妙見が基軸にある。地域融和	B
	千葉	妙見社				千葉一族の守護神である妙見を祀った寺として千葉氏の妙見信仰の中心地だった。明治時代の神仏分離により千葉神社となった。	千葉神社	神社	千葉市中央区院内1-16-1	北庭妙見尊、主神(二天)天御中主大神	妙見大祭をはじめ、妙見に由来する行事が行われている。	千葉氏の妙見が基軸にある。地域融和	B
下総	岡田	妙見社					妙見八幡神社	神社	常総市石下町新石下1679(石下の小字に岡田あり)		千葉一族である豊田四郎と妙見に関する伝説が伝わっている。	千葉氏の妙見が基軸にある。地域融和	B
千葉	飯高	飯高寺			妙見二休、面談	飯高城跡。日蓮宗最初の隠棲、学生発布により康僧とされる。妙見社は飯高神社になった。	飯高寺(法華寺)妙見社	寺院	匝瑳市飯高1789	日蓮宗	飯高寺には妙見と内妙見があったが、そのうちのひとつが妙見神社(後の飯高神社)に祀られることになった。現在の飯高寺は住持は僧侶が管理されている。元禄時代であったころで、僧侶は宗教活動はしていない。地元では星宮、星神社などもあり、妙見の名残を残していることができる。	江戸時代、日蓮宗の修行僧から試験の神様として尊崇された。	C
下総	飯高<飯高山>	妙見社			三休、飯高殿	祭神は天御中主命。江戸時代まで妙見神社として祀られていたが、明治時代の神仏分離により、妙見寺(飯高1789)から分祀された村社の村として飯高神社となった。妙見菩薩は妙見寺妙見堂に移された。	(飯高神社)	寺院	匝瑳市飯高475		地元での妙見への信仰は強い。	江戸時代、日蓮宗の修行僧から試験の神様として尊崇された。	C
	千葉	妙見社				延暦3(1310)年、蓮華大親王が守護神として妙見尊を勧請し建立した。飯高の妙見神社の別当であった。神仏分離により飯高神社に祀られていた妙見像を祀った。北庭殿と書かれた妙見堂がある。	(妙見寺妙見堂)	寺院	匝瑳市飯高477	日蓮宗	地元では妙見への信仰は強い。妙見菩薩は飯高に祀られており見た者はいないといわれる。	江戸時代、日蓮宗の修行僧から試験の神様として尊崇された。	C
	千葉	妙見社				創建年代は不詳。岡田市入山崎にあった真言宗寺院で、正和年間(1312年-1317年)に日蓮宗に改宗された。その後、現在地に移された。聖徳太子の作と伝えられる妙見菩薩像が、蓮氏、蓮華、蓮太郎、加藤清正、大塚城、江戸城、多古城、松平家を経て、現在、妙見寺北庭殿に祀られている。「鏡子の妙見様」といわれ、篤く信仰されている。	妙見寺	日蓮宗寺院	銚子市妙見町1465	日蓮宗	妙見に由来する祭礼や行事が行われている。毎月14日には妙見縁日も行われる。	江戸時代に築かれた日蓮宗の寺院	C
	千葉	妙見社					妙見寺	日蓮宗寺院					

百村妙見の由来

第5章 参考資料

	758～764	826	1107～1123	1182
妙見宮(妙見尊)	<p>・天平4(760)年、妙見寺裏山に創建。『武州多東郡妙見寺縁起』</p> <p>・孝謙天皇の天平宝字4(760)年の創建。領主であった当麻真人村継に命じて妙見菩薩を安置させたものという。『妙見寺記録』</p> <p>・天平宝字4(760)年、妙見さまが青龍にのって天下り、この地に現われたという言い伝えがのこる神社である。『稲城の昔ばなし』</p> <p>・「本尊妙見、天平宝字4(760)年…当山に安置シ…」とある。『寺院明細帳』</p>			
妙見寺	<p>大炊天皇(淳仁天皇[758～764])の御願により、道忠禅師が本尊に定光仏、脇士に星王同体の妙見大菩薩を安置したことに始まる。寺号を妙見寺とする。妙見大菩薩は道忠が自ら彫刻したもの であるという。『武州多東郡妙見寺縁起』</p>	<p>天長3(826)年、寺は火災に会うが、武蔵国守藤原信高が勸願により新寺を建立する。『武州多東郡妙見寺縁起』</p>	<p>鳥羽院(1107～1123)のとき寺院は大破するが、武蔵国守高階敏信が修復、更に四至を定めた。『武州多東郡妙見寺縁起』</p>	<p>・治承6(1182)年、寺院は再び炎上するが、本尊は 猛火の中を飛び移り難を逃れた。『武州多東郡妙見寺縁起』</p> <p>・この霊験を聞いた源頼朝は武蔵・相模の御家人に奉加を命じ伽藍の造営にあたさせた。頼朝の平家討伐も妙見大菩薩崇拝の利益である、として縁起を結んでいる。『武州多東郡妙見寺縁起』</p>
	1182～1661	1662	1663	1635～1677
妙見宮(妙見尊)	<p>中世では、領主稲毛三郎重成が妙見宮を保護したが、国が乱れて以来修復もなかった。その後八王子の滝山城主北条氏直が諸堂を修復したという。近世になり天正18(1590)年から徳川氏領、正保～延宝期(1644～81年)以降、旗本坪内氏の知行となった。この間、修験東光院が妙見宮の別当として進退を取り仕切っていた。『妙見寺記録』</p>	<p>・寛文2(1662)年、疫病が大流行し、皆で青龍をつくってお祭りをすれば疫病が村の中に入ってくるのを防ぐことができるだろうと考えた。さっそく村のあちこちに生えている青蘆を刈り取り、より合わせて大きな龍をつくり、妙見尊が祀られている妙見山に村人総出で担ぎ上げた。村人たちの折りにより疫病は流行せず、もとの静かな村にもどった。青蘆でつくった青龍は、形が綱でつくった大蛇に似ているところから「綱より」とか「蛇より」とか呼ばれ現代まで伝えられている。平成4(1992)年東京都無形民俗文化財に指定された。『稲城の昔ばなし』</p> <p>・寛文2(1662)年の春、諸国に疫病が流行した 折、妙見宮の神木に大注連を張って北辰四天を祭り、また茅で三百間に及ぶ大蛇の如き大綱をつくって郷境の道の傍に置き、村内への疫病侵入を防いだことに始まる。一時中止の時期もあったが、村内に疫病が入ったため再開した。その後は毎年茅の大蛇をつくって疫病を防ぐ祈願を行ったところ、村内に疫病が入ることはなかった。神化祭りは1月8日、綱よりは7月16日の夜である『北辰妙見尊略縁起』</p>	<p>寛文3(1663)年、「神化まつり」が始まる。毎年1月8日に行われ、厄除けの信仰で知られる。ウラを撒いて太い注連縄をつくり、注連縄には「蘇民将来子孫の門戸也」と書かれた木札や北斗七星にまつわる木札、シメの木札などをさす。『文化財ノートNo.89妙見尊の民俗行事』</p>	<p>・東光院権大僧都源春のせがれ民部の代の延宝5(1677)年に妙見宮は観音院に譲られる。『妙見寺記録』</p> <p>・山伏となった源春は妙見宮だけは守り抜いてきた。しかし「せがれ民部は延宝5(1677)年観音院にその権利を譲り渡した。『妙見寺過去帳』</p> <p>・1635年、1654年、1678年に3人の山伏が本願となり妙見宮を修復している。『妙見寺記録』</p> <p>⇒この山伏が東光院とどのような関係であったかは不明であるが、妙見宮は天台修験にとって重要な拠点であった可能性もある。『妙見寺記録』</p>
妙見寺	<p>東光院は権大僧都源春(寛文元(1661)年寂)と称し、「当寺退転之節山伏二相成」とある。『妙見寺過去帳』⇒妙見寺は少なくとも江戸初期までは存続し、後に退転してしまったことがわかる。</p>			<p>観音院は民部より妙見宮を譲られると、さらに土地を集積し経済力にも力をつけ、妙見寺の再興を果たす。村人達の要請もあったものと思われる。観音院は初め妙見宮の鳥居の脇にあったという。寺院というより妙見宮の守に当たっていた修験であったものと思われる。『妙見寺記録』</p>
	1704～1710	1819	1822	1836
妙見宮(妙見尊)		<p>文政2(1819)年本社の修復と拝殿の新規建立が行われた。『妙見寺記録』</p>	<p>文政5(1822)年、「星祭り」が始まる。百村の地頭坪内氏の星回りが悪いので星供修行を希望してきた。これを発端として諸人も参加する方法で始まり、参加人数も増加し盛況になっていった。天保3(1832)年には5,600人余、天保6(1835)年には6,800人が参詣している。『妙見寺記録』</p>	<p>天保7(1836)年、天候不順により儉約令が出され、「星祭り」への江戸の講中の奉納・参詣も少なくなったが、近郷の参詣者により「星祭り」は維持されていった。『妙見寺記録』</p>
妙見寺	<p>・宝永年中(1704～1710)晃伝住職の代、観音院は、東叡山寛永寺(天台宗)の末寺を願い出て府中安養寺の配下となり、現地に寺地を移して、本堂・庫裡・本尊・観音堂・表門を建立し、寺号を神応山観音院妙見寺と改めた。『妙見寺記録』</p> <p>・現在の妙見寺は、晃伝を中興開山とし、この時をもって始まる。宝永7(1710)年には、観音院は妙見寺と寺号を改めている。寺院として土地を寄進される記録もあり、妙見寺が百村の寺院として成立してからも随時地域に浸透していったことが分かる。『妙見寺記録』</p>	<p>旗本領主坪内氏の祈願寺として存在するとともに地域の民衆の信仰を集めた。</p>		

○『武州多東郡妙見寺縁起』: 百村 妙見寺の開創を伝える史料。天正19(1591)年10月の年紀を持つ。それを享和3(1803)年正月に書写したものであることが巻末に示されている。この史料は補足史料がないので妙見寺の成り立ちを正確に記しているかどうかはいまだ検討の余地がある。(『稲城市史研究 第四号』)

○『妙見寺記録』: 記された年代は不明だがおそらく江戸末期と考えられる。明治35(1902)年までの書き継がある。(『稲城市史研究 第四号』)

文政年間～弘化4（1847）年の「星まつり」の人出数

文政5年	1822年	1,000余人	天保2年	1831年	5,100余人
文政6年	1823年	1,690余人	天保3年	1832年	5,600人余
文政7年	1824年	2,740余人	天保4年	1833年	6,000余人
文政8年	1825年	3,253人	天保5年	1834年	6,800人
文政10年	1827年	3,800人余	天保6年	1835年	6,800人
文政11年	1828年	4,000余人	天保12年	1841年	5,000人余
文政12年	1829年	4,800余人	弘化3年	1846年	5,288人
文政13年	1830年	5,000余人	弘化4年	1847年	5,160人

『妙見寺記録』（『稲城市史研究 第四号』 稲城市史編集委員会 1992）より

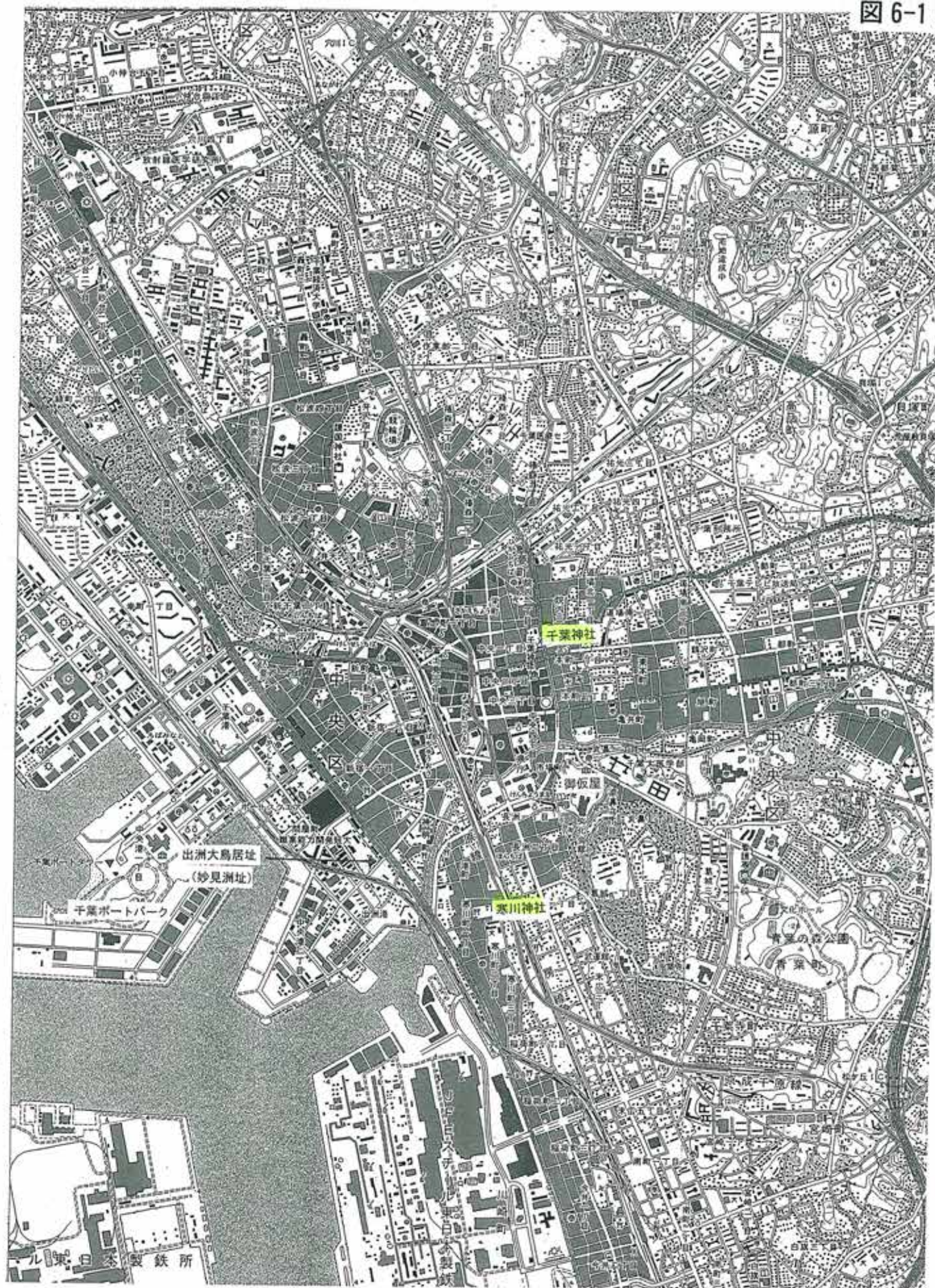
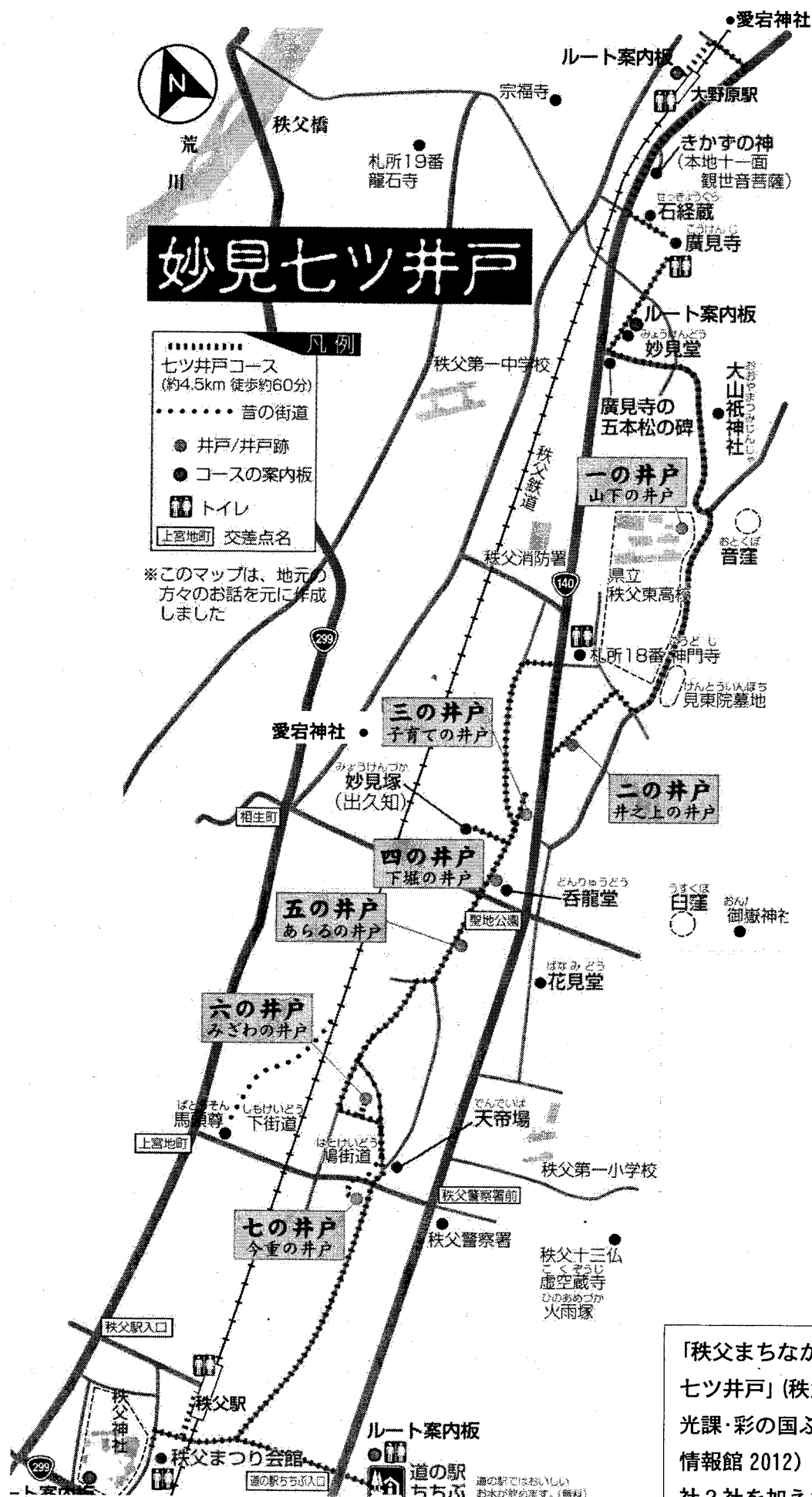
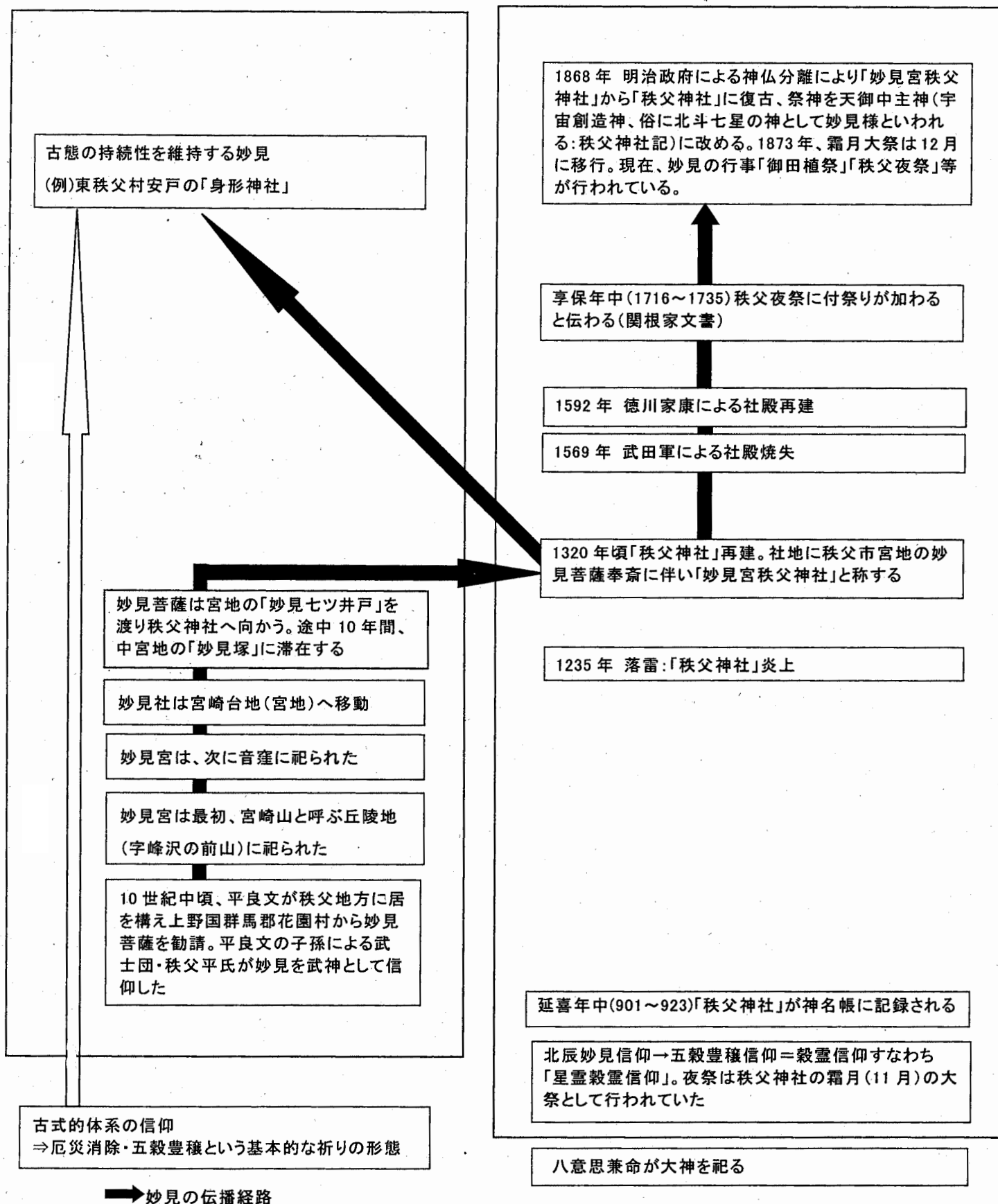


図 6-1 千葉市中央区市街図（平成 21 年国土地理院発行の 2 万 5 千分 1 地形図を複製し、千葉神社、寒川神社、御飯屋、出洲大鳥居（妙見洲址）、千葉ポートパークの所在地名を加筆した）



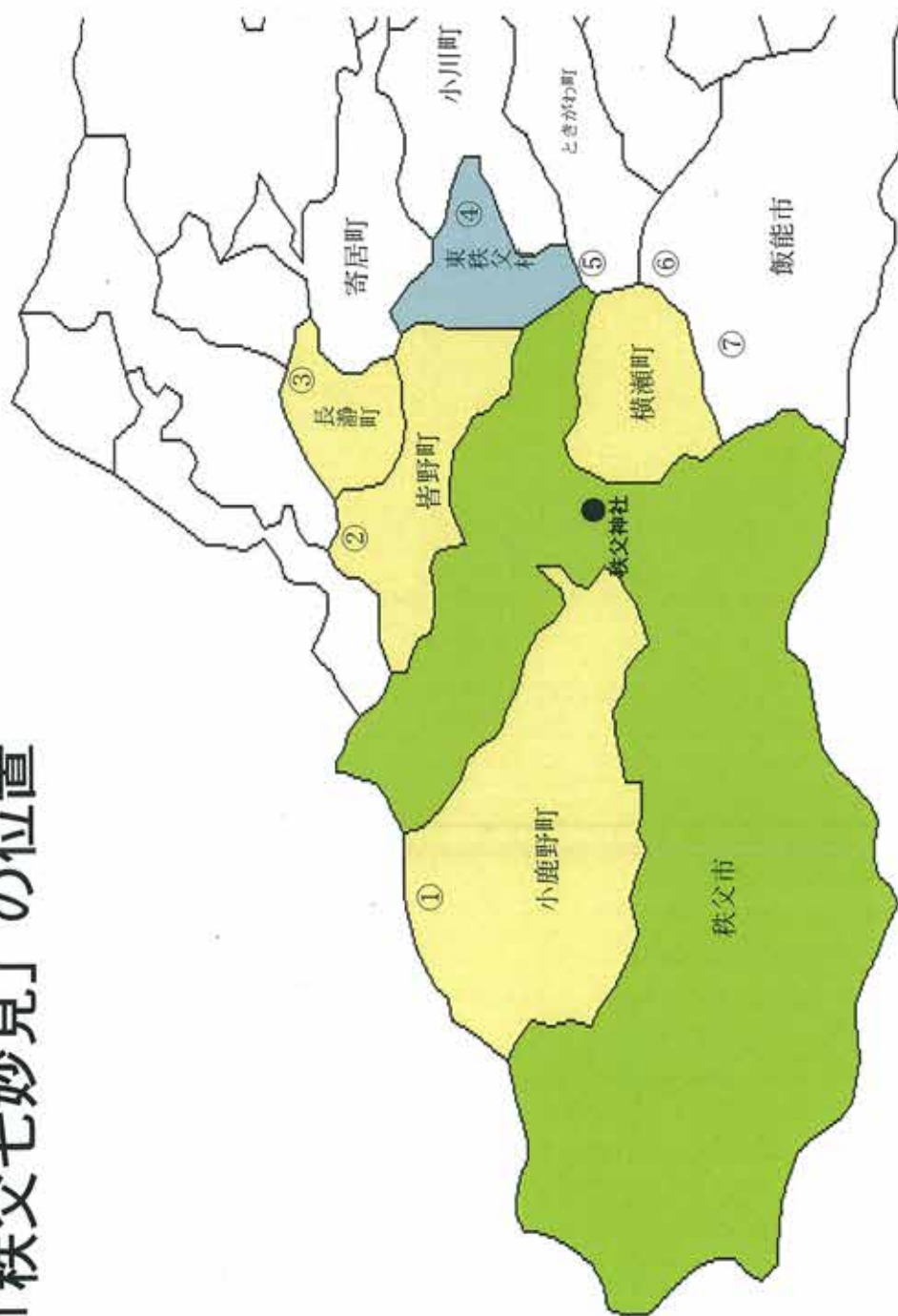
秩父地方の妙見

秩父神社の変遷



『秩父夜祭』(藺田稔監修 2005 さきたま出版会)、『秩父神社』(千嶋壽 1989 さきたま出版会)、
『秩父大祭 歴史と信仰と』(千嶋壽 1981 埼玉新聞社)、『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』(埼玉県
神社庁神社調査団 1986 埼玉県神社庁)を参考に筆者が作成

「秩父七妙見」の位置



「秩父七妙見」の所在地

- 第1所：小鹿野町藤倉① 第2所：皆野町金沢② 第3所：長瀬町矢那瀬③
 第4所：東秩父村安戸④ 第5所：都幾川村大野(現 ときがわ町大野)⑤
 第6所：名栗村上名栗(現 飯能市上名栗)⑥ 第7所：飯能市北川⑦

秩父七妙見

	所在地	『秩父志』の記述	現状（「秩父七妙見社」〔宮澤 1994〕）	現状	現在の祭神
第1所 妙見社	小鹿野町藤倉	妙見社ハ此村ノ麓キ山中ニアリ、古ヘハ此マデ秩父郡ノ内ナリ、大宮妙見神ヲ七所ニ勧請セシ其一所ニシテ郡境ニ祭ル所ナリ。〔大野 1983 246〕	現状（「秩父七妙見社」〔宮澤 1994〕）	明らかではない	
第2所 妙見社	皆野町金沢 (かねざわ)	此村ノ麓ニ出牛村ト云所ニ、秩父七所妙見神社アリ、今ハ當國児玉郡ノ郡内ニ入テ秩父の境中ニアラス、此社ハ郡境ノ所々ニアリテ、大宮ノ妙見神社ヲ郡境七所ニ往古分配セシナリ、コレ其ノ一ノ所ナリ按フニ天厩ノ頃マデハ此出牛村ノ接隣ニテ、太駄村ノ内杉木峠ト云フノ山頂ヲ郡境トセルナランカ。〔大野 1983 256〕	すでになく、かつて金沢の出牛（じゃうし）耕内地内にあった七所様と呼ばれた祠がこれに当たると思われる。	明らかではない	
第3所 妙見社	長瀬町矢部瀬	矢部瀬妙見ノ社ハ今ハ榛澤郡米野村ノ境内ニ入り属ス、往古ハ此米野村ノ内ノ境川ト云。秩父郡ノ郡境トス、此ノ妙見神祠ハ秩父七所妙見ノ四所所ニテ、大宮町妙見神ノ郡境ノ村々七所ニ遷請シ奉ル所ナリト云フ。往昔ハ矢部瀬村ノ総鎮守ナリシガ今ハ米野村ノ総鎮守トナリテ、初應此村ヨリ献ジ祀ルト云。〔大野 1983 263〕	「米野神社」に合祀になった字間口の「天御中主神社」であろうか		
第4所 妙見社	東秩父村安戸	妙見ノ神社ハ安戸村ニアリ、秩父七妙見ノ四所ニテ大宮町ノ妙見神ノ郡境ノ村々七ヶ所ニ遷請シ奉ル所ナリト云。〔大野 1983 276〕	御堂村の宮地と呼ばれる地に祀られていたが、近くを流れる棚川が流路を変えたために現在の安戸字常沢の地に社地を移したという。氏子は「この妙見様は秩父神社のナカツェイ（中姉）である」と言い、更に「妙見様は三姉妹で、長女は小川町木部の妙見様（三光神社）、次女は当社、三女は秩父神社である」と語っている。明治初年に社号を身形神社と改め、現在に至っている。身形の社名由来は三神を示す三形の意で、古くからあった三女神の伝承に基づくと考えられる。	身形神社	市井島姫命、多紀理理姫命、淵津姫命の三柱。崇徳三女神とされる。
第5所 妙見社	都幾川村大野 (現ときが わ町大野)	妙見ノ神社ハ大野村ノ内ニアリ、秩父七妙見ノ五所ニテ大宮町妙見神ノ郡境ノ村々七ヶ所ニ遷請シ奉ル所ナリト云フ、此社ハ此村ノ総鎮守ニテ一村ヨリ初應等コレヲ献ジ祭リテ祠主アル事ナシ。〔大野 1983 269〕	日本武尊がこの地に来て国常立尊を祭り、身形神社と称したのに始まると伝えられる。江戸期になって北滝山妙見宮と改め、明治初年に身形神社に社号をもどしたが、明治四十三年には地名を採って大野神社と改めた。本殿に安置される豊沙門天像は、北方の守護神であるため、北極星を祀る妙見信仰により奉安されることになった。	大野神社	国常立神
第6所 妙見社	名栗村上名栗 (現 飯能市 上名栗)	名栗村ノ内宮平ト云所ニ妙見ノ社アリ。秩父七妙見ノ六ニテ大宮町妙見神ノ郡境ノ村々ニ遷請シ奉リシト云。祠主山岡氏コレヲ奉ズト云。〔大野 1983 265〕	元暦年中（1184-85）の頃、栗林に天から「丸き光物」が降ったことから、そこに社を建て星宮神社と称したのである。応仁元（1467）年に小野少将藤房の一行が和歌山行に關東へ下り、鎌倉から信州更級方面へ向かう途中、当社に参詣し、社号の星宮が珍しいと心に留め、翌年鎌倉を派遣して山城国紀伊郡伏見より大己貴命を当社に分霊して妙見宮と称せしめたという。明治3（1870）年に星宮の古称に復し、現在に至っている。	星宮神社	天御中主命、天照大御神、大己貴命の三柱
第7所 妙見社	飯能市北川	此村ノ内宮代ト云ル所妙見ノ神社アリ、是秩父七妙見ノ内ニテ、大宮町妙見神ノ郡境ノ村々ニ遷請シ奉ル所ナリト云。〔大野 1983 267〕	古くは山神社と称していたが、寛文8（1668）年頃から星宮大神社と号して妙見様のお姿を安置した。このお姿は明治初年に紛失したという。明治40年の合祀を機に喜多川神社と改めた。氏子は「妙見様は三姉妹で、末の妹は秩父神社となつて出世し、中の妹は我野神社となり、姉が当社になった」と語り伝えている。氏子区内の柏木地区では姉は姉わす、また正月には門松を立てないという風習がある。これは妙見様が山姥蛇の姿で正月遊びに出たら竊に連れられ門松の松葉で目を突いて片目をつぶしたためである。	喜多川神社	天御中主神

第五章 氏神として伝わる妙見

—東京都稲城市百村の「妙見尊」行事から—



妙見宮へ向かう参道

写真 5-1



藁で作った大注連縄

写真 5-2



大注連縄にお札を差し込む

写真 5-3



大注連縄に轡も取り付ける

写真 5-4



大注連縄を巻き付けた丸太を掲げる

写真 5-5



大注連縄を巻き付けた丸太が掲げられた

写真 5-6



朝刈った青萱を束ねて干す

写真 5-7



大蛇の制作に取り組む

写真 5-8



写真 5-9



写真 5-10



写真 5-11



写真 5-12



写真 5-13



写真 5-14



写真 5-15



写真 5-16

第六章 祭礼の中に武神として伝わる妙見
—千葉県千葉市中央区の千葉神社・寒川神社の祭礼から—



千葉神社

写真 6-1



香取神社前で神輿に「孔雀」を掲げる

写真 6-2



中継地点で力いっぱい太鼓を叩く

写真 6-3



22日昼過ぎに神輿が御仮屋を出発

写真 6-4



千葉神社も近くなり派手に神輿を揺む

写真 6-5



神社を出て神輿巡幸に出発

写真 6-6



鳥居をくぐって海へ向かう神輿

写真 6-7



「御浜下り」神輿の海中渡御

写真 6-8

第七章 大衆文化的妙見の需要

一東京都墨田区の柳嶋妙見山法性寺界限に伝わる妙見一



柳嶋妙見山法性

写真 7-1



柳嶋妙見山法性寺

写真 7-2



能勢妙見山東京別院

写真 7-3



能勢妙見山東京別院本堂

写真 7-4



「柳嶋妙見」妙見堂

写真 7-5



1日に「柳嶋妙見」妙見堂で行われる「妙見さま大祭」

写真 7-6



勝海舟の父・小吉が水垢離をしたと伝えられる

写真 7-7



能勢妙見山東京別院で好評を得ている御守

写真 7-8



写真 8-1



写真 8-3



写真 8-2



写真 8-4



写真 8-5



写真 8-6



写真 8-7



秩父神社入口大鳥居前に掲げられた
「水口の竜」（「御田植祭」にて）

写真 8-8



「秩父夜祭」の大櫓（下の櫓に
「水口の竜」が巻きつけられている）

写真 8-9



神部により田仕事の所作が行われ
る（秩父神社「御田植祭」にて）

写真 8-10



老竜の描かれた宮地屋台の
前幕（屋台下段の竜の彫刻
と合体して玄武となる）

写真 8-11



番場町に祀られて
いる「お諏訪様」

写真 8-12



「お諏訪渡り」
（「お諏訪様」に向か
って進んでいく）

写真 8-13



宮地屋台が秩父神社神門前で三番叟
を奉納（「秩父夜祭」本マチにて）

写真 8-14



秩父夜祭」本マチ神幸行列の
大櫓（下の櫓に「水口の竜」
が巻きつけられている）

写真 8-15